慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	散木奇歌集伝本考(二)
Sub Title	
Author	平澤, 五郎(Hirasawa, Goro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1992
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.27 (1992.) ,p.1- 234
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000027-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

散木奇歌集伝本考(二)

平澤五郎

承前

第一・二類に続き第三・四類本系の伝存諸本解題を以下に麁述したのであるが、前稿(一)に於ても縷述してきたごとくに、本集は伝存本としては第四類本系――とりわけ、阿波国文庫旧蔵本・書陵部A本の両本のごとき――をのぞき、私集としての外的形態はともかくとして其の本文は収載歌員の較著な変異と共に一首上の詞書・下句の欠落のごとき、其の歌句の異同きわたゞしさに併せて異形、破格ともいえる本文状況を呈示する諸本が過半を占めている。それは、ひとつには、本集証本として確たる古鈔本の伝来をみぬとともに、其の撰述経過も分明ならず、更には伝写本の経由も唐突にして祖系を辿るべくもなくして言わば跛行的な変遷のなかに転移していたかの感が残るのである。仄聞する冷泉家伝来定家書写本はきわめて異常な草稿形態をとゞめるものとの由であるが、未見なるまゝに本集に看る此の異相

を繙くの鑰たるや否かが想望されるところである。

飜って第一類本系を観るに、その基底たる契沖自筆本の拠ってなる底本は不明なる上に夥多にわたる朱校補綴本文は即転写の間に本文本行化して本集既成本文として定着し、いつしか大野広城本系のごとき呼称を以て系統化されるにいたっている。且つ第一・二類本系を通じて概観し得るのは、比較的混淆要素を経ぬ八巻本系統であるが、多くは雑部上下の任意な補配合綴によって成立した、いわば合成書写本であるといえる。かてゝまた、本集本文の晦渋性による本文校訂―契沖以下近代にいたる国学者において訓詁注釈を基底とする所謂校勘―は自ら伝本としての原態を漸次変形化させるにいたったことは否みがたい。そして、それは歳月をふるに伴い、諸々の要因が雑糅し渾然化し伝本系統の混乱化を招く一由因をなしている。偏えに書写に於ける錯誤・誤脱を以て律しえぬところでもある。

第三類本系にいたると更に此の傾向は顕著となり、同一系統本に於てすら相互に異同本文を多々生じているのである。

麁述にさきだち大凡、如上の事柄を、基本的伝本処理の上に案配しながらに言及したものであるが、就中、伝写の間に於ける校合の累層、釈義に伴う校訂経過についての書入れは煩累をかへりみず愚直の縷述を重ねた。それも又、本集現存伝本の紛雑する本文状況のしからしむるところにも其の一半はあるのでもあろう、かと思うのである。

猶本集系類一覧―略称共―は拙稿尾に附載した。

第三類本系

神宮文庫蔵〔近世初〕写　存八巻　附堀川院御百首抄・俊成卿女家集・続詞花和歌集・順徳院御集

錯綴　神B

袋綴、八冊。浅葱色地銀泥花卉円紋等表紙、竪二十八・三糎、横十九・五糎。料紙、楮紙。字面高サ約十九・二糎（但シ、散木集）。毎半葉十行に和歌二行書き、詞書略三字下げ（同上）に書写する。各冊本文墨付後述。

題簽、斐紙短冊を各冊表紙左肩に貼付し、「散木抄　異本　一之二（三・四ノ上・四ノ下・五・六・七・八）」と墨書する。内題、「散木奇歌集巻第一（〜八）」と記す。但し、巻四は、「散木奇歌集巻第四」、「散木奇歌集巻第四下」と記しているが、前者は冬部巻初五九番より書写するに対し、後者は夏部後半二四番を巻首としている。恐らく「巻第四下」は「巻第二下」の誤写であろう。

部立表記は、右のごとく夏部（上）下二部とするのほか第三類諸本と同じくする。即ち、四季部・祝部・別離・羇旅部・悲歎部・神祇部・釈教部・恋部上下、となっている。

印記、各冊巻初に、「林崎文庫」（方形）、「勤思堂」（円印）、同巻尾に、「邨井」（単郭方形）、「天明四年甲辰八月吉旦奉納／皇太神宮林崎文庫以期不朽／京都勤思堂村井古巖敬義拝」（単郭方形）、各朱印を捺している。

本書は、標記のごとく、本集のほかに、「堀川院御百首抄　以法橋玄仲本写之」―自鶯尾部至柳前半部・自忍恋後半部・遇不逢恋前半部・祝尾部等欠―、「俊成卿女集」―一部欠、「続詞花和歌集」―自巻十二至巻二十略過半存―、「順

徳院御集」―後半七五三（私家集大成歌序番号）～二八一番迄、略存―、の四種が、第一冊から第四冊の間に混入している。しかも、本集を含め三集一抄の本文は将に紛雑に入交り錯綴されているので、以下に各冊各丁数に順い詳記することにした。しかも留意されるのは各集・抄共に同一筆者の書写になることである。かかる混淆書写本の経由は確認すべくもないが、本書の筆写者の五種写本を雑輯したとみるべきか、その依拠本のままの転写と見做すかのいずれかであろう。外題に「散木集　異本」と銘するのも其故かと推測される。

以下、各集は歌番号を以って略記したが、本集・続詞花集は言うまでもなく「新編国歌大観」、「俊成卿女集」は森本元子氏「俊成卿全歌集」所載「I家集」―同氏類別2類第一種書陵部本C―に拠る。「順徳院御集」は前記した通りである。「堀川院御百首抄」は歌題を以って略記することにした。

第一冊

一オウ　散木奇歌集―以下「散」―略記―一～五上句、二・三オウ　堀川院御百首抄　以法橋玄仲本写之―以下「抄」ト略記―立春～霞（前半）、四・五オウ　俊成卿女家集―以下「俊女」ト略記―一四　第五句～六、六オウ　「抄」柳（後半）～春雨（前半）、七オウ　「散」三九五～四〇一、八・九オウ　「散」三下句～三、十オウ　「抄」帰雁（後半）～苗代（前半）、十一オウ　「散」三三～三六詞書（前半）、十二オウ　「俊女」五四～六二上句、十三オウ　「抄」苗代（後半）～款冬（題）、十四オウ　「俊女」六二下句～七一上句、十五～二十四オウ　「抄」款冬（前承）～薄、二十五～二十七オウ　「散」一九三上句～二〇九詞書、二十八オウ　「散」五六三下句～五六八、二十九オウ　「散」二〇九歌～二五、三十オウ　「散」二四三歌～二四九、三十一オウ　「散」六〇三歌～六〇八、三十二オウ　続詞花和歌集―以下「続詞」ト略記―七四一～七四四詞書前半、三十三オウ　「散」三七～三四

第二冊

一～三オウ「散」三七～三九上句、四オウ「散」一八詞書（後半）～三上句、五オウ「抄」春雨（後半）・春駒、六～八オウ「散」四〇三～四一八詞書、九・十オウ「俊女」七下句～八上句、十一～十三オウ「散」五四詞書（後半）～七上句、十四・十五オウ「散」四八～四九詞書（尾欠）、十六オウ「俊女」一三～一四、十七オウ「続詞」五八作者、十八オウ「俊女」一五～一九、十九・二十オウ「続詞」五九歌～六〇七、二十一オウ「抄」露（尾）～月（前半）、二十二オウ「散」九下句～一〇三詞書（首）、二十三・二十四オウ「俊女」一六〇～一七上句、二十五オウ「散」一〇八歌～一一三、二十六・二十七オウ「抄」月（後半）～霜（尾欠）、二十八・二十九オウ「散」一一〇～一一三上句、三十オウ「散」五〇四小序―恋のこゝろをそへて……もてはやさせ給ひそのすちを好み、マデ―、三十一オウ「抄」鷹狩（後半）・炭竈（尾欠）、三十二オウ「散」五〇四小序―くりかへしうけひかぬ人もや……あすのあさけりをはかへり見さらんかも―五〇四歌～五〇七上句、三十三オウ「散」五五八詞書（後半）～五六三上句、三十四・三十五オウ「散」一四三詞書（後半）～一五三、三十六オウ「散」五三下句～五一九、三十七オウ「散」一六〇下句～一六六上句、三十八オウ「抄」不遇恋～後朝恋（尾欠）、三十九オウ「散」三七下句～三六上句、四十オウ「抄」旅恋（首欠）～片思（首）、四十一・四十二オウ「散」一七三詞書（後半）～一八一、四十三・四十四オウ「散」五三五歌～五四六詞書、四十五オウ「散」一八三詞書～一八七詞書（前半）、四十六オウ「抄」暁（尾）～松（尾欠）、四十七オウ「抄」苔（後半）～山（首）、四十八オウ「散」五四六歌～五五三詞書（前半）、四十九オウ「抄」竹（後半）～苔（前半）、五十オウ「散」一八七詞書（後半）～一九三詞書、五十一～五十四オウ「抄」海路（首欠）～祝（尾欠）、五十五～五十七オウ「散」五七四～五九一、五十八オウ「散」二三七～二四三詞書、五十九オウ「続詞」七三〇詞書（後半）～七三四、六十オウ「散」五九八歌～六〇三詞

書、六十一オウ　「続詞」七三五～七三七

第三冊

一オウ　散木奇歌集巻第四　五六九～五七三、二～四オウ　「抄」山(首欠)～海路(尾欠)、五オウ「散」三八九下句～三九五詞書、六オウ　「散」二歌～一八詞書（前半）、七オウ　「散」三八詞書（後半）～四三上句、八オウ　「散」五〇詞書（後半）～五四詞書(前半)、九オウ　「散」四二四下句～四三〇、十オウ　「俊女」八六下句～九五上句、十一・十二オウ　「散」四三七～四四七、十三オウ「俊女」一三四～一三三、十四オウ　「散」七九下句～八五、十五オウ　「俊女」一四三～一五〇、十六オウ　「散」九〇詞書（後半）～九五詞書（前半）、十七オウ　「抄」苅萱～鹿（首）、十八オウ　「散」四七〇～四七五第二句、十九オウ　「抄」鹿(首欠)～露(首)、二十オウ　「散」四七六～四八二詞書、二十一オウ　「俊女」一二四下句～一三三、二十二オウ　「散」一〇三詞書(後半)～一〇八詞書、二十三～二十六オウ　「散」四八二歌～五〇三、二十七オウ　「散」一三一下句～一三七詞書、二十八・二十九オウ「抄」霜（後半）～神楽（前半）、三十オウ　「散」五〇四小序―九月……しつかに月を見ると云事に、マデ―、三十一オウ「抄」神楽（後半）・鷹狩（前半）、三十二・三十三オウ　「抄」炭竈（尾）、～忍恋（首）、三十四オウ　「散」一五四下句～一六〇上句、三十五オウ　「散」五〇～五四、三十六オウ　「抄」後朝恋（尾）～旅恋（前半）、三十七オウ　「散」一六六下句～一七三詞書（尾欠）、三十八オウ　「抄」片思（後半）～暁（尾欠）、三十九～四十一オウ　「散」六〇九～六二七詞書（首）、四十二オウ　「続詞」七五二～七五七作者、四十三オウ　「散」六二七詞書（首欠）～六三上句、四十四オウ「散」三四下句～三三〇

第四冊

一オウ　散木奇歌集巻第四下　二六四～二六八、二オウ　「散」五五～五三〇詞書、三オウ　「散」六三八下句～六四上句、四オ

ウ「続詞」七四作者～七六九詞書（尾欠）、五～十オウ「散」六四下句～六八上句、十一オウ「散」三二～三六詞書、十二オウ「続詞」七九六詞書(尾)～八〇〇詞書(前半)、十三オウ「続詞」八〇六～八〇九、十四オウ「散」三六歌～三四詞書(尾欠)、十五オウ「続詞」八一〇～八一三、十六・十七オウ「散」三四詞書(尾)～三六、十八オウ「続詞」八八詞書(尾)～八三詞書、十九オウ「続詞」八一四～八八詞書、二十オウ「散」三七歌～三四上句、二十一オウ「続詞」八三作者～八三七、二十二オウ「散」三六四下句～三七〇、二十三～二十八オウ「続詞」八三八～八五六詞書（前半）、二十九オウ「続詞」八六七歌～八七三詞書、三十～三十二オウ順徳院御集―以下「順」ト略記―七五三～八三、三十三オウ「順」九八〇～九九一、三十四・三十五オウ「順」八一三～八五二、三十六オウ「順」八七三～八九二、三十七オウ「順」九六五～九七九、三十八オウ「順」八五三～八七二、三十九オウ「順」八九三～九〇六詞書、四十オウ「続詞」九二作者～九八作者、四十一～四十四オウ「順」九〇六歌～九六四、四十五・四十六オウ「順」一〇三七～一〇五五、四十七・四十八オウ「順」一〇六七～一〇八八詞書、四十九・五十オウ「続詞」九七九～九八八詞書、五十一オウ「順」一〇八八歌～一〇九九、五十二オウ「順」二四三歌～二五三詞書、五十三オウ「順」一〇五六～一〇六六、五十四オウ「順」一〇〇～二一一詞書、五十五・五十六オウ「順」二三歌～二四一、五十七オウ「順」二五三歌～二六三詞書、五十八オウ「順」二七三～二八一

第五冊　祝部・別離・羇旅部十九丁、第六冊　悲歎部・神祇部・釈教部　四十四丁、第七冊　恋部上二十二丁、第八冊　恋部下二十丁、同部巻尾に、

徳是北辰椿葉影再改云〻

従　禁裏依宣旨注之

文亀弐年八月十七日」21オ

と、「抄」奥書を誌している。

上記の雑輯的な状況にはあるが、本集自体は、以下可成の欠葉箇処が推定されるのであるが、それを除けば略根幹本文をとどめ、大概の本文基底を把握することは可能である。その落丁部を掲示すると、

春部　五下句～一詞書　四三下句～五〇詞書前半　七一下句～七九上句　八六詞書～九〇詞書前半　九五詞書尾部～九九上句　一一四詞書～一一九歌　一三七歌～一四二詞書前半

夏部　二二六詞書～二三七上句　二四九下句～二八三歌　二八九詞書～三一四上句　三二六歌～三二八詞書

秋部　四一八歌～四二四上句　四三一歌～四三六歌　四五九詞書尾部～四六九歌

冬部　五〇四詞書（中間）―ならはさりける人をはふみの道につけ哥のかたによせて……はつかしの杜のはつかしくことの葉ことにしほめるけしきなれはあまのたくなは、ノ間―、五〇七下句～五一三上句　五三〇歌～五三五詞書　五五二詞書後半～五五八詞書前半　五九二詞書～五九八詞書　六三二下句～六三八上句　六八一下句～六八四歌

と、相当の落丁本文が見出されるのである。しかし、上記したごとく本書の大略を看取する上に於ては差したる支障なきものである。

又、併せて附記するが、本文重複箇処が一ヶ処所見される。即ち、

第一冊三十三丁表裏に、夏部三七下句～三四歌上句、が書写され、第二冊三十九丁表裏に、同じく三七下句～三六歌上句までを書写しているが、前者の当該箇処には三四上句に続け次行に三五下句「山のけしきも空はかはらし」を誤写[註]しているところから再度の書改めとも推測されるのである。その本文は漢字・仮名の相違は認められるが、全く同一本文である。

本書は、稍々煩瑣にわたったが、以上のごとく諸集雑綴されている。が、以下、本集本文の叙述にあたっては、本集部立を復原の上に言及してゆくことにするので、それに先立ち詳記附言におよんだ次第である。

本書は既述のごとく、落丁・錯綴、又他集の混在、しかも同筆書写本という実に怪訝な伝存本であるが、本集諸本のなかにあっては、例の冷泉家本をのぞけば、その書写年代は古写伝本に属し近世初期の書写本である。且つ、私に云う、伝本分類からすれば、第三類本系統を代表する本文である。現存伝本状況からすれば、第三類本系統は全て十巻完備の形状を整えるのに対し、本書は八巻本、雑部上下二巻を欠如しているが、第一・二類本系の基底も未完の八巻本に十巻本系の雑部両巻が補綴されるという基本的編成をなしていたのと同様である。その点では第一～三類の間は異るところがないが、以下に諸本各項に於て概要するごとく、やはり各類を以って別するのが至当であろうかと推測するのである。従って、その類を分つべき本文異同を、第三類本を代表する本書に拠り俯瞰してゆくことにする。しかし、本書の欠落葉、又雑部二巻の各処に就いては、次掲三類本の当該箇処に於て言及することにする。

例に倣い、まず本書に看取される欠落本文は第四類書陵部A本本文を基準とし、同本本文を以て掲出することにするが、本書本文の部分的本文の欠漏については、本書本文を本行とし、同欠文を・・・・を以って示し、圏点部に書陵部A本本文を傍記することによって掲示する方法に従った。又、当然のことながら当該本文に於ける第三類本諸本との異同―存否・有無・追補を含め―脚下略注した。更に参考までに、第一・二類本系統諸本との関聯も同様に追記することにしたが、第一類本は前輯に記したごとくに、契沖書写追補朱訂本とその転写整定本との関係にあるので、契沖書写墨筆本文を第一類原本として朱補本文は棄去し第一類本とのみ略記した。又、第二類本系諸本も屢々朱筆追補部分を所見するが、前者同様に捨象することにした。その詳細は第一・二類本系諸本解題を参照されたい。

1 東北院の花さかりなりと聞て人〳〵あまたくして見にまかりたりけるに梅のはなもさかりにておもしろかりけるに鶯おとつれて過かたかりけれはたちとまりて侍けるに人〳〵はすきにけれはよめる　春部五一　詞書　神B・岸・初・国蘆本傍記本文欠、但シ、岸・国蘆本同筆細補

2 山さくら谷ふところに木かくれぬ風そよ□□めきて花もとむ也　同部八三歌　神B本傍記本文欠、岸・初・国蘆本存

3 百首哥中にかへるかりの心をよめる　同部一五三詞書　神B・岸・初・国蘆本傍記本文欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補

4 とりつなけたまたよこ野〻はなれ駒つ〻しか本ノおかにあせみさくなり　同部一五六歌　神B・岸本傍記本文欠、初・国蘆本存

5 はしかきにさとをはかれすとかけり　同部一六七左注　神B・岸・初・国蘆本欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補、第一・二類本系同欠（当該本補写ハ各本参照、以下省略）

6 をくにあまのおふねもとかけり　同部一八八左注　神B・岸・初・国蘆本欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補、第一・二類本系同欠

7 夜深聞郭公　夏部三三詞書　神B欠（重複書写本文共）・初・国蘆本欠、但シ、初・国蘆本同筆細補、岸本存

8 もろともに今そなくなるほと〻きす八声の鳥はをのかつまつまかは（ママ）　同部三三六歌　神B本傍記本文欠（本書毎半葉十行書写ナルモ、当該箇処九行ヲ末行トス―第二冊三十九丁裏―従ツテ欠落本文ト推定サレル）、初本欠、岸・国蘆本存、但シ、斯・東・京・穂蘆本等同筆朱補、第二類本系同欠

9 くる人もなき山里はかやり火のくゆるけふりそ友と也ける　同部三四八歌　神B・岸本欠、但シ岸本同筆細補、初・国蘆本存

10 夏草をよめる　同部三五七詞書　神B欠、岸・初・国蘆本存

11 七月七日孝清かかつらの山里にて帥中納言基縄（ママ）を初て哥綱（書A）よまれけるに　秋部三八二詞書　神B・岸・初・国蘆本傍記本文欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補

12 うき身には山田のをしね（おしこめて世をひたすらに恨つる哉）　同部四七五歌　神B・初・国蘆本傍記本文欠、但シ、初・国蘆本同筆細補・岸本存

13 秋はきの下葉に月のやとらすは明てや露のかすを□□□□（しらまし）　同部四九二歌　神B・岸・初・国蘆本傍記本文欠、但シ、初・国蘆本同筆細補、岸本モ別筆墨追補

14 ……前略……みな御心になんまかせ給へり（しあまのみそらにはたなひけるくもゝなく政の庭にはみやをまもる）神ちからをあはせ給ふあまりに……下略……　同部五〇四小序中間部　神B・岸・初・国蘆本傍記本文欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補

15 ……前略……あすのあさけりをはかへり見さらんかも（そのことはにいはく）　同五〇四小序尾部　神B・岸・初・国蘆本傍記本文欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補

16 秋の山の月をみるといへる事をよめる　同部五三八詞書　神B・岸・初・国蘆本欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補、第一・二類本系同欠

17 家道朝臣　冬部　六五八作者　神B・岸・初・国蘆本欠、但シ、岸本同筆細補・国蘆本「家通」ト略補、第一・二類本系同欠

18 衣手のさへ行まゝに（神なみのみむろの山に雪はふりつゝ）　同部六七七歌　神B・初・国蘆本傍記本文欠、但シ、初・国蘆本同筆細補・岸本存、cf、第一類本系・第二類神A・志A本同一首全欠

19 堀川院の御時中宮はしめて堀川の内裏にまいらせ給ひけるに（て（書A）松契遐年といへる事をよませ給けるに）よめる　祝部六九三詞書　神B・岸・初・国蘆本傍記本文欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補

20 ……前略……石なとりの石のおほきなるをつくりて十の石に（ひとつつゝ）書侍りける　同部七一八詞書　神B・岸本

傍記本文欠、但シ、岸本同筆細補、初・国蘆本存

21 加賀守　別離七四一作者　神B・岸・初・国蘆本欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補、第二類神A・志A同欠、cf、第一類本系詞書・作者名欠、第二類忠・江本詞書・作者・歌全欠

22 経盛（兼）　同部七四六作者　神B・岸・初・国蘆本欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補、第一・二類本系同欠

23 藤戸といふ所にとまらんとしけるに（おひ風ふきなとすまた日もたかしとてよらてすきけれはよめる）　羇旅部　七六九詞書　神B・岸・初・国蘆本傍記本文欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補、第一・二類本系同欠

24 おほ舟のほにあけて物を思ふには（本ノはしる）はしるそ袖はぬれける　悲歎部八〇四歌　神B・国蘆本傍記本文欠、但シ、国蘆本同筆細補、岸・初本存

25 例ならぬ人の舟に有かくるしかると聞て（そひ舩にのせうつすをきゝて）　同部八一〇詞書　神B・岸・初・国蘆本傍記本文欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補、第一・二類本系同欠

26 君こふるなみたのたきにおほゝれてふりさけふ（さけふ）こゑはきこゆや　同部八四四歌　神B・岸・初・国蘆本傍記本文欠、但シ、岸・国蘆本同筆細補、又第一類本系・第二類神A・志A同欠

27 たかためにもとめてえたるいのちなれはけふまて此身（かすに）もりけん　釈教部八七三歌　神B・岸・初・国蘆本傍記本文欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補

28 うちはへてたのむみやまのあをつゝちくるしみなきはわれひとりかは（ら）　授記品心を　同部八七六歌・八七七詞書　神B・岸・初・国蘆本欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補

29 難思光仏

人はいさひかりのすちをしかそともおなしほとけやしらはしるらん　同部八九二詞書・歌　神B・岸・初・国蘆本欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補、第一類本系・第二類野本同欠、cf第二類本系神A・志A・忠・江・信本歌欠

30 そのほとゝ思ひかたきはよものうみにそこゐもしらぬ心也けり　同部九三六歌　神B・岸・初・国蘆本欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補、第一・二類本系同欠

31 たれしかもあはれと見えむけぬもせすやまかたつくるはるの・・・・・　同部九四三歌　神B・国蘆本傍記本文欠、但シ、国蘆本同筆細補、岸・初本存（岸本墨筆追補歟）

32 法の花くさ〳〵にさきみたるといへる事をよめる
そこはくの花のひもとく庭のおもにをしのけたるはは（ら）ちす也けり　同部九五八詞書・歌　神B・岸・初・国蘆本欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補、第一・二類本系同欠

33 そゝきするあられか嶋に・・・されぬむかへにきませみつのあま人　同部九九二歌　神B・国蘆本傍記本文欠、但シ国蘆本同筆細補、岸・初本存

34 おんな　恋部上一〇〇八作者　神B・岸・初・国蘆本欠、但シ、岸・初本同筆細補

35 みつきといふはつくしのふのかとてなり　同部上一〇三九左注　神B・岸・初・国蘆本欠、但シ、岸・国蘆本同筆細補、第一・二類本系同欠

36 あさましやこはなにことのさまそとよこひせよとてもむまれさりけり　同部下一一三六歌　神B・岸・初・国蘆本欠、但シ、岸・初・国蘆本同筆細補、第一・二類本系同欠

37 ちつのほきとちのわたをも・・ぬへしそれにおもれるこゝろなりせは　同部下一一四六歌　神B・初・国蘆本傍記本文欠、

但シ、初・国蘆本同筆細補、岸本存

38 海路恋　同部下二六〇詞書　神B・岸・初・国蘆本欠、但シ、岸本同筆細補、又第一・二類本系同欠

以上、大凡三十八例が本書に所見する欠落本文の著しき処箇として挙げられるのである。脚注した第三類諸本との異同から結論すれば、その過半は相互に共通し一類系を成していることは否定しがたい。あらため整理するまでもないが、単純な統計的数値を誌しておくことにする。

(イ)第三類四本―神B・岸・初・国蘆本、但し蘆庵本系には相互に若干の相違があるが、共有する欠落本文は上掲表中―1・3・5・6・11・13・14・15・16・17・19・21・22・23・25・26・27・28・29・30・32・34・35・36・38、の二十五例である。

(ロ)同じく三本―神B・初・国蘆本が共有する同上本文は―7・12・18・37、の四例である。

次に二本が共有する場合は、(ハ)神B・岸本、(ニ)神B・初本、(ホ)神B・国蘆本の三系の図式を見る。

(ハ)神B・岸本、共有の同上本文は―4・9・20、三例である。

(ニ)神B・初本両本の場合は―8、の一例である。但し、斯・東・京・穂蘆本は欠文追補とする。

(ホ)神B・国蘆本の場合は―24・31・33、の三例である。但し、岸本は24例も追補本文歟。

(ヘ)本書神B本のみの欠落本文は―2・10、の二例である。

第三類本系四本の相互関係を図式的類縁として数字上に単純表示すれば、神B・岸本に見る共通欠落本文は、三十八例中二十八例、神B・初本に於ては三十例、神B・国蘆本では三十二例、となり、些少の相違は存するにせよ、略同じくする数値となって現れてくるのである。その相互の相違には附記したごとく追補本文か否かを既に認定しがたき

処も生じ、且つ三本―岸・初・国蘆本―はいずれも江戸末の書写本であり、その転写・校合の経過を考慮すれば寧ろ当然の結果であり、以上八巻迄の祖本系は同一本より派生したものと見るべきであろう。

又、既述第一・二類本両系諸本とは、同じく上掲表中に略脚注したごとくに、その5・6・16・17・22・23・25・30・32・35・36・38の十二例を共通して欠如し、更に18・26例等も本類との関聯は否認しがたいものが存する。そのほか、8・26・29の両三例なども、第一類系又は第二類系の伝本中の一・二本と合致するか或は何等かの交渉関係が想定されて、第一類本系から第三類本に到る過程には既に現時点では推測を許さぬ経由事情が嘗って存したことが窺見されるのである。もとより上述の推論はあくまで図式的な結果に拠るものであり、各例本文の細部検討を要するものである。当然の事ながら私なりの推勘は試みるところではあるが叙述の紛乱を避けて稿を更めたい。

が、ともかくも、第一類から第三類本系の間は、次述第四類本系に比して截然たる分岐線は設定しがたい事実は一方に存しながら、猶縷述してきたごとくに、本類第三類本系は第一・二類本系とは依然本文状況を異にする伝本類として措定しえざるを得ないのである。それは、前記した本書の落丁部分を考慮し、且つ本集伝存経過に於ける避けがたい混淆化という前提を設けるとしてもである。

そのことは、以下に挙げる本類本文上の特徴に於ても同様である。即ち、第一・二類本系と緊密な関聯上にありながら又本類固有な一面を示しているのである。

まず、第二類本に於ける部立表記であるが、本集全般を通じて基本的には異るところはないが、巻五・六の両巻に於ける小題―小項目―の表記には若干の異同が散見される。前例同様の方法に則り各類の表記を見ることにする。

巻五　羇旅部神B・岸・初・国蘆本同、但シ、初・国蘆本「旅宿」同筆校補、第一・二・四類本系「旅宿」―但シ、

類本系「羇旅部」

巻六　神祇部・神B・岸・初・国蘆本同、但シ、岸・初本「部」ト同筆校補（ナシ塙（ル））、第一・二・四類本系「神祇」

同巻　釈教部・神B・岸・初・国蘆本同、第一・二・四類本系「釈教」、但シ、類本系「釈教部」

の三例が所見される。後者二例はともかくとして、一例にはすぎぬが、第三類本系のみに看取される「羇旅部」の表記は、その伝写経由を審らかにしがたいが、本系類諸本に看る独自表記として特徴付けられるものでもある。

続いて次に本書に所見する異文―前例同様に第四類本系書陵部A本に対する― の主なるを掲示し、併せて第三類本系諸本との異同を附記して、その類同関係を検することにする。又、参考までに既述第一・二類本系諸本との交錯状況を辿るべく異同を略記する。各系類に於ける略記の次第は前表―欠落本文―と同様である。

1　家隆（綱（書A））かもとより蛤をこすとて……（下略）　家隆（綱（書A））春部二六七詞書・作者　神B・初・国蘆本同、但シ、初・国蘆本「家綱」ト同筆朱校、岸本・第一・二・四類本系「家綱」

2　丹波前司重房（季（書A））の家にて女郎（人々秋の花をよみけるに（書A））花をよめる　秋部四〇三詞書　神B・岸・初・国蘆本同、但シ、岸・国蘆本ハ傍記本文同筆朱校、第一・二類本系略同

3　九月十三夜殿下法性寺関白（ナシ（書A））にてよめる　秋部三六詞書　神B・岸・初・国蘆本同、但シ、岸・初本「法性寺関白」ニ類本ニテ「ナシ」ト同筆朱校

参考マデニ第一・二類本系ノ本文ヲ挙ゲルト、

九月十三夜殿下にて法性寺関白　第一類本系・第二類神A・志A本

九月十三夜殿下にて法性寺関白よめる　第二類野本

九月十三夜法性寺関白殿下にてよめる　第二類忠・江・信・築本

等、類似的異同本文ノ諸態交渉が看取サレル

4 落葉満網人(代書A)にそ　冬部六〇八詞書　神B、諸本傍記本行

5 せたのさと橋の馬(書A)橋駒(書A)ふみ朽るおほみこそ(書A)のなみたそおもかけにたつ　恋部上二〇八歌　神B・岸・初・国蘆本同、但シ、岸本「駒つみ朽る」、国蘆本「おほえこその」、又、初・岸・国蘆本ハ類本ニテ同筆朱校

参考マデニ、第一・二類本系ハ、

せたのさと橋の駒ふみ朽めおほみそこの涙そ俤にたつ　契・神A・志A・忠・江本等略同ジクシ、第三類本系トノ関聯ヲ看ル

6 皇后宮の弘徽殿におはしましける比細殿にて人に物申けるに女はうの上へのほるとて道みくるしとてしはしと(たはしてと(書A))て今女官の申けれは恋て(たち(書A))殿上のかたへまかりけるを後に参やすると待けるに見えさりけれはかれよりおくり侍りける(て(A書))　恋部下二三〇詞書　神B・岸・初・国蘆本略同、但シ、国蘆本「おはしましける比」ヲ「おはしまし比(けるル(朱))」ト誤ル、初・国蘆本「物申けるに」ノ「物」字欠、又同二本「しはしとて今」ハ「しはしとてと」ニ作ル、岸本「女はうの上へ」ヲ「女はうの上人」、「女官の申けれは」ヲ「女官のよけれは」ニ誤ル。第一・二類本系ハ既述シタガ比較参考マデニ第二類本系神宮文庫A本本文ヲ掲示スル

皇后宮の弘徽殿におはしましけるころ細殿にて人に物申けるに女はうのうへゝのほるとてみちはくるしとてしはしたてと女宮(ママ)の申けれはたちて殿上のかたへまかりけるを後にまいりするとはんへりけるにみえさりけれはかれよりをくり侍ける

トアリ、第一・二類系諸本ハ略同ジクシ、本系類トハ又近似スル処ガ窺レル

の纔か数例を掲示するにとどまるが、その細部にわたる異同が寧ろ系類間相互に於ては、その意味するところは重

いのである。しかし、此僅少例においても第二類本系は、上掲4の本書の誤写をのぞいては殆んど同一本文であり、その一例1のごときは—岸本を除く—本文の誤謬もさえ同じくするなど、同一系類本としての結果は前者—欠落本文—の結論に准ずるところである。且つ、第一・二類本系とは、その過半が近似又は類同し、各類系の流動、交錯の様相は概ね自然な経過が辿られるごとくである。しかし猶、やはり第三類本系は微細な点に於て—掲示例文以外にも—その本文が一類群を構成していることは否みがたいのである。

本書の落丁箇処部分に就いては、次述各本の処にて触れることにするが、その概ねは略同様な類同的本文であったろう、と推測されるのである。

次に、本書に於ける歌序次第の異同—前例に倣い書陵部A本に対する—は、既述の第一・二類本に所見された三例—㈠・㈡・㈢—が予想され、その排列に於ては第一〜三類系諸本には基本的異同は認めがたい。しかし、本書には落丁箇処が存し、以下のごとく、その㈠・㈡に於ては、就中㈡本文は全て落丁し不明である。

先ず㈠夏部、三三・三五・三四・三八・三九・三六・三七・三〇、の排列であるが、本系類では、岸・初・国蘆本共に同じくし、第一・二類本系も共通している。しかし、本書は三六詞書より三七歌上句を落丁して、その下句より、

おもひしつみてあかしつるかな　三七歌下句

かきねにはもすのはやこゑおのゝ音してのたをさにしのひかねつゝ　三〇歌（にゑたてゝけり（書A））

と次第する本文のみであり、前半の三三〜三六は猶確認しがたいが、本集諸例よりみて同一排列であったろうと推測される。些事ながら本書第二句「もすのはやこゑ」、第三句「をのゝ音」、等の誤文は岸本を除き初・国蘆本共に同じくしているのは三本の祖系を自ら想定せしめる点でもあろうか。

次の㈡夏部、二六三・二六五・二六四・二六六、の排列であるが、本系類では岸・初・国蘆本共に同じくし、第一・二類本系も共通する。しかし記したごとく本書の落丁部分に当り確認しがたい。たゞし、前者同様に同排列であったろうことは予測されるのである。

又、㈢釈教部、八九一・八九〇、の排列は、第一・二類、本系類も本書を含め全て同一である。参考までに本書本文を掲示すると、

智恵光仏

侘人のこゝろのうちもよそなからしるやさとりのひかりなるらん　釈教部八九一

不断光仏

ちかひおきてみちひく人の隙なさにひかりもたえぬものにそ有ける　同部八九〇

とあり、本文も又殆んど異同を見ぬ。

本書の歌序次第は、右記したごとく可成りの落丁部分にあたり厳密には断定しがたいが、妥当な推測として、それは㈠・㈡・㈢の排列を持ち、他の三類本同様にして、その依拠する基を同じくしていたのであろう。又、一方第一・二類本系とも共有し、第四類本系と分つ点に於ては、本書が代表する第三類本系は既述の第一類から第二類にと展ずる延長上に次いで隣接する系類と目してよいのであろう。ともかくも、本集に於ける歌序次第の異同は右記三例を基本としている。

以上、本文・排列上から所見される本書のもつ特色の概要である。後述する第三類本系伝本は各々又独自の諸要因を胎みながらに屢々註記してきたごとくに極めて近似し一伝本上より派生した系類であることを表示している。そし

て、それは第一・二類本系とは不可分な関聯を保持しながらに又個有の類群をなしている。それが、永い伝写の経過上に生じた書写・校合上の単なる変化であるのか或は旧き原態をとどめながらに呈示しているのかは、本類系統に本書を遡る書写伝本の存しない現在如何とも推測の手懸を得ない。ひとまず、本系類を設けて対処してゆくことにする。

註　当該箇処は、第一冊三十三丁裏には、

時しもあれなきあふ坂の枚か枝に／山のけしきも空はかはらし

と、上句は夏部三四歌、下句は同部三五番歌である。又、重複書写部分の第二冊三十九丁裏第三行目からは、

時しもあれなきあふ坂の枚か枝に／山郭公せきかたむ也　同部三四

山里にて郭公をきゝてよめる

ほとゝきすぬしあやしとて夜かれする／山のけしきも空はかはらし　同部三五

と、訂正され書写されている。両首の下句「山」の目移りによる誤写と重写であろう。

国立国会図書館蔵〔江戸後期〕写　存十巻　岸本由豆流旧蔵本

袋綴、五冊（但シ、現在茶刷毛引帝国図書館覆表紙合二冊―自巻一至巻五、自巻六至巻十各一冊トス）。原表紙は浅縹色。竪二十七・九糎、横十八・六糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十・七糎（歌本文）。毎半葉十二行に和歌一行書き、詞書略三字下げに書写する。

題簽、稍々大振な白紙短冊を各冊左肩に貼付し、「散木奇歌集　一春二夏（三秋四冬・五祝別／旅六悲釈・七恋上八恋下・九雑上十雑下）」と墨書する。但し、第二～五冊は「歌」を「哥」に作る。

内題、「散木奇歌集巻第一（〜十）」を記す。

部立表記は、前掲第三類本系神宮文庫B本に所見する巻四夏部（上）下二部に分つのを除けば全く同じくし、四季部・祝部・別離・羇旅部・悲歎部・神祇部・釈教部・恋部上下・雑部上下、となり、就中、巻五「羇旅部」、巻六「神祇部」、同「釈教部」等の表記は本類の特徴を具示している。

本書各冊の本文墨付は、第一冊三十六丁―内巻一　二十丁、巻二　十六丁―、第二冊三十二丁―内巻三　二十一丁、巻四　十一丁、第三冊三十六丁―内巻五　十一丁―、巻六　二十五丁、第四冊二十三丁―内巻七　十二丁、巻八十一丁―、第五冊四十九丁―内巻九　二十五丁、巻十　二十四丁、である。

印記は各冊第一葉表の右寄り下方に、「岸本家蔵書」と子持枠付の長方形朱印を捺している。同印は岸本由豆流（寛政元〜弘化三年）印記であるので同所蔵本と目せられるが、後述するごとく書写上の誤謬著しく由豆流筆写本とは到底考えられず略同時期書写の手沢本と想定される。本書本文の蕪雑下拙な手跡とは異る稍々枯格な練熟した書風の朱墨両筆の書入れ、本文校合・註記・集付等がかなり詳密に附記されている。あるいは、本書取得後の由豆流の手になる校勘記の一端ではなかろうか、とも想察されるのである。いずれ精査を期したい。

本書は前記神宮文庫B本八巻本と異り、全十巻を具備する完本ではあるが、後述する本類―第三類本―に共通する巻第九・十の両巻を本類八巻本系統に補配された合綴本文に拠るものと推測される。その雑部二巻を除けば所掲本類本文は略共有し、本集伝本の中の一類群として措定されるものと考えられる。従って、以下に於ける本文の比較、対照も巻第一〜八、巻第九、十、の二部に別して叙述することにする。

前例に倣い、本書の本文の特徴を検証してゆくことにする。その本文は上記したごとく本類本系の特有性と共に本書独自の欠落本文が処々に散見される。そして、その過半は、数例を除き、皆群書類従本に拠り朱補されている。墨筆本文と異り、枯格流麗な筆致であるところから由豆流当人の校合かと想像したのである。従って、此処に、以下本書の欠落本文とするのは右校合補筆部分を却除しての本来の墨書本文である。

先ず、巻第一より巻第八迄の八巻本本文に就いてであるが、前掲神宮文庫B本に所見した特徴的な欠落本文との共通する諸点を辿ることにする。簡便を期し、同本一覧表に附記した番号をゴチック体にて挙げ、（ ）圏内に本集番号を記すことにする。同本解題（十～十四頁）を参照され、本類諸本、又第一類本系との相互関聯も併せ参考されたい。更に当該朱補部分には「塙」、「塙本」、「右二行脱以塙本補」、「以塙本補」等の朱註を附すが、以下には「塙朱補」と略註することにした。

1（五二詞書）―塙朱補、**3**（一五三詞書）―塙朱補、**4**（一五六歌）―塙本並ビニ夫木抄・印本百首朱補、**5**（一八七左注）―塙朱補、**6**（一八八左注）―塙朱補、**9**（三四八歌）―塙朱補、**11**（三八二詞書）―塙朱補、**13**（四九二歌）―無註記墨筆補、**14**（五〇四小序中間部）―塙朱補、**15**（五〇四小序尾部）―塙朱補、**16**（五三八詞書）―塙朱補、**17**（六五八作者）―塙朱補、**19**（六九三詞書）―塙朱補、**20**（七一八詞書）―塙朱補、**21**（七四一作者）―塙朱補、**22**（七四六作者）―塙朱補、**23**（七六九詞書）―塙朱補、**25**（八一〇詞書）―塙朱補、**26**（八四四歌）―塙朱補、**27**（八七三詞書）―塙朱補、**28**（八七六歌・八七七詞書）―塙朱補、**29**（八九三詞書・歌）―塙朱補、**30**（九三六歌）―塙朱補、但シ本書ノミ同詞書モ欠、**31**（九四三歌）―無註記墨補歟、**32**（九五八詞書・歌）―塙朱補、**34**（一〇〇八作者）―塙朱補、**35**（一〇三九左注）―塙朱補、**36**（一一三六歌）―塙朱補、**38**（一一六〇詞書）―塙朱補

と、以上神宮文庫B本に看取される三十八例中、二十七例を同B本と同じくし、又無註記の墨筆追補13・31の二例を加うれば、両本の欠落本文の過半は一致することゝなるのである。更に又、2・10の両例は神B本のみに所見され、本集伝存本に類例をみぬ欠落本文である。加うるに、7・12・18・37の四例は第三類本中、本書にのみ存する本文であり他本はこれを欠くことを併せ考慮すれば、相互の関聯は一層近似し、その転写上に於ける問題として対処し得るかと思われるのである。即ち、両本の祖本は、その源を同一にするものであると。

しかしながら、本書には猶以下のごとき欠落本文が所見され、その過半は本書独自の、諸本に類例をみぬものであり、両本の転写経由は単一線上には想定しがたいのである。

その顕著なるを次に挙げる。

イ 第一冊十五丁表と裏七行迄―二行余白―に別筆―朱補写と同筆―墨書する。本書の落丁一葉に近きを補写したのであろう。即ち春部二三七歌から同二四三詞書迄である。補写本文については附記するところはないが、漢字・仮名の相違を除けば、群書類従本の本文と全く一致する。同系本に拠る後補であろう。第一～四類本系存

ロ 春部二五五詞書・歌を欠落し、上欄余白に、

屏風の絵に春山里に人々なかめてゐたるに野にたかゝりするところをよめる

きゝすなくすたのに君かくちするゑてあさふ（虫損）　んいさ行てみん　右以塙本補　第一～四類本系存

ハ 夏部二五五詞書・歌を欠落し、上欄余白に、

毎夜待郭公

ほとゝきすよころ心をつくさせてけふそかすかにほのめかしつる　第一～四類本系存、校本註記ナシ、同ジク塙本ニ拠ル歟

ニ　同部三三詞書尾部を欠落し、下辺余白に、

皇后宮権大夫師時の八条。にて水風晩（の家塙・涼といへる事をよめる塙暮金）　第一類本同欠、但シ大細補（塙本）、第二類本神A・志A本欠

ホ　同部三三歌・三四詞書を欠落し、上欄余白に、

いしゐつゝひまもる水にたはふれてつてにも夏を聞わたる哉

百首哥中に泉をよめる　右二行以塙本補　第二～四類本系存

ヘ　同部三四歌を欠落し、行間余白に、

くる人もなき山さとはかやり火のくゆるけふりそともとなりける　塙本　第一～四類本系存

ト　秋部三九〇詞書・歌を欠落し、上欄余白に、

八日人のもとへつかはしける

あひ見てはたちもはなれぬ心をそたなはたつめにかすへかりける　以塙本補　第一～四類本存

チ　同部四三詞書の一部に傍記校合あり

同所にてとふ人もなきたひの。いふせかりけるにみやこの人うらめしかりけれは（すみかに霧降ふたかりて塙）　第二類本系同傍記本文欠、第三類系、神B落丁部、初・蘆本ハ塙本ニテ細補ス、第二・三類本系の独自異文歟

リ　同部五〇四小序中間部を欠落し、上欄余白に、

○ならはさりける人をはふみの道につけ歌のかたによせてまたすさめ給はさりきしかある御時に雲の上人とりそへられてたまのうてなになれさふらひしころこれらのみことのりをうけ給りし時肝にとほりむねにとゝまりて涙の雨とふらすとしよりはつかさくらゐはひきく面のしわはたかしかしらのかみはうつろひゆけとも心はか

はらさりけるものなれは見るもの聞事につけてあくかれうせぬるにやたきのなかれにひかされぬれは池のみきはにやたゝよふらんあらしのおとにたくひぬれはよもの山へにやまとひぬらんさゝかにのいかにしてかははつ鴈のかきつらぬへきよろつにはゝかりの関のかたくなはしき身の有さまとは思ひなからのはしのひさしきなにもやのこらむとはつかしの杜のはつかしくことの葉ことにしほめるけしきなれはあまのたくなは　第一～四類本系存、校本註記ナシ、同ジク塙本ニ拠ル歟

ヌ　冬部五二詞書・歌を欠落し、上欄余白に、

かへし

もみちする梢にさへそうらみつるちらて待へきこゝちならねは　右以塙本補　第一～四類本系存

ル　恋部上一〇九四詞書冒頭を欠落し、傍記校合あり、

○見せにおはせたりけれは返しつかはすとて　第一～四類本系傍記本文存

（さゝくみといふものを女のもとより塙）（こ塙）

以上、本書には第三類本系に於ても特異な欠落本文が多見され、一見同種の系類本から除外すべき感の印象も否みがたい。が、以下に述べるごとく、その大半は本集伝存本に所見せぬところであり、やはり本書の転写過程に於ける誤脱と認めらるべきものであろう。

右掲出箇処、イ～ル迄の十一例は、イの落丁補写一葉の墨書以外は殆んどが塙本―群書類従本―に拠る朱筆補写である。既に記したごとく此等補写校合は本書原本文とは筆跡を異にする追補・追校である。

その追補・校合本「塙本」と明記するのは、ロ・ニ・ホ・ヘ・ト・チ・ヌ・ルの八例の殆んどあり、又前後の校本附記の情況から判断して「塙本」を推測されるものに、ハ・リの両例が加わるのである。そして更にイも又塙本系本

文であるところから、塙本系本文とは、此処に於ても又歴然と識別されるのである。且つ、ニ・ホ・チを除く九例は孰れも第一～四類伝存本に見出されるところから本書独自の誤脱本文として現時点からは対処するのほかはない。しかし、ホ三三歌・三四詞書の欠落本文に関しては、第一類本系に三三詞書・歌の欠落文を見出し、その類似性が参考される。加えて、ニ三三詞書尾部の省略は第一類系本、第二類本系では神A・志Aの両本と共通している。纔か二例にすぎぬが上掲九例とは別して考慮すべきかもしれない。ことに後者などは第二類本系との相互関係などを推測する上に於ては前表第三類本の特徴的本文の一覧と併せ参照すべき一例でもあろう。その意味では、更に、チ四六三詞書一部の略叙の一例も加えられるべきであろう。

勿論、言及するまでもないが、しかし、本書は右例のみならず随処に誤写・誤字の多きが散見される伝本である。

次に、第三類本系の異文に就いては先に神宮文庫B本に所見するところ数例を掲示し、第一・二類本との関聯と並びに本類との対比を附記し言及せるにより重ねて附言するまでもないが、本書特有な書写状況と追補校合の一端を提示すべく以下に掲示することにする。本書と神B本と略共通するのは次の四例である。即ち、

2　丹波前司重房(季塙(朱))の家にて。女(人〻秋の花をよみけるに(朱))。花(郎(朱))をよめる　秋部四〇三詞書

3　九月十三夜殿下法性寺(ナシ塙(朱))関白にてよめる　同部五三六

5　せたのさと橋駒(夫卅一(朱))つみ朽(のむまふみくちめ夫/塙(朱))るおほみこそのなみたそ(そこ夫/塙(朱))面影(も夫/に(朱))にたつ　恋部上一〇八歌

6　皇后宮の弘徽殿におはしましける比細殿にて人に物申けるに女はうの上人(塙(朱))のほるとて道みくるしとてしはし(おはしてと塙(朱))と(朱)て今女官(申塙(朱))のよけれは恋(立塙(朱))て殿上のかたへまかりけるを後に参(り塙(朱))。やすると待けるに見えさりけれはかれよりおくり侍りける　恋部下一三〇

である。本書本文には稍々誤写を瞥見するが、神B本の六例中、四例を同じくし、且つ相違する神B本4は同本個有の独自異文である。又、神B本1は本類系にては、本書のみ第四類系本文である点を異にするが、纔かな例示ながら同類系一本と措定されるのである。

猶神宮文庫B本解題にて附言すべきであった特異本文の数例を此処に掲出し参照とする。

7　君こふとゐのかるものそね覚してあはかねたにやつれてそをる　本書恋部下二三歌
（夫廿七猪(朱)　より夫／塙(朱)　あみけるぬたにやつれてそふ(み)る夫／（　）ハ塙(朱)）

以下、参考までに第三類本系伝本の異同を記すと―以下三本傍記校合を掲げず―

第三句　いのかるもより　神B・初・蘆本（国学院本）、第四句あみかねたに　神B・初・蘆本

8　我を君こゝろのまゝにわくるしまのことをなへてこしみてそくる　本書恋部下二三九歌
（夫廿五(朱)　すかしまの夫／塙(朱)　つみのうらみてそふる(ゆく)夫／（　）ハ塙）

第三句　わくるしまの　蘆・初本、第四句　ことをなへてうらみてそ行　神B本、ことをなへてうらみこそゆく　初本、
（すか(朱)　つみの(朱)　くるイ(朱)　つみのル同し　くるイ　ル同し）

ことをなへて恨てそ行　蘆本
（くるイ(朱)）

9　手枕をかけてつれはお。ろ人しみはやはひましねみつのかとより　本書恋部下二九一　第二句　かけてしれは
（く塙(朱)　く塙(朱)　そ塙ナシ塙(朱)　く(青)　てく(青)）

蘆・初本、但シ、初本（墨）

以上纔か三例にとどめるが本集伝本中には類例を所見せず、且つ7・8の両例は四本の間に些少の異同を相互に見出すのであるが、その就れかの是非はともかくとして、本来は一異文として存したものが、書写上の間に又しても異形化して現在に至ったのであろうことは辿りうると考えられる。いずれにせよ、かかる第三類本の共有本文は、時に第一類本系、又第二類本系とのかかわりと混和のなかにも交錯し、その上に本類の独自本文をも夾雑させながらに一系類を形成しているという紛紜錯綜の状況が看取されるのである。しかも猶その各本間に於ける異同は確実な校本を俟

つのほかなきほどであって例示を拒むのである。しかしながらも、その総体より観れば一系類を成すものとして捉らえられる諸因をとどめているといえよう。ただ本書の場合は本類の中に於ても異同はもとより誤脱・誤写が著しく、塙本に拠る校合の跡を辿っても一見して認知されるのである。

次に、本書の歌序、排列次第であるが、屢々記述してきたごとく、第一・二類・又第三類本系の基本的形態に準じ、以下の三例を見出すのである。即ち

㈠夏部　二三三・二三五・二三四・二三八・二三九・二三六・二三七・二三〇、㈡同部　二六三・二六五・二六四・二六六、㈢釈教部　八九一・八九〇

である。第三類本系では、神宮文庫B本に於て、㈠の排列に前半落丁部分が存し、猶未確認の処―㈡落丁―が所見されるほか全て同一であり、上述の本書本文と共に第三類本系の一本として位置づけられるのである。但し、同類系数本に比し誤脱・誤写本文が多見され、岸本由豆流か、その朱墨補写校合を俟たねば可成りにわたる意解不明の本文であることは否まれない。その依拠本と共に又類本を見ぬものである。

上記、本書排列とは異るが、以下のごとき、無註記の朱筆歌序訂正の指示が見出される。誤認の惧れがあるので念のため掲出しておく。夏部二九五～二九七番の箇処である。

さみたれのこゝろをよめる

五月雨はもりこす水に岩こ(も塙(朱))へて庭も沼田の底(江塙(朱))となりける　二九五

さみたれはなつかしかりし水の音(の塙(朱))○をひたゝしくも成(まさる塙(朱))にける哉　二九六

百首の歌中五月雨を

おほ(千夏)つかないつかはるへきわひ人のおもふこゝろはさみ(や千(朱))たれのそら　二九七

と本来の歌順を追い書写されているが、二九六歌〻頭より朱線にて二九七歌の次に排すべく指定している。此の朱訂の表示は前後の関係より塙本に拠る校合と判断され、書写後に於ける本書元来の歌序次第を訂するものではないことを附言しておきたい。

本書巻一～八迄の本文・排列に所見する大略の骨骼は凡そ如上を以て尽きるが、次のごとき重複書写、左注・詞書の混入なども見出されるので些事ながら附記しておくことにする。

恋部上二〇四歌は、

まとろむにこひしきことのなくさまはねさめをさへや恨(は塙(朱))さらまし　一〇ウ（続拾(朱)）

と、書写し、次葉（11オ）に全く同じ本文を重写している。朱筆校訂では当然の事ながら朱圏で囲み見消ちにしているのである。

又、羇旅部七四左注・七五詞書は、

興してをの〳〵たちわけるとそありまといふ所にて日比になりにけるほとに春もくれて四月になりにけれはよめる（に塙(朱)）（か塙(朱)）

と、合せ混じ一文脈としている。校者は前者同様に朱訂指示しているが、総じて本書はかゝる稍〻疎略な書写伝本であり、然るべき書写者の手に係るものとは思われない。印記に拠り岸本由豆流旧蔵本と識られるが、その書写は別人であり、本書手沢の後、彼の人による諸本校合・書入れが新たに施されたかと推測されるのである。

次に巻第九・十―雑部上下の二巻についてであるが、第二・三類系の諸本に於ける、八巻本と此の両巻との補綴の

様相は概ね前者に対するに第四類本系本文を以て充当するのが一般である。しかるに本書は前記八巻本の欠落にも増して其の誤脱は多見されて類本を見ぬのである。そして、その朱補は前者同様に「塙本」を以て当てゝいるが、塙本の欠落は従って此れを脱している。以下に顕著なるを掲出するが、塙本補入本文はそれを挙げ、同本にも脱漏する処は書陵部A本本文にて掲示することにした。併せて、本集伝本第一～四類諸本に於ける当該本文の存否を附記する。但し、第二類本四本―神A・志A・忠・江本―は雑部両巻を合綴しないので当然の事ながら此れを除く。

1 雑部上二五五・詞書・歌を欠落し、上欄余白に、

懐旧

恋しともいはてそ思ふたまきはる立かへるへきむかしならねは　右二行脱以塙本補　第一類～四類本系存

2 同部上二三〇四作者名を欠落す、

阿闍梨（書A）　第四類書A・阿本存　他諸本欠

3 同部上二三〇九作者名を欠落し、同余白に、

皇后宮大貳（金葉・夫木）　第一類～四類系存、但シ「大貳」ト記ス

4 同部上二三二歌欠落す、

わきかへりなみちゐさそうたきつせにたえてもたてるいはまくらかな（書A）第一類本系存・第二類野・筑本存、第三類本系存、第四類書A・阿本存　第二類信本欠、第四類上記二本以外欠

5 同部上二三四作者名を欠落す、

永縁（書A）　第一類本系存、第二類信・野本存、第四類書A・阿・永・烏本存　第二類筑本欠、第三類本系欠、第四類上記四本以外欠

6 同部上一三六作者名を欠落し、同余白に、

家道朝臣 塙本 第一・二類本系存、第三類蘆本存、第四類永本以外存、第三類初本欠、第四類永本欠

7 同部上一三四詞書尾部を欠落し、行間余白に、……前略……と人のいひけるを聞てよめる 塙 第一類～四類本系存

8 同部上一三八作者名を欠落す、

修理大夫 三宮御製云々 （書A） 第一類本系存、第二類信本以外存、第三類本系存、第四類書A・阿・烏・岡本存 第二類信本欠、第四類上記四本以外欠

9 同部上一四八歌・一四九歌の両首を欠落し、上欄余白に、

ふしつけしおとろの下にすむはえの心をさなき身をいかにせん

しみつ（ママ）山ならのましはにかさゝれてねらふさつをのたゆみなのよや 右二首脱以塙本補 第一類～四類本系存

10 雑部下一五八長歌中、次の二句を欠落す、

……前略……むかしをよそに聞しかとわか身のうへになりはてぬ（書A）さすかにみよのはしめより……後略 第一類本系存、第二類野・築本存、第三類本系存、第四類書A・阿・烏本存 第二類信本欠、第四類上記三本以外欠

11 同部下一五〇詞書の前半を欠落し、同行間に、

中宮亮仲実かもとにうしかりにつかはしけるついてに 塙

はきのえたにつけてつかはしける 第一類～四類本系存

12 同部下一五二詞書尾部を欠落し、同余白に、

かへしうしにくして 塙 第一類～四類本系存

13 連歌一五七〇唱句作者名を欠落し、同余白に、

安藝守重基塙
・・・・・ 第一類〜四類本系存

14 同部下一五七六唱句詞書の一部を欠落し、上欄余白に、

……前略……備前国のあふすゝきのゝゐるといふところに（に塙）（ナシ塙）（く塙）（ものゝたちなみたるさきにうといふ鳥とさきといふとり）

・ゐたりけるを（と）……後略　第一類〜四類系本存

15 同部下一五八三和句を欠落し、上欄余白に、

さもこそはすみのえならめよとゝもに（金塙）　第一類〜四類本系存

16 同部下一五九〇唱句欠落す、

まことにやのりのはしよりをちにける（書A）　第一類系本存、第二類野・藥本存、第三類系本存、第四類書A・阿・烏・岡本存、第二類信本欠、第四類上記四本以外欠

17 同部下一六〇〇同作者名を欠落し、同余白に校本註記なく、朱補す、

・・・（肥後君（朱））　第一類〜四類本系存

18 同部下一六〇九作者名を欠落す、

殿義入寺（書A）　第一類本系存、第二類野・藥本存、第三類本系存、第四類書A・阿・烏本存　第二類信本欠、第四類上記三本以外欠

19 同部下一六一七唱句詞書中の一部を欠落し、上欄余白に校本註記なく、朱補す、

……前略……俄に出へしときこえめしをきたりける（し塙）（をえしらて蔵人は候と申たりける）・・・・・・・・・・・・・・・に能尋よと仰事有けれは……

……後略　第一類〜四類系本存

上掲十九例ほどが本書両巻に通覧される顕著な略一覧である。あらため記すまでもないが、

a　第一類系本より第四類系本―八巻本系は当然の事ながら、各類系本に所見される補写・補入本文も又此処では排除される―の諸本に当該本文の存するのは、1・3・7・9・11・12・13・14・15・17・19、の十一例となり、その過半を占めるのである。伝存本中、十巻本系の、特に第四類本系の性格と八巻本系との合綴の経由を測すれば、本書の十余例の多くは転写過程に於ける誤脱と想定せざるを得ないのである。

b　次に、特徴付ける所見例としては、第一類本系、第三類本系―本書を除く―に存し、第四類本系に於て**書A・阿**本を軸に数本内の異同を検出される、4・5・8・10・16・18、の六例である。殊に第四類本系ではいずれ後に詳述するが、b項に於ける此の欠落本文は所謂群書類従系本文に略共通する欠落本文であり、同類従本の系列を形作る所以でもある。一言附記すれば第四類系は概ね同類従系列と他系列―**書A・阿**本等―との二系列に類別し得るかと考えられる。と同時に、そのことは第一類～第三類本系の基底たる八巻本系本と十巻系巻九・十の両巻の補配は、その配綴の間の経過、情況は予測しがたいにせよ、此の二系列との結び付きにより現十巻本の形が成ったものと推測されるのである。第二類本系に見る些少の異同に就いては前輯にも触れたが、両三本―**信・野・藥**本―に於ける転写上の不測の結果とし対処し得るものと憶われ、右記の予測を覆すものとは思われない。

c　その他、残る二例、2・6、であるが、前者2は同じく欠脱する類従本系―**書B・京文・岡・志B**本―に拠り派生した第三類本系の一特徴とみれば、此れも又同様に処理し得る現象であろう。後者の6は第三類本中、本書・**初**本の両本に欠く点、稍々推測を困難としている。が第一・二・四類本系に存し―但し**永**本欠―寧ろaに準ずべきものとみるのが妥当であって、両書の特色をなしているのであろう。

かく概観するに、第三類本系に於ける本書巻九・十の両巻は欠落本文を極めて多く散見される伝写本であり、岸本

由豆流歟の補校なくしては本集伝本として稍々生彩を欠く点は否まれない。又、強いて本書両巻の依拠本系を探れば群書類従本系列の誤脱本文多き一本によるものであろう、そして同類系、初・蘆本系が—その細部は異るにせよ、後述—書A・阿本等の系列本に略依拠するのと対遮されるかと想定するのである。

如上、縷述にすぎたる嫌いは免れないが、本書両巻は更に又語句上に於ても随処に誤謬が散見され、前の巻一～八の各巻と共に必ずしも善本とは云難い。

しかし、両巻の排列は本集伝存諸本と変るところはないことを附記しておく。

備考

本書には岸本由豆流かと目される朱筆を中心とする—間々墨筆を含む—集付と詳密な校合が上掲補充本文と共に施され、且つ同様に上欄余白等には朱・墨同筆の出典・引歌・類歌・語解等にわたる書入れを処々に散見する。

その対照校本は金葉和歌集以下勅撰諸集に収載する俊頼歌を主とするが、その他、堀川院両百首、夫木和歌集、袋草子等に加え、前記の「塙本」即ち群書類従本に拠る校合箇所は随処に散見され、本書本文の誤りを訂すところは甚だ夥多に及び、且つ周密である。本書の本文校勘の精緻なあとが偲ばれるのである。

又、その書入れも数十ケ処にわたり、史書・辞典・歌集等、比較的多岐に及ぶ上記諸本の類である。前記校合と前後する同人の補註とも云うべきものであろう。それら書入れは第一類契沖書入れとも異るものであり留意される。参考までに寓目するまゝ少々を例示することにする。

1　此集を散木集と名つけしは荘子人間世篇曰匠石之レ斉ニ至ニ乎曲轅一見ニ櫟ノ社樹一其ノ大蔽レ牛絜レ之テ百囲アリ其高臨レ山十仞而後有レ枝其可ニ以為ヲ舟者旁十数ナリ観ルル者如レ市匠伯不レ顧遂ニ行テ不レ輟マラ弟子厭アクマテ観レ之走テ及ニ匠石一曰自下吾

執斧斤以随夫子未嘗見材如此其美也先生不肯視行不輟何耶曰已矣勿言之矣散木也以為舟則沉以為棺槨則速腐以為器則速毀以為門戸則液樠以為樹則蠹是不材之木也無所可用故能若是之寿（ヤミネ）（ク）（イノチナカシ）○林註曰散木者言無用散棄之木也　第一冊遊紙裏（墨、訓点朱）

2　夫木廿七　慈鎮和尚

あさてほすはつきのえたにゐるもすのしつかならはやしつかいほまて

夫木九　西行法師

あさてほすしつかはつきをたよりにてまとはれてさく夕かほの花

夫卅五　永承五年十一月俊綱家歌合　能因法師

もしほやくあまのぬれきぬほすみれはいそへの松そはつきなりける　夏部三〇二歌上欄（墨）

3　班婕妤怨詩曰新裂斉綈素鮮絜如霜雪裁為合歓扇団々似明月　祝部七二五歌上欄（墨）

4　続紀六旻楽崎　美弥良久崎　肥前国松浦県　蜻蛉日記上

そうともねふつのひまに物語するをきけはこのなくなりぬる人のあらはに見ゆるところなんあるさて近くよれはきえうせぬなりとほうては見ゆ也いつれの国とかやみゝらくのしまとなんいふなるなとくち〳〵かたるをきくにいとしらまほしうかなしうおほえてかくそいはるゝ

ありとたによそにてもみん名にしおはゝ我にきかせよみゝらくの山

といふをせうとなる人聞てそれもなく〳〵

いつことかおとにのみきくみゝらくの嶋かくれにし人をたつねん　悲歎部八四六歌上欄（墨）

5　袋冊子三公実卿云ミツノウミノノ、字ハオソロシクオケルモノカナ後生ハオキ難字ヲト云々　恋部上二〇六九歌(朱)

6　万葉十七礪波郡雄神河辺作歌

をかみ川くれなゐ匂ふをとめらか葦附水松之類とると瀬にたゝすらし　恋部下二八四歌上欄(墨)

7　拾葉集十二云甲斐国に七彦と云所の米をめして粥にして産所の七夜〻に用る也猶可考　雑部上二三五歌上欄(墨)

8　巻五離別部既出(朱)

明ぬなりしはしまきれよ。衣たつねむ程になをなつさはむ　同部上二三七歌右傍記(朱)
次郎百　た次(朱)から(り傍記)次/塙(朱)　ほ(朱)　ぬイ(朱)

9　夫木廿七兎　家集雑哥中　俊頼

月見てもたのみをかけてまちわたるみちはしとなるうさきすみけり　雑部上巻末余白(朱)

以上、その一部にとどめるが、各註文はかなり広範にわたり又正確を期しているのが窺われる。

その1は、記すまでもなく、本集の書名「散木」の由来を示す出典である。既に先学契沖の説―第二類葉山信果書写本識語―に拠れるか否かは審らかにしがたいが、荘子人間世篇を正しく著録し、林氏の言説を敷衍している。その2は夏部二〇一歌の類歌を集め歌解の一端に供したものであろう。3は祝部七五歌の典拠班捷妤怨詩―団扇歌―を挙げ、本歌と本文との関聯を誌すものである。4は悲歎部八四六歌中の「みゝらく」の語釈に続紀・蜻蛉日記の用例を採取し、本歌の意図を探った一端である。5は恋部上二〇六九歌の初句に当代の禁詞を推測し、6は恋部下二八四歌の本歌を万葉に捜し、7は雑部上三三五歌の第二句「なゝひこのかゆ」の用語例、俗間の風俗にあさるなど、俊頼特有な歌語用法の一種晦渋な歌風の鍵のごときを附註書入れたものと思われる。

その8同部上三三七歌傍記、「巻五離別部註出」は、本集一六二〇余首の中に検出される同部七四三番歌の重出―但し詞

書、語句小異あり―を指摘している。又、9の夫木集廿七に看取される俊頼歌にして本集未収歌一首を摘出したものであるが、村上忠順「散木弁謌集標註」附載の「散木弁謌集脱漏歌」四十首中にも含まれている。

これら纔かな例示ながら、此の補註者は何人であるか猶審らかにし得ないが、然るべき学識者にして、その印記より岸本由豆流その人を想定するのが妥当ではなかろうかと後考を俟つものである。

又、併せて雑部上一四三歌の詞書「同人のもとより松竹にそへて送て侍ける」の上欄余白に「正按松竹は松茸なるへし」の墨筆書入れが見出されるが、此の「正按」の「正」は誰人たるか未だ明らかにし得ない。本書書入れに係る問題として今後の精査を期す。

小沢蘆庵奥書本系統

第三類本系統諸本のなかで最もその主体を占めるのが、此の蘆庵奥書本系統である。所掲五本・初雁本に加え、更に本文校合の機を得ぬまゝに残されている小平市立図書館蔵久下文庫本ほか仄聞のまゝに所在を確認し得ぬ伝本等も存し、未だ伝本調査の不備は否まれない現状である。本系統本が既述し又次述するごとくに前八巻、後二巻の合綴伝本であり、且つ両者共に永い伝流経過の末、その伝存する本文は現在既に推論を拒む状況を呈示している。しかも其の上に、現存伝本のなかで、従来より蘆庵令写自筆校訂の奥書本と伝承される国学院図書館本は以下に縷述するごとくに其の筆跡の類同性を以てのみ同一原本と断定するには、諸本間相互の校勘よりして猶一抹の疑点は払拭し得ず、各転写伝本の伝存本文中には間々反証する諸例を看取され、存疑はそのまゝに拙稿の躇いを誘うのである。しかしなが

ら、現存同系本にあっては該本はもっとも蘆庵奥書本に時代を同じくし且つ其の書蹟の近似性より推して、同系諸本は該本を基底におき対比・対照の基準たらざるを得ない事実は又容認せざるを得ないところでもある。従って下述の解題は其処に叙説の規矩のごときを取敢えず設け、煩雑な照応に終止した次第である。が仮令同系統本が後世の錯雑混淆の末流本としても、本集伝流本として一系統を形成する現状に於ては講明する所要は存するものと考えるのである。あるいは、時に偶々の結果を齎すこともあろうかもしれぬ。とまれ、その如何を問わず、当初の視点から、蘆庵奥書本系諸本は、唯一本に拠るの危険もさることながら、諸本相互の本文は相補い補捉することにより具現完備するものであることは推断し得ることと考えられるのである。

終尾にお断りしたいのは穂久邇文庫蔵蘆庵奥書本は後述するごとく前八巻は第二類本系に属する伝本であるが、同奥書の存するところにより本類系統上に一括したものである。

国学院大学図書館蔵　安永八年小沢蘆庵令写校合本　存十巻・附顕昭註

袋綴三冊。縹色布目表紙、竪二十三・五糎、横十六・一糎。料紙、楮紙。字面高サ約十八・五糎。毎半葉十行に和歌一行書き、詞書略四字下げに書写する。

外題、表紙左肩に「散木集　上（中・下）」と別筆にて打付書きしている。

内題、「散木寄歌集（葉朱）巻第一（〜巻第十）」と記すが、巻第二以下巻第十迄は「奇」と書し、巻第四「冬部」は「奇（和墨）」の右傍校記が附されている。巻第一の「寄（葉朱）」は後述するように契沖本系よりの朱校であろう、しかし、巻第四の「奇（和墨）」の傍記については、第四類本中の一本、間宮永好校合本同巻に「奇（和イ朱）」の一例が管見されるのみで類例を見ず、その来

由を審らかにしない。又、附載の顕昭註は内題はなく、第三冊中の扉題に、「散木集注」と同中央に別筆墨書している。

部立表記は、前掲第三類本系と略同じくし、四季部・祝部・別離・羈旅部(朱旅宿)・悲歎部・神祇部・釈教部・恋部上下・雑部上・雑歌下、とする。この中、「雑部」・「雑歌」と表記を別しているのは注目される。又、巻第五には「羈旅部(朱旅宿)」と朱傍記が存する。両者共に第三類本系のうち蘆庵本系・初雁文庫本が此の独自表記をとり特徴づけている。前者朱校は先例同様に契沖本系からの移写であろう。

本書各冊の本文墨付は、第一冊八十七丁―柱下辺に丁付す、内巻第一　二十五丁、巻第二　二十丁、巻第三　二十八丁、巻第四　二十四丁―、第二冊　七十六丁、同じく柱に丁付し「七十五」とするも「十一」(欠脱)「五十七」(重記)「七十」(重記)の誤記が散見―内巻第五　十四丁、巻第六　三十三丁、巻第七　十五丁、巻第八　十四丁―、第三冊百一丁、内本集六十三丁、同柱に丁付、顕昭註並びに奥書　扉一丁、本文　三十七丁、但し丁付欠―本集内巻第九三十三丁、巻第十　三十丁、である。

印記、各冊見返しに「子爵水野忠欵氏寄贈」の方形飾印を捺す。

本書には、散木集「顕昭註」の末尾(一〇一丁表)に次の奥書が存する。即ち

右散木棄歌集三巻誂讃岐守美　／令新写校合早　朱如元本　青私所書加也

于時安永八己亥年正月十日　／　蘆庵

と誌している。此の記に拠り小沢蘆庵令写校合本であることが明らかであるが、該奥書、校合傍記―後述―と本集

令写本文とは筆跡極めて類似し、或は同一書写者によるかとの印象を受けるのである。しかれば右奥書文面とは異ることゝなり、本書は蘆庵令写校合本よりの転写本ということゝなるのである。因みに蘆庵自筆である静嘉堂文庫蔵「六帖詠草」との比較を試みたのであるが、その筆体・運筆の形似は否定しがたいが猶断定しがたい一面を残すのである。前記の存疑と共に、本書は蘆庵令写自筆奥書本のそれであるか否かは今後の課題とし、該本に接する時期に於ける蘆庵書体の最も近似する一本であると査定しておくことにする。

又、奥書に云う「詵讃岐守美　令新写」の記であるが、蘆庵本系諸本―斯道文庫本・京都大学図書館本・穂久邇文庫本等―は此れを「詵讃岐守宗美令新写」と「宗」字が存するので、本集筆写者は「讃岐守宗美」とあるのが元来の完名記であろう。しかし、如何ながら其人を審らかにしない。

本書には、又、巻第一・九の両巻内題下に朱・藍両筆の識語が附記されている。即ち

(イ) 朱校契沖手写本也分為三本此本下巻／私補入顕昭註九十七首卅四張契沖本／哥一首一行書（朱）　巻第一

(ロ) 自是以下依無他本所書写以元本／校合更得異本可再校也（藍）　巻第九

と、細記している。

まず、本書(イ)・(ロ)の識語より検討をすゝめてゆくことにする。

その(イ)識語であるが、先学関根慶子氏は[註一]、

この本の由来は可成複雑であるが、結局次のやうに解される。元本は、八巻本で、是を上中二冊とし顕昭注九十七首を下巻とした三冊本で、その元本を蘆庵が書写せしめ、欠巻となってゐる雑部二巻を下巻に補入して散木集十巻と顕昭注九十七首とを合したものとなつてゐるのである。

と述べられている。本書が現在の上中下三本仕立に至る経由はもとより其の詳細を辿るべくもないが、氏の御推論のごとき大筋の経路があったのであろう。そして、「此本下巻私補入」の記は、本書下巻が本集巻第九・十両巻と顕昭散木註とにより構成されているところから、右(イ)識語の文脈として両書を含むかのごとき印象を受けるが、既述してきた第一～三類系の現存伝本に於て、この両巻を多く欠く伝本情況から判断して、ともかくも巻第九・十の両巻を指すものであろう。即ち、本書は巻第一より巻第八迄の八巻本と巻第九・十の両巻は各々その依拠本を異にした合綴本であり、更に「顕昭註」を附載され、三本と分巻したものであって、本集にかぎって云えば本文系統上では当然のことながら別して対処すべき対象となるのである。

次いで、此処で奥書にかえって、(イ)・(ロ)の両識語との関聯を辿ると、奥書末の細記には「朱如元本　青私所書加也」と誌している。「青」筆のことはひとまず措き、「朱如元本」とある「元本」とは何れの本を指示しているのであろうか。この識語をはなれて奥書それ自体からみれば、蘆庵令写本に云う「元本」は該本の依拠本であることを示している。そして巻第一から巻第八に至る朱校は、(イ)識語に記す「契沖手写本」本文であり、且つ「元本」即ち依拠本に存し、その移写・転写にとゞまることゝなるのである。もっとも後述するごとく朱校は契沖手写本にとゞまらず群書類従本の比校半ばを含み、爾後の経過を見るのである。蘆庵令写に際して拠った伝本は大凡右記のごとき内容を有する三巻仕立の本であったことを両記は告げているのであろう。

しかし、此処にいう「契沖手写本」は現在円珠庵に伝蔵される契沖書写朱校八巻本と巻第九・十の二巻の令写補綴契沖朱校本、全十巻を指し示しているのであろう。本書八巻迄の朱校を辿ると確かに其の半ばは契沖本の墨本文と朱補校記本文に拠るものであり、同本との比校は認められるのである。たゞし、巻第九・十の両巻にいたると、その朱

校は激減し、契沖本との校合は纔かに一例を見出すにすぎない。それはさきの「此本下巻私補入」とあるを受けてのことであろうから当然ではあるが、契沖本が欠巻両二巻を令写補綴するにもかかわらず本書は何故に書写補配することがなかったのであろうか。縦んば契沖本対校以前に別本にて両巻を既に「補入」していたとするも、その朱校は前八巻にとゞまり、両二巻に及ばなかったのであろうか。素朴な疑問は釈然とせぬまゝに残されるのである。

又、国文学研究資料館蔵初雁文庫本は本書に存す蘆庵奥書を持たないが依拠祖本を略同じくする天保年間の写本であるが、(ロ)識語を異にしているが—後述—(イ)識語は全く共通する。そのことは、とりもなおさず、(イ)識語は本書・初雁本、両本の依拠本に(イ)識語が存していたことを語るものであり、その記に云う内容は両書の全三巻三冊に及ぶものであった、と推論されねばならず、それはとりもなほさず、蘆庵本に看る同人の加筆識語ではないとせねばならない。しかし、同本解題にて言及するところであるが、両本の緊密なる交渉経過が推測され、右推定も又猶問題を残し、同本はやはり蘆庵令写奥書本の本文を伝えるものではないかとも思われ、同書にて詳記し疑点を提示した。

次に、(ロ)の識語であるが、「自是以下依無他本所書写以元本校合」の記であるが、此れは青色を以て附記され、奥書に云うが如く蘆庵その人の附記であろう。因みに初雁本の当該箇処には「此巻より以下入江昌喜ノ校する所青書入なるをあやまちて朱にて入たりそは片ニ入曰入云なとアリ」と同書筆写者は附註している。両書の校合・書入れの相違を示すものである。本書(ロ)識語の記述は稍々文意不明の嫌いはあるが、同じく蘆庵本系の転写一本、穂久邇文庫蔵本に「自是以下依無他本以所書写之元本校合」と記されていて—蘆庵元本の記述か否かの真偽はともかくとして—その文意はよく解明する。即ち、蘆庵の披見する伝本には、この依拠本以外に両巻を具備する伝本が存せず、今書写する処の元本—依拠本—を以て、令写本を校閲したのである、というのであろう。追って「更得異本可再校也」と本書に

みる本文の不審を訂さんとし、事実、又「青」筆の校合補訂を処々傍記しているのである。

以上、奥書及び識語につき贅言したが、その朱・青両筆―間々墨校を散見す―の校合又書入れの実体を本書の中に通覧するに、青色のそれらはすべて蘆庵その人が書入れたものとみて異議はないであろう。例えば、附註書入れに、「芦庵考」―春部157歌―のごとく殊更に記名するなども見えるのである。一方、朱筆の校合と勘物附記は青筆のごとくに一様ではなくして複合し重層している。

まず、朱筆校合の傍記であるが、その一つは(イ)識語に誌す契沖書写本系統による校記であり、その二は「ル」と附記する群書類従本とのそれである―その間、まゝ墨校も散見するが極めて尠い―。この二種の校合が略朱校のすべてゞあろう。後者は記すまでもなく蘆庵令写青筆校合其の後の、しかも別人による校補であろう、しかし現在手跡・筆墨共に判別しがたい。それらは共に可成り周密な態度を堅持し加筆者の見識を窺うに足りる。

次に、勘物書入れであるが、それは契沖手写本系統からの部分的移写のものと共に、同本に見えぬ書入れ―蘆庵の追考なども或は含まれるか―も散見される。更に加えて、簡略な語注のごときが上欄余白に稍々蕪雑に走り書するのが随所に附記されている。その経由は審らかにしがたく、それは後人の追補とも考えられるが、さきの朱「ル」校記と同様に現在では手跡・筆墨共に其の前後は見極めがたく、やはり本書は蘆庵令写校合書入れの元本とみるよりも書風をも近似する転写一本と推測するのが、これら矛盾を解消しうるのではないかと思われるのである。

以上が大略本書に附記された朱・青両筆の校合・書入れの情況である。が、他本を以て書写・補綴されている―(イ)識語「此本下巻私補入」―巻第九・十の両巻にいたると、上記両筆の校合・書入れは著しく尠くなり、殊に朱校記にいたっては極めて減少し、群書類従本とのそれは皆無に近く纔かに数箇処に散点するにすぎない。何故か判らぬが同本と

の詳密さは此の両巻にまで及ばなかったのであろう。又、契沖本とは当然の事ながら其の比校はありえぬことながら、たゞ朱筆書入れに於て一箇処、巻第九「四九歌第四句「風のかゝみの」の傍記に「うら夫木契沖書入」と朱書するのが見出される。確かに同本にも「風のかゝ(ママ)みの」と傍記するが、後人による偶々の混入であって、契沖本系との交渉は想定しがたい。その他の朱校合は「補入」本に存した、その移写であろう。たゞ、上欄余白に於ける語釈等は前八巻と同様のものと判断される。奥書に云う「朱如元本」の「元本」は云うまでもなく識語(イ)に記す「補入本」を、此処では指すのであろう。

又、両巻に於ける朱書部分には、朱色と埴色の両様が看取されるが他墨との混和によって生じた筆墨の変色であって敢て此れを弁別したものとは思われないことを附言しておく。

本書巻尾に附載された散木集「顕昭註」に就いては本稿とは別にあらため統括する予定であるので言及することをさけるが、蘆庵令写本系諸本には同註が合綴されるのが殆んどすべてであるので参照の便をはかり左に掲出することにする。巻第十巻尾、前掲蘆庵奥書の前葉（一〇〇オ）に

本云

寿永二年十月七日奉／梁園教命注進之

重下給差声之

顕昭

文禄三年四月廿七日写之顕昭親之本也（筆脱歟）

と記している。諸本、「親」字の下に「筆」字あり、本書の誤脱であろう。

猶聊か繁雑に及ぶが、本書の表紙見返し又遊紙裏に、諸本多く左の俊頼略伝を附記している。参考までに掲出する。

源俊頼

大納言経信卿男木工頭従四位上左京大夫／密勘云堪能至ていふといふこと皆秀逸なり父子二代ならふ／人なきにゝたり

。亡父卿は哥よむ人俊頼をもときては三十一字はいたつらことに／なりなむとそ申されし八雲御抄ニ云俊頼は天下に／肩をならふる者なくて数年をへたり云々

と誌している。

扨、本書の本文に就いてであるが、本書は補配合綴の書写本たるにより、まず巻第一より巻第八迄につき述べ、次いで巻第九・十両巻は別して叙述することにする。又、前例に倣い、本書も第三類本系の一本として、前掲神宮文庫B本に検出された特徴的な欠落本文の一覧に沿って、その異同を見てゆくことにする。本書の場合、「朱」・「青」・「墨」両三筆の校記を補記し、ことに「朱」筆は契沖本本文との比較と「ル」と記す群書類従本とのそれが混在し、且つ、「青」筆の蘆庵校訂本文も附記されてあるので繁屢ながら再録することとした。

1 東北院の花さかりなりと聞て人〳〵あまたくしてまかりたりけるに梅の花もさかりにておもしろかりけるに鶯をとつれて過かたかりけれは（人〳〵過にけれはよめる（朱）けるに立とまりて侍けるに人々はすきにけれはよめる（青）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・よめる）春部五二詞書　但シ、穂蘆本傍記本行存

3 百首哥中に（かへるかりのこゝろをよめるイ本（青））　同一五三詞書　但シ、穂蘆本傍記本行存

（はし書にさとをはかれすとかけりル（朱））　同部一八七左注　但シ、斯・京蘆本本文欠傍記ナシ

5

6 （おくに海士の小舟もとかけりル（朱））　同部一八八左注、但シ、斯・京・穂蘆本本文欠傍記ナシ

7 （夜深聞時鳥（朱））　夏部三三詞書　但シ、穂蘆本傍書本行存

8 諸ともに今そ鳴なるほとゝきす（八声の鳥はおのかつまかは（朱））　同部三三六歌　本書傍記本文本行存、斯・東・京・穂蘆本本文欠―朱補

11 七月七日孝清かかつらの山里にて帥（源（朱））中納言基綱を始て哥（をよまれけるに（朱））　秋部三八三詞書　但シ、穂蘆本傍記本行存

12 浮身には山田のおしね（をしこめて世をひたすらにうらみつる哉（朱））　同部四七五歌　但シ、穂蘆本傍記本行存

13 あき萩の下葉に月のやとりすは明てや露のかすを（らイ（墨））（しらまし（朱））　同部四九三歌　但シ、穂蘆本傍記本行存

14 ……前略……みな御心になんまかせ給へり（あまの神空にはたなひける雲もなくまつりことの庭には宮を守（朱））神ちからをあはせ給ふあまりに……後略……　同部五〇四小序中間部　但シ、穂蘆本傍記本行存

15 ……前略……あすのあさけりをはかへりみさらんかも（そのことはにいはく（朱））　同五〇四小序尾部　但シ、穂蘆本傍記本行存

16 （秋の山の月をみるといへることを（朱）・よめるル（朱））　同部五三八詞書

17 （家通（朱））　冬部六六八作者　但シ、斯・京・穂蘆本傍記ナシ、東蘆本本行「家通朝臣」存

18 ころもてのさえ行まゝに（神なみのみむろの山に雪はふりつゝ（朱）・シモトユウカツラキ（朱）金（青））（金冬（朱））　同部六六七歌　但シ、穂蘆本傍記本行存

19 堀川院の御時中宮はしめて堀川の内裏にまいらせ給ひ（て松契遐年といへることをよませ給（青））けるによめる　祝部六九三詞書　但シ、穂蘆本傍記本行存

21 加賀守(朱)　別離七四一作者　但シ、穂蘆本傍記本行存

22 経兼(朱)　同部七四六作者

23 藤戸といふ所にてまらんとしけるに(とル朱)　追風吹なんとすまた日も高しとてよらて過けれはよめる(朱)　羇旅部七六九詞書

24 おほふねのほにあけてものを思ふには(はしる朱)　はしるそ袖はぬれける　悲歎部八〇四歌　但シ、穂蘆本傍記本行存

25 例ならぬ人の舟にあるかくるしかると聞て(そひ舟にのせうつすとて朱)　同部八一〇詞書　但シ、穂蘆本傍記本行存

26 君かふる(こ青)泪の滝におほゝれてふりさけふ(我朱)声はきこゆ(や青)也　同部八四歌

27 誰ためにもとめて得たる命なれはけふ(けイ青)まて(法ル朱)此身(さけふル朱)もりけん　釈教部八七三　穂蘆本傍記本行存

28 うちはへてたのむみ山の青つゝらくるしみなきはわれひとりかは(朱)　授記品のこゝろを(朱)　同部八七六・歌八七七詞書　穂蘆本傍記本行存

29 難思光仏　人はいさ光のすちをしかそともおなし仏やしらはしるらんル本(朱)　同部八九二詞書・歌　斯・京蘆本本文欠・傍記ナシ、穂蘆本傍記本文本行存

30 そのほとゝおもひかたきはよもの海にそこひもしらぬ心なりけり(朱)　同部九三六歌

31 誰しかも哀と見(らイ青)んけぬもせ(す青)ぬやまかたつけるはるの(はたれを朱)　同部九四三歌　但シ、穂蘆本傍記本行存

32 もろ〳〵の花くさ〳〵に咲(さて朱)みたるといへる事をよめる(朱)　そこはくの花のひもとく庭の面におしのけたるは蓮なりけり(朱)・此詞哥ともイニナシ(青)　同部九五八詞書・歌

33 そゝきするあられか嶋に(崎イ青)ゆら(朱)て(朱)されぬむかへにきませみつのあま人(ライ青)サキイ(青)さゐル(朱)　同部九九二歌　但シ、穂蘆本朱補「ゆら」本行存

34　おんな（書A）
・・・　恋部上一〇〇八作者　蘆本系諸本欠
35　みつ（ママ）といふはつくしの府のかとてなりル旁書（朱）
・・・・・・・・・・・・・・・　同部上一〇三九左注　但シ、斯・京・穂蘆本本文欠・傍記ナシ
36　あさましやこは何ことのさまそとよ恋せよとてもうまれさりけんル（朱）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　同部下一二三六歌　但シ、斯・京蘆本本文欠・傍記ナシ
37　ニケ地名歌（朱）
ちつのほきとちのわたをも・・ぬへしそれにおもれぬこゝちなり□は　同部下一二四六歌　但シ、穂蘆本朱補「こえ」本行存
りイ（朱）こえ（朱）　ねるイ（朱）　せ（朱）
38　海路恋（書A）
・・・　同部下一二六〇　斯・京蘆本本文欠、穂蘆本朱補

但し、本書に施された朱筆「ル」本の校異は他本には見られず、必要上の一部を除き註記は省略した。

以上、神宮文庫B本に於ける顕著な欠落本文として特色をなしていた三十八例中、三十三例にも亘り共通するのである。纔かに、2・4・9・10・20の五例を相違するにとゞめ、第三類本系の特徴を如何なく提示しているのである。

第一・二類本系との関係は前輯又神宮文庫B本に於て再三縷述したので省略するが、ただ上掲一覧の朱傍記する契沖本系本文―第一類本―は

1・7・8・11・12・13・14・15・16・18・21・22・23・24・25・26・27・28・30・31・32・33・37、

と、その殆んどを占め、一見、本書との間には、かくも著しき異同を示すかのごとく推測されるが、上記番号中、16・18・21・22・23・25・30・31・32・33（一部）・37（一部）、と、その約半数が契沖自筆本に於ける朱筆補訂の傍記本文であり、残りの半数が該本元来の墨筆本文である。いうなれば前者は本書と共通する欠落本文[註二]であり、後者が本書と相違する事実上の本文となるのである。

かく贅言したのは、ほかでもない、本書識語(イ)に云う「朱校契沖手写本」と記す、その具体的内容に言及して文脈から招く誤解の惧れを思ったからにほかならない。更に一言附言すると、本書の依拠本に於て校合された契沖本は円珠庵現存の自筆校合本ではなくして、その転写本であり、しかも朱筆補訂を本行化した所謂契沖本系—前輯参照—の一本であろうかと想定されるのである。そして、その朱筆の校記本文は、上例に於ける限りでは、それはまた第四類本系諸本の中の一本、群書類従本系本文と殆んどが—1・16・17等の一部語句上の異同を除き—略一致するのである。

次の青色傍記の校合本文であるが、それは、1・3・19・26（一部）・27（一部）・31（一部）・32・33（一部）、の八例であり、本書と異同する部分に当る。これらの依拠本文に関しては記するところでなく、明確にしがたいが、やはり33の一例を除き群書類従本系本文と略同一である。

更に、「朱ル」は5・6・16・26（一部）・27（一部）・29・33（一部）・35・36、の九例であるが、記すまでもなく群書類従に拠る比校の結果である。

この三本校合の状況から、当然のことながら、朱筆校合から青筆が次ぎ、最後に「朱ル」の経過を辿ったことが、予想され、各比校本文の傍記は、その校合次第に従い、それぞれに前校々記に拠り重記されることなく活用する方針に略準拠しながらにすゝめられている。その意味で蘆庵校合（青色）の後を受けて本集の校訂はそれなりに進展しているのである。勿論、34・38、の両例のごとく群書類従本との比校に於て看過した例なども見受けられるのは校勘一般のこととして已得ぬところであろう。

次に、本書に看る第三類本系共通の異文については既に神宮文庫B本に於て其の大略を誌したが、猶朱・青筆校合の情況を示すべく煩瑣再三にわたるが以下に全文を掲示することにする。

1　家隆(綱朱)かもとより恰(蛤は朱)をこすとて山吹を上にかさして書付て侍りける　家隆(綱朱)　春部一六七詞書

2　丹波前司重房(季ル朱)の家にて○女郎花(ヒ。人々秋の花をよみけるにル朱)をよめる　秋部四〇三詞書

3　九月十三夜殿下法性寺関白にてよめる　同部三六詞書

5　せたの里橋の(の朱)駒ふみ朽るおほえこそ(め朱)その涙(みイ青)そ俤にたつ(そこイ青)　恋部上二〇八歌

6　皇后宮の弘徽殿におはしまし(ナシ青)○比細殿(けるル朱)にて人に申けるに女房の上へのほるとて道みくるしとてし(たはしはくらしとて朱)はしとてと女(おはル朱)(たイ青)官(房朱)の申けれは恋て殿上(立朱イ青)のかたへまかりけるを後に参りやするとまちけるにみえさりけれはかれよりおくり侍りける　恋部下二三〇詞書

とみえる。六例中五例、神B本4―同本独自異文―を相違するにとどまり、本文には小異は存するが此処にも第三類本系一本たることを示している。朱・青両筆の校合は稍々繁雑であるのは本書本文の多少の乱れを示唆するものであるが、その校訂方法は前記に準ずるものである。

又、岸本由豆流旧蔵本解題に於て追記例示した同本異文、7・8・9―本書との校異を附記す、二七頁―は、既述のごとく本書に於ても類同し、些少の相互異同は転写上の変形化としてとらえられるものであろう。本書9は朱・青筆校合書入れが稍々複雑な情況を呈すので参考までに掲出しておく。

障(隔ル朱)本夫恋

手枕をかけてしれはおろ(くイ下同てゝく青)人しみ(そろしみ朱・イ青)はやはひましねみつ(いやいひましね朱・イ青、朱校「い」字ニ「はイ」青)のかとより　恋部下二九二詞書・歌

と附記している。

次に、本類中、とかく区々として看られる欠落と異文本文の両例であるが、それは、

a　さみたれを(朱)・・・・・　夏部三〇二詞書　本書　岸本「さみたれを」、神B本落丁部分、穂蘆本傍記本文本行存

b　同所にてとふ人もなき旅の○いふせかりけるに都の人らめしかりけれは　秋部四三詞書　本書　神B本落丁部分、斯・京蘆本傍記本文欠

c　秋の夜の長き心をル(朱)・・・・・・・・・　秋部五二詞書　本書　神B・岸・斯・京・穂蘆本傍記本文本行存、但シ、五本「よめる」ノ結語アリ

d　うき事は・・・ありけりとあさゆふに誰すみそめの袖ぬらすらん　悲歎部八〇七歌　本書　神B・穂蘆本同傍記本文本行存、斯・京蘆本同傍記本文欠

の猶四例が散見される。その中、cは管見に入る本集伝本に存し且つ蘆庵本系諸本にも存する詞書であれば、本書の単純な誤脱であろう。又aは蘆庵本系―但し穂蘆本存―とその同系初雁本に所見するにすぎず、同様に誤脱とみられる。加えてdも蘆庵本系―但し穂蘆本存―のみの欠脱本文である。しかし、bの場合―岸本解題にも触れたが―第二類と共に第三類本系諸本すべてにあらわれ、共通異文として両類の混淆過程をたぐる一要因ともなろうかと思われるのである。

以上、本書おおよその本文概要であるが、朱・青両筆の校合書入れは随所に散見され、寧ろ、本書の特異性はその細少な本文変化の様相のなかにこそ集約されるべきかもしれない。

次に、本書の歌序・排列次第であるが、既述のごとく、第一・二類、又第三類本系の基本形態を其の儘に襲い、以下の三例を見出すにとどめる。即ち、

㈠夏部　三三・三五・三四・三八・三九・三六・三七・三〇、㈡同部　二六三・二六五・二六四・二六六、㈢釈教部　八九一・八九〇

であり、その点、上述二本と共に第三類本系排列といえよう。

本書、巻第一～八の諸巻に看取される本文・排列は略如上の記述により、その大凡は尽きるであろうかと思われ、次述蘆庵令写校合本数本も本書に準じて参看してゆくことにする。

次に、巻第九・十、雑部上下の二巻についてであるが、本書には既述したごとく識語(イ)に云う「此本下巻私補入」の朱記とよって前掲諸巻とは別する伝本系に依拠している。そして、その補綴本文は第四類本系の一本を充当している第二・三類系の諸本一般の原則に準拠している。が、さきの岸本由豆流旧蔵本に看るがごとき著しく且つ明らかな欠落本文は見出されない。

まず、岸本欠落本文一覧と比較するに、次の纔か二例を散見するにすぎない。附記番号は岸本一覧に誌したそれである。即ち、

2　阿闍梨（書A）　雑部上三〇四作者名欠落、斯・京・穂蘆本欠、初本欠

5　永縁（朱）　同部一三三四作者名欠、朱補、京蘆本・初本欠、斯・穂蘆本本行存

である。しかし一方、蘆庵本系には岸本にみぬ欠落本文も多少ながらも散見されるのである。以下に掲出するが、その欠落本文は書陵部A本本文を以て傍記し、参考までに本書に隣接する初雁文庫本の存否を併せて附註対照することにする。

(イ)　……前略……心はいかようにかさもさふらひぬへき（さまにやしさふらうへき（書A））と申けれは……後略……　雑部上三四詞書　書A本傍記斯・京蘆本欠、穂蘆本細補、初本朱補

(ロ)　こりはてぬにへの初かりあさに（ちイ（青））やとに（する（書A））もあらて人かへしけり（本（朱））　同部上三〇三歌、　書A本傍記斯・京・穂蘆本欠、但

シ、穂蘆本細補、初本朱補

(ハ) 契りしことゝもをわすれにけるにやことさまに思ふなり（にけりときこゆる人のかりつかはしける(書A)）　同部一三七九詞書　書A本傍記斯・京蘆本欠、初本墨書本行「ル」と傍記、穂蘆本細補歟

(ニ) 子ともあらはそら夢みてやかたらましなす（ら(書A)）・ひならぬかけをして（忘(書A)）　同部一四〇三歌　斯・京蘆本ら字欠、穂蘆本細補、初本本行存　下句字不足(朱)

(ホ) ふししはにやとれる程（ほ(墨)）やのおのれのみときわ（かきは(書A)）・に物をこそ思へ　同部一四六歌　書A本傍記斯・京・穂蘆本欠、但シ、穂蘆本細補、初本朱補　本(青)

(ヘ) 我か身はなけきこりけるこけさほや(らをト朱校)はきあつめつゝひとゝなしけん(青校補)　同部一四九歌　斯・京・穂蘆本本行存、初本本行存

(ト) ……前略……人をも（落字歟(青)）・・・うらめしと……後略……　雑歌下一五三〇長歌　書A本傍記斯・京・穂蘆本欠、但シ、穂蘆本細補、又斯蘆本「落字歟本ノマヽ」(青)トアリ、初本「身をも」ト本行存　よをも(書A)

(チ) しもつけ(書A)・・・・うらみてもなにゝかはせん花みるとけさしもつけぬ心せはさは(書A)・・・・

第二類本系野口道直旧蔵の一本が存し、その点では同解題にて述べたごとく両者の親近関係が窺われるのである。他には第一類の契沖本系に(ハ)・(ニ)・(ホ)・(ト)の四例、第二類本系の簗瀬本に(ハ)の一例を見出すにすぎない。しかし、上掲各本の当該部はいずれも第四類本系の補配部分に当り、結句は第四類系の一伝本の特徴を提示しているにとどまる。因みに第四類本系に於ては(ハ)・(ホ)・(ト)の三例が静嘉堂文庫蔵烏丸光政令写本―存巻第九・十―一本に管見するにすぎないのであるが。又、(ヘ)は伝存本中、蘆庵本系の本書にのみ看取される欠落本文である。同本系の斯・京・穂蘆本はすべて本行に書写され、本書にみる青校が載録されているのは転写に於ける本行化とも推測されるが、一方、本書自体も蘆庵令写本そのものと猶決めがたき疑点も存するので、或は本書の誤写、後補とも考えられる。いずれにせよ、右記七例は野口本にその類同性は認められるが、第三類本中、蘆庵本系、初雁本にみられる特有な誤脱状況として措定しておくことにする。

次に、本書に於ける異文をみるに、その顕著なるものは左掲の一例である。即ち、

伏見の山さとにてあそひともをあるしのをこしたりけるをたてこもりてねたりけるをあそへなとかうてはなとい（書A）り（朱）ひ（朱）本ノママ（青）お（青）かれ（朱）か（朱）こ（墨）（書Aナシ）

ひけるついてに　雑歌下一六三詞書

とあり、第四類本系はさきの烏丸光政令写本に同文の存するのをのぞき、書陵部A本に代表する右記の傍点部をすべて欠き、蘆庵本系と初雁本とに存する特異本文である。もっとも、第一類本系及び第二類系―野口本・簗瀬本―の十巻本系に同一本文を共有し、共に補配部分ながら其の近似関係は否定しがたい。特に野口本は本書系類と前述の欠落本文とあわせて類同する本文系統をなしているといいうるであろう。

扨、本書巻第九・十の両巻は前記のごとき誤脱本文と一異文例を呈示し、これら諸例よりみれば、第二類(二)の野口

道直旧蔵本が伝存本のなかでは最も類同するのであるが、この両本も第四類本系の当該本文である。そして、その同類本系として十巻本たる所謂第四類本系とを比較するに、本書並びに野口本の呈示する諸特徴は寧ろ両本個有の異体として捉えられ、その異文一例を除けば単なる誤脱本文と推測せざるを得ず、いうなれば第四類本本来のものとは認めがたい性格のものである。その点、所謂第四類本系では誤脱本文の多見する群書類従本系とは略々大同小異、軌を一にする伝本であるといえる。しかし、同本の誤脱本文は前述の岸本由豆流旧蔵本解題中（三〇～二頁）に於て比較したごとくに、雑部上一三三歌・同一三八三作者名・雑部下一五一八長歌一部・同一五九〇唱句・同一六〇九作者名等、本書に存する本文を誤脱し、一方、本書と共通する欠落本文は、雑部上一三〇四作者名・同一三四作者名、の二例にすぎず、本集伝存本の転写過程より推論すれば群書類従本系本文―その経由は審らかにしないが―とは異る十巻本系伝本系統に拠るものであると想定されるのである。とすれば、第四類本系伝本として群書類従本系とは異る本文系統が予測されるのであるが、右例示の諸例を考慮するに当該伝本は管見しない。が、概括的に云えば、同系類上に於て略大別され、且つ本集本文を具備する書陵部A本又は阿波国文庫旧蔵本系統に近い伝本が、寧ろその依拠本として推察されるのである。

備考

本書の朱・青筆の校異に就いては概ね既述したごとくであるが、その他に、両筆の、(イ)集付、(ロ)他集にみる本集未収録歌と関聯書入れ、(ハ)語解、(ニ)引歌・類歌例、(ホ)歌解等、の多岐にわたる書入れが随処に所見される。朱筆の一斑は第一類契沖本のそれを移写したものであるが、それは別註[註三]したごとく同本書入れの一部にすぎず、他は何故か破棄されている。同じく朱筆ながら、そのほかは同書には見ぬ書入れである。本書の奥書に云う「朱如元本　青私所書加也」の記に従えば、青色筆以外は依拠本の書入れと想定されるが、蘆庵本元来のものに加え、それ以後の書入れ―特

に上欄余白に看る―なども相夾雑しているのでもあろう。参考までに契沖本書入れを除く、朱・青両筆の顕著なるを雑然ながら偶目するまゝに拾掇することにする。掲出文の許に附註したのは蘆庵本系と初雁本に於ける存否である。前者は過半を同じくするので、その欠漏のみを、後者は同記の存するのみを誌す。

1　贈左大臣長実の家にて云ミト云新続古今誤也（朱）　春部一四詞書　斯・東・京・穂蘆本欠

2　うきつは泥田歟タツ通音浮沽浮田ナト云フアリ（朱）　同部三六第二句　斯・東・京・穂蘆本欠

3　今物語保元物語等いしくも参たりト云フアリしみハしみさひナトノシミカ重字しミトカヨフ（朱）　同部三七第四句　斯・東・京・穂蘆本欠

4　芦庵考夫木ニ出建長八年百首哥合信実朝臣　山陰に心はかりは春の色のつゝしのけたみ花咲にけり　判者知家卿云つゝしのけたみこそ耳とほく侍れある書にはつゝしのふるねにあせみおふと申せり又つゝしのそはといふ義も侍るとかや何にても風躰あなかちの秀逸にあらさるにやあらさるにや（マヽ）下略（青）　同部一五第四句

5　笥コニテ椀ノ類歟伊勢物語ニけこのうつは物にもりてトアルナルヘシ（朱）

さや田味酒をみわトカヽル枕詞ヨリ誤ツテ酒ノフトセル也（朱）　夏部二〇第二一・四句　斯・東・京・穂蘆本欠

6　読人不知（墨）（右哥続古如此（青））夏部二六二歌ノ次二六三詞書前　斯本欠

7　ソテノコ　ホコシタ　共ニ稲ノ名也　カフシ稲実成（ナリ）テ傾ヲ云頗傾（カフシ）日本記宝（青）　秋部四七第二一・三句　斯・穂蘆本後半欠　初本存

8　古誹諧よみ人しらす　思ふてふ人のこゝろのくまことに立かくれつゝみるよしも哉　後恋三　藤原後蔭　いつかたに立かくれつゝみよとてか思ひくまなくひとのなりゆく　此集下　月前述懐　さよふけてくもらぬ空にす

む月は立かくれなきわか身なりけり（青）同部四九三歌

9 蕎麦（ソバムギ）にや萍流考　九月比かりてかけたるなり（朱）同部五三九詞書　斯・東・穂蘆本欠

10 此哥ハ父経信死別ニテノホルトテヨメリ（青）悲歎部七九二歌　初本存

11 昌喜云　蜻蛉日記　ありとたによそにてもみん名にしおはゝ我にきかせ（ママ）みゝらくのしま　といふをせうとなる人きゝてそれもなく〳〵

いつことかおとにのみきくみゝらくのしまかくれにし人をたつねむ　かくあれは今ノ一二句は写誤なるへし可為袖中抄正（青）悲歎部八四六歌　初本存

12 万十一　あまとふやかるの社のいはひ槻いくよそあらんこもりつまそも　イ書入（青）釈教部九七二歌　初本存

13 ヲシネハオソイネヲ曽以之反ナレハツヽメテイヘリ然ラハワサ田ノトイヘルイカヽ（朱）同部九八九第二句　初本存

14 春云真麻ノ秋ハキニテ秋麻ヲハリカ度々引動シテ起テ物イフト云ㄱカ（朱）恋部上一〇三歌　斯・京・穂蘆本欠

15 保安二哥合判基俊（青）同部上一〇二八歌　斯蘆本欠

16 紫陽花（アヅサヰ）和名味狭藍（アヂサヰ）万六共（青）恋部下二三五初句

17 。かたきをとく　俗口解ト云ハ口説歟（朱）同部下二八七詞書　斯・京・穂蘆本欠

18 詞林採要　わかれにときの川ゆすりたつかの弓のしら鳥をきの川ゆすり恋ぬ日はなし　俊頼（朱）同部下二四三ノ次　斯・京・穂蘆本欠

19 万十一　いもかゝみ上小竹（アケサヽハ）葉野のはなれ（摂津国）駒あれ行けらしあはぬ思へは　今の哥みつの浜に詠合此名所歟（青）雑部上二三五二

20 当集　風ふけはたちろく宿の板しとみやふれにけりなしのふ心を　源はゝきゝ　さやうならんたちろきに絶ぬへきわさなり（青）同部上三五第五句

21 古忠岑長哥　なにはのうらにたつ波の浪のしわにやおほゝれん云々（青）同部三九〇第五句

22 和名　奄藝安無木（青）同部上一四〇九左注

23 後拾　冬のよにいく度はかりね覚して物思ふやとのひましらむらん（青）雑部下一五三歌

24 和名　尨蹄子（セイ）和名勢　貌似大蹄而附石生者也兼名苑註云石花　花或作華　二三月皆紫舒花附石而生故以名之（青）同部下一五四詞書

25 国基集　同佐のもとにかひつものをませくたものにしてきこえさすとて

わたつみの波の花さくうきゝにはかきはまくりのなるにやあるらん（青）同部下一五七六和句

如上は本書書入れの比較的長文なるものであり、短文寸記なるは相当箇処にわたるのである。上掲例文に於て先ず目に付くのは、青筆書入れは蘆庵令写本の転写諸本に共通して移写されているのに反し、本書朱筆書入れの殆んどが—13一例を除く—他本には見出されないことである。もっとも掲出例のかぎりにはすぎないが。しかし、本書が蘆庵令写校合原本であるならば尠くとも孰れかの転写一本に移書されていて然るべきが自然であろうかと思われるのである。それら諸本の転写経過は既に辿り得るところではなく、卒爾に判断すべきことではないが、諸々の事柄を含めて、本書は蘆庵令写校合の原本ではなくして、蘆庵風書跡をも真似た転写一本ではなかったかとの推測が妥当となるのである。とすれば、右掲のごとき朱筆書込みは蘆庵の追補なども一部含みながらに、一方、その依拠本とは別に、其の後の—恐ら本書筆写者か—増補加筆ということも重なり、それが他転写本には経目しない理由ともなっているのでは

なかろうか。既述したごとくに、朱筆校合に於ける「ル」校即ち群書類従本とのそれも蘆庵令写校合本以後のものと判断されると同様に、本書に至るには其処に重層的な経過と拡がりが予想され、単一な転写経過を以って規定しがたく個々の伝本のもつ多面性を思うべきであろう。

例えば、上例中、11「昌喜曰」の附註は蘆庵本系諸本に存するのは固よりであるが、此の入江昌喜書入れは初雁文庫本巻第九の識語に同人のそれを移写する旨を記するに対して、本書などには断り書きするところではないが、唐突に一例混入するなど写本のもつ錯雑性を思うのである。又、14「春云」なども同様であろう、その加筆増補と重層化するのは本書のみならず伝存写本の担う宿命でもあろうか、と思われるのである。

註一　関根慶子氏「散木奇歌集の研究と校本」昭和二十七年　明治図書出版株式会社

註二　瑣末なことながら、掲出表17は朱筆であり、当然のこととして所謂契沖本系本文が予測されるが、同本系に於ては墨本文・同朱補校本文にも此れを欠く。群書類従本校記に誌す「ル」略号を失念したのであろうか。斯・京・穂蘆両三本は此の朱補を附さないので除外した。

又、34・35・36項の三例は共に所謂契沖本系に欠落し、且つ35・36項は朱補するところではないので本書同様に欠落本文であり、更に此の二例を加えることになる。

註三　本書に云う契沖書写本に於ける朱筆書入れは、その半ば近きにとゞまるが、契沖自筆本に看取され第二類本系(一)にも踏襲されている本歌の特徴的な書写形態であるが―前輯記―本書になると、単に行間傍記となり、

(イ)　万葉引哥石見のうみの山の木の間よりわかふる袖を妹みるらんか（朱）　春部七〇・七一歌行間　蘆本系諸本、初本存

(ロ)　玉たれのこの春鶏吉にいりかよいきぬたらちねのはらかとはれはかせとまうさん　恋部下二七四・二七五行間　蘆本系諸本略同存、初本略同存

と、この契沖本の特異な墨書本行本文を行間に朱書し、同本系の書入れを移写している。しかし、契沖本系の勘物はすべて転写されるのではなく、任意な取捨撰択が働いたのであろうか、以下は前輯(一)に於て、契沖自筆本書入れのおゝよそを一覧した同番号に従い略記することにする。

一　他集による本書未収録歌と関聯書入れ中の、6・7、を移写する。

二　語釈書入れ、(イ)・(ロ)、三　類語書入れ、(ロ)、四　歌解書入れ、(二)—上記恋部二七四・二七五行間書入れ

と、纔か一部にすぎぬが、それは例示の範囲内のことであり、可成りの転写が所見される。

慶応義塾大学附属研究所斯道文庫蔵　安永八年小沢蘆庵令写校合奥書本　存十巻・附頭昭註

袋綴三冊。薄茶色布目刷毛引表紙、竪二十七糎、横十九・三糎。料紙、楮紙。字面高さ約二十一・二糎。毎半葉十行に和歌一行書き、詞書三字下げに書写する。

外題、表紙左肩に「散木集　上（中・下）」と同筆打付書する。

内題、「散木寄歌集（朱）巻第一（〜巻第十）　春部（〜雑歌下）」と記し、巻第二以下第十迄は前掲本と同様に「奇」と誌す。但し、本書は前掲国学院本の巻第四「冬部」に見える「奇歌（墨）」の墨傍書を欠いている。部立表記は同本と全く同じくし、例えば巻第十を「雑歌下」と表記する。蘆庵奥書転写本として当然のことではあるが、既述し又後述するごとく両書には本文又校合書入れ等にも異同が散見され、直接の転写関係は想定されがたい。その転写期は降り江戸末明治初の間のことであろうか。全般に亘り入念な書写態度を持し、前者を相補うものがある。

本書各冊の本文墨付は、上冊九十九丁—自春部至羇旅部、中冊九十三丁—自悲歎部至雑部上、下冊二十八丁—雑歌

下・三十三丁―顕昭註・同奥書・蘆庵奥書、である。

此の蘆庵本の奥書、朱・緑（国学院本、青色。但シ奥書ニ云フ青ヲ指ス、以下青ト記シ区別セズ）両筆の(イ)・(ロ)の識語又顕昭註奥書は次の一点を除き書写形態をも含め全く同一である。それは既述の国学院本が「誂讃岐守美　／令新写校合早」の記中、本書は「讃岐守宗美令新／写校合早」と「宗」字を書写している。以下諸本も同様に「宗美」とあれば本来かくあったのであろう。国学院本の略記の真意は猶量りがたいが本書等により本名を知りうるのである。

これら奥書・識語等の記述については既に掲出し言及したので同本解題を参照されたい。又、同本表紙見返しに追記された俊頼略伝は本書には書写されず、代りに本書旧蔵者□□の蔵書記と本集題名・部立などの略述した二葉を貼附している。

印記、各冊表紙右下に「大森／文庫」（方形朱印）を捺印紙片を貼付す。

本書は蘆庵奥書本の一本として、記すまでもなく、その本文・排列形態は殆んど同一である。しかしながら蘆庵令写校合の元本として前掲の国学院本を以てするには猶躊われる諸点も存し、且つ同本が当該元本であるとしても、その稍々錯雑した校合・書入れからして本書以下数本の同奥書本の依拠した書写本とは遽かに決めがたい。従って当面は其の相互の異同より両者の関聯を検討するのほかはないかと考える。他類本系との関係又第三類本内での相違は既に縷述したので、此処には国学院蔵蘆庵奥書本との比較を主とし、且つ煩雑を避け該本解題に例示した其の特異本文に集約し、両本の相違をみることにする。両本の異同は既に附記するところであるが再掲し具体的に示すと、

(い)　はし書にさとをはかれすとかけりル（朱細補）―国蘆本　春部一八七左注　本書欠

(ろ) おくに海士の小舟もとかけりル（朱細補）―国蘆本　同部一八左注　本書欠

(は) 諸ともに今そ鳴なるほとゝきす（八声の鳥はおのかつまかは(朱)）（朱細補）―本書　夏部三三歌　国蘆本傍記本文本行存

(に) 同所にてとふ人もなき旅の。いふせかりけるに都の人うらめしかりけれは―本書　秋部四六詞書　国蘆本ニハ「。」点右傍ニ「住かにきりふりふたかりル」と朱補ス

(ほ) 秋の夜の長き心をよめる　本書　秋部五五一詞書　国蘆本細補

(へ) 家通（朱細補）―国蘆本　冬部六五八　本書欠

(と) 難思光仏

人はいさ光のすちをしかそともおなし仏やしらはしるらんル本（朱細補）―国蘆本　釈教部八九三詞書・歌　本書欠

(ち) みつ（ル旁書）といふはつくしのふのかとてなり（朱細補）―国蘆本　恋部上二〇三九左注　本書欠

(り) ルあさましやこはなにことのさまそとよ恋せよとてもうまれさりけん（朱細補）―国蘆本　恋部下一二三六　本書欠

(ぬ) 永縁―本書　雑部上二三四作者名　国蘆本朱細補

(る) 我か身はなけきこりけるこけさほやはきあつめつゝひとゝなしけん（らを歟(青)）―本書　雑部上二四九九歌　国蘆本青筆細補

と、(い)～(る)の十一箇所に及ぶ。その中、(ほ)・(る)の二例をのぞき他はすべて朱細補箇処である。その朱校は蘆庵奥書によれば「元本」のそれであり、且つ識語によって巻第一～八迄は「契沖手写本」を示している。しかし、上記の掲出例の朱校に於ては、(い)・(ろ)・(に)・(と)・(ち)・(り)、の六例には「ル」即ち群書類従本との比校を指す略号を印し同本文たることをしめしている。その意味するところは、これら諸例は契沖手写本との比校箇処でないのは当然のことながら同時に蘆庵令写校合本以後の更なる対校であることを告げるものである。しかも、この異同六例は蘆庵奥書本であ

る数本共通して―穂蘆本は同奥書本としては稍々異例の本文構成を示すのでこれをのぞく―同本文を欠落し朱細補の校記を見ぬのである。そのことは此ら数本は、尠くとも現在の国学院本を其の依拠本とするものではなかった、と云えるのである。然れば、同本本文系統に於ける群書類従本比校以前の蘆庵本本文に拠るものであったか、との推測も一方に配せられるのであるが、下記するごとくやはり困難であるといわざるを得ない。

それは、(は)の「諸ともに」歌の下句である。本書以下、東・京・穂蘆本等はすべて朱書細記し、これを補っている。第三類本系は岸本由豆流旧蔵本の一本以外は同じく朱補するところである。因みに第二類本系諸本も欠落本文とするか同様に朱補するかのいずれかである。この第二・三類本系の共通する特徴より推測するに、国学院本のごとく墨書本行として存するよりも本書以下に看る朱補―即ち識語に云う契沖本系による朱校―が本来ではなかったろうかと思われるのである。

又、上掲例とは別に一例をあげると、本書には

一のすにことなく入てよろこふほとにとゐといふものゝまうて来て……後略……　羇旅部七四詞書　東・穂蘆本・同系

初本朱傍記存

と、朱校記を附している。朱校本文は群書類従本本文ではなくして契沖本系本文に「いたりて」(イニ无(朱))とあり、それよりの校合とみるべきであろう。東・穂蘆本には「入て」(いたり本行同(朱))と更に附記していることからも明らかである。ところが国学院本には此の朱傍記が存せず―京蘆本は転写時の誤脱歟―して、この点にも前者と共に朱傍記の附されているのが元の姿ではなかったかと思われるのである。更に精査すれば幾例かをみるであろう。

又、上例(る)の一首であるが、国学院本には行間に青筆細補しており、本書以下の青筆傍記を朱筆にて「らを」とし

ている。青色は蘆庵本奥書に記す「青私所書加也」とあれば蘆庵の校合である。とすると、該一首を蘆庵自らが校合細補し、巻第九・十両巻に附する「元本」の朱校を移写するという、全くありうべからざることが推量されねばならない。偶発的な錯誤とみるよりも寧ろ本書等に看るごとく元々誤脱歌ではなくして墨書本行中に青筆の蘆庵の校訂が附記されたと考えるのが自然ではなかろうか。此の雑部上二四九歌は管見する本集伝存本には国学院本一本をのぞきすべて所収するところからも同書青筆細補は訝しく思われてならないのである。

かく縷々と言及したのは他でもなく国学院本が蘆庵令写校合本の元本であるか否かの躇いによるものであり、且つは一方に於いて、本書等数本の依拠原本を辿るとき、同本を以て其の祖本とするには猶幾許かの齟齬、背反する処が検出され、その一斑を述べて爾後の再考を期するところにあった。が結句、両書には右掲のごときの異同が存し、両書相互の関聯は極めて密ながら依然其の間の逕庭を思わざるを得ないのである。

又、一方本書のみに見出す欠落本文として、釈教部九三第五句「やみ・・・・・・・・・・・」や、同部九五詞書「万よきことのほとりもなき・・なん海のことくに……」などの誤脱例も瞥見される。

次に、第三類本系に於ける蘆庵本の共通異文を国学院本にて例示したので、此処では同じく当該箇処中に纔かに看取される小異のみを掲示することにする。

春部一六七詞書　家隆(綱朱)かもとより恰(蛤朱)をこすとて……（国蘆本、以下同）―家隆(綱朱)かもとより蛤(は朱)をこすとて……、　秋部四〇三詞書……家にて○女郎花(人々秋の花をよみけるにル朱)をよめる―……本文同、朱校記ナシ、悲歎部八〇七第二句　○ありけりと(又ル朱)―ありけりと(なル朱)、本ノママ落字歟(青)

恋部上一〇八第二句　橋の駒(の朱)ふみ―橋の駒(は朱)ふみ、恋部下一一九二詞書　障本夫(隔ル朱)恋―障本先(ママ)恋、同第二句　かけてしれは(くイ下同てゝく(青))―かけてゝくるれは、恋部下一三〇詞書　……おはしまし○比(けるル朱)……―おはしましける比、同詞書　……道(たはしはくらしとて)みくるしと

おはル(朱)　たイ(青)
てしはしとてと……―……道みくるしとてしはしとてと……、雑歌下一六三詞書　……あそひともをあるしのをこ
たはしはくらしとて(朱)　ひ(朱)本ノマ、　お(青)
ナシル(朱)　か(朱)
(青)
したりけるを……―あそひともをあるしのをこしたりけるを……
ひ本ノマ、(朱)　かれ(朱)
かれ(朱)

と、まことに微々たる書写上の異同にすぎない。が、国学院本の「ル」、群書類従本との朱校が此処では其の主たるものとなっている。本書には例示したのみならず国学院本に看る群書類従本に拠る追校は一切見出されず、その意味では蘆庵奥書本の元来の姿を伝えているのであろう。

以上、本書と国学院本との異同のあらましである。が、再三言及してきたごとく蘆庵令写校合の原本として国学院本を認定するには猶聊かのためらいが残り、加えて同書が呈示する後補の追校・追記など可成り錯雑して、其の原態に復しがたい諸点などを想いあわせられるのである。

やはり、其処に本書以下数本の蘆庵奥書本が持つ、その原態遡及の相互補足の意義が存するのではないかと思われるのである。

猶、蛇足ながら本書の歌序配列は記すまでもないが、国学院本のそれと同じくし、

㈠夏部　二三三・二三五・二三四・二三八・二三九・二三六・二三七・二三〇　㈡同部　二六三・二六五・二六四・二六六　㈢釈教部　八九一・八九〇

の三例である。

備考

本書にも、国学院本に所見した朱・青色両筆の附註書入れは処々散見されるが、同書に比し朱書入れは甚だ少く、同書備考に略掲示し言及したところであり、あらため再述するまでもないので、青書入れに於て国学院本未載の一例を次に挙げると、

アラタマノスコカタケカキアミ（万）ユモイモシミエナバワレコヒメヤモ（註）（青）

黙軒斎に万の此哥あら玉のすことつゝく事は璞之寸戸をかくてんせり寸戸ハキベニテ遠江国麁玉郡伎倍（キヘ）といふ郷の寸垣なりよりて此哥の語勢も同万あし引の山のとかけに鳴鹿の声きかすやも山田もる酢児これを用られしなるへし（青）―夏部三五第二句　東蘆本略同存、穂蘆本「アラタマノ」歌ノミ存

と書入れている。京蘆本には見えぬが、東・穂蘆本の両本共に万葉歌は同じく片仮名細書されている。註記書入れはともかく青筆であれば蘆庵書入れとも考えられ、国蘆本未載の点は留意される。猶黙軒斎は蘆庵門の前波敬儀黙軒のことであろう。

註　参考までに、東・穂蘆両本の万葉歌を挙げると、

万云アラタマノストノ（スコ）、サカキ（タケ）。メニヨリソノイモシエスハワカコヒメヤモ（アミ）（寸）―東蘆本

万云アラタマノストノ、サキメニヨリソノイモシエスハワカユヒメヤモ（竹カキアミメヨリ）（コ）　穂蘆本

と、同歌の訓読を誤写し補訂している。

東京大学附属図書館蔵　安永八年小沢蘆庵令写校合奥書本　存自巻第一至巻第五

袋綴、一冊。薄茶色刷毛引表紙、竪二十六・九糎、横十九・五糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十一糎。毎半葉十行に和歌一行書き、詞書三字下げに書写する。

外題、表紙左肩に「散木集　四季　祝　離別　旅　上」と同筆打付書している。

内題、「散木寄(朱)奇(青)歌集(朱)詞已下同ナシ(青)巻第一(〜巻第五)春部(〜祝部・別離・羇旅部(朱))」と記し、巻第二〜五迄は「奇」と書す。右傍記の朱「棄」又「旅宿」は契沖本に於ける、前者は朱訂、後者は墨本文の、それぞれの校記であろう。又、左右傍青色(実ハ緑筆)校記は群書類従本の対校である。又、本書巻第四「冬部」の内題中の「奇(墨)歌(和)」は国学院本の傍記と同じくし、共にその祖本の跡を偲ばせている。

部立表記は、巻五迄の残欠本であり、蘆庵の奥書は存せぬが、同本系と全く一致する。

本書各巻の本文墨付丁数は、既述の斯道文庫本、京都大学図書館本の両本と全く同じくし、春部二十五丁、夏部十九丁―京蘆本第一裏ヨリ書写ニテ二十丁―、秋部二十七丁―京蘆本同ジク第一丁裏ヨリ書写二十八丁―、冬部十四丁、祝部・別離・羇旅(朱)部十四丁、である。且つ又、斯道文庫本とは行数・字詰等をも含めて両本の間は後述するごとく極めて臨接する伝本である。

蘆庵本系の奥書は諸本顕昭註の後に存し現在知るべくもないが、前記の書写状況、又巻第一内題下の同一識語(朱書)等から推測して、顕昭註・同奥書・蘆庵奥書を具備附載する上中下三冊仕立の転写一本であったのであろう。

書写年代は斯道文庫本を稍々遡り、表紙右肩に打付書きする「前波黙軒手沢本」(別筆)を信ずれば黙軒没年文政元年臘月以前ということになるが、群書一覧引用の記、又、群書類従本との校合のこともあり―もっとも同校合筆跡は細書し別筆ではあるが―、同年代をそれ程に遡るとは思われない。

印記、巻首に「対樽/堂璽」(陰刻方形印)、「渡辺文庫/珍蔵書印」(旗幟飾印)の二顆を捺している。

扨、本書の本文は其の書写状況と同様に斯道文庫本次いで京都大学図書館本と―校合・書入れは別して―全くといってよく一致する。勿論、両書が本書からの直接の転写本と断定するのは、本書の校合―後述―書入れを別しても断

定しがたいが、両三本は恐らく同一本から分岐した各々一本であることは確実である。

又、斯道文庫本との間には更に相互の関係が想定されるのである。それは同本解題の備考に掲出した、夏部三吾歌第二句「すとの竹かき」の附註書入れである。本書のそれと対比の都合上、再録すると、

万
アラタマノスコカタケカキアミ（ママ）ユモイモシミエナバワレコヒメヤモ

黙軒斎に万の此哥あら玉のすことつゝく事は璞之寸戸をかくてんせり寸戸ハキベニテ遠江国麁玉郡伎倍（キヘ）といふ郷の寸垣なりよりて此哥の語勢も同万あし引の山のとかけに鳴鹿の声きかすやも山田もる酢児これを用られしなるへし

と、青筆にて誌している。この黙軒斎は恐らく前波敬儀黙軒であろう。ところで、本書の当該箇処書入れには

万云アラタマノスト（スコ）ノ、サカキ（タケ）。メニヨリソノイモシミエス（アミ）ハワカコヒメヤモ（寸）（青）

璞（アラタマノスコカタケカキアミ）之寸戸我竹垣編目従毛妹志所見者吾恋目八方（メユモイモシミエナハワレコヒメヤモ）

右見十一一六葉

契沖云万十四東哥遠江国哥

阿良多麻能伎倍乃波也之尓奈乎多氐天云々

伎倍人乃万太良夫須麻尓云々

山上憶良哥ニ　かくのみやいきつきをらんあら玉のきへゆく年のかきりしらすて

遠江国麁玉郡［　　］（青）

と、万葉代匠記を抜粋している。右の本書書入れが即斯道文庫本書入れとして要約し転写されたものとは思わぬ

が、同本に「黙軒斎に」とあり、同人の手沢本と称せられる本書に内容を同じくする書入れが存するとすれば、その直接の書承関係はともかくとして、前波黙軒齋と斯道文庫本との系結を考慮せざるを得ない。寡聞にして黙軒の本集に関し著録するところを識らない。とすると、斯道文庫本に誌す黙軒齋記は本書に看る書入れより―その経由は直接ではなくして、その間に猶介在する事情はあるにせよ―の摘要、転載ではないかと推測されるのである。しかも書写状況までを同じくするとすれば、前波黙軒手沢書入本の線上に斯道文庫本は位置することになる。しかし、本書独自の書入れは猶多く散見するが斯道文庫本には転写されていないことも併せ附言しておく。

又、本書が記す「前波黙軒手沢本」の記を信ずれば、黙軒は蘆庵の学統にある者として、本書手沢の経由は又然るべく確かなる蘆庵本系の書写本であったと考えねばならない。未だ黙軒の手跡を審らかにしない現在遽かな判断は避けるが、此の経路上に蘆庵奥書本の一系流が想定されるのである。

本書の書入れについて更に触れておくと、表遊紙の裏に、国学院本・京都大学図書館本に添書されていた―国蘆本解題ニ掲出―源俊頼の略伝の同文が転写され、次に、

(1) 群書類従奥書云右散木奇謌集以織部正乗尹本校合了

(2) 新類題和歌集に散木奇□歌集として此集中のうたを出せり

(3) 群書一覧云按するに此集を散木と名づけたるは荘子に樗櫟散木云〻無用の材といふ心也しかるに奇歌の奇の字はものをほむる心あれは散木の二字にかなはずもとよりみつから名つけられたる題号と見ゆれはいよ〳〵不審なるもの也契沖の考に此奇の字は弃(キ)の字をあやまり写したるものにて弃(スタ)るといふ義なるべしといへり此説もつともあたれり

と追記している。これら添書は俊頼略伝・(1)と(2)・(3)とは別筆のごとく見える。

その(1)は青筆にて群書類従本との校合の記であるが、実際には本書全般にわたり、同書による詳密な対校—漢字・仮名の相違をも記す—を施しているので、その校本の記を誌したのであろう。同校記は青墨稍々細筆にて本書本文と異り、その校記には略称など一切附さぬが一見して容易に判明する。又一部「……百首の哥(ナシ(青))めしけるに(を(朱))……」—春部一—のごとく「今ニ同」、「今同」と附記するものがあるが、それは右傍「を」を除いた「哥めしける」(今ニ同(青))が群書類従本と同じことを意味するかと推測される。国学院本にも同書との校合が所見されるが本書ほどには微細にわたらず同本からの移写とは認められない。又、「名寄」などによる校合の跡も間々見出されるが、その他は既述した蘆庵本系共通の校合で本文を同じくしている。

(2)・(3)の追記は、本書巻第一の内題に「散木寄歌集」と記すのに触発されてか、「散木」の原義に拠って諸本の「奇」もこれをさけ、契沖説の「弃」字を是とする尾崎雅嘉の書に拠って添書したものである。共に此の期一般の校訂・書入れ等の実態を示している。

以上、いさゝか、校合、書入れに贅言することゝなってしまったが、本書の本文自体は斯道文庫本・京都大学附属図書館本と殆んど異るところがない。斯道文庫本解題に列記した国学院本との異同、(い)〜(へ)—本書存巻第五迄ニ依ル—の六例中・本書に細補されているのは、(い)一八七左注・(ろ)一八八左注・(は)二三六下句・(に)四六詞書一部と四例にも及ぶが、(い)・(ろ)・(に)の三例はいずれも追補傍記した前述の群書類従本による校異である。たゞ一例、(へ)六六作者名は「家道朝臣」と本行に書写され両本と相違する—因みに国学院本には単に「家道」と朱補し、その依拠を明らかにしない—にすぎなく、他は転写本相互に起りがちな極く細微な相違である。繰返すまでもなく両三本は同一本上の岐れとして捉えら

れる。[註] が、相互直接の転写関係は現在のところ確認しがたいのである。

更に附加えたいのは本書を問わず此の期一般の傾向として原写本への校合作業が累積的な結果としていわば安易な本文整定化のごときを生ぜしめていることである。しかも、それは錯雑する校合伝本であればあるほどにやゝもすれば恣意的な撰択によって新たな校訂本が形造られてゆくのである。既述の契沖本とその転写本との関係に於て生じた結果は、蘆庵本に見る同本との対校の不明確さ―例えば契沖自筆本墨本行と朱校の混同化による―を生じるがごときが看取されるのである。

又、蘆庵奥書本系伝本に立返っても確実な元本のもとの姿を確認し得ない現在、各伝本上の処理は同様な錯誤の上に立っているものと考えなくてはならないであろう。その意味では本書を含め不確かな立脚地に於ける言及であることを附言したい。

猶本書の欄外等に於ける書入れは可成りの箇処に及ぶのであるが省略する。本書が蘆庵門の前波敬儀黙軒―文政元年十二月十日没、七十三歳―の手沢本であれば、その校合・書入れの筆跡は本書本文と異るところから黙軒その人とみるのが自然であろう。その手跡の確認を得て記すことにする。

註　細部に於ける書写上の異同は三本間にも散見するところであるが、比較的には斯道文庫本がより隣接するのであるが、次の夏部二六三詞書の後半に、本書は、

……例ならぬ事ありて之まかるましき事なと申けるついてによめる　本行に同（青）

と傍記する。朱校「りける」は契沖本文であるが、『イタハルヿ云〻』は朱校ながら契沖本には存せず蘆庵本系に見出される。

但し、斯道文庫本は此れを平仮名表記とし、本書とは異る表記である。些細な表記上の相違ながら国学院本・京都大学図書館

本両本と相違するなど、両三本―斯・京・東蘆本―は相互に異同を見出すのである。

京都大学附属図書館蔵　安永八年小沢蘆庵令写校合奥書本　存十巻・附顕昭註

袋綴、九冊。茶褐色刷毛引表紙、竪二十七・一糎、横十八・八糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十一・三糎。毎半葉十行に和歌一行書き、詞書二乃至三字下げに書写する。

外題、表紙左肩に「散木棄歌（但シ巻第九「哥」）集」と同筆打付書きしている。

内題、「散木寄（棄朱）歌集巻第一（〜巻第十）　春部（〜雑歌下）」と記すが、巻第二以下巻第十迄は前掲二書と同じく「奇」と書す。国学院本等に見る巻第四冬部の「奇（和墨）歌」の墨書傍記はない。部立表記は巻十「雑歌」に至るまで同じくしている。

奥書・識語、又顕昭註奥書も全く同様であるが、その奥書の記中「讃岐守宗美／令新写校合早」と「宗」字を書写し、斯道文庫本以下と一致する。

本書各巻の本文墨付であるが、以下のごとく斯道文庫本とすべて相符合し、両書は極めて同類、近似する関聯のもとに書写されたものと推測される。

第一冊　春部二十五丁斯蘆本―以下省略―（同）、第二冊　夏部二十丁―但し、第一丁裏ヨリ書写―（同）、第三冊　秋部二十八丁―但シ、第一丁裏ヨリ書写―（同）、第四冊　冬部十四丁（同）、祝部・別離・羇旅（旅宿朱）部十四丁（同）、第五冊　悲歎部・神祇部・釈教部三十三丁（同）、第六冊　恋部上十六丁、恋部下十四丁（同）、第七冊　雑部上三十丁（同）、第八冊　雑歌下二十八丁（同）、第九冊　三十四丁―斯本、顕昭註奥書・蘆庵奥書一葉表裏ニ書ス、三十三丁

右記の中に附註した夏部・秋部の巻首が他巻と異り第一丁裏より書写されている不自然な印象は本書の依拠本が本来二乃至三冊仕立て―例えば蘆庵本識語に云う「分為三本」のごとく―であるのを該本の丁数・行数のまゝに略各冊に分巻せんがために惹起されたが故であろうかと推測されるのである。―もつとも偶々一行字詰めの異同により次葉にと組入れられるところも散見するのであるが―。このことから判断するに、斯道文庫本と本書とは其の依拠本を同じくせぬまでも同一本よりの転写経路上に分岐した書写本であろうかと推理されるのである。両書の漢字・仮名、草体は勿論相違し、その本文も細部に於ては小異を見出すのを含めてである。

本書の書写年代は斯道文庫本と相接する江戸末頃の書写本である。印記はない。

扨、本書の本文に目を転じてみると、本文も同様に第三類本系の特徴を示すと共に、その蘆庵本系の中に於ても前掲の斯道文庫本と極めて近似する関係にある。即ち、該本に例示した、(い)～(る)の十一例は当然ながら全く共有している。[註]

その他、朱・青筆校合、両筆書入れ附註等、その大概を同じくしている。

又、その歌序、排列も、(一)・(二)・(三)の形態が所見されて異るところがない。

しかし、一方両書本文の微細な面にまで渉ると、厳密には依拠本を同じくしたとも云いがたく、両書の一方から他方へというがごとき転写関係は勿論想定しうるところではない。別註した纔かの二・三例に於ても、それは単に書写上のミスとして処理すべきものかもしれぬが、かゝる例は挙げつらえば猶相当箇処に及ぶのである。

例えば両書に散見される校合書入れの異同一例を挙げると、

春部三六の異同多き第三句「このこなを」に本書は右傍に「ゑこのうれ(朱)、こな歟上ヲウレト云ソレカ(青)」、左傍

に「ゑくうれを以上夫木(青)」と校記しているが、斯道文庫本には左青筆校記―蘆庵歟―を書落している。又、本書は同部二五第四句「つつしかけたに(本の岡に宝(青)の契沖本同(朱))」と左右に校合するが、斯道文庫本は「契沖本同」記を書落している、などが見出される。同様に「イ」本校記の春部に偶目する異同、二・三箇処を掲示すると、

　　夅詞書……さくらの哥十首人〳〵よませ(にイ(朱))侍りけるに……(斯蘆本、以下略)―本書「にイ」朱校ナシ、同第五句「しるへなりけれ(しレイ(青))」―本書「しイ」青校ナシ、一七八 第五句「浪そたちぬる(けイ(青))」―本書「けイ」青校ナシ

などが散見される。その一方、同二四第五句「風にきせけん(なんイ(青))」(斯蘆本)を本書は「風にきせなん」と書し、右傍に「本行けん」と校記して両書が同一本系たるを示している。―因みに国学院本は「風にきせけん(なんイ(青))」とあり、斯道文庫本と一致する―。

これら極く一部の例示にすぎない。諸巻それぞれに校合のみならず本文中にも看取されるのであるが、此処で留意されるのは右記の二四第五句に誌す「本行けん」の記である。即ち、本書に於ける一種の本文整定の意図が窺れるのである。その点、本文上より見ると、本書は斯道文庫本本文に比し、以下―同様春部よりの両本文語句の異同である―のごとく仮名遣いを中心に訂されている。目につくまゝに拾えば、即ち

三〇 詞書……若菜。そへ(にイ(墨)てイ(青))。……(斯蘆本、以下略)―……若菜にそへて(イ)……(本書、以下略)、三一 第四句なつなのはつ

　　お(をか(青))―なつなのはつを―以下「お」「を」の仮名遣い訂正は三一・三二・三七・三八・三九・四〇・四六・二三・二四・二六九等多きに亘る―、三六 第四句世によろほへる(ろ(朱))―世によろほへる、四三 詞書……かきつけゝる(侍り(朱))―……かきつけ侍りける、四五 第二句けしきことなり(る(青))―けしきことなる、七三 初句おし鳥に(を(青))―おしとたに(とたに(朱))、八四 初句雪きへぬ(え(朱))―雪きえぬ、八六 第四句身のゆくゑを(へ(朱))も―みのゆくへをも―以下「ゑ」「へ」の訂正屢〻見るが省略―、九五 詞書……なをためらひてまつ(ほ(青))

内まてまいれる(青)と……—……なほためらひてまつ内まてまいれと……、一〇三 第二句花の御舟に—と(墨)花の御舟と、一〇六 第二句けふにそ歟(墨)おほめく—けふそおほめく、一四二 第四句かけには波の—に(墨)影には波に、一七〇 初句をる波に—の(青)をる波の

のごとくがある。掲示した両書の微細な異同を一見するに、斯道文庫本の朱・青・墨三筆の傍記校合本文が本書本行本文と訂正されているかと推測されるのであるが、国学院本のそれらと比校するに過半は本書と一致するのである。換言すれば斯道文庫本の誤写に帰せられるべき本文となると想定するのが妥当であろう。しかも、かゝる例が両書全巻にわたるのであるからには、此の斯道文庫本に於ける朱・青筆の校合は如何なる経由によるものかとの疑問が生じ来り、それを安易に手写上のことがらとしてのみ断定しがたく、両書の直接に依拠した伝本は厳密にはやはり同一のものではなかった、と推論するのが自然であると思うからにほかならない。又、かく末端に類する小異に対し縷々たる言及は、所謂蘆庵奥書本なる伝本が管見するほかにも猶伝存が予想され、多くは転写本たるにより且つ又繰返すが其の元本を確認しがたい現在、かゝる区々たる異同が多見されるであろうからでもある。その異同の是非又真偽は伝本相互の対比校勘を俟つのほかなく、その一例として煩述したものにすぎない。いずれにせよ両書は同一本より派生し、転写された伝存本であるが相互に猶補足すべき諸点が存するのである。

本書の朱・青両筆の書入れ—集付・附註等—はやはり斯道文庫本と殆んど同じくするが本書は稍々尠く、それらは同本の其後の追記でもあったのであろうか、その備考に掲示した書入れ後半は勿論見出されない。

本書の歌序排列は当然前掲二書と同様に、夏部㈠・㈡、釈教部㈢、の形態を示している。

註　第三類本系に於ける蘆庵奥書本の共通異文につき、国学院本と斯道文庫本両本との些少な異同をさきに比較掲示したが、更にそれに依り対比するに極く細微な二・三を除き、此の点でもよく類同する。その相違箇処は、

恋部上一〇八　第二句　橋の駒(は朱)ふみ朽る(め朱)(斯蘆本)―橋の駒ふみ朽る(め朱)(本書)、恋部下二九一　第二句　かけてゝくるれは(くイ下同てゝく青)(斯蘆本)―かけてしれは(くイ下同てゝく青)(本書)、雑歌下一六三　詞書……あそひともをあるしのをこしたりけるを(か朱)……(本書)

と、両本相互の書写上のミスとでも云うべきものであろうが、しかし、両本の間には此の類同と共に猶小異が多く散見し、相補塡する関係にある。

○附記

小平市立図書館蔵　安永八年小沢蘆庵令写校合奥書本　小津桂窓旧蔵本　存十巻・附頭昭註

本書は未見本である。本文庫助教授大沼晴暉君の調査カードによるものであり、未だ披閲の機会を得ぬにより同君のそれにより略記する。

袋綴、三冊。渋引刷毛目表紙、竪二十七・七糎、横十九・三糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十一・五糎。毎半葉、行数十行。

外題欠。内題「散木寄(棄朱)歌集巻第一(～十)春部(～雑歌下)」。

各冊丁数、上冊九十九丁―自巻第一至巻第五、中冊九十三丁―自巻第六至巻第八、下冊六十丁―自巻第九至巻第十

・頭昭註。

部立表記は蘆庵本系と同じくする。

奥書、顕昭註末であろう。

右散木棄歌集三巻誂讃岐守宗美／令新写校合年(ママ)朱如元本　青私所書加也

于時安永八年己亥正月十日　蘆庵

と記す由、蘆庵奥書本と同じくする。

上冊、内題の許に、識語(イ)に当る

朱校契中(ママ)午写本也分為三本此本下巻／私補入顕昭註九十七首卅四(二)張契沖本哥一首一行書

と朱筆細書している。

巻第九内題下の(ロ)識語は藍筆にて細書されている。即ち

自是以下依無他本所書写以／元本校合更得異本可再校也

と細記されている。(イ)・(ロ)の識語は朱・藍両筆ではあるが、その校合は朱と薄緑の両色にて斯蘆本とは若干の異同が散見されるごとくである。未見のまゝ本文の実態は確認するところではないが、蘆庵奥書本系の転写一本であろう。

又、蘆庵本系に間々散見する書入れも存するが、いずれの転写本系に依るかは不明である。

夏部三四歌第二句「すこの竹かき」の例歌として、

万云アラタマノスト／ノ、サカキメ(ママ)ニヨリ／ソノイモシミエスハ／ワカコヒメヤモ

を頭書しているという。さきの穂蘆本と略同じくし、斯蘆本・東蘆本に見える追補釈義は書写されずとの由であり、同様に未定である。

顕昭註の奥書は上掲諸本と同じくして、

本云

寿永二年十月七日奉／梁園教命注進之／重下給差声之　　顕昭

文禄三年四月廿七日写之顕昭親筆。之本也

とある由である。

印記に「西荘文庫」の重郭朱印を捺すところから、小津桂窓所持本として注目される一本であろう。披閲の好機を俟つところである。

国文学研究資料館初雁文庫蔵　〔天保〕写寄合書　存十巻・附顕昭註

袋綴、三冊。浅縹色刷毛引表紙、竪二十六・六糎、横十八・九糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十糎。毎半葉十行に和歌一行書き、詞書略二字下げに書写する。各冊の書写年代は天保年間と同じくするが、その手跡は各々異る寄合書きである。

題簽、表紙左肩に薄様斐紙短冊を貼付し、「散木奇歌集　上(中・下)」と別筆書写している。

内題、「散木寄(棄)歌(朱)・奇(朱)ル集巻第一(〜十)　春部(〜雑哥)」と記すが、巻第二以下は「奇」に作り、傍記の「棄」は施されていない。但し、巻第四は「散木奇(墨)和歌集」と墨傍記を附し、国学院本と同じくする。

部立表記は、蘆庵令写奥書本と全く同一であり、四季部、祝部・別離・羇旅(宿)部、悲歎部・神祇部・釈教部、恋部上(下)、雑部上・雑哥下、と誌している。

本書各巻の本文墨付は、該奥書本は諸本類同し、本書も又、各巻に一・二葉の相違を見るにとゞまり、祖本の共

通性を示している。即ち、

第一冊八十五丁　春部　至二十四丁表・夏部　自同裏至四十三丁表・秋部　自同裏至七十丁裏・冬部　自同表至八十五丁表　第二冊七十七丁　祝部・別離・羇旅部　至十四丁表、悲歎部・神祇部・釈教部　自十五丁表至四十七丁裏、恋部上　自四十八丁表至六十三丁表、恋部下　自六十四丁表至七十七丁裏、第三冊九十一丁　雑部上　至三十丁裏、雑哥下　自三十一丁表至五十八丁裏、顕昭註　自五十九丁表至九十一丁表

である。

印記、「勝安芳」方円朱印を各冊遊紙（第一冊）又は巻首に捺す。

本書の奥書は、次の顕昭註の奥書は存するが、同一本系に皆附載する蘆庵奥書を欠いている。それに就いては後述することにする。

顕昭註のそれは、同註の尾に、

本云

寿永二年十月七日奉／梁園教命注進之　群書作門（朱）

重下給差声了　顕昭

文禄三年四月廿七日写之顕昭親筆之本也

と書し、その行間に又、

羣書類従本奥書

寿永二年十月七日奉梁門教命注進之重下給／差声了　顕昭

と別筆朱書している。

又、蘆庵奥書本に誌す巻第一・九の内題下の(イ)・(ロ)の両識語のうち、本書は次の(イ)識語のみ記し、(ロ)を書写していない。

朱校契沖手写本也分為三本此本下巻私／補入顕昭註九十七首卅二張契沖本哥／一首一行書（朱）―(イ)識語

青書入江昌喜校（青ト記スモ現在暗緑）

と、青書を添書している。共に同筆である。又、(ロ)識語―巻第九―に代り、当該箇処には、前者とは別筆―第三冊書写者の筆跡歟―にして、墨筆にて、

此巻より以下入江昌喜ノ校する所／青書入なるをあやまちて朱にて入たり／そは片ニ入曰入云なとアリ

と附記し、更に巻第十内題右傍に同筆にて、

入江本是より下巻なりしを今とちかへたり

と墨書している。

上掲識語とは別して、第一冊前遊紙の表には、(イ)識語と同筆の次の校合記を朱書している。

校合以ニ代赭石ニ者頼遠かものせるにて群書聚類（ママ）中所レ収散木／奇歌集。三巻也依略記ニル印ニ右類聚本傍、イ印塙氏之所校合／也よていまルノイト記し侍り　天保辰の五月中旬校合初六月十五日畢（朱）

たゝ異同を記して当否をしるさすこの外誤字ある所ハ誤ならんト書たるも／ありこれより遠かさかしらなり（朱）

以ニ先人ノ朱丸印ニ点せしハ下に註釈アル哥トモ也さあらぬにもまゝ丸を点せしもあり／頭ニ一二三ヲ点せしは註釈をみ

るにたよりするもの也

此内七一首は雑の部の上にあり　本書とちうさくとは次第不同なれハ／註釈の頭にも一二を点して見やすからしむ（朱）

と誌している。天保辰(三)年頼遠の追校の記と先人の簽符等に亘る添書である。この添書の筆者頼遠については春部一四八歌の上眉欄外の朱書入に「山田頼遠云」とあり、山田姓なるのほか寡聞にして審らかにしない。

如上、本書の識語・校合記を簡略に整理すると、(一)(イ)識語により本書は上述の蘆庵奥書本と同じく上中下の三分巻―分為三本―であり、その朱校は契沖手写本であり、且つ下巻は私に補入し、顕昭註を附載している。そして「青書入」は入江昌喜の校せるところであるという。

続く、巻第九内題下の識語は、蘆庵奥書本の(ロ)識語に代り、(二)は巻第九・十両巻と顕昭註には、入江昌喜の青色校合書入れを誤りて朱書したので「入曰」「入云」と附記した。又巻第十巻初の傍記には入江昌喜本の巻次第は当巻より下巻としていると共に墨書している。当然蘆庵本との相互の関係は此処に提示されるが後述することにする。

そして(三)は天保三年頼遠による群書類従本との校合の要記と先人の簽符の記の略三部からなっている。

本書に所見する校合・書入れも当然のことながら上記を反映し可成り複雑な痕跡を残す結果となっている。即ち、本書に云う朱書の校合・附註両書入れは、巻第九・十の両巻をのぞき、契沖と頼遠のそれでなければならない。頼遠の校合には対校本の略符を附すにより其の大概は識別し得るのであるが、契沖本からの校合・移写の跡は、現在のところ最も憑拠せざるを得ない国学院本に於ても朱書校合・書入れは契沖自筆本はもとより同本転写本系からの必ずしも全ての校合・移写とも云いがたいものが混入し、その詳細な対比を掲示し判別するのほかはない。該本奥書に云う

「朱如元本」とあるを信ずるのほかなく、後述するごとく本書と国学院本との極めて近似する類同性より推して両書は同一祖本によるものを判断せざると得ないのである。がしかし一方次述のごとき諸点も散見され猶躊われる疑問を残すのである。

まず、本書は如何なる理由によるかは既に審らかにしがたいが、第二冊目を構成する巻第五から巻第八迄の四巻には朱・青の両筆の色別は全くなくして墨一筆に書写されている。寄合書と推測される点より担当書写者の手抜きとも想像されるが、其後の天保年間の頼遠追校―群書類従本―は如何に解すべきかは判断に苦しむところである。何等かの事情により、該冊を以て頼遠追校後の同本写本の補塡とでも決着し得れば安易な解決となるが未だ判断しがたい。

更に、国学院本の青筆校合―青私（蘆庵）所書加也―と本書に所見する青筆校合―青書入江昌喜校―と一致するところが随処に見出され、例示するに余りあるところから両書の間には依拠底本を同じくするにとゞまらず、其の緊密な交流・交渉を想定せざるを得ないのである。青筆校異のみならず、青筆附註書入れも間々両書は同じくする処が散見されるのである。青筆集付は勿論のこと、国学院本にて一部例示した、7―秋部四七第二一・三句、10―悲歎部七九三歌、11―同部八四六歌、12―釈教部九七二歌、等々の附註を共有している。殊に11は両書共に「昌喜云」とあり、本集についても両者の交流は否定しがたいものがある。入江昌喜の晩景には、その編著「万葉類葉抄補闕」を繞り蘆庵の推挙などのことを想うと其の親交も窺われ、本集に関してもそれは交友関係の一端を語るものであったのであろう。そして如上の蘆庵の青筆校合・書入れも又自ら昌喜の取捨選択をえながらに、或は又其の書入れの途次のものにより、蘆庵本それ自体を底本として書写しながら、同時に移写したのが現在の初雁本の原態ではなかったろうか。更にそれには入江昌喜自身による附註が追補され、両者共に青書たるにより頼遠転写の段階では昌喜書入れとして一括されるという結

果となったのではないではないかとも想定され、現在のところ如上の推測によることにしておくことにする。しかし猶不審を残すのは蘆庵本に誌す「安永八年己亥年正月十日」の蘆庵奥書を本書が載録していないことである。附言して再考を俟つことにする。

巻第九・十の両巻について一言すれば、国学院本以下蘆庵奥書本は、朱・青筆の校合・書入れは共に僅少であり、その点本書は頼遠による群書類従本との朱校併びに昌喜書入れ—誤って朱書する—が間々散見されるのほか問題を残すところは殆んど皆無である。

繰返し言及して来たところであるが、国学院本が蘆庵令写奥書本の原態であるや否やにも存疑をみると共に爾後の追補も予測され、その意味では厳密なる同系諸本との対比を困難としているが、上掲本同様に、本書の場合も又同本を基準におき以下対照するのほかはないのである。例に倣い、神宮文庫B本解題にて使用した当該番号を以て例示した順次に従い略記し重ねての掲出は省略することにする。但し、適宜必要に応じ註記して此れを補うことにする。

まず、巻第一〜八の前部に於ては、

1—春部五二詞書（但シ本書ハ国蘆本青筆校記ヲ欠キ、附箋貼付ス、即チ「おもしろかりけるにうくひすおとつれて過かたかりけるに立とまりて侍けるに人々はすきにけれはよめるイ本如此アリ（朱）」トス、国蘆本青校記本文ノ補訂ト同ジクス）、3—同部一五三詞書（本書ハ国蘆本青筆校記存、但シ朱書、傍ニ「ル」ト附記ス）、5—同部一八七左注（両本「ル」本ニテ朱補、本書「ル此一行アリ」ト附記ス）、6—同部一八八左注（両本「ル」ニテ朱補、本書「ル此一行アリ」ト附記ス）、7—夏部三三詞書（両本朱補、但シ本書「ル同シ」ト附記ス）、8—同部三三六歌下句（国蘆本本行存、本書朱補、但シ本書「ル同シ」ト附記ス）、11—秋部二八二詞書末尾（両書朱補、但シ本書「ル同シ」ト附記ス）、12—同部四七五歌第三句以下（両書朱補、但シ本書「ル已下同シ」ト附記ス）、

13—同部四九二歌第五句（両書朱補、但シ本書「ル同シ」ト附記ス）、14—同部五〇四小序中間部（両書朱補、但シ本書「ル已上同シ」ト附記、又「神空（ルミ）」ト校ス）、15—同五〇四小序末尾（両本朱補、但シ本書「ル同シ」ト朱補ス）、16—同部五三八詞書（両書朱補、但シ本書「ル同シ」ト附記、又共ニ朱補「よめるル」同ジ）、17—冬部六六八作者（本書朱補欠ス）、18—同部六六七歌第三句以下（両書朱補、但シ本書「ル同シ」ト附記、国蘆本「金」朱校、本書又存ス）、19—祝部六九三詞書後半（本書以下中冊ニテ朱墨識別ナシ、但シ本書、国蘆本青校記ヲ墨細補傍記シ、「イ」ト附記ス）、21—別離七四一作者（国蘆本朱補、本書墨細補傍記、「ル同シ」ト附記ス）、22—同部七四六作者（同朱補、本書墨細補傍記、「ル同シ」ト附記ス）、23—羇旅部七六九詞書後半（同朱補、本書墨細補傍記、「ルアリ」ト附記、又「また（ルナシ）」ト校ス）、24—悲歎部八〇四歌第四句（同朱補、本書墨本行、但シ、書写ノ際ノ本行化歟）、25—同部八一〇詞書後半（同朱補、本書墨細補傍記、「ル同シ」ト附記、又「とて（ルをきゝて）」ト校ス）、26—同部八四歌第四句（本書「ふりさけふ（我ルナシ）」ト記シ、国蘆本「ふりさけふ・・（我（朱））」ノ「ル」校記脱ス）、27—釈教部八七三第五句（同朱補、本書墨細補傍記、「ル同シ」ト附記ス）、28—同部八七六歌・八七七詞書（同朱補、本書墨細補傍記、「ル同シ」ト附記ス）、29—同部八九二詞書・歌（国蘆本「ル本」ニテ朱補、本書墨細補傍記、「此所一首依類聚本補之」ト附記ス）、30—同部九三六歌（同朱補、本書墨細補傍記、「ル同シ」ト附記ス）、31—同部九四三第五句（同朱補、本書墨細補傍記歟、「ル同シ」ト附記ス）、32—同部九五八詞書・歌（同朱補、本書墨細補傍記、両書共に九七七詞書・同歌ノ間ニ補ス、又共ニ同詞書上ニ移行符○△ヲ附ス、本書九七七歌ノ次ニ「○上ノ小書の哥ルニモ此所ニ入タリ」ト附記ス、33—同部九九二歌第二・三句（本書稍々表記ニ異同アリ掲示ス「あられか崎（あらをか崎イ）にゆらされぬ」、国蘆本朱補「ゆら」ヲ本行トス）、34—恋部一〇〇八作者（国蘆本欠脱、本書墨細補傍記、「ル同シ」ト附記ス）、35—同部上一〇三九左注（国蘆本「ル傍書」ト附記朱補、本書欠脱ス）、36—同部下一一三六歌（国蘆本「ル」本ニテ朱補、本書墨細補傍記、「ル／以聚本補之」ト附記ス）、37—同部下一一四六歌第三句（同朱補、本書墨細補傍記、「ル同

シ」ト附記ス）、38―同部下二六〇 詞書（国蘆本欠脱、本書同）

の如くである。

右掲一覧によれば、第三類本系、神宮文庫B本と国学院本とに見出す過半の共通性は、本書との間に於ても同様に其の殆んどを同じくし、纔かに以下、8・17・24・26・33・34・35、の七例の異同を散見するにとどまり、両書共に同一本文に拠るものであることは否定しがたい。しかも、その細部にわたれば、8例は国学院本を除く蘆庵奥書四本共に細補する欠落本文であり、17例も又、同国学院本にのみ朱細補するにすぎず蘆庵奥書本元来のもの否やは認定しがたい。因みに契沖自筆本には存せず上記四本同様である―もっとも34例のごとく契沖自筆本に朱補するも現蘆庵奥書本系に移写されぬがごときを見出す一面も否定しがたいが―。更に26例に於ては同歌第四句の錯雑性から本書が群書類従本の校合を見落した点にあるものと推定され比校上の事柄として対処されるであろう。或は牽強の謗りあるやもと惧れるが、他の二・三例にみる転写上の本行化も人為のしからしむるところではなかろうかと思われるのである。

又、両書の群書類従本との対校に関してみれば、国学院本のそれは蘆庵令写校合本以後の追校であり、同奥書本諸本と相違するのは上述してきたごとくであるが、本書の場合は更に降り天保三年頼遠の校合するところの傍記であり、校記中、原本文に看る校異に対し、「ル同シ」「ル已下（上）同シ」など附記すると同時に「此所一首依類聚本補之」「以聚本補之」など謹直な附記をとゞめ、前者国学院本とは別して該本校合以前の書写本に拠っているかと想定されるのである。繰返すが同奥書本が同様であるようにである。

いさゝかならず煩雑な言及となつたが、上記表中、国学院本に校する青筆の校合と本書との類同する三例、即ち、1・3・19、である。青筆は蘆庵の「青私所書加」であり、契沖本系のそれではないが、先ず1の例に於ては本書はさ

きに掲示したごとくに当該部に附箋に朱色同筆にて国学院本と全く同文を清書している。その由来するところは、契沖自筆本では、

……前略……おもしろかりけるに人〳〵過にけれはよめる

とあり、明らかに相違し、本書の朱書するところは現時点からはやはり蘆庵奥書本系の青筆校合に拠るとみるのほかはない。

又、3例のそれも本書は同様に国学院本の青色校合を朱細補している。契沖自筆本には、

百首歌の中に帰雁の心をよみ侍りける

と書写し、これも又該本本文とは云難い。

次の19例であるが、国学院本の青筆校合は本書中冊がすべて墨筆校合であるのを受けて該本同文を傍記細書している。他本では斯道文庫本も同文の青筆校異を記しているので、此れも蘆庵本青書校合と認められよう。契沖本の当該部は、墨本行に書写され、

……前略……松久遐(契朱)年といへることをよませ給ひけるによめる

と、本文を同じくしている。蘆庵奥書本系が何故に本来朱校すべきを青筆を以て校したるかは推測すべくもないが、同本に於ける契沖本系との校合は既に屢々言及したごとくに可成り任意的な点は否まれず、此れも又其の一端を示すものであり、寧ろ蘆庵の用いた青書き校合一本の本文が右記19例の校異本文と偶々一致していたとするのが妥当ではなかろうかと推せられるのである。

右掲の表中から纔か三例を挙げ言及するにとどめるが、本書と蘆庵奥書本との密接不離な関係は否定しがたく単に

祖本を同じくする以上のものを想定しざるを得ないのである。そして、本書は19例はひとまず措くにせよ、1・3例のごとく、その朱校は(イ)識語に誌すがごとく必ずしも全て契沖本系の本文を示すものではなくして、或は蘆庵→昌喜→再転写のごとき稍々混淆・複合化の許に成立した、此の期一般の書承伝本として受入れるべきかと愚案するのである。

更に、神宮文庫B本に見出されず蘆庵奥書本系に所見された欠落本文―国学院本同解題に掲示―a～dの四例であるが、煩を厭わず本書のそれを再掲すると、

a　さみたれを(朱)／さみたれのこゝろを一行落タリ(朱)　夏部三〇一詞書

b　同所にてとふ人もなき旅の。ルすみかに霧ふりふたかりてト云十三字アリ(朱)いふせかりけるに都の人うらめしかりけれは　秋部四六三詞書

c　秋の夜の長き心をよめる　秋部五一詞書

d　うき事は又ありけりとあさゆふにたれすみそめの袖ぬらすらん　悲歎部六〇七

と書写されている。国学院本とはc・dの二例を異にするが、a・b両例共に原本文を同じくするものであり、「ル」略符は附さぬが「一行落タリ」「ト云十三字アリ」など該本との校合を示すものであろう。a例などは「さみたれを」と国学院の朱校の再記さえ残している。

両書の相違を示すc例は国学院本一本のみの欠脱であり、他四本、即ち**斯・東・京・穂蘆**本ともに本行墨書しているのであり、従って以上三例は蘆庵奥書本の元来の特徴を共有し、本書は此の面に於ても同本系たることを語るものである。但し、d例の第二句の欠落二字「又」を本行とする点に微細な異同を見るが、転写上に於ける没意な本文化の結果と推測するのが自然であろう。

如上、蘆庵奥書本系の欠落本文を略々概括したが、更にもう一例筆者の看過するところがあり、次に例示しておくことにする。春部二三 作者名「大弐」を同系本中、国学院本・京都大学本の二本と本書とが欠脱していることである。その間の事情は判然とせぬことと共に此処に附言する次第である。

次いで、蘆庵奥書本系統に於ける独自異文とも称すべき本文であるが、各本間には転写過程か否かは判然とせぬが、微妙な差異を呈示している。本書は蘆庵奥書を誌さず、その意味に於て、該本系とは殆んど同文にして僅差にはすぎぬが念のため掲出しておく。即ち

1 家隆(綱ル同シ(朱))かもとより蛤(はを(朱))を・こすとて山吹を上にかさして書付て侍りける家隆(綱(朱))—ル二字ナシ(朱)　春部一六七詞書

2 丹波前司重房(ルノイ同シ(朱))の家にて女郎花をよめる　秋部四〇三詞書

3 九月十三夜殿下法性寺関白(ル五字ナシ(朱))にてよめる　同部五六詞書

5 せたのさと橋の駒ふみ朽るおほえこそ(ゝゝゝゝゝめル同シ(墨)み(墨))のなみたそおもかけにたつ—上欄ニ、せたのはしの馬ふみ、ト墨書

恋部上一〇八歌

6 皇后宮の弘徽殿におはしましける比細殿にて人に申けるに女房の上へのほるとて道(たはしはくらしとて(墨)ルおはしとて(墨))みくるしとてしはしとてと(ル同シ(墨)たイ(墨))

女官(房(墨))の申(立—ル同シ(墨))れは恋て殿上のかたへまかりけるを後に参りやするとまちけるにみえさりけれはかれよりをくり侍(ル同シ(墨))りける　恋部下一三〇詞書

とある。国学院本との間には、元来の本文は一・二語の異同をわずかに見出すにすぎぬが、5・6の例に看る該本朱・青筆傍書—本書墨書—には一部移写を欠く処も存し、両本の書写関係に疑点を呈するのも否みがたい。しかし、2・3の例に所見する群書類従本校合に於ける異同は、両本共に蘆庵奥書本以後の校異結果であり起り得べきこととし

て処理し得るものである。

更に、同本に例示した一例をあげると、

障本夫恋（ル隔（墨））
手枕をかけてしれはおろ人しみはやはひましねみつのかとより　恋部二九二詞書・歌
（ルノイ（墨））（ルシくけてゝくイ（墨））（おそろしみ―ル同シ（墨））（いやいひましね（墨）／はやはひましねイ―ル同し（墨））

と、元本文は当然同一であると共に、国学院本の朱・青両校記も本書は墨一色にして纔かに表記こそ異なれ全く同じくしている。殊更に附言すれば、本書に云う青筆書入れ―但し本冊は全て墨書―は入江昌喜とあるが、先々よりの課題たる昌喜書入れの拠って来たるところはやはり蘆庵朱・青書校記にあったのではなかろうか、と推測され、その転写関係をも想像せざるを得なくなるのである。猶躇いは払拭しえないまゝに敢て強誣した次第である。

本書の歌序、排列は既に記すまでもなく、第一・二・三類本系の基本の儘に、

㈠夏部三三・三五・三四・三八・三九・三六・三七・三〇、㈡同部　二六三・二六五・二六四・二六六、㈢釈教部　八九一・八九〇

の形態を襲い、蘆庵奥書本系諸本と全く同じくしている。

以上、巻第一～八迄の諸巻にみる本文・排列の特徴的概要であるが、煩述したごとく、蘆庵奥書本にあっては、何故か其の自筆奥書本と目せられる国学院本とは細微な点に於て不同し、寧ろ降っての転写本である斯道文庫本・京都大学本と、その点に共通する処が散見されるのである。

扨、次に巻第九・十、雑部両巻について誌すと、両巻も又、蘆庵奥書本と些少な異同を除いては、両書は同一伝本上にある。従って以下本集の歌番号を以て略記し、その異同当該箇処に限り附註又は例示することにする。該本文に

ついては国学院本解題中の掲出本文を参照されたい。

雑部上二四四 詞書中途一部欠落（国学院本等、以下略）―本書「ル」本朱補、同部上二三〇三第三句一部欠落―本書「ル」本朱補、同部上二三〇四作者欠落―本書同欠、同部上二三四作者欠落―本書同欠、同部上二三六作者「家通朝臣」（道イ（朱））存―同系中本書ノミ欠落、同部上二三九詞書後半欠落―本書墨書本行、但シ「ル」ト傍記、同本ノ本行化歟、同部上二四〇三下句一部欠落―本書本行存、同部上二四六下句一部欠落―本書「ときはかきはに（入日落字（朱））。物をこそ思へ」（ルかきは（朱））ト重記ス、同部上二四九歌一首青筆細補―本書以下同系諸本墨書本行トス

雑部下二五〇長歌中一部語句欠落―本書存、但シ、「身をも」トアリ、同部下二五二詞書・歌欠落―本書同欠、同部下二五六唱句詞書一部欠落―本書同欠

以上がその大概である。本書は国学院本に比し頼遠による群書類従本との比較的丹念な校合傍記を除外すれば、本書は雑部上二三六作者名を欠脱し、国学院本が同部上二四九歌一首を青筆細補―同書によれば蘆庵補校―するの二点が基本的異同となるのである。前者は附註したごとくに同系本では本書のみの現象であり恐らく書写者の書落しであろう。それに反し後者の場合は蘆庵令写自筆奥書本であれば、同歌一首を欠落し青書細補するとなると、同系諸本すべてが墨書本行とする点より推して解しがたい問題が提起されるのである。種々の想定は予測されるのであるが、従来の臆測の展開の一端として、該書はその元本とは疑しくやはり近辺の者になる転写一本ではなかったかと想像し、同歌は本来同自筆本には存し、以後の転写諸本のなかにとゞめられたのではなかろうかと思われるのである。

そのほか雑部上二三九詞書後半に於ける本書の墨書本行化は「ル」の附記が存して、同本との校合途次における余白に書き入れた偶々の結果ではなかろうか。「ル」符も又墨筆のまゝである。

又、他に散点する小異―雑部上一四六・同部下一五〇―なども厳密には両書の相違ではあろうが、転写の間の本行化と推測しておくことにしたい。当時の校訂として、例えば同部上一三六作者名・同部下一五六唱句詞書一部等、群書類従本に存する本文の看過など自然の結果として許容されたのではなかろうか、と思うのである。

更に、国学院本に於ける異文として掲示した一例も、此処に念のため挙げると、本書では、

伏見のやまさとにてあそひともをあるし(主ノ心(朱))のをかれたりけるか『たてこもりてねたりけるを』あそべなどかう(何(朱))では(斯(朱))なといひけるついてに(濁点朱附ス)―雑歌下一六三詞書

とあり、本文は『　』圏を附す書A本系第四類本には当該箇処を全て欠き第一類本以下本類の国学院本と殆んど同じくしている。たゞ、仔細に看ると、本文の小異箇処は国学院本に施したる朱校―傍点部分―の本行化にほかならない―該本参照―。該本に「朱如元本」とあれば、それは「元本」に忠実であったことを示すものであり、本書が文脈を辿り整定化したものであろう。又、該本の「あるし」(ひ(朱)本ノマ、(青))の場合も同様であり、青筆批点に従って無視する結果となったのではないかとも想像されるのである。その意味では国学院本は間々当を失する一面を露呈する点は否みがたいにせよ、「元本」に準ずる原則を遵守する方針を一貫しようとしたのであろう。本書の漢字傍記は国学院本には見えず入江昌喜か頼遠の附するところのものであろう。

両二巻は国学院本に於ては朱・青両筆共に其の校異する処はすくないが、その多くは右記のごとくに本行化するか墨筆移写している。例えば、該本にみる青筆集付は本書に於ては墨書移写するのごときが、それであり、該本よりの転写として推測せざるを得ないのである。

此の仮定をすゝめれば、国学院本に於ける纔かな朱筆校記はさて措き青筆校異に絞ると、先ずそのイ本傍記のそれ

をみると―例示は二・三例にとゞめるが、雑部上二〇三第三句「あさに屋と」(ちイ(青))(国蘆本、以下略)―「あさに屋と」(ち(墨)・ルする(朱))、同部上三四三第五句「わすれはてける」(つへきイ(青))―「忘はてける」(つへきイ(朱))、同部上二六八第四句「にしの宮人」(にと(青))―「にしの宮人」(にとイ(墨)ル同シ・本(朱))、同部上二四五第四句「さとなれし身の」(ぬイ(青))―「さとされし身の」(ぬイ(墨)つる(朱)ル同シ(朱))、と対比され、該本青筆「イ」本校異は―朱「ル」校合は除く―三四三の一例を除外して墨書移写している。

又、次の場合も雑部上に例示をとゞめるが、同部上三六三第五句「さへつくすなり」(ら歟(青))―「さへすらすなり」、同部上二四二詞書「……なかめやるかたにくわといふ木……」(は歟(青))―「……なかめやるかたにくはといふ木……」、同部上二九三第二句「わたのみさきを」(も(青))―「わたのみさきも」、同部上二四四第二句「さきいつるせ井の」(くひ歟(青))―「さきいつるく井の」、と該本批点・校異を殆んど其儘に墨書本行化している。

かゝる対比は本来全巻すべてにわたるべきものであるのが当然事であるが余りもの雑然なるを惧れて極く一部に敢て抑え掲げたが、両者の数例より推して、両書相互の関聯は前八巻同様に両書が共通祖本に縁由するのは言うまでもなく、猶更に両者の間は不離不即の緊密一体の関係より生じた本文交渉によるものであり、本文の類同性に起因するところと想定せざるを得ないのである。そして、それは詰るところ小沢蘆庵令写自筆奥書本に帰着するのである。上記縷述を重ねた同奥書本系諸本、又本書も含め、その理解を超える種々様々な異同の現象は転写の途上に於ける書写者の錯誤もさることながら、一種の校勘・校訂に伴う整定と過誤との相互作用に揺れ動くところの是認されるべき結果ではなかったか、と思われるのである。更に加えて訓詁注釈を前提とする校勘作業には附註・考証を経ながらに本来の本文は毫末な変化を随伴して現存伝本の本文を形成していったものであり、既に現在、其の原姿を辿るべくもないのが、其の実状ではないかと愚按するところである。

猶附言すれば、縷々として言及し来たごとく、国学院大学図書館蔵蘆庵奥書本が蘆庵による自筆の校合元本たるや否やの諸点が残される処に論拠の迂余と曲折の拙さを痛感するのである。翻って本書も両書不即一体の事実は想定し得ても、結句その祖本を同じくすると粗述するのほかはないのである。重ねて附言すれば、本書の拠って立つ原奥書も存せず、又、あるいはあるべき蘆庵奥書の不載は疑念として猶遺留されるのである。

備考

本書も又両識語に誌すごとくに朱・青両筆書入れが屢々散見される。本文傍記の校合書入れは既に上述したが、上眉欄外余白に寸記する釈義・考証の類いの附註は国学院本以下諸本のそれと其の大概を異にするものである。青書は識語に云う入江昌喜の附註である。もっとも第三冊—巻第九・十—の朱書は青色を誤りて移写したものであり、第二冊—巻第五〜八—は本文校異同様に全て墨書している。又、第一冊—巻第一〜四—は、青書→昌喜、赤書→頼遠、墨書→国蘆本、と大略することが可能である。但し墨書中、全三冊にわたる群書類従本の各冊・巻第次第・丁数表裏等の目安附記は別として、猶註者未詳の附註も瞥見される。此等附註の重層性を呈示するものであろう。しかも本書は加えて各々の書入れの再転写を主とするものである点、複合体としての取捨選択はもとより、移写時に於ける誤認、誤写、識別の混乱等も当然に推測されて判然としがたい処なども生じてくるのである。本文の変異も一面は書写者の釈義を通じての整定経過の中に意図されるものであれば、これら附註書入れも出来得れば多例を以て示すのが本来であろうが、徒らな煩瑣も一方に於ては避けるべきを思い、各冊より数例づつを掲示し、今後に類同伝本の顕出も予期されるところから、その参照の視点ともしたいのである。掲出の書入れのうち、国学院本と同一記述には「同」とし、附註者未詳には「未」と附記した。朱・青両書のものは上記のごとくに判断されたい。

第一冊

春部一　詞書　七十三代堀河院善仁（ヨシヒト）白河第二御子御母中宮賢子御在位二十一年（墨）―「未」

同部一七第二句　あしみはあしき道の略歟中巻ノ廿八葉（青）、同上　万葉集ニ馬酔木（アシビ）アリ（墨）―「未」

同部三七第四句　袖中抄いしみは畚と書かたみあしか躰の物也云云（青）

同部三第四句　なつなの初を歟初をの意にて初穂か三代実録には所鋳作之早穂二十文と鈔のうへにさへいへり（青）

同部一四八歌　四番山田頼遠云コノ一二三ノ次第ヲ以テ下ノ巻ナル顕昭ノ注ノ一二三ニ引合セテ見ルヘシ（朱）、国蘆本ニハ「九十七首有顕注内」ノ附記アリ、本書ハ同註次第ヲ本集ト照応セシモノナラン、該本ニハ上記附註ヲ全テ記スニ対シ、本書ハ此処一箇処ノミナルモ逆ニ顕昭註ニ歌序ヲ次第ニ従イ番号スル、単ナル暗合歟、両書ノ交渉歟

秋部四七七歌　ソテノコホコシタ共ニ稲ノ名也カブシ稲ノ実成（ナツ）テ傾ヲ云頗傾（カブシ）（墨）　日本記（ママ）宝「同」

第二冊

別離七四〇歌　よろこひをくはへてと云に加賀をもたせたる歟（墨）

同七四九第三句　とふとりのは飛鳥井を書誤たる歟（墨）

悲歎部七九二歌　袖中抄ニ此哥ヲ催馬楽ト云ヘ　此哥ハ父経信死別ニテノホルトテヨメリ（墨）―後半「同」

同部八一〇第三句　そひ舟は和名鈔云艇ハ小船也釈名ニ云一二人所乗也遊艇ハ和名ハシフネ是ハ今云テンマノ類大船ニ添故そひ舟歟（墨）―国蘆本「そひ舟」ト朱書シ註項目トス

同部八四六歌　昌喜ニ云蜻蛉日記ありとたによそにても見ん名にしおはゝ我にきかせよみゝらくのしまといふをせ

うとなる人きゝてそれもなく〳〵

いつことかおとにのみきゝみゝらくの嶋かくれにし人を尋ん　かくあれは今ノ一二ノ句は写誤成へし　可為袖中抄正（墨）―「同」

釈教部九七一歌　万十一アマトブヤ軽ノ社ノイハイツキイク世マテアランコモリツマソモ

此哥によってよまれたれは軽ノ社と有へきや写誤歟（墨）―前半「同」、契沖本本行略同存

恋部上一〇六九第一句　袋草紙云公実卿ミツノウミノ之字ハオソロシクモオケルモノ哉後世ハ難置字ヲト云云（墨）

第三冊

雑部上一三九第三句　入曰和名小辛螺仁之小辛ノ字にからみ有事知へし　一名蓼螺是もからき□□なるへし―（朱）―国蘆本「○にしノ貝」ト朱書シ、註項目トス

同部一三七六第四句　入曰椎ヲ誣（シュル）にそへてそしらぬ人はあらしとよめる歟（朱）

同部上一四一〇第二句　入曰尓雅ノ疏ニ云楊一名ハ蒲生沢中可為箭笴云〻是ニ拠に本朝の古へも箭笴と〔せしより〕ヤノキと訓せしかノとヤ通（カヨ）フされば〻やきと有も柳か（朱）国蘆本「○やきのはひえ」ト朱書シ、註項目トス

雑部下一五六〇詞書　入曰独楽和名古末都玖利宇治拾遺にこまつふりといへり（朱）―国蘆本「○こまつふり」ト朱書シ、註項目トス

雑部下一五六四詞書　入曰巧婦和名太久美止里俗ニヨシハラ雀（朱）―国蘆本「○たくみ鳥」ト朱書シ、註項目トス

連哥一六〇五和句　入曰馬把ハ和名宇麻久波作田具也漏棲和名上同銕歯把ノ名也（朱）

連哥一六〇九唱句　○痩牛（キイ）ヲいほうしりと云　「馬ヲハ螳螂ト云」貞丈雑キニ引　螳螂廿匹云〻尺素往來六ウ。出法師落書卅オ里坊ナル螳螂（墨）―当該項ノミ墨書シ「入曰」ナシ、或ハ頼遠ノ附註歟

以上、その書入れの部分的例示であるが、その大凡は推測しえようかと思われる。上述したごとくに重層的な加註形態をとり既に加註者の何人たるやも判じがたい処々も散見するのである。就中、中冊は全て墨書たるにより、八四六歌註―「昌喜ニ云」―とあり、国学院本「同」とある以外は昌喜註か頼遠註かは又当然認定しがたい。しかし全三冊通じて其の過半は入江昌喜の施したところのものであろう。

又、此処で留意されるのは国学院本との同文註記であり、下冊に附記した該本に朱書する附註項目の一致などをも含めての蘆庵令写奥書本との密接な交流である。其処にも又本文同様に不離不即の関聯を想定せざるを得ないのである。更に蛇足すれば纔か上例中にも後の村上忠順の本集標註にも所引するところもあり、その深き典籍交流の形迹が偲ばれる。

穂久邇文庫蔵　安永八年小沢蘆庵令写校合奥書本　　存十巻・附頭昭註

袋綴、三冊。縹色布目表紙、竪二十七・三糎、横十七・五糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十・二糎。毎半葉行数は巻第一より巻第八迄九行、巻第九・十両巻十行に和歌一行書き、詞書略三字下げに書写する。

外題、表紙左肩に「散木和歌集　上(中・下)」と別筆後補している。

内題、「散木奇歌集(棄(朱)寄(墨))。巻第一(〜巻第十)　春部(〜雑歌下)」と記し、巻第二・三・六〜十には「棄」「寄」の傍記を欠き、巻第四は「奇(和)歌集」と傍書している。「奇(和)」の記は国学院本のそれと符号する。又、巻第傍記の「。(巻)」は巻第六〜八は傍記を去り、巻第九・十両巻は本行としている。

部立表記は、四季部、祝部・別離・旅宿(羇旅部本行同)契、悲歎部・神祇(ナシ)部(朱)・釈教、恋部上(下)、雑部上・雑歌下、と書写

され、蘆庵奥書本系とは、「旅宿」(羈旅部)「神祇部」(ナシ)の両部表記を本行、校異、と相反し、寧ろ校記を除けば第二類・四類本系と同じくしている。しかし、一方巻第十部立は「雑歌下」と記し蘆庵奥書本のそれである。

本書各巻の本文墨付は、

第一冊九十四丁　春部二十八・夏部二十二丁・秋部二十九丁・冬部十五丁、第二冊八十六丁　祝部・別離・旅宿十五丁・悲歎部・神祇・釈教三十八丁・恋部上十七丁・恋部下十六丁、第三冊九十一丁　雑部上三十丁・雑歌下二十八丁、頭昭註三十三(同註奥書并びに本集奥書一丁)

である。巻第一より巻第八迄は既述諸本と異るが、巻第九・十の両巻は斯道文庫本・京都大学図書館本と全く一致し、且つ各巻の行数と共に一行字詰めも略同一であり、此の両巻は**斯・京蘆**本との関聯は極めて密なるものがある。

本書の奥書は、まず巻第十雑歌下の末に、

右散木奇謌集以織部正乗尹本校合了(青)

とあり、群書類従本の校本記を誌し、同本との対校を示している。

次いで、諸本同様に、頭昭註奥書—前掲—を挙げ、同裏半葉に蘆庵奥書を記している—前掲、本書も国学院本記中「詵讃岐守美」を「詵讃岐守宗美」とす—が、その前余白に同じく国学院本以下に見える同文の俊頼略伝を細補し、更に右記の群書類従本校合の記を再掲(青)している。これは東大図書館本前遊紙裏の記と類同している。その校記の再掲に就いては後述する。又、巻第一・巻第九の両巻第下の識語(イ)・(ロ)は共に書写されているが、既述したごとくに(ロ)は

自是以下依無他本以所書写之元本／校合更得異本可再校也(青)

と、傍点部分を異にしている。その真偽はともかくとして識語の文意は更に明らかにしている。

本書の書写年代は既述蘆庵奥書本同様に江戸も末近き頃であろう。

印記、各冊第一葉巻頭に「□氏／蔵書／之章」方形朱印を捺している。

扨、本書の本文に就いて要約すると、本書は巻第一より巻第八迄と巻第九・十の両巻并びに顕昭註は各々その伝本系類を異にしている。先にその書誌にて記したごとく前者の行数九行に対して後者のそれは十行と変り且つその手跡も明らかに相違して各々別時別者の書写になる補配本である。たゞ全巻に亘る同筆の書入れより判断するに、本書の所持者は前八巻の手沢の後、欠巻二巻を補うべく蘆庵令写奥書本を以って補綴すると同時に、該書との校合を施し、併せて其の書入れ・校異をも移写したものと思われる。更に加えて自説を補捉し、巻第九・十両巻には蘆庵本系に看る群書類従本校合の不備を補うべく入念に追校したものと推測される。後述備考にその書入れを掲示したが、その記中に屢々「隆璉按」、「隆按」の記名を見る。隆璉は恐らく富士谷御杖門の榎並隆璉―弘化元年五月二十五日没―のことであろう。いま俄かに断定しがたいが、巻第九・十両巻・顕昭註の補写筆跡は全巻にわたる右記の校合・書入れ・追補等の筆跡と近似する印象があり、而も耆老枯槁な感をとゞめ、或は隆璉その人老晩の書写になるかとも臆測される。猶精査を俟つことにする。

ともかくも、本書は両筆の合綴本であり、その前八巻は後述するごとく本集第二類本系の伝存本に拠り、後両巻・顕昭註は蘆庵令写奥書本を以って構成した一種の補配取合せ本である。蘆庵奥書を附載し同両巻が同じくするにより本系類上に並記したものにすぎない。本来第二類本系一本として述べるべきであったかもしれない。

従って、先ず、巻第一～八の本文につき、以下に本集第二類本に顕れた諸特徴に照し対比してゆくことにする。第二類本系神宮文庫A本解題―前輯―に掲げた一覧表と該番号を踏襲し、念のため其の本文を掲出する。

1 返（書A）春部一三詞書　本書ナシ、神A・志A・忠・江・野本ナシ、国蘆本存

2 はしかきにさとをはかれすとかけり　同部一八七左注　本書細補、神A・志A・野本ナシ、忠・江本細補、国蘆本細補

3 おくにあまのおふねもとかけり（書A）同部一八八左注　本書ナシ、神A・志A・野本ナシ、忠・江本細補、国蘆本細補

4 宝 夏ころもたちきるけふのしらかさね　下句無本しらしな人にうらもなしとは　夏部一九四歌　本書細補、神A・志A・野本下句ナシ、忠・江本等下句存、国蘆本存

5 もろともに今そなくなるほとゝきす　無本八こゑの鳥はおのかつまかは　同三六歌　本書細補、神A・志A・忠・野本等下句ナシ、江本同細補、国蘆本存

8 同所にてとふ人もなき旅の　すみかに霧降ふたかりて　いふせかりけるに……後略……　秋部四三詞書　本書細補、神A・志A・忠・江・野本傍記ナシ、国蘆本細補

9 ……前略……朝夕の御いとなみとなんみえし。この。　ことにたつさはれる人をは。そのむしろにめしてもて　はやさせ給ひ……後略……同五〇四小序　本書細補、神A・志A・野本傍記ナシ、忠・江本存、国蘆本存

10 秋の山の月をみるといふ事を　同五三八詞書　本書細補　神A・志A・忠・野本傍記ナシ、江本細補、国蘆本細補

11 家道朝臣（書A）冬部六五八作者　本書ナシ、神A・志A・忠・江・野本ナシ、国蘆本「家道」細補

14 経兼　同七四六作者　本書細補、神A・志A・忠・江・野本ナシ、国蘆本細補

15 藤戸 ふちとゝ云所にとまらんとしけるに　追風吹なんとすまた日も高しとてよらて過けれはよめる―んニ「ナシ」、またニ　旅宿七六九詞書

「ナシ」校記
本書細補、神A・志A・忠本傍記ナシ、江本細補、野本存、国蘆本細補

16 例ならぬ人の舟にあるかくるしかるときゝて（そひ舟にのせうつすとて―朱書也、契本、とてニ「きゝて」ト校記）　悲歎部八一〇　本書細補、神A・志A・忠・野本傍記ナシ、江本細補、国蘆本細補

17 君こふる涙の滝におほゝれてふりさけ（さけ我）ふ声はきこゆや（同也）　同部八四四歌　本書細補、神A・志A・野本傍記ナシ、忠・江本存、国蘆本細補

19 人はいさ光のすちをしる（ママ）そともおなし仏やしらはしるらん　釈教八九三歌　本書細補、神A・志A・忠・野本傍記ナシ、江本細補、国蘆本詞書・歌共ニ細補

21 そのほとゝおもひかたきはよものの海にそこひもしらぬ心なりけり　本行不違　同部九三六歌　本書細補、神A・志A・忠本傍記ナシ、江本細補、野本存、国蘆本細補

22 もろ〳〵の花くさ〳〵に咲みたるといへる事をよめる　此詞哥ともイニナシ
そこはくの花のひもとく庭の面におしのけたるは蓮なりけり　同部九五八詞書・歌　本書細補、神A・志A・忠本傍記ナシ、江本細補、野本存、国蘆本細補

23 おんな（書A）恋部上一〇〇八作者　本書ナシ、神A・志A・忠・江・野本傍記ナシ、国蘆本同ナシ

24 みすきといふはつくしのふのかとてなり（書A）　同部一〇三九左注　本書ナシ、神A・志A・忠・野本傍記ナシ、江本細補、国蘆本同ナシ

26 あさましやこはなにことのさまそとよこひせよとてもむまれさりけん　恋部下一二三六歌　本書細補、神A・志A・忠・野本傍記ナシ、江本細補、国蘆本細補

27 海路恋　同部二六〇詞書　本書細補、神A・志A・忠・江・野本傍記ナシ、国蘆本同ナシ

と、本書の欠落又は細補本文は、既表一覧―神A本―二十八例中、その二十例を類同するのである。二十例のなかで細補する十六例も本書元来の欠落箇処であり、他本による校合のあとであろう。そして、その対校伝本は恐らく蘆庵奥書本系の一本によるものが過半であり、その他二・三は―例えば2一八七左注・8四六三詞書・27二六〇詞書―群書類従本によっての校異であろうかと推定される。というのは随所に施される校合傍記、又附註書入れ等を蘆庵奥書本のそれと殆んど同じくするからである。云うなれば、本書蘆庵奥書は巻第一～八に限っては対校本奥書を示すものであったわけである。そして、不備の両巻―巻第九・十―を補綴するに蘆庵奥書本を以ってこれに充て、更に巻第一～八の第二類本系の書写本に対校し又同本の朱青の校異・書入れを移写して成ったのが本書の経由であったかと推論されるのである。たゞし、現在の書写状況よりみると、本書の書写過程に於いてすべて逐次補筆されたとみるよりもやはり、その一部は本書の依拠底本本来のものを含むものと考えるのが自然であろう。しかし当該本は管見するところではない。

それでは、この巻第一～八の第二類本系での位置について言及すると、上表にて判明するごとく、同類㈠神宮文庫A本・志香須賀文庫A本とは―該本解題参照―

6―夏部三三詞書、7―秋部三七二歌、12―冬部六七歌、13―別離七四一作者、18―釈教八七一歌・八七二詞書、20―釈教九一八歌・九一九詞書、25―恋部上一〇六〇詞書、28―恋部下一三二詞書・歌

の八例を相違し、その間稍々逕庭が存する。上表にかぎってみれば、同松平忠房旧蔵本・林羅山旧蔵本とは4・9・17の三例、同類㈡野口道直旧蔵本とは15・21・22の三例を各々異同するにとどまり一見隣接するかのごとくである。しかし、両者の間にも上表とは別に異同が散見するのである。

先ず、林羅山本解題の中に列記した神宮文庫A本に存し同本に欠脱する本文十一例―同解題九十七頁参照―は、即ち、

1—春部一〇二歌、2—夏部二五九詞書・歌、3—秋部五八詞書一部、4—別離七四一詞書・作者・歌、5—悲歎部七二歌、6神祇八六一作者、7—釈教九一六歌・九一七詞書、8—釈教九二〇第五句、9—恋部下一三〇二歌・一三〇三詞書、10—恋部下一三七歌・一三八詞書、11—恋部下一三八歌

である。この多きに亘る欠脱は本書には全て存し、その隔りは否定しがたい。因みに忠房・羅山旧蔵本書名は「散木弁謌集」とあり相異るものである。

一方、野口道直旧蔵本は書写年代を異にする取合せ本—巻第一～四（第一手跡）・巻第五～十（第二手跡）・頭昭註（第三手跡）—であり、比較の対象としては稍々難があるが、本書との対比に於ては右記三例のほかは顕著な例としては次のごとくである。

野口本は同解題で誌したごとく、巻第一～四の第一手跡巻の本文は神宮文庫A本に近似している。本書はその点では野口本と同じくし、神宮文庫A本に欠く6夏部三三詞書後半、7秋部三七三歌、12冬部六六七歌を共に収載し、同本文系に属する。しかしながら、野口本第二手跡の中にある巻第五～八の四巻には本書に存する次の三例の欠脱を散見するのである。本書本文を挙げ当該部を附註する。

九品経生（往）経文十二光仏

何にかはかけてと程（し）をしるすへきあふはかりなき光と思へは　釈教九七詞書・歌　野本欠、国蘆本系存

仏の御身の色こかねの山のことしといへる事をよめる

時雨つゝ色つく山の木のまより出る日影によそへてそみる　釈教九五詞書・歌　野本欠、国蘆本存

かへし

岩くゝる滝のうはへはこほれ(る)とも□□(とゝ)ろきおちむ程はたえせし　釈教一〇四七詞書・歌　野本欠、国蘆本存

右三例は同解題で既述したごとく本集伝存本中にみぬところであり、野口本の誤脱であろう。しかし、纔か三例にすぎぬが、やはり本書との間には明著な異同を加えるのである。

如上、本書と林羅山旧蔵本系及び野口道直旧蔵本との対比の概要であるが、両本文系統とも相異る―共に両本文系の誤脱であれ―一面を見出し、第二類本系の複雑性を呈示しているが、本書巻第一～八は、その基本には第二類系の伝本上に位置するものである。

又、上表中に蘆庵奥書本系を代表する国学院本本文の存否を附註したので、此の場を借り一言附け加えておくことにする。上表に関する限りに於ては第二類本と蘆庵奥書本との相違は、1―二三詞書・4―一九四歌下句・5―二三六歌下句・9―五四小序、の四例を看取するにすぎず伝流上に於ける両系統の緊密な交渉経過は充分に推測されるのである。両系の区々たる本文語句の類同的特徴も又一面否定しがたいものがある。しかし一方、蘆庵奥書本系に看る第三類本系の基本的本文構成は言及するまでもなく本書を除く既述の諸本に照し明らかであり、両系を類別しているのである。が、此の両相矛盾する両面性は永い伝写上の経由に伴う本文混淆化の結果として分岐されたことは予測されるのであるが、現存伝本上に於ては其の道筋は辿るべくもないことを附言しておきたい。

次に、本書に看る第二類本系としての異文数例は松平忠房・林羅山旧蔵本系と極く纔かな小異を除き近似するので省略―同解題参照―し、此処では上記第三類系本―主に岸本由豆流旧蔵本―に掲出した所引例の中、比較的異同あるを以下に数例挙げることにする。即ち、本書には

1　家綱(隆イ・同)か本より蛤(はお)をこすとて山吹をうへにかさして書付て侍る(りける)。　家綱(ナシ・契同・イ隆)　春部一六七

3　九月十三夜殿下にて法性寺関白読る　秋部三六詞書

5　せたのさとはしの駒ふみ朽めをほえそこの涙そ面影にたつ　恋部上一〇八歌

7　君かふとゐのかるもよりね覚してあみけるぬたにやつれてそおる　恋部下一三三歌

8　我を君心のまゝにすかしまのことをなつみの恨てそゆく　同部下一三九歌

9　手枕をくけてゝくれはおそろしみはやいひましねみつのかとより　同部下一一九一詞書

とあり、本書にみる右傍記校合は蘆庵奥書本系と群書類従本との校異である。又、左傍に私に附した。圏点は同本との異同を示し、第二類本系―忠・江本―との類同を示す本文である。些少な例示ながらに前記同様である。その他随処に見出す語句上の異同は例示し得ぬほど夥多に及ぶが第二類本系の本文と略類同するのが殆んどである。

又、此の当該部八巻の歌序・排列は第二・三類本系は共に同じくし、

㈠夏部　二三三・二三五・二三四・二三八・二三九・二三六・二三七・二三〇　㈡同部　二六三・二六五・二六四・二六六　㈢釈教部　八九一・八九〇

の三例を見出すのみである。

以上、本書の第二類本系としての大概を縷述したが、猶以下のごとき書写の際の誤脱か或は其の依拠本の欠脱か、本集伝存本すべてに載録する次の二首の欄外細補、又例示一・二例のごとき同細補が散見される。その二首は

こきもとれ見てもしのはむ夕されは生田のもりに木のはちる也　冬部五六歌

をやみせぬなみたのあめはかゝれともきにはとまらぬものにそありける

きにはをいてゝまかるに追風たちてはしるによめる　悲歎部八〇三歌・八〇四詞書

である。その他細補傍記には、

法性寺の花さかりと聞(无)て人々あまたくして侍ける人々は花のもとにあそはれけれは……後略……　春部六三詞書
（見ありきけるに柳の木のもとにゐてはへりけるに）

堀川院御とき所泉(衆)共の哥よみけるに遠行(本行同)にかはりて松樹契久。（といへる事をよめる）　祝部六七詞書

のごときである。前者は単なる目移りかと想定されるが、後者のごときも間々所見され、その判別を困難にしている。

概して本書の本文補入・校合は不分明な校異本文の傍記にとどまり、その主たる蘆庵奥書本校記の移写たるか、或は群書類従本のそれかは各々相対照するのほかなく、その他に爾後の「隆按」のごときも加り、かなり錯雑化している。例えば前掲の「遠行(本行同)に」―祝部六七―の「本行同」は蘆庵奥書本の本行を示し、「めを覚(さましつゝイ)しつる(本行同)」―旅宿七六第五句―の「本行同」又「イ」は群書類従本の各々本行・校異である、等々既に判別しがたい。当時一般の校合が本書の依拠本に施されていたのであろうか。

本書、巻第九・十の両巻に移ると、上述したごとく、斯道文庫本・京都大学図書館本と各巻丁数・行数、一行字詰め―一・二字次行に移るところもあるが―は全て一致し、両三本相互の転写関係は猶認められないにせよ、同一伝本を源とするものである。

その両巻の本文は言及するまでもなく、蘆庵奥書本にあっては前記二書、特に斯道文庫本と同じくする。そして同本と国学院本との些少な異同は同解題に掲示したごとく纔か二例にすぎなく、その中の一例、雑部上三四作者名「永縁」は斯道文庫本と同様に書写されて、余の一例、雑部上二四九歌「我か身は云々」一首も又斯道文庫本に存し一致する。同歌は国学院本独自の欠脱歌―但し青筆細補す―であり、他本共通する載録歌であって巻第九・十両巻に於ける同本とを劃している。

その他、本書の書写上に於ける微細なる語句上の異同は―斯・京蘆本共に―此の伝本間にも存するが、それは又已むを得ないことでもあろう。両巻に於ける異文一例としてあげた雑歌下一六三唱句詞書も傍記一・二字の存否の相違にすぎないのは同様である。

しかし、本書には顕昭註奥書余欄の追補校語に加え更に群書類従本との同校合記を再記していて、此の両巻に於ける該書との校異は他本、国学院本に看る同書対校に比しても詳密となっている。他本の不備をあらため補うにより此処に重記したのであろう。その校合傍記には蘆庵奥書本元来の朱青校異と区別しえず判然としがたい嫌いはあるが、次のごとく蘆庵奥書本の欠脱を細補している。国学院本解題に書陵部A本を以て掲示したので、以下略記すると

(イ)雑部上三四詞書一部、(ロ)同部上二三〇三第三句、5同部上二三四作者―但シ、本書本行存、(ハ)同部上二三九詞書後半註、(ニ)同部上二四〇三下句、(ホ)同部上二四六第四句、(ト)雑歌下一五三〇長歌一句、(チ)同歌下一五二詞書・歌、(リ)同歌下一五六詞書一部―

附記　(イ)・(ロ)……5等略符ハ国蘆本解題中、私ニ便宜上施シタモノデアル

のごとくである。蘆庵奥書本系に共通して欠漏する雑部上2二三〇四作者名「阿闍梨」は群書類従本も同様に欠落するにより校異は細補されていないのであろう。

いさゝか煩累にわたったが、本書は第二類八巻本系と第三類本系二巻―実は第四類本系と称すべきか―との変則的な相互補綴がしからしめるところに系統のみならず、本文末端にまでおよぼし、更に加えてその転写・校合が本書をして錯雑化せしめている。此の期、一般の校合書写本の姿を、それは示すものでもあろう。

備考

本書の書入れは上掲諸本相互に独自の追補等が散見されるが、その基底は諸本同じくし、朱筆の契沖本系からの移写と青筆の蘆庵追記とからなる。従って、第一・二類本系に共通して散見した次の万葉集引歌三首も当然諸本に傍記されている。本書には

1　万葉引哥　万ニ引哥　石見ノウミウツタノ山ノコノマヨリワカフルソテヲ袖イモミルランカ　春部七一歌　諸本存

2　万云　アラタマノストノ、サキメニヨリ竹カキアメニヨリリイモシエスハワカユヒメヤモ　夏部三五四歌　斯・東・京蘆本存、国蘆本欠

3　タマシノコスノ寸鶏吉ニイリカヨシキネタラチネノハ、カトテヤトカセトマウサン（ママ）—以上見セ消チ、上欄ニ

万十一三丁ウ玉垂小簾之寸鶏吉仁入通来根足乳根之母我問者風跡将中（タマダレノ ラスノ スケキ ニ イリカヨヒコネ タラチネノハ、ガトハサバカゼトマウサン）　恋部下二七五歌　諸本存—但シ仮名書

と細書している。たゞ2の記が国学院本にのみ不載であるのは不審である。此の辺にも同書の蘆庵令写校合の元本たるに疑点を残すのである。

又、本書には「隆璉云」又「隆按」として次のいくつかの書入れがある。

古俳諧　よみ人しらす　思ふてふ人のこゝろのくまことに……以下省略、国蘆本備考8ニ掲出ス……

の書入れにつづき、

『散木旅　をしめともあかしの浦にてる月のおもひくまなくかたふきにけり

後拾遺雑二　をとこのへたつる事もなくかたらはんなといひ契ていかゝおもほえけんひるまにはかくれしつへくなといひ侍ければ　和泉式部　いつくにかきてもか（ママ）。れんへたてつる心のくまのあらはこそあらめ

源氏総角にむなしく成なん後の思ひてにも心こはく思くまなからんとつゝみたまひてはしたなくもえおしはなちたまはす

当集恥運哥　世中は思ひくまなき物なれやたのも身をしもいとふと思へは』

隆璉云思ひくまなきは今俗に思ひやりのなきといふことにおなしさるは人より思ひやりてこれはかくあらんとおしはかる隈のなきといふ事にて右の心のくまとよめるとはことさまなる辞也思ひくまなく人のなりゆくといふ哥は上の句思ひくまをいふへき序のようにいひ出たる也又按におもひくまと心のくまとは用ひたるさまうらうへになれりこれは彼とこれとのけちめによる也よく考へし心のくまといふ時はくまありてうちとけぬかたのやうにいひ思ひくまといふは其人の思ひにけむと考へみる所をくまといふにて。そのなきはあしき方也いひなれたる辞のおのつからそのすちにきゝなさるゝなり　秋部四三　但し散木集以下当集恥運哥迄即ち『　』圏内は東京大学図書館本ニ存

隆璉云上ノトハ帥ノ北方ヲ云ナルヘシ行宗卿ノ姉妹ナトニテヤ有ケン考索スヘシ　別離七三〇詞書

隆璉云和名抄棖爾雅注云音唐和名保古多知弁色立成云戸類　門両旁木也　今按舟ヤカタノ出入口ニタテル木ヲモホコト云ニヤ舟ニアタル波ノ此木ニカヽル雫ヲ云歟菅絃ノ狛鉾ナトニ思ヒ合テ父卿ノ音楽アリシ「ナト忍ハレタルニヤ　悲歎部七九第二句　本書「ほこの雫に」トアリ

古事記下ノ巻　斯本勢能那袁理袁美礼婆云々ナヲリハ波折ノ略ニテ波ノ高クタツヲ云ナコロハ経緯ノ音ヲ通ハシテ後ニ云転タルニテナヲリトアルト同辞ナルヘシ　隆璉按　同部八二詞書・第一句

隆云何事ニヨラスノ意ニテヨクキコエタリ　釈教九〇九詞書

隆璉按けぬもせてはきえもせての誤歟　同九四三第三句

等が散見される。その手跡は榎並隆璉との照応を見ぬので確認しえないが、前述のごとく前八巻の手沢と後二巻の補写のあと、蘆庵奥書本系の書入れに自ら補註したものではなかろうかと想像されるのである。

本集の釈註は村上忠順の標註以前には部分的にせよ極めて纔かであり、更に隆璉附註かと推測される本書独自の主なる書入れを以下に掲出して参考に供することにする。

革堂　拾芥抄云号行願寺八尺千手行円上人云々　百錬抄云寛弘元年十二月十一日皮聖供養一条北辺堂行願寺是也件上人不論寒熱著鹿皮号之皮聖人云々　春部三〇詞書

古事記中巻　神武天皇段　伊知佐加紀微能意富祁久袁

本居氏云今近江の彦根のあたりにて知佐加能といふ木あり是なるへし尾張にては志良者気(シラシヤケ)美濃にては毘者加紀(ビシヤカキ)といへり黒く小き実の甚大くなる木なれはおほけくの序によく叶へるといへり　以上　田中道麿説

此説宜し其木は和名抄に柃漢語抄比佐加木とある是也今も比佐加紀といへり伊勢にては微佐加紀(ミサカキ)とも毘者許(ビシヤコ)ともいふ北国にては此木を佐加木と云とそ何処の山にも多かる木なり下略　春部一七九第四句

赤坂　神護寺縁起云四至南限赤坂東峰菖蒲谷幷素光寺北峰　土人云平岡八幡宮鳥井前谷也俗云長刀坂　悲歎部八三五詞書

史記云　斉王冏辟張翰為大司馬東曹椽因秋風起思呉中菰菜蓴羹鱸魚鱠曰人生貴適意何能羈宦数千里要名爵乎遂命駕帰俄而冏敗人謂見機　恋部上二三第二句

韓非子云　楚人和氏抱其璞哭于楚山之下王使玉人理其璞得宝焉遂名和氏璧　同部二三歌

万葉第十九　礒上之都万麻乎見者根乎延而年深有之神佐備尓家理　注未考得樹名云々　恋部下二四〇第四句

万第十九　天雲ヲホロニフミアタシナル神モケフニマサリテカシコケメヤモ　同部下二四三第二句

漢書賈誼伝云前車覆(ノルハ)後車戒(メ也)　同部三三歌　等々が偶目されるのである。

註　当該部分は一行字詰も斯道文庫本と同じく、

契りしことゝもをわすれにけるにやことさまに思ふなり

と二行に書写されているが、本書は上記二行目文末の下、余白に稍々小字にて「にけりときこゆる人のかりつかはしける」と―群書類従本同文―書継がれている。他の細補に比し字もわずかに大ぶりにも見え書継ぎが処を得ているため、本書元来の本文とも考えられる。原本照合の機会を得て確認したい。ほか蘆庵奥書本はすべて此の末尾を欠いている。

第二類本系　補遺㈠・㈡

補遺一

岡山大学附属図書館蔵　寛延二年業合賢豊写　自第一至第八

袋綴、一冊。黄蘗色表紙、竪二十三・三糎、横十六・八糎。料紙、薄手楮紙。字面高サ約二十・五糎。毎半葉十二行に和歌一行書き、詞書三～五字下げに書写する。本文墨付き、全百二十三丁。虫損稍々多し。

題簽、表紙左肩に斐紙短冊を貼付するも外題を誌さず。

内題、「散木奇歌集第一（～八）　春部（～恋部下）」と記し、第一・二・四類と同様に、第三類諸本に見る「巻第」の「巻」字を闕いている。部立表記も上記の系類と同じくし、四季部四巻、祝部・別離・旅宿一巻、悲歎部・神祇・釈

教一巻・恋部上下二巻を以て構成している。又、本書の前遊紙にも、「目次」として前記部立を三行にわたり略記している。

書写奥書は、

寛延弐己巳年夏五月中ノ四日

業合賢豊謹書

と記す。寛延二年の書写本と判断される。筆写者業合賢豊は岡山邑久町上寺山の郷社北島寺の宮司、第四代目にあたり、文化二年に没す、江戸末国学者業合大枝の祖父にあたるという―岡山大学所蔵「業合文庫・塩合文庫目録」解題―。右前遊紙に本書寄贈者「業合隆雄寄贈」印が捺されている。同家十代の孫と同目録の系譜に誌されている。大枝編著と共に同家襲蔵書の寄贈一書であろう。

本書は前輯第二類本諸本解題の刊行後、偶々閲覧の機に恵まれ、その調査の結果、以下に誌すごとく誤脱又稍々特異なる一面を併せもつが、本来の基底は第二類本系の一本と判断されるにより、此処に補遺として附載するものである。

扨、本書は其の第二類伝本の中にあっては就中〔近世初〕写神宮文庫A本に最も近似、類同するところが所見される。従って前輯㈠に於て掲示した該書の本文異同・特異性等の番号を襲い言及してゆくことにする。但し、必要に応じ附言・附註し、本書との関聯を示すものとする。

先ず、神宮文庫A本の一覧㈠に於ける本書との異同を照応すると

1 春部二三詞書―両書欠（以下両欠ト略記）、2 同部一六七左注―両欠、3 同部一六左注―両欠、4 夏部一九四詞書尾部・歌

下句―両欠、神A本「下句無本」、本書「下句本ニ無シ」ト附記ス、5 同部三六下句―両欠、神A本「無本」、本書「下句本ニ無シ」ト附記ス、6 同三三詞書尾部―神A本欠、本書存「……涼といへる事を」トアリ、7 秋部三七三歌―神A本欠、本書存「秋きてはしのひ(ママ)あへそと思へはや風音信て暮かゝるらん」トアリ、8 同部四六三詞書中途―両欠、9 五〇四小序中途―両欠、10 同部五三八詞書―両欠、11 冬部六五八作者―両欠、12 同部六六七歌―神A本欠、本書存「衣手の寒行まゝに神なひの三室の山に雪はふりつゝ」トアリ、13 別離七四一作者―両欠、14 同七四六作者―両欠、15 同七六九詞書後半―両欠、16 悲歎部八一〇詞書後半―両欠、17 同部八四歌第四句―両欠、18 釈教八七一歌・八七三詞書―神A本欠、本書存「君か為かける御法のみつくきに我身をさへもすゝきつる哉／神力品の心をよめる」トアリ、19 同部八九二歌―両欠、20 同部九一八歌・九一九詞書―神A本欠、本書存「あしさまのことのゆかりはおほかたのみゝのつてにも聞へさりけり／其国に生ぬる人はむかしの事を知さとりを得てそのかみの事を知るといへる事をよめる」トアリ、21 同部九三六歌―両欠、22 同部九五八詞書・同歌―両欠、23 恋部上一〇〇八作者―両欠、24 同部一〇三九左注―両欠、25 同部一〇六〇詞書―神A本欠、本書存「経年恋」トアリ、26 恋部下一三六歌―両欠、27 同部一六〇詞書―両欠、28 同部一三一詞書・歌―神A本欠、本書存「恋の心をよめる／恋すとて身のけしきたにかはらすはいわぬに人のあやめ(ママ)しやは」トアリ

と、以上のごとくである。神宮文庫A本の例示二十八例中、七例―即ち6・7・12・18・20・25・28―の異同が存し、本書は必ずしも該本と欠落本文を同じくするものとは云いがたい。且つ又、上記異同に於ては第二類諸本は本書同様に此の略七例等も見出され、その点では一見該本以外の第二類本と類同するかのごとくであるが、当該諸本解題で述べたごとくにやはり神宮文庫A本に最も近似するのである。

その類似例のひとつを挙げると、夏部三六番は、

ならの歌合に人にかわりて時鳥をよめる

墻根時鳥

時鳥初音は空にとまらねとわかぬ名残に詠めつるかな

と、次詠三七詞書「垣根時鳥」と重複し書写している。この題詞の書き様は第一類契沖本系[註一]と第二類本では神宮文庫A本、同転写本志香須賀文庫A本にのみ所見する異形な本文であり、その間を繋ぐものは単なる偶然とは考えられず、上掲の類同性より推して神宮文庫A本系とのかゝわりを想定せざるを得ないのである。

しかし、一方本書には殆んど類例を見ぬ以下のごとき欠落本文が散見されて、近世後期の伝本とは云え、書承の錯雑さが想われるのである。その欠落本文を書陵部A本を以って掲出することゝするが、部分的欠落本文については、本書本文を挙げ、当該本文を同A本を以って細補傍記した。

1　深山桜といふ事をよめる

山桜谷ふところにこかくれて風そよめきて花もとむなり　春部八三詞書・歌

2　花をよめる

さけはちる花をときはの物と見て心しつかによをすくさはや　春部二七詞書・歌

3　よしの山花さきぬれは谷川の波はたかねの物にそ有ける

散花をさそふと見つる春風のうはの空にもすてゝける哉　同部一四六・一四七歌

4　家綱　同部一六七作者

5 こゝのへにやへ山ふきをうつしてはいてのかわつの心をそくむ
かへしつかまつれと宣旨ありけれは　同部一七歌・一七詞書
6 うの花のかきねなりけり山かつのはつきにさらすけふとみつれは
卯花隔隣　夏部二〇一歌・二〇三詞書
7 郭公をよめる
みそのふにむきの秋かせそよめきて山郭公忍ひなくなり　夏部二八詞書・歌
8 雲居寺にて未飽時鳥といへる事を人〳〵あまたまかりてよめるに（書A）　同部二五詞書後半
9 堀川院の御時二間にてかなまりをうちならさせ給ひて其ひゝきのうちに雨中瞿麦といへる事をよませおはしましけるにつかうまつれる（書A）　同部三三詞書後半
10 琳賢法師の大原の坊にて女郎花をまかりて萩女郎おもしろかりけるを人〳〵よみけれは（書A）　秋部四三詞書後半
11 山家嵐をよめる
嵐のみたえぬみ山にすむたみはいくへかけけるとふのつかなみ　冬部六九詞書・歌
12 大殿哥絵に女の思ひをもちてゐたるに水（書A）鳥のまへに有所を　同部六三詞書前半
13 春宮大夫公実の鳥羽殿の宿所にてあそはれける夜月おもしろかりけるにかはらけとりて哥よ（書A）めとせめられけれはよめる　祝部七〇詞書中途
14 経成朝臣　別離七四作者
15 肥後君　旅宿七四作者

16　春宮大夫公実の許にてこひの心を

いかにせんうさかのもりに身わぬとも君かしもとのかすならぬ身を　神祇八六詞書・歌

17　ゆりはな（阿）神祇八六一作者　書A本落丁ニツキ阿本ヲ以テ替ル

18　中宮上総　恋部上二〇九作者

と、顕著なるものにても十八例の多きを見出すのである。その書写時に於ける目移り等の誤脱―例えば6・13のごとき―を含むとしても余りに其れは甚しきことであり、本書の依拠本に見る欠落本文として想定せざるを得ない。しかし現在のところ類本を見出していない。但し、17（八六一作者）が第二類本系中、松平忠房旧蔵本、林羅山旧蔵本―但しイ本朱補する―の両本に所見され、その点では一種の類似性を見出すのであるが、その他は右掲例中、4（一六七作者）・18（二〇九作者）を欠脱する伝存本は第四類本系に所見される。特に前者4は同四類の群書類従本・書陵部B本・京都大学国語学国文学研究室本・志香須賀文庫B本・静嘉堂文庫本・〔萩原宗固〕本等諸本に散見する同系類本の一特徴ともなっている。後者18はやはり同四類系の〔萩原宗固〕本一本のみに所見する欠落である。他例は管見する伝存本には全て存し、17・4の両例はともかく、他例は伝写又は書写の間に於ける誤脱とみるのほかはないであろう。

更に、本書の本文は詞書末尾の結び、(イ)「……よめる」、(ロ)「……といへることを」、(ハ)「……いひつかはしける」、(ニ)「……つかうまつれる」等を刪省するところが余りにも顕著である。殊に(イ)の「よめる」は本書と同一であるべき第二類本系―第四類本系に比し稍々尠い―に比しても約百六十例前後に及ぶのである。(ロ)・(ハ)・(ニ)も各数例づつを数え、将に異常というのほかはなく、書写者―勿論本書の筆写者に限らぬか―の故意の省筆とでも推測せずしては到底には対処し得なく、上例又以下に掲示する歌序排列の異形と共に、本書は独自変異な伝本の態を成している。

本書の歌序次第について誌すにさきだち、第二類本解題の叙述順序に倣い、同類に見る異文本文を神宮文庫A本の当該番号に従い看ることにする。

1 夏部二六詞書―両本同、上述掲示したごとくに就中両本の最も類同と相関性を示唆するものである。

2 秋部三八第二・三句―両書同、「帰るあしたの雫には」とあり。

3 同部四〇三詞書―両書略同、但し本書は「丹波前司重房の家にてをみなへし」とのみあり「をよめる」を削省す。

4 釈教九七歌下句―本書は神A本と異り、以下のごとく

身相神道楽（ママ）　天飛や性ノ社（雁ノ誤写）ニ斎槻イクヨアルヘキアタシマツリモ　本ノマ、

あまねくやかりの社に身を（ママ）していはひつ（ママ）きのさかへてそみる

と書写している。当該箇処は第一類契沖自筆本に端を発し、下句の補正以降、第二・三類本にて本文整定の方向を辿るのであるが、神A本は右掲傍記の旧形を其儘に残している。本書が如何なる経緯のもとに補訂本文を主行とし、旧形を傍註細記し、且つ「本ノマ、」と附したかは推測の域を超えるが、やはり其処には何等かの関聯経過が存したことが窺われる。

5 恋部下一三〇詞書―両書前半同、後半略異なる、その後半部は

……女房の上へのほるとて道見（は）くるしとてしはしたてと女宮の申けれは立て殿上の方へまかりけるを後に参（まいり）やすると（神A）待（はんへりけるに）けるに見へさりけれはかれより送りはへりける

と見え、両書の相違はつまるところ「見」と「は」の書写上の相違と「待」「侍」の読解上の事柄に属する。因みに第一類本系の「侍」に対し、第二類本系以下は「待」とする諸本が多い。

以上、纔か五例にすぎぬが、それらは―4例はともかく―第二類本系、特に神宮文庫A本との系統上の名残をとゞめるものとして、同系統上の欠脱・誤写・删省多き一本として措定しておくことにする。

しかし、本書には猶前掲一覧の誤脱十八例とは別して本文上の細部に亘り誤写・誤脱・錯誤を含めた独自本文が随所に多見されるのである。それらは、ただ単に本書筆写者の過誤・看過或は任意な作為による改訂、删省に帰するものとは認めがたく、恐らく依拠本元来のものが其の大概であったろうと推測される。しかも、それらは類同本を現在見出されないとはいえ、かゝる伝存本が存したのには、嘗て何等かの改訂理由も、その偶発的結果をも伴いながらに存したのではなかろうか。それを本集成立時に遡及するのは伝存諸本の現状よりみて殆んど無意義にすぎないが、その伝来過程に於ける累積的な結果として異形の一本を派生してゆく流れのごときを本書のなかに見出すのである。その意味では、本書を以って、徒らな末流の誤脱一本としてのみに放置し得ないのである。繁述を避けて補註例示するにとゞめた。[註二]

次に、本書の歌序・排列についてゞあるが、上述本文同様に極めて錯乱し、此れも又類同する伝存本を管見するところでない。しかし、第一～三類本系の基本形態は本書にも所見される。即ち、

(一) 夏部　三三・三五・三四・三八・三九・三六・三七・三〇、(二) 同部　二六三・二六五・二六四・二六六、(三) 釈教　八九一・八九〇

である。しかし、本書は以下に掲出するごとき異例な歌序が三例にもわたり頻出する。

(イ) 夏部

雲居寺の聖人のもとにて撫子帯露といふ事を

朝露のをきぬる庭のとこ錦たかしきしまの大和撫子　三四

晩風如秋

夕されは玉まく葛のうら風に葉かへる秋と思ひける哉　三三六

大和なてしこを読る

今朝もまたいさ見にゆかんさゆりはに枝指かはす大和撫子　三三五

(ロ)　秋部

大弐長実の八条家にて水上月を

あすも見ん野ちの玉川はすこへて色なる浪に月やとりけり　四八三

八月十五日遍照寺にて翫月といふを

空も空月もよころの月なれは今宵になれは光ことなる　四八五

殿下にて八月十五夜を

引わくる駒そい(ママ)わゆる望月のみまきの原や恋しかるらん　四八六

水上月をよめる

はき(ママ)わくる岩間の水に澄月は浪にくたけぬつゝ(ママ)ら成けり　四八四

(ハ)　冬部

同し心を

あわ霜(ママ)もまたふる年に被(ママ)引はころまとはせる霞とそみる　六八〇

百首歌中除夜を　六八一

行年も今宵斗に成にけり果なき物は我身也けり　六八二

晦日をよめる　六八三

ことたまのをほつかなさにをかみすと梢なからも年をこす哉　六八一

先ず・(イ)・(ロ)に就いては、管見にいる現存諸本にはかゝる歌序次第は見出されず、且つ(イ)例は「瞿麦」詠四首―三三・三三・三四・三五―の一群としてあるべき排列であり、晩夏の移ろいたる「晩風如秋」の歌題詠の挿入のごときは想定すべくもない。(ロ)例も略同様に「水上月」詠二首―四八三・四八四―の中に「八月十五夜」題詠二首―四八五・四八六―の混在は予想されがたい。又、四八四詞書は諸本すべて「おなし心をよめる」(よめりける契沖本系)とあり、前歌と相対応していることからも自ら諸本の次第に従うのが自然であろう。[註三]

次の(ハ)例―六八二詞書・歌―は堀河院初度百首「除夜」題の詠であり、本書の詞書と歌詠との組合せは明らかに誤りである。勿論諸本中では本書のみである。

いずれ三例ともに本書の歌序排列の錯乱というのほかはない。上述の本文の欠脱・異文・誤記・删省等に看ると同様の結果を此処にも所見され、伝存諸本中では類例をみぬ一伝本となっている。しかし、再述するまでもないことながら、その縁由するところは深く、本書書写者に必ずしも帰せられるべき事柄とは思われない。

備考

本書の書入れは尠く、次の一・二につき誌すのみである。その一つは第一・二類本に散見された万葉引歌三例であるが、その中次の二例を転写している。即ち

1　万ニ引歌　石見ノ海ウツタノ山ノ木ノ間ヨリワカフル袖ヲイモミツランカ　春部七〇・七二歌行間

3　万云（タマタレノコスノ寸鶏舌ニイリカヨヒキネタチ子ノハ、カトテヤトカセトマウサン）　恋部下二七五詞書許

とある。神宮文庫A本系が平仮名交り文の本行に書写されるに対し、本書は片仮名交り文にて松平忠房旧蔵本・林羅山旧蔵本と同じくしている。就中、3例などは双行表記、第四句の誤写までも同じくしている。この点に関するかぎりでは第二類本のなかでは寧ろ羅山旧蔵本系である。伝本転写経由の錯雑性を示す一例でもあろう。

その二つは、第六釈教の部に記す歌詠の仏教義である。各初句と歌番号を以って略記すると

九一八　あしさまの―無三悪趣（初句左傍記、以下同）、九一九　あさましや―宿命通、九二〇　あくかるゝ―天眼通、九二一　いつくにも―光明無量、九二二　そのほとゝ―寿命無量、九二三　なかれくる―随意聞法

の六処に見出す。何れの伝本よりの移写か分明でない。

註一　契沖自筆書写本の当該箇処は

ならの哥合に人にかはりて郭公をよめりける

垣根郭公（コ、ニウタナシイカ、哥合ノウタ此題歟イカ、本ノマ、）

時鳥初音は空にとまらねとわかぬ名残になかめつるかな

と書写され、存疑を仮名注記している。念のため、神宮文庫A本の当該詞書部分を誌すると

ならの哥合に人にかはりてほとゝきすをよめる

墻ね郭公

と本書と全く同じくしている。

註二　本書の独自異文―既述のごとく誤写・誤脱・錯誤が当然に所見されるが其をも含む―は類を見ぬほどに多見される。以下は偶目するまゝに各巻より拾掇したものである。当該本文には右傍に・符を附した。又、必要に応じて附註を加えたところが

ある。

春部六〇詞書　梅のはな風にかほるといふ題を、同一〇三詞書　……せめられは仕る、同一〇三詞書　……人々なみ居〔り〕けるに主にかわりて、同一三九第五句　もてはや〔す〕□□（虫損）、同一三四詞書　……申かけたる哥、同一四九詞書　同し日のこゝろを、同一八七詞書　……得まからてけるほとに日暮にけれは送りける歌

夏部二六二詞書　……八条家にて時鳥を待といふを、同三四第一句　遠かたは、同三五詞書　……秋節に成摂政殿より遣しける

秋部四三詞書　……所（トコロ）の名によせて読けるによめる、同四四詞書　水上月をよめる、同四四第一句　はきわくる、同四四第五句　つゝら成けり、同五〇〇詞書　……月のねたる所にもりくるを、同五六詞書　神祇伯顕仲の本にて△人〳〵読けれはよめる（諸本△符箇処ニ「九月十三夜」トアリ）、同五〇〇詞書　……鹿の声哀なれは、同五六詞書　九月十三夜殿下にて法性寺関白よめる―第二類本系類同スル、就中野本と同一―、同五四八詞書　……残菊裏花云題を

冬部五五五詞書　四条の宮のあらき合に（諸本次ニ「紅葉を」トアリ）、同六三第一句　嵐ふく、同六六詞書　山の雪を見てよめる

祝部六九〇書詞　……水石契久と云題を、

旅宿七六〇第一句　あらし吹、同七六第五句　めを覚けん

悲歎部七八四第四句　涙もけふは（イ本類本ナシ）

神祇八四第四句　おつたらしめに

釈教八六九詞書　……寺桜と云題を、同八二詞書　大仏を雲居寺におかみまからんにくせよと人有けれは、（諸本「人のもとより雲居寺の大仏おかみたてまつらんにくせよとありしかはいひつかはしける（書A）」トアリ）、同九四詞書　……国におはしけんといへるこゝろを、同九七詞書　思事のしたかふ身なれは浮世もいかゝと思によす

恋部上一〇二第三句　はむくさも、同一〇三第三句　ふちさらし、同一〇四第一・二句　心みよつ△らからし（△符「よも」脱ス）、同一〇五詞書　夜恋といふ事を、同一〇九詞書　……六条家にて△寄織女恋といひける事をよめる（△符箇処ニ「七月七日に」トアリ）、

同部一〇九七詞書　冬恋といふことを、同一〇九八詞書　……をせさせ給けるによめる
恋部下二四〇第五句　つまゝとをらん、二七〇第五句　□みふかて思へ、同二九四詞書　或所にて夕恋を、同二九六詞書　同殿にて人をとゝむるといふ事を、同二九八詞書　関路の恋を、同三三七第三句　立露　（諸本「をく露の（書A）」トアリ）

註三　但し、続く四七「明石の月」の次には四八詞書「水上月」とあり、詞書上では多少の混入も予測されて(イ)例とは稍々異なるが、やはり本書のごとき混雑は草稿本でもないかぎり想定し得ない。

補遺二

岡山市立中央図書館蔵〔江戸後期〕写―寄合書　存巻第一・二・巻第六～十

袋綴、三冊。浅縹色布目表紙、竪二十三・五糎、横十六・九糎。字面高サ約十八・一糎。毎半葉十一行に和歌一行書き、詞書二・三字下げに書写する。本文墨付き、第一冊三十九丁、第二冊五十一丁、第三冊五十四丁。

外題、各冊表紙に「散木奇歌抄」と別筆打付書きしている。又、各冊同右上、綴目近くに「共四冊」と墨附記が存す。更に、同館函架番号標にも「〇九九・一一一／M／1（3・4）とあるのから第二冊が散離したのは近時のことであろうか。

内題、「散木奇歌集第一（哥朱）（奇歌後准之墨）（二・六～十）春部（～雑部下）」と記し、その許に「源俊頼歌集」と誌している。但し、朱墨傍記は第二巻以下には存せず。又、第八巻は「哥」に、第十巻には「謌（哥イ）」に作る。本書の内題も前掲「補遺一」と共に、第一・二類同様に、第三類系以下に見る「巻第」の「巻」字を省略している。部立表記も該類と同じくし、春部

・夏部」二巻、悲歌部・神祇・釈教一巻、恋部上（下）二巻、雑部上（下）二巻、と誌している。

本書には奥書・識語等は存せぬが、書写の年代は江戸の後期頃、更に稍々降るの印象が残る。その書写者は二筆により成るものと判断される。第一冊、即ち第一・二巻と、第二・三冊、第六～十巻の両筆跡である。恐らく、本書の散離巻、第三～五の前半を第一筆写者により書写されていたのであろう。本集伝本一般に看る上下二冊本を各担当し書写したのでもあろうか。そして、その上下二冊は後述するごとく稍々伝写の経由に於て曲折ある伝本ではあるが、単に同時期の取合せ本とは思われない。

印記　各冊第一葉に「玩翠園／蔵書記」の方形朱印を捺している。

扨、本書の本文についてであるが、その系統上から類別すると、第一～八巻、第九・十巻が両系統に分類され、前者は基本に於て第二類系統、後者は第一類系統―契沖本系―に属する。即ち本書も又第一～三類系統に屢々見出される八巻本系統と十巻本系統の雑部二巻との補綴的な複合により成る一伝本として措定されるのである。

本書の系統を概ね右記のごとくにひとまず結論から述べたのであるが、以下、前半第一～八巻と後半巻九～十巻にわけ検証してゆくことにする。

まず、前半については便宜上、本解題の記述に倣い、神宮文庫A本に掲示した該書の本文異同―同解題一覧(一)―と照応する。重記を避け、同表番号と本集番号を以って代え、必要に応じ附註することにする。

1　春部一三詞書―両書欠（以下両欠ト略記）2　同部一八七左注―両欠、3　同部一八六左注―両欠、4　夏部一九四詞書尾部・歌下句―両欠、但シ本書「しらしな人にうらもなしとは」（下句無本）ト細補、5　三六歌下句―両欠、6　同部三三詞書尾部

―神A本欠―本書存「……涼といへることをよめる」トアリ、以下第三～五巻欠

16 悲歌部八一〇詞書―両欠、17 八四同部歌第四句―両欠、18 釈教八七一歌・八七三詞書―神A本欠、本書存「君か為かける御法のみつくきにわか身をさへもすきつる哉／神力品のこゝろを」トアリ。19 同部八九二歌―両欠、20 同部九一八歌・九一九詞書―神A本欠、本書存「あしたまのことのゆかりはおほかたのみゝのつてにも聞えさりけり／其国に生ぬる人はむかしのことを知さとりを得てそのかみの事を知といふを」トアリ、21 同部九三六歌―両欠、22 同部九五八詞書・歌―両欠、23 恋部上一〇〇八作者―両欠、24 同部一〇三九左注―両欠、25 同部一〇六〇詞書―神A本欠・本書存「経年恋」トアリ、26 恋部下一三六歌―両欠、27 同部下一六〇詞書―両欠、28 同部一三一詞書・歌―神A本欠・本書存「恋のこゝろを／恋すとて身のけしきたにかはらすはいはぬに人のあやめましやは」トアリ

と、以上のごとくである。

本書は第三～五巻が散離のために、その正確な実態は把握し得ないが、第二巻迄の六例中に於て一例6を相違し、第六～八巻迄の十三例中、18・20・25・28の四例の異同が所見されるのである。その点では必ずしも第二類本神宮文庫A本系と同一伝本上に対処し得ないが、上記五例は同系の松平忠房旧蔵本・林羅山旧蔵本等には本書同様に其等本文は存し、第二類本系に於ても揺れ動く処でもあれば、本書は其の基底部にては第二類本系の一本として措定するのが妥当かと考えるのである。

又、前掲**補遺**一業合賢豊書写本とを対照するに、本書とは―現存巻の限りでは―右掲欠落本文は4の補写一例を除き全く同じくしている。業合本は既述したごとく右表とは別して更に多くの欠脱本文を散見するが、本書同様に第二類本系に類別したのは、第二類本系諸本に於て相類同し共有する蓋然性に系統化を試みたものにすぎない。それはともか

くも業合賢豊書写本とは伝写経過上に於ては嘗つて何等かの交渉関聯が遡及されるべきかと推測されるのである。

しかし、本書には右記の欠落本文以外にも更に次のごとき纔かながら二・三ケ処の欠文が見出されるのである。

(イ) 百首哥中に三月の晦日の心をよめる（書A）　春部一九三詞書

(ロ) 待郭公（書A）　夏部三六七詞書

(ハ) ゆりはな（阿）　神祇八六一作者　書A本落丁ニツキ阿本ヲ以テ替ル

である。業合賢豊書写本に比すれば写本にありがちな誤脱にすぎなく第二類本系とより近似するといえよう。因みに(イ)・(ロ)両例は伝存諸本には所見せず、(ハ)例は第二類本系、松平忠房旧蔵本・林羅山旧蔵本二本と上記業合本に所見る欠落である。

又、本書には第六巻末尾―釈教―に

こくらくをおもふといへることを

よものうみのなみにたゝよふみくつをもなゝへのあみに引なもらしそ

の本集未収録歌一首を本行として書き添えている。同歌は第一類本契沖自筆本の当該部に、本集遺漏歌として金葉集所載歌中より朱補細書したものであり、同朱補書入れが本行化したものである。契沖書入れと本書との交渉については後述する雑部二巻と備考中にて言及することにする。

本書の上記本文の欠脱又遺漏歌一首の補入とは別に、先の業合賢豊筆写本に甚だ顕著に所見した、(イ)「……よめる」、(ロ)「……といへることを」、(ハ)「……いひつかはしける」、(ニ)「……つかうまつれる」等、詞書の結びの刪節が本書にも多見する。殊に(イ)「よめる」は現存巻六巻にて約百十余例を散見する。しかし、それは業合本の当該箇処と必ずし

も同じくせず、第一・二巻の四・五例に対し業合本五十余例、第六～八巻の百十余例に対し、業合本三十五・六例――同じく第二類本系に対する――と頻度数も著しく相違する。自ら両本の親疎関係の程合いも想定されるのであるが、両書に看取される此の傾向は該本で記したごとくに転写上に於ける故意の省筆とでもいうほかはないのではなかろうか。ともかくも同一傾向にある一本である。

次に、第二類本系統の一特徴ともなる異文本文を例に倣い神宮文庫A本の当該番号に従い略記することにする。

1　夏部三六詞書は、

ならの哥合に人にかわりて時鳥をよめる

とあり、神A本・志A本に存す―第一類本系同存―「墻ね郭公」の重記を欠いている。その点では第二類本系忠本・江本以下第三・四類本系と同じくする。又、本書と比較的近似する業合本とも異同するところである。

2・3―共に秋部であり、本書欠巻部につき未詳。

4　釈教九二歌下句―本書は神A本と異り

身相神通楽　万十一／天飛や〔雁〕の社ニ斎槻ソクヨ見□（アル）ヘキアタシマツリモ（ママ）

あはとふやかりのやしろに身をなしていはひし槻のさかえてそみる（ママ）

とあり、業合本と相互共に誤写を見ながらに同じくし、既述のごとく第二類本系、忠本・江本以下の整定本文を本行としている。

5　恋部下二三〇詞書―神宮文庫A本とは極く小異を所見するにすぎず、「……道みくるし（は）……（本書）」の一例にとどまる。業合本とも「……参りやすると侍（待）けるに（業合）……」の一箇処にすぎず、共に類同する。

以上三例にすぎぬが、1・4例は共に第二類本系の松平忠房・林羅山両旧蔵本以下の流布本文にと移行している。業合賢豊書写本とは1例に於て相違するも4・5例にて同じくし、第二類本系の本文の揺れと共に近世後期の伝写本が辿る混淆的傾向を本書も又示している。

以上、本書前半、現存五巻は上述のごとく第二類本系統としては業合賢豊書写本に頻出するほどの欠落本文はないが、その書写本文は可成り蕪雑・錯誤が多くして正当な伝写本とは云いがたく例示するには余りにも繁多に及ぶので省略することにする。たゞ業合本との類同性よりして、第二類本系統の崩れゆく本文の一情況[註一]を示すものとして両書は又それなりの意味をとゞめるものであろう。

本書の歌序・排列は第一〜三類系の基本形態をとり、業合賢豊書写本に看取された異形は見出されない。即ち、

㈠夏部　三三・三五・三四・三八・三九・三六・三七・三〇、㈡同部　二六三・二六五・二六四・二六六、㈢釈教　八九一・八九〇

である。

本書前半第一・二、第六〜八の現存五巻は多少の疑点は存するが、共に第二類本系の一本として措定し得るものと思われる。しかし、既述したごとくに第九・十の両巻は、第二類八巻本系の欠巻二巻を補全することにより現十巻本の体裁を整えたものと推定される。第一類契沖本に於て既に先縦を見ると共に第二・三類本等にも屢々補綴、補完の状況は看きたった通りである。本書の場合、それは本書書写者の手になると想定するよりも寧ろ依拠底本の階程において既に補綴は完了していたと推測するのが妥当かと考えられる。というのは、後述するごとく雑部両巻は契沖自筆本の補綴二巻―此の雑部両巻は別筆、令写本歟―の本文と殆んど同じくする。しかも此の両巻のみならず本書全般にわた

り契沖自筆本に発する可成り詳密なる書入れが移写されているのをみると、ひとつの推測として、依拠八巻本の書写者が書写完了後、欠巻二巻を補うべく契沖本系の一本により補全すると共に同書入れを全巻に転写したのではなかろうか、と思われるからであり、それ故に本書書写者の両名は各々前半五巻後半五巻を分担、寄合書きし得たのではなかろうか、と推論するからにほかならない。

此の両巻本文につき、如上の仮定に基き、契沖本系との比較・照応するに、該本系とは以下に掲出するごとく異同するところは極めて尠く該本系上の崩れを示す転写一本と想定されるのである。

先づ、本書の欠落本文―繰返すが例に倣い書陵部蔵A本に対するものである―を例示すると、

a　阿闍梨（書A）・・・雑部上一三〇四作者　契本系同欠

b　大弐（書A）・・・同上一三〇九作者　契本系存

c　返し（書A）・・同上一三一三詞書　契本系存

d　ちきりしこともを（書A）わすれにけるにやかことさまに思なり・・・

本集雑部上下の両巻は既述してきたごとくに第四類本系をのぞき第一〜三類系諸本に於ては八巻本系に第四類本系の両巻補綴という成立ちの上に伝写されてきたものであり、従って、その本文はつまるところ第四類本系の異同、しかもそれは殆んどが纔かな誤脱・錯誤に帰せられるのである。

本書の右掲欠落に於ても、b・c・e・hの四例は伝存本中、本書のみに所見するのであり、単なる誤脱と認めるのほかはない。他例、a・d・f・gの四項はいずれも契沖本系では欠落又は朱（墨）補入本文であり、両本は共通、符合するのである。もっとも、a例は本集各類の伝本中にも間々散見され、d例も第三類蘆庵本系にも見出され、その点では類同する一面をもつのであるが、既述又後述するごとく各類それぞれにa・d以外の欠脱が散見され、雑部上下両巻の中での系列としては契沖本系又は本書とは相違するのである。f例はその間の微少な符合一点として契沖本系と本書との誤脱を示すものである。かゝる例は更に多くが看取される。g例は契沖自筆本に於ける金葉集所収歌との朱筆校合の書入れであるが、本書は其の書入れの一端を補入傍記している一例として掲示したものである。

又、契沖本系統の特徴を示す本文の一例をあげると、

伏見の山さとにてあそひともをあるし（契同存）のをこしたりけるをたてこもりてねたりけるをあそへなとからてはなとい（契本行）

ひけるついてに　雑部下一六三詞書

（契同存）かれイ（契同存）か（契同存）

とあり、全く一致する。右傍校記も「からて」の本書補訂を除き同一である。右掲異文は同じく第一類本系、野口道直旧蔵本・簗瀬一雄氏蔵本、第二類本系、蘆庵奥書諸本・初雁本、等八巻本系の補綴雑部上下両巻に共通して所見するのは既述したごとくであるが、本書も又当然同じくしている。

如上、本書雑部上下両巻は契沖本系上の類同一伝本として推定されるが、其の系列本としてはやはり誤脱・誤写の

乱れを看る書写本である。因みに語句上に於ける小異は猶多く且つ稍々蕪雑な本文も散点し、両本の結ぶの間には更に転々の経過が予想されるのである。一例を挙げるに、詞書の結び「よめる」を省略するところは略六例[註二]ほどを見出すなども其の現れではなかろうか。

猶、契沖自筆本に朱筆傍記する校合―イ本・諸集所載との―の過半は本書にも又転写されている。

備考

本書の書入れは可成り詳密であり、大略次の三種より成っている。

㈠ 第一・二、第六～八巻の前半五巻の第二類本系に所見するもの

㈡ 雑部上下両巻を含め現存七巻の全般にわたり契沖本系の朱筆書入れの移写

㈢ 本書独自の書入れであるが纔か数ヶ処にすぎず、見るべきものは存しないので省略し、㈠・㈡項につき以下に附言する。

先ず、右の㈠項では、その主なるものは、

1 万ニ引歌石見ノウミウツタノ山ノコノマヨリワカフルソテヲイモミツランカ　春部七一歌

2 万六アラタテ(云歟)ストノ(ママ)、サカキメニヨリソノイモシエ(ママ)スハワカコヒメマモ(ママ)　夏部三五四詞書

3 タマタレノ寸鶏舌ニイリカヨイキネタラチネノハ、カトテヤトカセトマウサン　恋部下二七五歌

などが主なる書入れである。右三項は、第一類本系、契沖自筆本に発する万葉集引歌―但し2例は同系本に不見―三首を本書も傍記している。右引歌三首は第二類本系・第三類蘆庵本系にも散見されるが、当該巻本文より推測して第二類本系の伝本からの直接の転写であろう。

又、同系の孰れの伝本からとは勿論予測しがたいが、本書に間々散見するイ本校合本文には、

恋部下二三第五句「あさ衣とは」―忠本同、同二九〇第五句「あされをそする」―江・忠本同、同三七第五句「なくてくらしつ」―江・忠本同

など見え、第二類本系に於ても下附註記した林羅山・松平忠房両旧蔵本と符合して参考される程度にとゞまる。右万葉引歌三首なども片仮名傍注の表記―神A・志A両本平仮名本行とす―は上記両本にはじまり同じくすることも多少の交渉を遡り推測されるのでもあろうか。

㈡契沖本系の書入れ転写は所収歌の集付けと共に、(1)釈註に関するもの、(2)本文校異との二種である。

(1)釈註に関する書入れに就いては前輯契沖自筆本解題の、備考㈡に於て其の主なるものを、一 他集による本書未収録歌と関聯書入れ、二 語解書入れ、三 類歌例書入れ、四 歌解等書入れ、と略分類して掲示したので此処では同掲示記号を以て略記―本書の存・欠―し、必要に応じ附註することにする。

一―1（夏部二〇〇ノ次歌）書入れ―同存、一―2（同部二七ノ次詞書）―同欠、但し契本欠歌、二七ハ本書所収歌ナルニ依ル歟、一―3（同部二九歌ノ次）―同存、一―4（夏部三八歌）―同欠、当該部契本錯乱アリ、本書整序スルニ依ル歟、一―5・6―欠巻部未詳、一―7（釈教九九歌ノ次）―同存、一―8（同九四歌「巻末歌」ノ次）―同前掲一首存、一―9（恋部上二〇三九詞書ノ許）―同欠、同解題ニ述ベタ如ク契沖ノ誤認ニ依ル、ソノ故歟、一―10（雑部下「折句哥」項ノ許）―同存

二―㈠（春部一七九歌第四句）―同存、二―㈡・㈥・㈣・㈩・㈧―本書欠巻部未詳、二―㈦（悲歎部七九五歌）―同存、二―㈤（同部七九七詞書）―同存、二―㈪（同部八二〇詞書）―同存、二―㈬（神祇八五五詞書）―同存

三—(イ)（春部七六歌）—同存、三—(ロ)（同部八五歌）—同存、三—(ハ)（同部二七歌）—同存、三—(ニ)—本書欠巻部未詳、三—(ホ)（悲歎部七九歌）—同存、三—(ヘ)（恋部下二〇八歌）—同存、三—(ト)（雑部上三六七歌）—同存、三—(チ)（同部一四七歌）—(チ)・1—同欠、(チ)・2—同存

四—(イ)（夏部三六八歌）—同欠、四—(ロ)・(ハ)—本書欠巻部未詳、四—(ニ)（釈教九七二歌）—同歌ハ上述ノ如ク契本傍記校本文ヲ本行トシ、同本本行ヲ傍記トス、同附註「万葉の哥を引には云〻」存、四—(ホ)（恋部下二五四歌）—同存、四—(ヘ)（雑部下二三六四歌）—同欠、四—(ト)（同部上二三五八歌）—同存

右記例示したごとく現存巻の全般にわたって、(1)の一～四項の書入れの過半は本書に転写されている。一部転写を逸する処も散見するが、それは転写途次に於ける漏脱も存するが、附註したごとき意図的な選択なども介したのではなかろうかとも推測されるのである。

次に(二)—(2)項、本文校異に関する移写であるが、雑部上下両巻については両巻は契沖本系の伝本であるところから其の校記は殆んどが転写されている。前半第一・二・五～八巻の現存五巻は上述のごとく第二類本系統ではあるが、各集の所収歌との本文校異、イ本又は無註記校異等を含め、本書との異同ある処には略々移写されている。しかし、本書の欠落歌は、例えば釈教の項を例にとると、八九二歌・同九二六歌・九五八詞書・歌等は契沖自筆本では朱筆細補されているにもかゝわらず、本書には転写されていない。其等を挙げれば多きにわたるが、契沖本系の校異傍記は第二類系本書本文に限っての校合移写であるかと推定される。その点稍々任意的である。それはとりもなおさず本書の第一・二、第五～八巻の当該巻では契沖本系との接点は上記のごとき—(二)—(1)・(2)共に—条件の許に契沖本系の略校異を含む書入れのみに関するものであり、該本本文の欠落補入本文にまで及ぶものではなかった、とする前述の推定は略確認

されるのである。従って後半補綴の雑部両巻とは自ら異にするのである。

註一　一例をあげるにとゞめるが、釈教六二番詞書は、

身のあやしさにおもひくつおれて念仏をたにもせぬによそふ未詳心を

と書写する。契沖自筆本に

身のあやしきにおもひくつおれて念仏をたにせぬによそふ。心をよめりける（を朱）（未詳朱）

とある朱補「未詳」の本行化であろう。第一類本系諸本に於ける契沖自筆朱補の本行化には略一律性が看取されるが、本書の場合は部分的結果としてのみ見出されるのである。附言すれば、本書全巻を通じ、契沖自筆本書入れは過半を移写しているが、上記の場合はその際の本行化ではなく其の依拠本によるところであろう。或は同書入れも該本に既に存したかもしれぬ。又、一方契沖本にみる「よめりけり」を迭すなど本文の混淆化は否みがたい。

註二　以下、偶目する処の歌番号を挙げ、以後の参考にする。

一三三・一三四・一三八・一三九・一三〇・一五〇、の六例であり、部分的に集中化していて寧ろ意図的な刪省かとも思われる。

第四類本系

静嘉堂文庫蔵天保十年烏丸光政令写本　存巻九・十

袋綴、一冊。無地鳥子表紙、竪二十七・六糎、横二十・三糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十一糎。毎半葉十二行に和歌一行書き、詞書略二字下げに書写する。本文墨付、全五十丁―内奥書一丁―。

外題、表紙左肩に「雑部／散木奇歌集　全」と令写者光政が打付け墨書している。

内題、「散木弁謌集第九（十）　雑部上（雑部下）」（哥イ（朱））と記している。

その奥書は、本文末に、

(イ)　在江戸中一覧之次自以他本／聊令校合是仮名を正し□□（得候カ）／　季鷹（本文同筆）」

(ロ)　天保九年／十月八日写之／了　判

借乞源黄門建通卿本令／書写校合

天保十年二月上旬左中弁（本文別筆大字）「光政／之章」（方形陰刻朱印）」

同月一覧付紫　同年十一月一覧

弘化四年冬一覧

嘉永元年夏凌暑熱一覧（以上三行小字朱書）

と、二部よりなる。(イ)記は令写依拠本の奥書であり、加茂季鷹の校記である。在江戸中に他本を以て仮名を訂したというのである。しかし、後述するごとくに本書には契沖書入れが処々に転写され、且つ季鷹が上加茂の祠官であるところから、現三手文庫今井似閑奉納本―契沖自筆本の転写―との交渉の有無に憶いをめぐらすに、その経緯は本書本文と共に留意されるのである。ともかく、

(ロ)記は、同記の序を追えば、前掲書は季鷹最晩景にあたる天保九年に書写されている。続く翌十年の光政の記からしていえば該本は中納言である「久我源建通二十五」（天保十年）の所持本である。それを恐らく書写又は令写せしめたものであって、季鷹の書写奥書が光政令写時に誤って同識語と共に大字に書写されたものではなかろうか。かく推測のもとに、本書は建通を経て、更に天保十年烏丸光政の許に再転写された、いはゞ伝本としては末流に属するものであ

る。かく転写経過を見るが本書には季鷹手跡の面影をとゞめ、模写に近き書写状況が推しはかられる。

次いで同裏に細記する「同月一覧付紫」の「付紫」の内容であるが、現在本書に見る朱・埴土色両筆の書入れを指すというよりも、備考後述するごとく光政一覧のついでの読点・濁点の両附点のことかと推測される。更に其の披閲は同年十一月、降って弘化四年冬、翌元年と再三に及び、その間の経過は既に辿るべくもない。且つ、巻中には間〻押紙附箋が散見され、それは本書本文・書入れ・校合等の後のことではあるが、誰人の手になるや判然としがたい。あるいは、旧蔵者松井簡治氏の箋歟。

印記、巻初に「松井／蔵書」の方円朱印を捺す。

扨、本書の本文は、第九・十の両残巻であるが、第四類、十巻本系の存巻であるのは言及するまでもないが、繰返し附言すれば、第一〜三類本系諸本の当該両巻は全て八巻本系伝存本に補綴、補完すべく第四類本系の両巻を以て充当したがためである。本書が、離散残存するに至った経由は勿論遡及すべくもないが、第四類、十巻本系の一本として対処すべきものと考える。

此の第四類、十巻本の本文は、本集に於ける既に完備、整定化の後を受けての伝写と想定され、伝存諸本は各本相互に異同甚だ尠きを特徴とする。第九・十両巻も又それに準ずる。

本書はこの些少なる異同の中で、敢て系類を探れば、さきの第一類、契沖本系の補綴両巻に最も近似隣接するものである。以下に両本本文を対比することにする。契沖自筆本解題に於ては第四類本系諸本解題に譲り敢て記述を避けたので、此処にて、契沖本の顕著なる欠落を挙げ―例に倣い―対照する。必要に応じ適宜附註するのも例に従うこと〻

する。猶両書の欠落本文は書陵部A本を以て掲示するのも同様である。

1 阿闍梨（書A）雑部上三〇四作者　契・烏本欠、cf第一・二類本系・第三類本系同欠

2 ちきりしことゝもをわすれにけるにやことさまに思なり（にけりときこゆる人のかりつかはしける（書A））同部上三七九詞書後半　契・烏本欠、cf第一類本系、第二類本系—但シ信本存—・第三類本蘆本系同欠

3 ときは（かきは（書A））にものをこそ思へ　同部上二四六歌第四・五句　契・烏本欠、但シ契本「かきはカ」朱傍記ス、cf第一類本系・第二類本系—但シ信・築本存—・第三類本蘆本系同欠

4 人をもうらめしと（身をも歟（朱））　雑部下一五〇長歌　契・烏本欠字同朱補ス、cf第一類本系同、第二類本系—野本欠落、信本「よをも」・築本「身をも」本行トス、第三類本蘆本系・岡本同欠

右掲の四例などが、其の主なるものである。纔か如上の例によっても予測されるが、第四類本系の伝本の当該両巻—第一〜三類本系補綴巻を含む—は相互の間には伝本上に於ける確たる異同と称するよりも寧ろ伝流途上に偶発的に派生した伝本間の交渉、書写者の錯・誤・脱等の、半ば写本に避けがたい事情より生じた本文変化として捉えるのが妥当とするの感を拭えない。参考として附註した第一〜三類本系との類同も又それを物語るのである。本書も含め—以下に例示す—各本間には個々の変相が存し独自伝本を形成している。既に第二・三類本系解題では言及したが、多少のばらつきは散点しながら、第九・十両巻は基本的には共通地盤にあるがごときである。たゞ、その枠のなかで各書の位置を措定するならば、本書は契沖が拠って令写補完した両巻本文と極めて近似する伝本系統であるといえるのであろう。

本書本文は私なりの諸本校合の結果としても、先学関根慶子氏の「字句の誤も多」[註]き伝写本であることは認めざる

を得ない、が其れには、既述したごとく、季鷹校訂以後の再三にわたる転写も又其の一斑の責を負うものであり、季鷹の記「自以他本聊校合」の跡とおぼしきには且つ一方みるべきものは存すのである―後述―。

しかし、ともかくも、本書には僅少ながらにもやはり次のごとき契沖本には所見しない欠脱本文が見出される。

イ　無常の心を（書A）　雑部上二三九詞書　本書欠・各類諸本存

ロ　いはねばころあれ（そ歟）・には（心（書A））　雑部下一五二〇長歌　本書欠、各類諸本存

ハ　□（み）ぬ・・さきになにたのみけん（より（書A））　同部下一五三第四・五句　本書欠、各類諸本存

ニ　……ひきがへのうしのことのほかにちいさくやせて・・・

第四類本系中の、仮りに契沖本系伝本群とも称すべき系列伝本に拠る補綴故ではなかろうか。贅言をさけて一言すれば、本書第九・十両巻は、本文上に於ける契本との異同―一・二語の誤写は言外として―の近親と共に其の異文に於ても同一線上に位置し、次いで第二類(二)―野口・簗瀬本等―第三類蘆庵本系諸本の当該両巻に相接する稍々誤謬多き一伝流本であるといえるのであろう。

猶本書には随処に原書写者―季鷹歟―の校合、イ本明記、校本無記、校者推定の「〜歟」等の校合・訂本文が傍記され、本書の誤謬は可成りにわたり整定されている。それらは季鷹記に云う「或本」に拠るところは尠くないであろう。そして、その一半は契沖本系の当該巻によるのではないかと推測すべく符合するのである。次述備考中にて言及するごとく該書書入れは校者の撰択の許であろう、処々転写されているのを考慮すれば、その可能性はあながちに否定しがたいものがある―詳細例示すれば審らかにしうる程のことであるが―。しかし、その際も又、然るべき取捨撰択がはかられ校者の判断が結果として現状に近き様相となっているのではないかと想定するのである。且つ又、本書の奥書・識語等から推測して加茂季鷹が浮上するのである。しかし、季鷹記に云う「在江戸中」時のことゝすれば現円珠庵蔵本、或は現三手文庫蔵今井似閑奉納本のごときに直接するものではなくして、その転写本系かとも想像を馳せるのである。即ち、契沖本同系の誤写多き存両巻に契沖本系転写一本を以ての校訂と共に該書入れの移写という経過である。以上臆測の一端を附記し今後の検討を俟つものである。

備考

上記したごとくに、本書には、(イ)契沖書入れ、(ロ)季鷹書入れ、(ハ)未詳者書入れ、(ニ)追補押紙附箋等が問々散見される。簡略に以下言及することにする。

(イ)契沖書入れは、該書に附す各集所収歌の集付は大概を移写するが、他書入れ―契沖自筆本解類に略例示した、一・二・三・四項―は恐らく筆写者の取捨を経てであろう、次項のごときを転写している。重記を避け、該書解題の例示番号により以下に示すと、

四―(ヘ)(雑部上二六四歌)、三―(ト)(同部上二六七歌)、一―10(雑部下「折句歌」項)

と主要附記は確実に書移されている。該書雑部両巻の契沖書入れは比較的尠いが筆者掲示に於ても省略するところが多く、同一書入れは所収各集詞書・語註・歌解等の短文寸記などを略転写するものである。しかし、該備考の掲示書入れの中、四―ト(雑部上二三八歌)、三―チ同部上二四七歌、などに施す主なる附註を欠くことから、その採否はかなり任意的か、或は依拠本系の不備かは不明ながら判然としがたい感は否みがたいものが残るのである。

(ロ)季鷹書入れは、

1 いはねばころあれ。(そ歟) 雑部下一五二長歌 眉欄ニ「□こも/季鷹案」と附記ス

2 あすか川うきゝにつもるあは(わ)雪のなみたちくればたのもしげなきよにもふるかな 同部下一五五旋頭哥 眉欄ニ「季鷹案 せとう哥句法たかゐしや可考」ト附記ス

3 いかでもと(か歟)思ふ人(心)はあかす(り)がはうちながれてもふるかな 同部下一五六混本哥 行間ニ「季鷹案 四字あまれり いかゝ次哥可并見」ト附記ス

4 わか駒をしはしとかるか山しろのこはたの里にありとこたへよ 同部下一五七歌 眉欄ニ「季鷹案 木幡里に馬はあれどゝ云哥は万葉集より出てかれには木はたの山をとよめるを誤伝へて如此よめる也」ト附記ス

季鷹の記名あるは以上四例にすぎぬが、いずれ妥当な附註である。と共に(ハ)末詳者書入れも間々散見し、且つ随処

に所見する適宜な校合・校訂とを併せ推するに、その多くは季鷹の手を経たものではなかろうか、と想定されるのである。且つ、(イ)・(ロ)・(ハ)項の書入れ、校註は契沖本系書入れ移写と同時期にして共に季鷹による披覧のついでのことであろう、と推測される。

又、(ニ)押紙附箋は明らかに後補のものにして手跡も異り、或は旧蔵者松井簡治氏の補箋追考ではとも臆測する。御教示を俟つことにする。一例のみを掲示すると、雑部上三五二歌第四句「あけをさゝのへ」に

万十一　妹かゝみ上小竹葉野のはなれ駒　あれゆきけらしあはぬ思へは

と誌すがごとき寸記の附註が主である。

註　関根慶子氏「散木奇歌集の研究と校本」　昭和二十七年　明治図書出版株式会社

静嘉堂文庫蔵文政十年源輳令写文久二年間宮永好校合本　存十巻

袋綴、三冊。茶褐色刷毛引表紙、竪二十七・二糎、横十九・六糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十二糎。毎半葉十一行に和歌一行書き、詞書三・四字下げに書写する。本文墨付、第一冊六十二丁、第二冊六十三丁、第三冊六十五丁。題簽、単郭付無地短冊を表紙左肩に貼附し、「散木奇歌集（異本校）　一／二／三・四／五／六／七・八／九／十止」と本文別筆にて墨書している。

内題、「散木奇詞集第一（和イ朱）（〜十）　春部（〜雑部下）」と記し、第一・二類と同様に、第三類諸本に見る「巻第」の「巻」字を闕いている。左傍記「弃歟云々」は以下各巻これを省略す。又、冬部一巻は「詞」字を「歌」に作り、各巻右傍朱記「和イ」は同巻のみ「和」とあり「イ」記を失す。

その部立表記は、四季各月を小項目とする四巻、祝部・別離之部イ・旅宿の各項を第五の一巻、悲歎部・神祇・釈教之部の三項（傍点部朱補）（同上朱補）を第六の一巻、恋部上下を第七・八両巻、雑部上下を第九・十両巻とし、第十巻は、長歌・旋頭歌・混本哥・折句哥・沓冠折句歌・隠題・連謌とし、第四類本系も其の基本形態は各系類共に異るところはない。但し、第五・六の両巻に於ける小項目表記に系類上に異同が見出され、煩細ながら既述してきたごとくである。

本書の奥書は、第三冊雑部下巻末（六五丁裏）に、

散木集十巻以師翁蔵写本書写之維時文政／十年晩秋下旬命重賢書写之而后再三校合／了　至初冬望後落成以識其由　源輳　（以上、朱）

と誌している。

右記の奥書によれば、文政十年晩秋に源輳の下命により、師翁蔵本を重賢なる者が書写したのが本書であるというのである。寡聞にして源輳の伝が不明なるまゝに、師翁を審らかにしがたく、且つ重賢についても猶確認しがたい点を残している。文政十年期に於ける重賢は次の両名に搾られるかと思われるのある。その一人は「蘆門の巨擘」として識られる小野重賢（天明五～天保五年）である。他の一人は加藤千蔭門の美濃大垣藩士の鈴木重賢（宝暦八～文政十二年「名家伝記資料集成2」）である。そのいずれかではあろうかと推測するのであるが、前者であるとすれば小沢蘆庵系の継承者として既述の第三類本中の蘆庵本系の伝本に拠ることが予想されるのである。しかし、本書は後述するごとくに蘆庵本本文とは大きく異同し、該本系とは明らに別するところから依然躊躇されるのである。従って後者に限定されるかといえば本集には千蔭書写本系の伝存を聞かず比照すべくもない。且つ源輳との関係も不明なるにより推測を拒むのである。未詳というほかはなく今後の調査を俟つことにする。

上記源輳の奥書と同筆の朱校語が第一冊末、炁部の奥に、後述の間宮永好の校合の記(ハ)の後に、

松舎蔵以原本校合了　都止布[註二]　(朱)

と記している。当初、此の「松舎」を永好師小山田與清の「松の屋」と想定したが、同校語は源輳手跡であり、埴色筆の永好手跡とは明らかに異なるところから、此の「松舎」も又して認知しがたく、結句、源輳の記「師翁」、「松舎」も未詳であり、本書の伝来経由は不明のまゝに残されたというほかはないので蛇足附言した次第である。

上記書写奥書と共に、小山田與清門の間宮永好の埴色校合の記が細書されている。

(イ)右源輳奥書に次いで

以師翁校本一校畢　此本今水戸家一献上。彼御文庫ニアリ

文久二年三月廿八日功畢　間宮永好(埴色)

(ロ)第一冊前遊紙裏の右肩に、埴色、朱両筆にて校合次第を詳記している。

1　墨と朱を以て。傍に書けるはもとより。此本に有ける也。

2　サとしるせるは。故翁校本に藍を以てものせる也。

3　イとしるせるは異本也。ムと注せるは。故翁校本に書名なきもの也。

4　ルと印せるは。群書類聚。墨としるせるはルの異本也。

5　○と印せるは墨にて故翁本に校せる也但書名をあけす。(以上、埴色)

6　□故翁本に墨にてイと印せる本(朱)

(ハ)同冊末、炁部の奥に、埴色、朱両筆にて、

安政六年以師翁手沢本類聚本等校合了　間宮永好　（以上、埴色）

類聚本ハ此次に冬部を加へて上巻とす

（以上、埴色、但し第二行目ハ類聚本トノ校異ニシテ、永好校語ニハ非ズ、参考マデニ附記ス）

松舎蔵以原本校合了　都止布（朱）

(ニ)第三冊、前遊紙裏の右肩にも、

1　墨朱の二色をもて校合せるは。もとより此本にしるせる也。

2　ムは師翁本ニ書名ヲ挙スシテ校シタル也　イハ師翁本ニイ□トアル也（以上、埴色）

と、四ヶ処にわたり永好の校語が存す。

本書―源輳令写本―を間宮永好が如何なる経由のもとに手沢するに至ったかは現在知るべくもない。しかし、源輳令写本文の手跡と永好の校合に加え周密な書入れの小振な書体とは明らかに相違し、その間には該本の入手の経過があったのであり、該本の永好転写・校合のごときは想定しがたい。

扨、上掲校語は可成り繁雑にわたるものであるが、その年次より追えば、まず、(ハ)記の安政六年、師翁―小山田與清―手沢本の「類聚本等」との校合が終了し、更に三年後、イ記の文久二年三月迄の間に、故翁校本―與清弘化四年三月没―に拠り、その校合を精密たらしめたものである。そして、その校合本の凡例とも称すべきを第一冊及び第三冊の前遊紙に要約し誌しとどめたのであろう。詮ずるに、その校合は類聚本と故翁校本との二本に拠るものであると云えようか。

そのひとつ、類聚本に関するの記は(ハ)項と共に(ロ)項4―ル・墨符―であり、附校には欠脱部―後述―が存するが可成

り詳細にわたり、本書本文との異同を提示している。

次の、故翁校本とは、(イ)項の総括の許に、(ロ)項2—サ符—・3—イ・ム符—・5—○符—・6—□符—、と推定される。3—イの「イ」も6—イと対するものであろうからして故翁校本の校異であるとみて差支えはないであろう。又、第三冊の(ニ)項は一括する前にして主要校合の跡を備忘附記したものであろう。従って(ロ)項1・3に対応するものであり、未だ詳記するにはいたっていない。

本書の右記校合記は、一見相当に複雑な趣を呈するごとくであるが、実際に本書を繙閲するに、(ロ)項に細別する、2・3・4の校異が主なるものであり、5・6の本文校異は極く僅少にして各数例を見出すにすぎない。但し、備考欄にて述べるが眉欄書入れ附注には5—○符を附するものと無符のものとがあり、その類別上同符を印したるとすれば、同符書入れは故翁本に存し本書に転写されたこととなる。しかも多出するのである。しかし、同書入れには、○符中にも「○永好曰。佐保山を棹に云々」(八歌)、「○永好曰。七種粥は云々」(三八詞書)など記名するもあり、一方、無符書入れにも「故翁曰。ゑこのうねは云々」(二六歌)と誌すもありて、「故翁曰」と断る以外は、其の大方は永好の新たな附注とみるのが自然であろうが、当該附註について参照されるのは、後述する国立国会図書館蔵文政十二年内藤広前写岡田希雄書入本である。該本希雄書入れの過半は本書のそれと類同し、同氏も永好同様に小山田與清本—或はその転写本—などに拠り、同本の校合・書入れを移写したものと推定される。従って、両書の照合により與清校合・附註の実体は略確認されるのである。それによれば、○符中の「永好曰」の書入れは一切見出せず、岡田氏の直接に依拠したのは此の永好書入本ではなくして右の推測のごとき伝本であったのであろう。結句永好凡例に云う「○」符は本文校合に限定されるべき簽符であり、欄外書入れにまで及ぶものではない。猶同書入れと第一類契沖本系との関聯については

岡田本解題にて概括することにする。

扨、更に留意されるのは、(ロ)項3・(ニ)項2—ム符の校異である。その特徴的な例とし目につくのは詞書の結び—よめ。る、よ。める—である。それは契沖自筆本系に看る独自な結び句であった—同解題備考参照—ことから推測し、故翁校本の「書名なきもの」とは、該本系の一本であったかの可能性があるのである。そこで、本書のム符校異を契沖自筆本と照合するに、当該箇処は該本墨筆本文、又一部朱書校合とも、纔かの例外は存するが殆んど全てが一致し、該本系書写本との対校が施されたことが明らかである。該本系書写本と記したのは同本の転写諸本に於ては契沖朱校箇処を墨本行とするところが極めて多く所見され、その本行化された本文に拠り校合した結果、同朱校部分も自らム符校異として傍書されることとなったのであろう。更にム符簽を印さぬ、勅撰集以下諸集又歌合等との校合、詞書の補記などに於ても随処に契沖本系のそれと同一であり、その凡例に誌す校異の一端は—而も其の甚だ多例である—本書に移写されているのである。しかも可成り綿密に全巻—但し本書は第五～八の四巻校異書入れを欠く—にわたるのである。しかし、契沖本系本文すべてについての校合という方式をとるのではなくして、あくまでも源輳令写本本文に則しての校合であり、時には、(ロ)—1墨符、(ロ)—2サ符、(ロ)—3イ符、等を踏えての比校でもあり、契沖本系と同異文の場合にはム符を失するところが散見されて、その校合は一種重層的な形態をとっている。当時一般の校勘方法でもあったのであろう。たゞ稍々不分明なのは、同凡例に「ムと注せるは。故翁校本に書名なきもの也」と断りながらに、一方、秋部四三詞書・歌を上欄余白に細補し「契沖本。異本」(埴色)、雑部上三三歌を行間に追補し「此哥契沖本にて補。」(埴色)、同三三四作者「永縁(ルヒ(埴色)) 契沖本此名あり。(埴色)」、等と契沖本と明記する処も見出されるのである。如何なる理由かは審らかにしがたいが、「師翁」即ち小山田與清その人の備忘の校勘であれば細部にわたる異同には「契沖本云々」

のごときを敢て附注しなかったのでもあろうか。ともかくも、間宮永好の校合・書入れ移写の段階では不分明なるまゝに残されているのである。後述の岡田希雄校合書入本では同じく與清本に拠りながらに、本書に見るム符のごとき略符をも印さず、その対校本の経由を記していない。が、かく契沖本は後々までに混入揺曳するの錯雑化は今後とも留意されるところである。

概ね間宮永好の校合は右述にてつきるが、その比校傍記は現在茶褐色に近く埴色とでも称すべき墨色を呈していて、(ロ)項1の原本校異の朱墨両筆の校異と識別されている。以下、原本文と永好とのそれは上記の色別を附し弁別してゆくこととする。

この永好の校合傍記は—元来の朱墨校合は勿論散見す—何故か第五祝部後半—七〇六・七〇七辺—より恋部下巻末—三四三—迄の間は全くこれを逸している。[註三]関根氏は其の事に関聯して、

所が彰考館には、小山田與清が和装群書類従三冊に書入校合を施した散木集が蔵されてゐて、この書入は轅本になした永好の書入と全く一致するので、永好の云う師翁本とはこの與清の書入類従本であり、従つて與清本の本文は群書類従なることが判明した。なほ永好は與清の註記考証をも写してゐるから、この永好本は、居乍らにして與清本をも見る事が出来るのである。但しどういうわけか永好の書入は祝部あたりまでで中止し雑の辺から又始まつてゐる。與清本にはこの間も継続しているから、中絶の分は與清本を以て補ふべきである。

と述べられている。永好校語(イ)項に双行細註する「此本今水戸家一献上。彼御文庫ニアリ」の記と対応するものであろう。ただ氏も疑問とされているごとく此の間に故翁校本の移写を欠く事情は釈然とせぬまゝに残るのである。且つ現在、彰考館文庫訪書の際、該群書類従本につきお伺いいたしたところ、当該書は見あたらず、その詳細の検討は不明であり、氏の

御調査の結果を再記させていたゞくにとどめるのほかはない。が、前記したごとくに岡田希雄校合本には本書の右の欠陥部分も存し、現在両書併せ補完し得るのである。

印記、各冊巻首に、「間宮之記」瓢形朱印、「間宮／文庫」方形朱印、「松井氏／蔵書章」方形朱印の両三顆が捺されている。

本書の本文は上記のごとくに稍々煩雑な経過―重賢書写・松舎蔵本校合本に更に永好の與清校合本による数種の校記移写になる―が重層しているがために、その扱い対処には充分に配意されねばならないものがある。それは又一方江戸後期書写本の多くが辿る伝本状況の一般でもあったのであろう。それら諸点を留意し、以下に本書本文の原形を閲してゆくことにする。

例に倣い本書の欠落本文について、永好の校合傍記を欠く場合には書陵部A本を以て傍記掲示し、必要に応じ附註することにする。

1　家綱サ春部一六七作者　埴色細補、サ・ム符ハ上掲永好校合凡例ニ見ユ比校本略符ニツキ以下省略ス

2　雨中時鳥

これきかんこせのさやまの枕かられ(ル埴)に雨もしの〻(みゝム埴)にくき〻(ママ)鳴也　今一首イ本ニテ補　夏部三四詞書・歌　墨本行、上歌・附注共ニ墨筆ナレバ源輳令写本ノ原形デアルガ附注ノ記ニヨリ原本ニハ欠員歌デアッタト推測サレル

3　月前自秋涼(ル諸本共ニアリ)　夏部三五詞書　埴色上欄細補　「秋」右傍ニ「ム无」ト校ス

4　明ほのに鹿のまちかくきこえけれはめつらしさによめる　契沖本。異本。

朝戸明て立出るしかの声きけは跡つかひにもきたりける哉　秋部四二詞書・歌　埴色上欄細補ス

5　やま田にしかのなくを聞てよめる

炑の田のあせふみしたきなく鹿はいなむしろをやしきてふすらん（しのふらんル）　同部四五詞書・歌　上欄朱補ス、傍記校ヲ除キ源蓺令写本校合ト見ユ

6　かへし（ル）　冬部五八一詞書　行間朱補　5ト同シク同令写本校合ト見ユ

7　（ゆりはな）神祇八六一作者　追補ナシ、書A本落丁ニヨリ阿本本文ヲ掲示ス

8　（ひまもなき網にも鳥のおとろかてあそふは風に花やちるらん）釈教之部イ九六〇歌　追補ナシ

9　（おんな）恋部上一〇〇八作者　追補ナシ

10　（寄鳥恋）同部上一一三詞書　追補ナシ

11　（阿闍梨）雑部上一三〇四作者　追補ナシ

12　（此哥契沖本にて補）わきかへりなみちへさそふたきつせにたへてもたてるいは枕哉（千重さわくイ）　同部上一三一歌　行間埴色細補ス

13　（家道朝臣）同部上一三六作者　追補ナシ

14　修理大夫（墨）三宮御製云々（同）　同部上一三八三作者　行間埴色細補ス

15　……昔をよそにきゝしかと。さすかにみよのはしめより（わかみのうへになりはてぬ）……　雑部下一五八長歌　行間埴色細補ス

16　まことにやのりのはしよりきちにけるム（ママ）　同部下連謌一五九〇唱句　行間埴色細補ス、上欄ニ「原本此行落文」ト朱注ス、同令写本書入レト見ユ

17　これを連哥にきゝなしてル　同部下同一五九三和句詞書　行間埴色細補ス

18 殿義入寺ム　同部下同一六〇九唱句作者　行間埴色細補ス

以上、顕著なるもの十八例におよぶ。第四類本系としては欠落多き伝本といえるであろう。

(イ)まず、伝存本中、本書にのみ所見する欠落本文は、3・5・6・8・10・17、の六例に及びその他小異の誤写・誤脱と共に稍々末流本たるの感をまぬがれない。その中、3・17の小振りな筆跡、埴色の細補は間宮永好の類従本による補入であり、やゝ大振りな朱補本文―5・6―は永好の凡例に記す源輳令写本に既に存した校補本文であると推定される。この両朱補には校合伝本を附注していないが、そのほかにも同筆の朱補・校異が散見され、その半ばには「イ」符を附している。例えば各巻内題に朱傍記する「散木奇謌集和イ(朱)」、第五巻の「別離之部イ(朱)」、第六巻の「釈教之部イ(朱)」などのそれである。前者は一部伝本の巻五のみに纔か検出するにすぎず、後者「之部」のごとき伝本は皆無である。源輳本に見る両朱補の校本は未詳というほかはないが、前者はことに書名たるにより留意されるので此処に附言しておく。

又、2例三四番詞書・歌はその脚注に「今一首／イ本ニテ補」とあり、同葉半面十一行中の本行として書写されているのをみると、源輳云う「師翁」本にかく書写されていたのであろう。その点、同師翁本は上記六例と共に2例をも欠く伝本であったと推量されるのである。

(ロ)、次いで、13・15の両例は類同伝本甚だ尠くして、前者は第三類本系、岸本由豆流旧蔵本―但し、朱細補―・初雁文庫本に、後者は同由豆流旧蔵本・類従本・〔萩原宗固〕本と、各両三本にのみ検出される処であり、単なる伝流上に於ける誤脱本文であろう。15例は埴色細補であるところから永好のそれであるが、その対校本を印さず未詳ながら永好の師翁本、小山田與清本からの移写であろう。

(ハ)又、7・9の二例は(ロ)例同様に第四類本系には検出されず、前者7は第二類本系、松平忠房旧蔵本・林羅山旧蔵本―但し、朱細補―・岡山市立中央図書館本・業合賢豊書写本と異例な所出であり、本書との交流は想定しえざることから偶然の符合であるとしか考えられない。後者9は第一類本・第二類本・第三類本各系と、本類をのぞく各類に頻出所見し、前者とは稍々趣を異にしている。単なる偶然による結果とのみ断定し得ず未詳というのほかはない。

(ニ)、残余の1・4・11・12・14・16・18、の七例は第四類本系の中、書陵部A本・阿波国文庫旧蔵本の両本を除く諸本に全てに所見する欠落本文であり、本系類の一特徴として呈示される処である。[註四] しかし、此の第四類本系以外には別系類に其の欠落は以下のごとくに散見される。即ち、1―一六七作者名は第二類本系の業合賢豊書写本に、11―一三〇四作者名は第一・二・三類系本に、12―一三三歌は第二類本系の葉山信果本（道直本ニテ藍筆補）、第三類本系の岸本由豆流旧蔵本に、14―一三八三作者名は同系の葉山信果書写本（道直本ニテ藍筆補）・第三類本系の岸本由豆流旧蔵本に、16―一五九〇歌は上記信果本（同藍筆補）・上記由豆流本に、18―一六〇九作者名は同信果本（同藍筆補）・同由豆流本にと間々点在所見し、いずれも江戸後・末期書写本が経由した交流或は写誤の錯綜する状況をとゞめている。

此の(ニ)項は11項をのぞく六例のいずれも永好の小山田與清校合本による埴色補校であるが、たゞひとつ留意されるのは、12―一三三歌に附す「此哥契沖本にて補」とある記である。此の外にも既述した「永縁ル无 契沖本此名あり（埴色）」（雑部上一三四作者）のごとき附記も見出されて一見永好は契沖本系伝本を比校せしかと受けとられるのであるが、その(ニ)項に限ってみても此の六例の欠落本文は全て契沖自筆本には書写されながらに校合の対象とはならなかった、その事より推測するに、それは寧ろ偶々主要比校本たる小山田與清本の附記をその儘に移写したものにすぎなかったと云うべきであろう。永好の校合凡例のごときに見える「ム」符―「ムと注せるは。故翁校本に書名なきもの也。」―はさきに言

及したところであるが、略契沖本系の本文によるとしか想定出来がたいとすれば、與清の校本自体に於て、「ム」符、「契沖本」の両者は既に弁別されているところではなかったと推測せざるを得ないのである。もっとも契沖本系本文と同一系統の他伝本に拠るとすればことは別であり、契沖本の依拠原本のごときを想定すれば其れも又否定しがたいが。かく煩瑣言及したが、此の期の校合伝本が纏絡する一面として把握されずしては対処しがたいことである。他符についても同様であることが予想されるのである。

以上、本書の欠落本文と其の再度にわたる校合・補入についての概要を誌したが、次に本書の特色として呈示される異文は、第一〜三類本系は云うまでもなく第四類本系に於ても書陵部A本・阿波国文庫旧蔵本等には見ず、同類本の中では、〔萩原宗固〕書写本・群書類従本系諸本、と両三本系に所見する。それは異文とするより誤謬本文とすべきであろうがその特徴的類同性をなしている。本書に施す校合本文とを併せ掲出すると、春部二六三〜二六六番の間は、

大弐長実。卿ル(埴)の家ル(埴)白河。にてほとゝきすをよめ。るりけム(埴)

おとせぬは待人からか時鳥たれをしへけん数ならぬ身を　二六三（続古雑）

ならの哥合に人にかはりてサ／ム同（埴）

時鳥なくうれしさをつゝめとも袖には声もとまらさりけり　二六五（続古）

左京大夫経忠の八条の家にてよめる

時鳥声待かねてゆふけとふ道のうらにもことよきものを　二六四

ならの哥合に人にかはりて郭公不乏（本ノマヽ）（朱）へるム（埴）といふことを

いまこそはふたむら山の時鳥声おりはへてあやになくなり　二六六　を（朱）れイ（朱）・ル同（埴）

と書写されている。

此の両三本系を除く伝存諸本はすべて、「サ・ム同」、「サ无」と附校するごとく、三五詞書は、「ならの哥合に人にかはりて」（書A）と見え、三六詞書は、「郭公不乏といふ事を」（書A）とあるのである。扨、右の三五番歌は〔天治元年春〕権僧正永縁花林院歌合　郭公　一番右　中納言君（教縁）歌として出詠されている。もっとも甲本廿巻本には、下句「空には声もとまらざりけり」と相違するが、乙本書陵部とは全く一致する―平安朝歌合大成6―。孫教縁に代って俊頼が代詠したものであろうから、本集出典を同歌合とみれば本書以下両三本系の詞書は明らかに粗忽な過誤である。

因みに、本歌合書名は甲本に「永縁奈良房歌合」、乙本に「奈良花林院歌合」とあるので―同上書―三五詞書とも抵触しない。又、同書「副文献資料」中の補6に本書のごとく三六詞書・歌本文を挙げられているが群書類従本系に拠られたのであろう。

此の錯誤の経由は辿るべくもないが、後々村上忠順「散木弁謌集標註」に於て、その原本たる葉山信果書写本の正文を類従本により改竄され本文として採用されるがごとき結果にもいたっているのである。

以上、本文は基本的には第四類本系諸本と共に類同するが、上掲諸例のみならず語句上の異同もさることながら誤写多き伝存本であることは否まれない。

次に、本書の排列であるが、第四類本系も各々多少の変相を示し、書陵部A本を軸に阿波国文庫本系、群書類従本系、〔萩原宗固〕書写本系とに略分類され、本書はその中では〔宗固〕本に最も隣接する。以下に掲示すると、

㈠

殿下にて子規の哥人々よませ給けるに

一(埴)ム(埴)より ムイ(埴)はしめなきみのはしめより時鳥あかてもよゝをすこしつサ/ム(埴)ける哉 夏部三三
三(同)夫如此(埴)なかすともなきつといはんほとゝきす人わらはれにならしと思へは 同三四
二(同)時鳥声待つけて聞ほとや人にわかみのうらやまるらむ 同三五
五(同)しとみ山風はおろせと時鳥声はこもらぬ物にそ有ける 同三九
六(同)ほとゝきすまちしわたらはやつはしのくもての数に声を聞はや 同三六
七(同)ほのめかすうきたの森の時鳥思ひしつ(しのひ音に夫(埴))みてあかしつる哉 同三七
四(同)ほとゝきすなかぬなさきの杜にけきル/イ(埴)きていとしも声をほゝめしイ(朱)つる哉 同三八
八(同)かきねにはもすのはやこゑたてゝけるしてのたをさにしのひかねつゝ 同三〇
にイ(朱)おのゝけりサ/イ(埴)りル(埴)

(二)

同部 二六三・二六五・二六四・二六六、上掲、本書・〔宗固〕本・類従本系、詞書誤謬ス

※

たからのあみそらにあまねくあり 釈教之部(朱) 九六〇詞書、歌欠

こくらくは大空さへそなつかしき匂ひかをほらぬ物しなけれは 同九六一歌

諸のかうはしき香あまねくにほふ 同九六一詞書

くるしともうしとも物を思ひしは見し夢の世の心也けり 同九六二歌

心にも身にもなやましき事なんはなるゝといへり 同九六二詞書

仏の御声たへにえもいはすといへり 同九六三詞書

いなつまの光のまにもなるかみの声にとくらん法をきかはや　同九三歌

の形態が所見される。

㈠の排列は書陵部A本一本を除く第四類系諸本ともに共通し、第一類～第三類系諸本―一部例外は存するが―に看る、三三・二五・二四・二八・二九・二六・二七・二〇、の排置と異同するのである。上掲本文の歌頭に永好の附記するム符「一ム・三・二……八」は既述したごとく第一類本、契沖本系のそれであろうが、ともかく本書排列は第四類本系の一特徴をなしている。勿論、記すまでもないが書陵部A本歌序は同番号を追い並列されている。

㈡は上述したごとく〔萩原宗固〕書写本・群書類従本系と本書に於いて詞書の過誤は存するものゝ、本集伝存諸本は書陵部A本と阿波国文庫本とが歌序番号に従う以外は、各類共に上記排列であり変遷をみぬものである。

※は本書のみに看取される歌序であるが、本書は九〇歌を欠逸すると同時に、九二歌につぎ九二・九三詞書を併記するなど一見して其の失誤は明らかである。又、当然のことながら、本書の序列次第に読めば、各詞書と歌意とは照応せず、伝写経過に於ける錯誤というのほかはない。

そのほか、本書には二六「五月雨はなつかしかりし云々」、二七「おほつかないつかはるへき云々」の両歌頭に○符を附し、二七→二六への移行符を共に埴色にて指示している。此の二五・二七・二六の歌序は群書類従本系諸本にのみ所見する排列であり、本書の場合も永好が同書に拠り比較した跡であって源輳令写本元来のものではない。

本書の歌序排列は以上であるが、此の点に於ても※のごとき明白なる失誤が見出され、上記本文と共にあやまり多き伝存本であって必ずしも善本とは云難いが、次述〔萩原宗固〕書写本とは比較的相隣接し、書陵部A本、阿波国文庫旧蔵本とは勿論のこと、群書類従本とも稍々相対する第四類本系の一本として留意される。

猶、間宮永好による校合については煩縷におよぶので其の実態は上述の略記にとゞめ省略するが、永好校合凡例に見る箇条中、「サ」符・「イ」符・「○」符・「□」符の四項の各校本は現在の処何れの伝本なるやを審らかにしがたい。又、同凡例外に、雑部上三八二「樊於期か荆軻にかうへ云々」と「古本」（墨）と一ヶ処を見出すが、「古本」も又未詳というほかはない。墨書校合の記であれば源輳令写原本のそれであろう。

備考

本書には主に上欄余白に、(イ)源輳令写原本書入れ、(ロ)「故翁曰」と記す附註、(ハ)「永好曰」と記名する追註、(ニ)無記名註、の書込みが可成り詳密、随処に施されていて其れは尠なからず本集歌解の参考に供するものとなろう。その中、(イ)・(ロ)は共に一・二ヶ処にすぎず、(ハ)も又七・八ヶ処にとゞまり、無記名の(ニ)が其の殆んどである。(ニ)も又、恐らく「師翁」記を附さないところから永好の註するところと推測するのが自然であろうが、前記したごとくに岡田希雄校合本に存する小山田與清註と過半一致するところから該書からの移写とする処が多くを占めるのである。

ところで(ロ)〜(ニ)は永好の移写と自らの加註であるにもかゝはらず、既述の本文校合傍記と同じく第五祝部後半から恋部下巻末の間、全く此の書入れをも欠いているのである。不審というほかはない。或は彰考館蔵與清書入本が解明してくれたことであろうが現在伝存を明らかにしない。が、恐らく此の欠陥部分については右記岡田本に拠って略補完し得るものと推測される。

ともかくも、右書入れ註記の一部概要を掲示し紹介することにする。

(イ)の朱書入れ一例をあげると、春部三〇詞書、「かは堂」に、

裘をきたる僧ありしよりかは堂といふよし山城名勝志にくはし（朱）

と、簡単な説明を施すにとゞまる。

(ロ)例としては、同部三六歌第三句「ゑこのうねを」に、

故翁曰。ゑこのうねは。恵具の生たる田のうねにや（埴色）

と注している。「故翁」と記すは一例を偶目するにすぎぬ。

(ハ)項の追注は、

1 永好曰。佐保山を棹にいひかけたるは。天喜二年四月蔵人所哥合紅葉（よみ人しらす） 今はたゝ紅葉の錦たつた姫染かけつらんさほの山へに。清輔初学抄。さほ山。棹ニソフ」なとあれは。此頃より専になれる歟 春部八初句「さほやまに」

2 赤き粥。永好曰。七種粥は正月十五日食ふものにて其品々式にあり。是をあかき粥といへるは。此比は七種はすたれて米と餅米と小豆なとになれるにや。枕草子に餅かゆのせく云々。とみゆるも此十五日の粥の事也。この哥にもち月といへるも餅をかねたる也。同部三六詞書「あかつきかゆ」（朱）（埴）

3 永曰。こくらんと。とあるは誤にてル本に蔵人とあるよし。さて蔵人はクラウトとよむ。読法なるを。クラムドとかけるは。むけに物しらぬ書さま也。後の誤写なる事論なし。冬部六七詞書「こくらんと」（蔵人とル）（埴）

4 たけのみやこ 永曰多気都にて斎宮の御居所を云。伊勢国多気郡也 雑部上三三九第二句「たけの都は」

5 和（コタヘ） 永曰かく読へけれと。和しとしをおくれゝはワシと読める也和韻の意にいへる也 同部三三六詞書「和」

6 永曰なの誤也。もと舟字にて書けるを。筆者仮名にかくとてフネとは書けん。哥も亦しかなるへし 同部三九二

詞書「ふねてらに」・初句「ふね寺に」

7 忍　永曰堪忍の意の事也　同部二四九第二句「忍ひかたきに」

8 永曰へしは押折事なるへし。万葉にをみなへしを姫押とかける。即押をヘスとよめる也。　雑部下二五八歌第二句「みなへしもちて」

等、偶目するところである。語釈・訓、誤写の訂正など次第に訓釈等に拠り本文校訂の方向を見るのである。纔かな記名例にすぎぬが更に無記名の多き書入れを看るに歌意の質疑にはじまる書写本文の整定は此の期一般にみる傾向ではあるが、本書の場合漸次周密の度を深めているのである。因みに、岡田希雄校合書入本に於ては右記1の引用書本文を略同じくするのほかは掲出例すべてこれを所見せず、該本書入れ移写は直接本書に拠るものとは想定し得ず、寧ろ小山田與清校合書入本からのものであろう。

㈡無記名の書入れは其の箇処多きにわたり、参考資料たるも、既に與清本において契沖本からの転写も混入し、いさゝか錯雑するので、此処では省略せざるを得ないが、契沖本書入れとの関聯は本書をも交え、後述の岡田希雄校合書入本の処にて概括することにして、いまは纔か冒頭数例―契沖本書入れと異る―を掲示するにとゞめる。

1 。貧道集　立春歌　いつしかと末の松山かすめるはなみとゝもにやはるのこゆらん。教長卿は。聊後輩なれは。此散木のを盗めりともいふへけれどさはあらし。全く暗合なるへし。　春部五歌　岡田本、教長卿以下欠

2 用は。モチヒの仮名ならぬ事漢語音図に論あり。可従。経衡卿集にもモチヒの仮名の証となる哥二首あれど。なほモチヒ也モチヰを可用也。　同部六歌第二句「世にももちひの」　岡田本、本注と異ル

3 袖中抄。此哥ヲハ。俊頼霞とてヨロシキ哥と申ケリ。仍左京兆モ詞花集ニ被入タリ。是ハ松ノシツエヲ蜘手ト

ハ。橋ノ柱ニツヨカラム為ニ。スチカヘテウチワタシタル木ヲ云ナリ。　同部一〇歌　岡田本、本注ト同ジ

4　。夜ごし。俚に云。よひごしに前日つめるを云。本行の花とあるはよしなし。両本どもに。はつほとあるかたしかるへし。初穂にて初物なるよし也。それを送り参らすれば。賞翫したまへと也。後拾一。正月七日周防内侍の許に遣しける。藤三位。数しらす重なる年をうくひすのこゑするかたのわかなともかな。　同部三歌第四句「なつなの花を（はつをム・イ同（埴））」岡田本、本注ト同ジ

5　古写二本ともにほふらん。と有かたよろし。かをるらんにては調わろし。　同部四第五句「かにかほるらむ（にほふ墨・イ同（埴））」岡田本、片仮名交り文ナレド本注ト同ジ

6　。本行。くるは上よりつるを。つゞけかける誤也。つると有本そたゝしき　同部八第五句「尋つるかな（くル・たム（埴）又イ如此（埴））」岡田本、片仮名交り文ナレド本注ト同ジ

と見え、数例にすぎぬながらも、本書と岡田本との附注は相互によく一致し、例示以外の全巻―但し本書巻五～八の間、書入れを欠く―も過半を共通し、其の源は小山田與清校合書入本に発するとみるほかはないのである。いわば、本書書入れは、先ず契沖附注にはじまり、更に與清による増補附注によって成った同書入れを略其儘に踏襲し、わずかながらに自説を書加えたのが、本書、間宮永好校合書入本の実態であろうか、と推定されるのである。

註一　この埴色校記「弃歟後准之故翁説」と「奇謌」を「弃謌」に訂すの説は本書を看るの限りに於ては故翁説―小山田與清説―ということになるが、此の「弃謌」説は疾く契沖説として其の自筆本に「散木奇謌集第一（弃歟後准之（朱））」と見え、以後第三類蘆庵本系等に屢々散見するところである。間宮永好は師與清の傍記校を故翁説として受けとめ、かく記したのであろうか。後述するごとく、校合本文又書入れ附注にも契沖本系との結び付きは否定しがたいものが存するのである。

註二　此の「都止布」の意味するところも又分明でないが、此の校語からして、校者の署名位記と推測するのが自然である。とすると、源輳奥書に云「而后再三校合」の校者を指すのでもあろうか。全くの臆測にすぎぬが、「輳」の意、アツム・アツメル、から「つどふ」とでも称呼したのではなかろうか、即ち「源輳（ツトフ）」かとも訓んだのではと。

註三　関根慶子氏「散木奇歌集の研究と校本」　明治図書出版株式会社　昭和二十七年

註四　春部二六作者名の欠落は第四類本系のほかに、纔かに第二類本系の誤脱多き一本、寛延二年業合賢豊書写本に所見される。これも又偶々の誤脱の一例であろう。

秋部四三詞書・歌の欠落については第一類本契沖書写本に同歌下句を朱補するのが想起されるが本系類との関聯、経由等は勿論想定しがたい。

慶応義塾図書館蔵　伝萩原宗固写　存十巻

袋綴、二冊。柴色表紙、但し、猶原表紙に香色絹布にて覆表紙とす。竪二十七・三糎、横十八・一糎。料紙、楮紙。字面高サ約十九・六糎。毎半葉十一乃至十三行に和歌一行書き、詞書二・三字下げに書写する。本文墨付、上冊八十丁、下冊九十四丁。

題簽、表紙左肩短冊に、上冊「萩原宗固筆／散木奇歌集（自一二／三至五　全部十巻）（所収巻双註朱書）」、下冊「散木奇歌集（自六至八　九十終）（同上）」と墨書して後補貼付している。上冊第一紙表に、「萩原宗固筆」の追補貼紙を附す。

内題、先ず巻初に現存本中に間々散見する私家銘たる「俊頼朝臣家集　全十巻」と第一行に記し、次行に所謂書名「散木奇謌集巻第一（〜十）春部　（〜雑部下）」を記す。但し、「巻」字は第一巻のみにして以下これを欠し、第一・二類又前掲静嘉堂文庫本、次述群書類従本系と同じくしている。更に本書は、巻三に「第」字・巻九に「奇」字を佚

脱している。

その部立表記は、群書類従本とは次の二・三点を除き同じくする。その一は、第五巻の小部立を、本書が「旅宿一本作羇旅部」とあるに対し、同類従本は「羇旅部」と記し、本書には一本の校記を附している。又その二は第六巻の小部立を「釈教」と記すが該本は「釈教部」と印している。その三は該書が第九巻に「雑部」とのみ刻し、「上」字を欠脱するの些事にすぎない。

本書は奥書を誌さず、その伝来・書写年紀・筆写者を確認しがたいのであるが、まず、本書筆写者が、後補題簽、追補附箋に云う「萩原宗固」その人であれば塙保己一との学統上の関係よりして群書類従所収本への交渉、関聯を当然のことながら想起される課題となる。寡聞にして現在猶確証し得るところではないが、静嘉堂文庫所蔵本のなかの、「後撰和歌集」二冊、「後撰和歌集増抄」三冊、の両部が共に宗固筆として録されている。殊に後者は宗固選述書であり、且つ「温故堂」旧蔵本とあれば、その伝来から信憑性は極めて評価されるべきものと判断される。しかし、又前者には、「百華庵主人」の識語が本文同筆にて誌され、共に期を同じくするがごとき写本であるところからも宗固書写を否認しがたいにもかゝわらず両書は如何様に検するも同一筆跡とは看做しがたい。又、一方宗固筆と称せられる短冊数葉を参看するに両書同類の二種の書風を漂わせ、結句確認し得ないのである。しかしながら、本書にかえって、その書体を対比するに上記書風のいずれとも明らかに相違し、江戸後期国学者風の流れを汲む稍々円味を帯びた温雅孤小の筆跡であり、宗固流のそれとは云難く、本書の伝称筆者はつまるところ不明というのほかはないのである。かく贅言したのは、後述するごとく、本書本文が、比較上のことがらとはいえ、同類従本のそれと相隣接するがごとき諸点が検出されるところからである。その書写の年代も江戸の中・後期にかけての伝本であるが、群書類従本との伝写

上の交渉は否認されるべきものと考えられるのである。

印記　両冊巻首に、「刀水書／屋所蔵／図書記」、「快馬／度刀水（シ）」の方形二顆と、解未詳方形蔵書印を捺す。同館蔵渡辺刀水文庫の一本でる。

上掲諸本と同じく本書の顕著なる欠落本文を掲出すると、次のごとくである。掲示番号は前記静嘉堂蔵源輳令写本に於ける当該番号である。又、※本書又は類従とあるは第四類本系においては本書、又は群書類従本に検出する欠脱本文である。

1—春部一六七作者、4—秋部四三詞書・歌、※本書—・・経兼（書A）祝部七四六作者、※本書—・・・・中宮上総（書A）恋部上二〇九九作者、11—雑部上三〇四作者、12—同部上三三二歌、※本書・類従—・・永縁（書A）同部上三三四作者、14—同部上三六三作者、15—雑部下一五八長歌語句一部（永本埴色細補本文）、16—同部下連謌一五〇唱句、18—同部下一六〇九同唱句作者

以上、十一例が散見される。

本集伝存本の中にあっては第一～三類本系諸本に比し欠落本文—書陵部A本に対し—甚だ寡少となり、異同著しき前八巻に於ては僅か四例を見出すにすぎず、後二巻に集約されて、第四類本系の本来の姿に近似する様相を呈示している。

前掲源輳令写本とは該本十八例中、八例—1・4・11・12・14・15・16・18—を同じくするにとゞめ且つ祝部七四六作者名、恋部上二〇九九作者名、雑部上三三四作者名を本書が佚脱し、該本とは同系ながらも稍々其の間に逕庭をみるのである。

此の源輳令写本に対し、群書類従本とは上掲欠落箇処の限りに於ては祝部七四六作者名・恋部上二〇九九作者名を本書が欠

き該本に存するのほかは全て同じく欠脱し、其の類同性は否みがたいのである。勿論、両書本文は後述するごとく歌序排列、又は独自異文、語句上の異同は尠なからず散見され転写上に於ける直接的関聯は想定しがたいが、両書は共にある類縁上に展開した伝本であったことは予想されるのである。

少々煩雑にわたるが、本書の右記欠落本文は本集諸本との間に各系個々ではあるが一部類同する処も認められる。

まず、前八巻当該部の、1—一六七作者・4—四三詞書・歌の両欠落は書陵部A本・阿波国文庫旧蔵本を除く第四類本系に見出される一特徴ともなっている。一方、※印七六作者名は同系にはすべて存し、寧ろ第一～三類本系諸本に同じく此れを欠くのであるが、本書の場合は単なる誤脱であり他系類との関聯は想定しがたいところであろう。又、※印一〇九作者名は本書のほかには、第二類本系の業合賢豊書写の一本に検出されるが、該本は誤脱多き伝本であり、本書同様の書写上の事柄に属すものであろう。

後両巻—九・十—に於ては、11—二三〇四作者名は第四類本系—上記二本を除く、以下同—のほかに第一・三類本系諸本、又、第二類本系葉山信果本・野口道直旧蔵本・簗瀬一雄氏本・岡山市立中央図書館本に此の欠脱が見出される。12—二三二歌は同じく第四類本系のほかに第二類本系葉山信果本・第三類本系岸本由豆流旧蔵本の両本にかぎられ欠脱が散見される。※印二三四作者名の欠脱は群書類従本系と共に第三類本系諸本に検出されている。14—二三八作者名・15—二五八長歌語句一部・16—二五〇連謌唱句・18—二六九同唱句作者名の欠脱はいずれも此の第四類本系のほかでは第二類本系葉山信果本・第三類本系岸本由豆流旧蔵本に散見するにすぎない。

かく両巻の欠落本文は二・三の例外を除き—11の二三四作者名・※二三四作者名—他系類上では散発的に個々の伝本、殊に葉山信果本・岸本由豆流旧蔵本といった江戸も末期に近い伝本に所見され、12・16両例のごときはともかくとして、他

の作者名などはいずれも転写経過に於て惹起された偶発的な誤脱によるものと推測されるものである。元来、此の巻九・十の両巻は、前八巻と相違して異同尠き伝本状況にあり、諸本に看取される欠落本文は寧ろ書写過程に於ける誤脱と想定すべきものであって系類上の対象とはなりがたいと思われるのである。強いて類別すべき点を覓めれば軽少な語句上の異同にあるのであろう。その意味では第四類本系諸本間は此の両巻に於ても異同する処は瑣細なものである。

次に本書の歌序排列に就いてであるが、上掲源輳令写間宮永好校合本に於て言及したごとく春部二六三〜二六六番歌群に看取され、群書類従本系にて定着した同歌群の詞書の誤謬は本書も全く同じくしている。類従本に稍々先蹤する一伝本として重複を顧ず全文を掲出することにする。

大弐長実白河にて時鳥をよめる

をとせぬは待人からか時鳥誰おしへけん数ならぬ身を　二六三

時鳥なくうれしさをつゝめとも袖には声もとまらさりけり　二六五

左京大夫経忠の八条の家にてよめる

時鳥声待かねてゆうけとふ道のうらにもことよきものを　二六四

ならの哥合に人にかはりて郭公不乏といふ事を

いまこそはふたむら山の時鳥声おりはへてあやになくなれ　二六六

と書写され、該書で上述したごとくに、傍点（筆者）部分を併せ詞書を構成している。本文も又、漢字・仮名等の異同を除けば、該書とは二六六歌第五句が「あやになくなり」と終止するにすぎなく全く一致するのである。当該歌群の本文異同は比較的尠いのと共に両書よく類同しているのである。それはともかくとして、群書類従本の本文校訂の経

由は未詳ながら、かゝる錯誤本文を把持する伝存本が時代を略同じくする時期に併存していた事実は注目されることであろう。

他に所見される排列は、前掲源輳令写本に於ける

㈠夏部　二三三・二三四・二三五・二三九・二三六・二三七・二三八、㈡同部　二六三・二六五・二六四・二六六―上掲、詞書誤謬ス

と二例を同じくする。該書㈢―釈教之部(朱)―はその誤脱―九六〇歌欠―、誤写―九六一歌・九六二詞書・九六三歌・九六三詞書―によるものであり、本書は整序されている。但し、九六〇歌は書落し故であろう同筆細補されている。その点を除けば源輳令写本とは元来同一の歌序を示す伝存本であったと推測される。

後述するが、群書類従本とも欠落本文・排列共によく類同するが、上記㈠・㈡例のほかに該書には、夏部に、二九七・二九六・二九八、秋部に、五一〇・五〇九、両例の本集伝存本中に見ぬ独自な歌序と、第一類～三類本系の一基本型として所見される、釈教部、八九一・八九〇、の一例の混入歌序とが看取され本書等両本とを分岐する一点ともなっているのが其の特徴をなしている。

本集伝存本に於て本類、第四類本以外に多少の相違はあれ、各類それぞれの顕著な特異又は独自本文は其の姿を急激に消しつゝ本類本文を形成している方向は否みがたいものが認められる。本書の場合に於ても既述掲示の諸例中、纔かに二例を所見するにとゞめ、例示すれば、

七夕のかへるあしたのしつくにはあまの川なみたちやそふらん　秋部三八歌（書A）

第二句、源輳令写本・阿波国文庫本、書A本同、類従本「かへる秋のしつくには」ト第四類本ニモ異同ヲ見ル

九月十三夜殿下法性寺関白にてよめる　同部三三六詞書（書A）

の本文を示し前系類本系の余韻と聊かの変遷本文が錯綜する跡を残している。其の紛雑する本文の現状に書陵部A本・阿波国文庫本の両本を除き第四類本系の実態を見るほかはないのではなかろうかと暗推を回すのである。

翻って、本書又は源輳令写本は第四類本系諸本のなかにあっては群書類従本系本文へと繋絡する接点的な位置を占める伝本ではあることは否認しがたいが、上記の異同と共に猶語句上の異同は勿論多々検出され、相互に誤写・誤脱・錯誤を含みながらに江戸中・後期の紛紜交錯する本文状況をとどめている伝存本である。

猶書入れは間々集付けを散見するのほかに此の期の写本としては皆無である。

群書類従本―巻第二百五十四所収　存十巻　慶応義塾図書館蔵

袋綴、三冊。淡茶色布目表紙、竪二十六・五糎、横十八糎。料紙、楮紙。無辺無界。印面高サ約二十糎。毎半葉十行に和歌一行、詞書二～三字下げ梓刻する。

版心、「巻二百五十四上（中・下）」、下辺に丁付、第一冊「一（～八十一了）」、第二冊「一（～六十九了）」、第三冊「一（～五十七了）」と刻す。

題簽、表紙左肩に単郭付白紙短冊に「羣書類従　二百五十四上（中・下）」と刷る。

各冊第一葉内題前に、「群書類従巻第二百五十四上（中・下）／検挍保己一集／和歌部百九　家集二十七」と三行に刻書する。又、各冊尾に「群書類従巻第二百五十四上（中・下）」の記を再刻す。

内題、「散木奇謌集第一　春部（～雑部下）」とする。本書は流布基本の本文たるにより、念のため各部立を掲示し

ておく。

第一冊　第一〜四—春部・夏部・秋部・冬部、第二冊　第五—祝部・別離・羇旅部、第六—悲歎部・神祇・釈教部、第七・八—恋部上・下、第三冊第九—雑部（「上」字ヲ欠ク）、第十—離部下（以下小項目トシテ、長歌・旋頭哥・混本哥・折句哥・沓冠折句哥・隠題・連歌、ノ部門ヲ立ツ）

第三冊、雑部下巻末に

右散木奇謌集以織部正乗尹本校合了

と、校記を刻している。

右の校記により群書類従本は三河奥殿藩主松平織部正乗尹（寛政二年八月二十七日没、六十五歳）本によって校合を施されたものであるが、其の稿本の存否は伝聞するところではなく、且つ該校本も寡聞にして同記以外に伝存を知りえず、本集類従本の校訂経由は現在辿るべくもない。同本に傍記する「イ」本校合本文を以て同校本本文に充当するのも短絡にすぎず、何等かの校訂経過は校合傍記以外にも及んでいたのであろうかと推測される。因みに稿本「続群書類従」は、昭和五十三年、書陵部に於て展示され瞥見の機会を得たが、展示書五十五点には四男忠宝、孫忠韶の書写・校合・書入れの跡をとゞめていたのが憶いかえされる。群書類従本本集の場合も又同様であったかと類推される。しかしながら稿本の伝存不明なるまゝ、以下の記述は上記板本に拠って言及するのほかはないことを断っておきたい。

上例に倣い、類従本の欠落本文を以下に略記することにする。掲示番号は同様に静嘉堂文庫蔵源輳令写本に記した当該番号である。

1―春部二六七作者、4―秋部四四二詞書・歌、11―雑部上二三〇四作者、12―同部上二三二歌、※本書・伝宗固筆本―永縁
同部上二三四作者、14―同部上二三六三作者、15―雑部下二五八長歌語句（永本埴色細補本文）、16―同部下二五〇唱句、18
―同部下二六〇九同唱句作者（書A）

等が散見されるほかに、類従本系諸本に所見する独自の欠脱本文として、註一(イ)別離七三四番の

かへし　　経成朝臣

旅衣たちし日かすをかそふれはさやのなか山はやこえぬらん―書A本

が見出される。又、同系諸本にも、(ロ)恋部上二〇〇作者を欠き、且つ次のごとく二〇二作者として誤刻している。註二

又をんなにめして男に給はせけるに

うき身なら人もつらしと知ぬれとことはりなくもおつる涙か

かへし　　四条宮甲斐

かりそめのたえまをさへやうらむへきことはりなきはなみたのみかは

更に、本文の誤刻について此処に併せ誌すと、既述の源輳令写本又伝萩原宗固筆本に於ても看取された、(ハ)春部二六三～二六六番歌群中の二六四・二六六詞書の誤謬は類従本にも検出されたのは両書に於て言及したごとくである。上記両書に於て掲示したので省略する。註三参照されたい。

以上、類従本に所見する欠落・誤刻本文の主なるものであり、同時にそれらは第四類本系に於ける同系の特徴を成すものである。

既述、源輳令写本に対しては、あらため記すまでもないが、※符箇処を除いては、1・4・11・12・14・15・16・18、(ハ)

の各項を類同し、近似する傾向を示している。しかし、両書の間の異同は上記の共通欠脱又錯誤本文以外の十一項に加え該本独自の誤脱（既述）も散見し、猶其間には相当の差異が存して、その逕庭あるを認めざるを得ないのである。

次の、伝萩原宗固筆写本にいたると、上記中、該本に誤脱する祝部七四作者名―経兼―、恋部上一〇九九作者名―中宮上総―の両項と、類従本独自の誤脱(イ)・同じく誤刻(ロ)の両項とが、両本相互の間に看取され、その差異は前記の源輳令写本に比し更に隣接し近似し、該本で記したごとくに両書の本文はある類縁上に展開した伝本であったのであろう。

扨、類従本の歌序排列をみると、

(一)夏部　三三・三四・三五・三九・三六・三七・三八・三〇、(二)同部　二六三・二六五・二六四・二六六―上記、詞書誤謬ス―、※同部　二九五・二九七・二九六、※秋部　五一〇・五〇九、(三)釈教部　八九一・八九〇　()圏番号ハ各類共通当該箇処番号

とあり、既述両本とは※符附印二例と(三)項一例を相違し、本文―殊に伝宗固筆本とは―に比し其の排列は異同顕著というべきであろう。

まず、※符附印当該両箇処は類従本系諸本に検出される排列であり、且つ前者は類従本又は同系写本の誤文である。同板本本文を掲示する。

※符　A

五月雨の心をよめる

さみたれはもりこし水も岩こえて庭もぬまえのそこと成けり　二九五

百首哥中に五月雨

おほつかないつかはるへきわひ人のおもふこゝろはさみたれの空　二九七

五月雨はなつかしかりし水のをとのおひたゝしくもなりまさる哉　二九六

※符　B

月前懐往事

ありし世をむかしかたりになしはて（なからイ）ゝかたふく月を友とみる哉　五二〇

百首哥中に苔をよめる

むくらふのけかしきやふのこけのうへにあたら月をもやとしつる哉　五〇九

右掲※符A・BのうちAは、各類の伝存諸本はすべて、二九五詞書・歌・二九六歌・二九七詞書・歌、と並列する。因みに二九七歌は堀河院御時百首和歌（太郎）の夏題「五月雨」の出詠歌であり、同詞書と対応するのであるが、二九六歌は同百首には当然のこと、同永久四年百首和歌にては同題を欠くを以て、右記詞書の中に統合するとは想定しがたい。各類伝存諸本のごとく序列されているのが妥当であろう。

後者※符Bは、秋部月詠群の中の一類群であるが、解釈上の推論以外には其の排列の是非は決めがたく、今暫く類従本系の一特徴とみておくことにする。

次に㈢、八九一・八九〇、の排列は、第一～三類本系諸本に共通する順序であり、既述してきたごとくであるが、此の排列が第四類本系に於て類従本系にのみ所見されるという事実は留意される。上記※符例のごとき偶発的な錯誤等に起因するものではなくして、其処には類従本系統本文の依拠する伝流上の交錯が顕出しているのではないかと臆測されるからである。縦令、校者塙保己一の校訂上の選択が働くとしてもである。それらを包括して想うに、既述二書とも相隣接しながらも猶異・同が混在し、次述の阿波国文庫旧蔵本・書陵部A本とを隔つ混淆的様相を示し、第四類本系

の中にあっても独自伝本系、伝流本文に依拠したものであろう。

しかし、それは上述したごとくに類系内に於ける比較上のことがらであり、類従本系に見出される稍々目立つ異文としては、

1　伊勢に侍けるころいつきの宮にてあをむまひくを見てよめる　春部三七（傍点本文、書Aナシ）

2　丹波前司季房（重イ）の家（イ校ナシ、書A）にて人々烋の花をよみけるに女郎花をよめる　秋部四〇三（傍点本文、書Aナシ）

など数例を散見するにとどまり、且つ他は多少の異同にすぎない。がしかし、仔細に類同本文を辿れば、1例は第三類本系諸本に検出され、2例は第一～三類本系本文と第四類本系本文との混在した類従本系の独自本文となっている。第一類本系、契沖本を以て例示すれば―第二・三類本系諸本略同―

丹波前司重房の家にて女郎花をよめる

の中間部に第四類本系の「人〳〵烋の花をよみけるに」の本文が挿入された合成本文たることが類推されるのである。

纔か一・二の例示を以って結論するの難は免れないが、書陵部A本本文を基底におき比校するに、そのほか語句上に屢々見出される異同に於ても、既述二本をも含めて類従本系本文は混淆的状況を呈示する本文であろう、と措定されるのである。

以上、群書類従所収本の概要は略々これにて尽きるが、上述したごとく織部正乗尹本との校合・訂の経過は審らかにしがたく現在の処、類従本本文として一括りにするのほかはない。たゞ、全巻に亘る「イ」本又無注記の校合傍記の多くは織部正乗尹本であろうかと推測されるのである。

註一　(イ)別離三四番の詞書・作者・歌の欠脱は、伝本一覧に掲示した各類系の伝本全てに存し、同一覧の類従本系五本に欠落する本文であり、類従本系の単なる誤脱であろう。

註二　「うき身なら人もつらしと云々」歌は「康和四年閏五月二日・同七日内裏艶書歌合」の四条宮甲斐の出詠歌であり、左京権大夫（俊頼）が返しを応じているのが「かりそめのたえまをさへや云々」の歌である。新続古今集巻十五恋歌五―一四六八・一四九九―等にも所収する。

註三　類従本本文と前掲両書本文とは漢字・仮名等を除けば殆んど異る処はない。たゞ一例、三六三詞書に於て

大弐長実卿白川（二字ナシ永・宗本）の家にて郭公をよめる―類従本

と纔かの異同を瞥見するにとゞまる。

京都大学国語学国文学研究室蔵　〔江戸末〕写　存十巻

袋綴、三冊。香色表紙、竪二十六・三糎、横十八・三糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十糎。毎半葉十行に和歌一行、詞書二～三字下げに書写している。

題簽、表紙中央に厚手布目斐紙短冊を貼付し、「散木奇謌集　上（中・下）」と墨書する。

本書は前掲群書類従本の影写に近き臨模本である。該板本とは各部立表記のみならず、冊数・行数・字高・字詰、更に草躰―纔かに異するも―に至るまで同じくしている。但し、該板本に於ける第十巻尾に見る校記、「右散木奇謌集以織部正乗尹本校合了」の記を刪省している。

本文は言及するまでもなく同一たるものであるが、第八恋部下の二六四歌―下冊六十一丁表初行―、即ち、該板本に存する

佗つゝもたのめたにせよ恋しなん後の世までもなくさめにせん

の一行を余白としている。かく臨模本にありながらに敢て空白とする理由は不可解というのほかはない。その間の事情はともあれ、たゞ、本文上に於ては群書類従本のそれを踏襲するものにすぎない。又、転写過程に伴う、該板本のイ本校記、或は集付等の移写に於いて当然の結果としての見落しは若干散見されるほか書写者の補訂傍記が二・三偶目されるにとゞまる真摯な転写臨模本である。

志香須賀文庫蔵〔江戸末〕写　存十巻　**志B**

袋綴、三冊。香色布目表紙、竪二十六・五糎、横十八・三糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十糎。毎半葉十行に和歌一行、詞書二〜三字下げに書写している。

題簽、表紙左肩に子持枠付刷短冊を貼付し、「散木奇謌集　上（中・下）」と同筆墨書している。

印記、各冊の前遊紙表、併びに各初葉に、「詠善堂図書」（長方形朱印）・「玉松家文庫」（稍ゝ小振り同形朱印）、「遠加文庫」（同形朱印）を捺している。

本書も又前記の京都大学国語学国文学研究室本同様に群書類従本からの透写本とも云うべき臨模本である。前掲本に検出された欠落歌余白―恋部下二四歌一行―のごときもなく、内題・部立表記以下、各冊巻第構成、丁数・行数・字高・字詰、更に草躰に至るまで全く同じくし、該板本のイ本以下校合傍記或は集付も殆んど誤脱するところを見出し得ぬ真率な転写本である。たゞ本書も該板本巻尾に附刻する織部正乗尹本の校記を刪節している。

此の臨模の後、更に多分同一筆者であろう。間ゝ類従本本文の誤刻に、例えば、雑部上三〇七詞書の結び「……しけ

れはめよる」に「めよる」と、又同部上三六八詞書「……かけるをよめも」に「よめも」と傍記訂正するなど自ら其の臨写実態を告げている。あらため記すまでもないが、該板本の欠落余白行、欠字空格は底本を其儘に従っているのは京大同研究室本と共に同様である。此の期の転写情況の一端を顕示する見本とも思われ敢て言及する次第である。

猶本書には同類従本に見えぬ朱筆のイ本校合一箇処が見出される。即ち、釈教部九〇歌第二句「まちたるしかの」と傍記している。

そのほか、本書には上欄余白に、本集の詞書・歌中より歌詠・歌題・語句等を採摭し附記している。爾後の標目にそなえての備忘でもあろうか。

書陵部蔵〔江戸末〕写　存十巻　**書B**

袋綴、二冊。縹色布目表紙、竪二十八・九糎、横二十一糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十二糎。毎半葉十四行に和歌一行書き、詞書一字下げに書写している。本文墨付、上冊七十一丁、下冊七十丁、尾に勅撰集以下俊頼所収歌十一首(後述)を表一面に朱書追補している。

外題、表紙左肩の題簽剥離痕に「散木奇歌集　上(下)」と別筆にて後補打付書きしている。

内題、部立表記共に前掲群書類従本と全く同じくし、第九は「雑部」とのみ記し、「上」字を欠くにいたるも一致している。但し、本書には該書に見えぬ尾題「散木奇歌集大尾」と誌している。

又、一方類従本校合奥書は附記されず、その点では必ずしも同一とはいゝがたい。

本書の書写年代は江戸も後期の末に近く、後述するごとく、本文は群書類従本本文と全くといってよく同じくし、書写後、巻尾に該書には存せぬ勅撰・私撰集・歌合等に収録する俊頼歌をも併せ、朱筆にて、集付・詞書を添書し、本文には校合を施し、間々類歌等をも書加えている。此の校合書入れは本文書写とは別時、別筆のごとき印象が残る。本文は記したごとくに極く些少の異同を検出するにすぎず、恐らく該書本文に拠って書写され、一部校記等を省筆したものと推測される。以下、群書類従本との類同を略記することにする。当然のことながら朱校・補記等の書入れは除外する。

本書の欠落本文は、

1—春部一六七作者、4—秋部四三詞書・歌　※本書・類従本—別離[註]三四詞書・作者・歌、11—雑部上三〇四作者、12—同部上三三歌、※本書・類従本・伝宗固筆本—・・・同部三三四作者、14—同部上一三八三作者、15—雑部下一五一八長歌語句、16—同部下一五九〇唱句、18—同部下一六〇九同唱句作者

と、類従本と全く一致する。又、同解題で附記した、恋部上二〇〇作者名を二〇一作者として誤刻しているのも同様に誤写し、更に(ハ)春部三六三〜三六六番歌群の中の、三六四・三六六詞書の誤謬に於ても同じくしている。

のみならず例えば次のごとくに細部に於ても、

馬ふみ□くちめ（類本）　恋部上二〇八第二句—本書同、雑部□（同）—本書同、□お期も首を（同）　雑部上三八三第四句—本書同

と類従本に検出される空格をも襲い、又、

…かみさうし[紙障子]に…（類本）　雑部上三〇三詞書—本書同、ことくらく[胡徳楽]とも　雑部下一六〇三連歌唱句—本書同

と、当該漢字の傍記にまで同一であるところから本書は記したごとく群書類従本からの書写と判断せざるを得ないのである。しかしながら一方かく極似しながらに、本文の表記に於ては漢字・仮名の相違、仮名遣の異同、同書に見るイ本校記、集付等の書落しも散見され必ずしも厳密には同一本文とは云難い。が今はたゞ書写に於ける偶発的な又任意な撰択による結果と認定しておくことにする。

本書の歌序排列も群書類従本と全く同じくするが念のため略記しておく。即ち

㈠夏部　二三三・二三四・二三五・二三九・二三六・二三七・二三八・二三〇、㈡同部　二六三・二六五・二六四・二六六―類従本参照、詞書誤謬ス、

※同部二九五・二九七・二九六―類従本参照、※秋部　五一〇・五〇九―類従本参照、㈢釈教部　八九一・八九〇

である。

更に類従本にて例示した同書異文のごとき二例、春部三七詞書・秋部四〇三詞書も全く同一本文であることを併せ附記しておく。

備考

本書はかく群書類従本に拠り書写され、上記したごとくに、金葉集以下勅撰集、私撰集、歌合等を以て、朱筆にて集付し、上掲書の詞書を添え、本文異同を校合するのが多見される。且つ又類歌等をも間々書入れて本書本文の資となしているが此処では言及を省略し、下冊末尾の半葉に載する俊頼歌十一首を掲出して本書書入れの一例としたい。

続詞花集雑上　大納言公実許にて人〳〵対水待月こゝろをよみけるに　源俊頼朝臣

山のはを玉江の水にうつしもて月をもなみのしたにまつかな　本集夏部三七歌

同雑下　うれふる事侍りけるころ　源俊頼朝臣

さらぬたにかわかぬ袖そ清見かたしはしなかけそなみのせきもり　同雑部上一四五七歌

千載雑中　田上の山里に侍ける比風はけしかりける夜よめる　源俊頼朝臣

まきの戸をみ山おろしにたゝかれてとふにつけてもぬるゝそてかな　同秋部四〇歌

新勅撰雑二　源俊頼朝臣

こひしともいはてとそおもふたまきはるたちかへるへきむかしならねは　同雑部上二五五歌

金葉秋　源俊頼朝臣

かへるさは浅せもしらしあまの川あかぬなみたに水しまさらは　本集未収録歌、頭注「此哥金葉集一本源俊頼朝臣五字无」トアリ

同同　九月十三夜閑に月を見るといへる事をよめる　源俊頼朝臣

すみのほる心や空をはらふらん雲のちりゐぬ秋のよの月　同秋五〇四歌

同雑上　一品宮天王寺にまゐらせ給ひて日来御念仏せさせ給ひけるに御供の人〳〵住吉にまゐりて哥よみけるによめる　源俊頼朝臣

いくかへり花さきぬらん住吉の松も神代のものとこそきけ　同神祇八四九歌

同雑下　こくらくを思ふといへる事を　源俊頼朝臣

よもの海の浪にたゝよふみくつをもなゝへのあみに引なもらしそ　本集未収録歌

新古雑下　題しらす　源としよりの朝臣

数ならてよにすみの江のみをつくしいつをまつともなき身也けり　同恋部下一〇九八歌

同同　述懐百首哥よみ侍りけるに　　としよりの朝臣

さゝかにのいとかゝりける身のほとをおもへは夢のこゝちこそすれ　同雑部上三云歌

堀川院御時百首　桜　　俊頼

桜花さきぬる時はみよし野の山のかひより浪そこえける　本書未収録歌

と朱書している。十一首中、三首―一首存疑歌、精撰本系に作者名を欠く―が見出されるなど附注書入れの一端が窺われる。

註　上欄余白に

万代集雑四

かへし　　高階経成朝臣

たひ衣たちし日数をかそふれはさやの中山はやこえぬらん

と朱書し、前歌との関聯から万代集により七三番歌を補っている。

国立国会図書館蔵文政十二年内藤広前写・岡田希雄校合書入本　存十巻

袋綴、三冊。香色刷毛引表紙、竪二十七・三糎。横十九・三糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十糎。毎半葉十行に和歌一行書き、詞書二～三字下げに書写している。本文墨付、上冊八十一丁、中冊六十九丁、下冊五十七丁、奥書一丁。外題、表紙左肩に、「俊頼朝臣歌集　散木集　上（中・下）」と墨書する。上冊に傍記する「俊頼朝臣歌集」は別筆であろう。内題は、上冊に「散木寄（奇ニ「ケ」ト附注）奇歌集第一」と群書類従本の「謌」を「歌」に作るほか全十巻同一である。左右の傍記は後弃歟後准之

述するごとくに他本に拠る校合である。各大小部立も該書と一致するが、第五「羇旅部」(旅宿同)、第六「釈教部」(无)、第九「雑部上」、第十「雑部下」(哥イ)のごとき傍補記等が散見するが前者と同じく本文筆写者と異る別人—岡田希雄の他本による校異である。

本集本文筆写者は両三冊の奥に誌す

文政十二丑年十二月はしめのこゝぬかしるしをはりぬ／さかき園のあるし（同印）　上冊

文政十二年十二月十一日しるしをはぬ(り)／さかき園あるし（同印）　中冊

文政十二年十二月十七日かいうつしをはぬ(り)／さかき園あるし（同印）　下冊

と、賢木園主人内藤広前（慶応二年九月十九日没、七十六歳）である。

又、本書には詳密なる校合・書入附箋が施されているが、それら書入れの手跡は、一部—後述—を除き、各冊巻首に捺す印記、附注に略記する「希云」等の記によって岡田希雄の補入たることが明らかである。

従って、本書は文政十二年十二月九日から同月十七日にかけて内藤広前の書写するところの本を手得した岡田希雄が後述の書入本を主とした校合・書入れを移写し、自らも又追補増訂した、それが本書の経由である。

印記、各冊巻首に、「賢木園文庫」（長方形重郭印、本印ノミ各冊尾ニモアリ）、「岡田／希雄／蔵書」（方形）、「コノフミヲカリテヨムヒト／ハケカサスニトクヨミ／ハテ、カヘシタマヘヤ—希／雄」（方形陰刻）、「陸軍予科／士官学校／図書之印」（方形）等の朱印を捺している。

本書は上述のごとくに内藤広前書写の本集本文と岡田希雄の校合・書入れ移写、追補訂とに大略区分される。従

って、以下には記述上の煩を避け、1主に本集本文、2校合・書入れ—附箋を含む—を備考欄にわけ言及することにする。

先ず、本書の本文は、さきの内題・各部立にも見るごとく群書類従本からの転写であり、各冊編成、同丁数・行数・字詰をも同じくする。が、間々漢字・仮名、草躰などの微細な相違が散見されるほか該書の巻尾に刻す織部正乗尹本との校合の記を前掲二書同様に欠いているのが偶目される程度である。たゞし、類従本に看取される欠落本文は過半細補される処が見出されるので、その補写を含め、以下に略記することにする。上掲類従本に掲げた欠落本文の一覧と対比すると—掲示番号は該書にも使用した第四類本系源輳令写本に附記した統一番号によるものとする—

1—春部一六七作者(行間余白補)、4—秋部四三詞書・歌(上欄余白細補)。※別離七三詞書・作者・歌(上欄余白細補)、11雑部上二三〇四作者、12同部上二三二歌(行間余白細補)、※同部上二三四作者(行間余白補)、14同部上二三六三作者(行間余白補)、15雑部下一五八長歌語句(行間細補)、16同部下一五九〇連歌唱句(行間余白補)、18同部下一六〇九同唱句作者(行間細補)

と、その欠落本文を同じくしている。そのほか、類従本に所見される欠格・欠字も

馬駒ふみ□くちめ—恋部上一〇八第二句、雑部上(「上」字細補)、□お期も首(カウヘ)を　雑部上二三八三第四句

と全く同一であり、該本の模写とも云うべき書写状況を呈している。

右例の欠落本文中、此の補写は岡田希雄の手跡にかゝるものであるが、上掲源輳令写間宮永好校合書入本にも同箇処に於ける補写が存し略同じくしている。そのことは、両書の本文補入に際しての依拠本を同じくしたものと推定される—既述—ので、此処に該書に次いで右掲例文中の補写本文を併せ掲出する。即ち

1　家綱同—春部一六七作者　永本細補、校合本略符「サ／ム」ヲ附ス、契本墨本行存

4 。明ほのに鹿のまちかくきゝてけれはめつらしさによめる

。あさ戸あけて立出る鹿の声きけは跡つかひにもきたりける哉

此一首契沖本又異本ニモミエタリ―秋部四三詞書・歌　永本上欄細補、本文同（但シ漢字・仮名ノ表記相違ス、永本同項参照、以下省略ス）、同本ニ「契沖本。異本」ト傍記ス、契本下句朱補記ス、同転写本系ハ墨本行タリ、本書転写本系ニ拠レル歟

※ 。かへし　　経成朝臣

たひころもたちし日数をかそふれはさやの中山はやこえぬらむ―別離七三詞書・作者・歌　永本本行存、本文同、従ッテ補校ナシ、契本墨本行、本文同

12 わきかへりなみちへさそふたぎつせにたへてもたてるいは枕かな―雑部上一三三歌、歌頭右ニ「此一首契沖本ニ而補」ト傍記　永本行間細補、本文・イ校同、同歌頭ニ「此一首契沖本にて補。」ト同傍記ス、契本墨本行存、朱墨訂アリ、同転写本系本文同

※ 永縁―同部上一三四作者、行間ニ本行トスルモ別筆歟、作者名右肩ニ「契沖本ニテ今補」ト傍記　永本本行存、但シ作者名右下ニ「契沖本此名あり。」ト附記ス、契本墨本行存

14 修理太夫　三宮御製云々―同部上一三八作者、行間ニ本行トスルモ別筆歟　永本行間細補、本文同、但ッ「修理太夫」ト「墨」符、「三宮御製云々」同ト「墨」符ハ永本ニ云ウ「墨としるせるはルの異本也。」ニテアレド「ル」本作者名欠キ誤記ナラン、契本墨本行存

15 ……わかみのうへになりはてぬ……雑部下一五八長歌語句　永本行間細補、本文同、契本墨本行存

16 まことにやのりのはしよりきち（ママ）にける　同部下一五九連歌唱句、行間ニ本行トスルモ別筆歟、永本行間細補、本文同、但シ句下ニ「ム」符ヲ附ス、「ム」符ハ永本ニ云ウ「ムと注せるは。故翁校本に書名なきもの也。」ニテアレド該本解題ニテ推論セシ如ク契沖本系

本文デアル、契本墨本行存、「……をちにける」トアルモ同本文

18　殿義入寺―同部下一六〇九同唱句作者　永本行間細補、本文同、但シ14ト同ジク作者許ニ「ム」符ヲ附ス、契本墨本行存

と、十例中九例を補写している。その中で契沖本と明記するものは纔か4・12・※一三四の三例にとゞまる。他は本書の場合、その依拠本をいずれも略符すら施していない。間宮永好校合本に於ては「墨」符―14―、「ム」符―1・16・18―のごとき簽符を附すのをみると、一見、両本の拠った伝本は各々別種のごとき印象を受けるが、契沖本と明記の上記三例のごとくに、其の附注表記に多少の異同はあれ同じくするところから両書は同一依拠本、小山田與清校合本からのものであると推定される。且つ両書は九例中七例を同じくし、相違する二例―※一三四・※一三四―は永好校合本に本来存したが故にすぎなく全く本文共に合致するのは単なる偶然とは考えがたい。殊に16―一五〇第三句「きちにけり」誤写の共通など端的に示唆している。両書がやはり與清校合本に拠ったものとすれば、本書に於て岡田希雄が何故に略符をも施さなかったかは不明のほかはない。又、一方間宮永好校合本に於ても「ム」符三箇処、「墨」符一箇処を符印しながらに無符二箇処存するなどの佚落も散点するのであるが、「ム」符は明らかに契沖本系本文であることは既に該書解題にて言及したところであり、又右掲例文中に契沖本系との存否を脚註したが、そのすべてが該本系に載録されているのである。そのことから推測しても、両本の校合に於ては契沖本系伝本を直接比校せるものでなくして、或る一本、即ち小山田與清校合本に拠っての移写であったと推論されるのである。そして、其の與清本にも一部「契沖云々」の記を附するのみにて他すべてに及ぶところではなかった、校勘次第の重層する備忘的な校訂本を目途してのものであったのであろう。同本の所在不明なるまゝに辿るべくもないのであるが。

更に注意されるのは、本書の校注において※一三四・14・16、のごとくに、いずれも行間に校異を補すにあたり恰も原

本文のごとくに大字本文に模して書写していることである。第一類契沖自筆本の処にて言及したが、その朱校補の多くが転写本の過程においては本行本文化と変異し、以後の所謂契沖本を形成したのと相似て本書の場合も又錯誤をまねきかねない惧れが生ずるのである。この些少な懸念ながらも、時に本書が群書類従本本文たるを見極めずして、両書の異同として提示されがちなのを避けるべく此の処をかり繁細にわたり記述した次第である。いずれにせよ、本書は又模写に近き同本の転写本であり、右記の異同のごときがあれば其の校合の途次に派生したものであることを付加えておきたい。

次に、本書の歌序排列であるが、当然のことながら類従本と同じくしている。当該部分に於ても、

㈠夏部　一三三・三三四・二三五・五二九・六三六・七二七・四三八・八二〇、㈡同部　二六三・二六五・二六四・二六六―詞書誤謬ス、※同部　二九五・二九七・二九六、※秋部　後五一〇・前五〇九、㈢釈教部　八九一・八九〇

と、傍記符注するところがある。

まず、㈠は間宮永好校合本も同排列であり、歌頭に同じく「一・三……八」と附記し、「ム」符を印している。既述のごとくに「ム」符は契沖本系本文の略符と判断され、本書には略符注記を見ぬが此れも又同一依拠本からの移写であろう。契沖本系は傍記の歌順である。

㈡は類従本系と伝萩原宗固筆本・間宮永好校合本特有の詞書錯誤例であるが、本書には、その誤謬本文を補訂し、たゞ「同」と附すのみであるが、永好校合本には同補訂のもとに「ムサ同」と符記している。「サ」符は故翁―與清―校本の藍筆校異であり、「ム」符は上記のごときであるが、その許に「同」とある。本書の「同」は或はそれと何等かの関聯あるものか。ともかくも第一～三類系諸本は右記㈡の排列にして、その詞書は誤ることはない。「サ」符本

は不明ながら「ム」本即ち契沖本系は両書の校異本文と同一である。

※二九五・二九七・二九六は、本書では上記のごとくに二九五歌の次に「。コ、ニ入イ又同」、二九六歌頭に「。」符を印し、整序歌順と訂している。永好校合本は二九五・二九六・二九七と整序されているので却って「ル」本にて歌順の移行を略符しているので、本書の「イ」符は不明である。因みに永好校合本では「イ」符は故翁本中の異本である。そして、本書の「イ」符本の排列は契沖本系と同一でもあるので該本系によるとも推測されるが契沖本系以下第三類本迄が全て同じくするために、猶「イ」符本は確定しがたい。

※五一〇・五〇九、は上記の「後」・「前」の歌序移行を指示するが、永好校合本は第一～三類諸本と同じく五〇九・五一〇と歌序を追い、「ル」本にて異同を附記しているので本書に誌す異同は何れの伝本に拠れるか不明である。

㈢は本書に校本の附注はない。永好奥書本は八九〇・八九一と整序されていて本書と異り、書陵部A本・阿波国文庫旧蔵本・伝萩原宗固筆本の数本のみに共通する稍々独自の排列となっている。寧ろ本書の歌順は本集伝存本の全般に普遍するところであり、従って比校本の注記が存せぬのが当然である。

以上、本書の歌序排列につき、間宮永好校合本に見る対校本略符との照合により、此の場合も同様の結果、即ち小山田與清本よりの移写を予想したのであるが、纔か㈠・㈡の確認を得たるにとゞまり、他三例は両本相互の原本が異るところから猶断定は躊われるのである。しかし、一方本書に於ける対校本の無記・無符の方法より推しはかれば、前者―欠落本文校補―と同様であったと考えるのが自然であろう。水戸家献上本の與清校合本の所在判明を俟つのほかはない。

はたまた、かく冗雑に校合の問題にも及んだが、それも又群書類従本系―当然本書を含む―の排刻の特徴を伝存諸本

との関聯の上にいさゝかなりとも解明することゝ共に、本書の一見多岐にわたる校勘も又先学の成果を多分に踏えての実態を併せ呈示することにもあったのである。

備考一

本書に看る各種校合は、その一端は右述のごとくであるが、前掲間宮永好校合本に誌す対校本凡例のごときは一切所見せず、本文中に纔か契沖本に拠ることを示す数例の補入―前記―につき附記するにとゞまる。そのほか、校合本文には、群書類従本の「イ」校とは別に「イ」本の校異、無註記の校合傍記、諸集、歌合等との比校略記等が、その主なるものとして散見される。且つかつがつ数例にすぎないが、春部冒頭部に、例えば

堀川院。御時百首。哥。めしけるに元日の心をつかふまつれる　一詞書

朝。原。霞をよめる　三詞書

……哥よみ。けるに霞の心をよめ。る　五詞書

さほ山にかすみの衣かけてけりなにをか四方の空はきるらん　八歌

百首。哥。中に霞をよめる　一〇詞書

等、「ケ」符の略号を附す校異を見出すのである。右例、五・一〇の詞書の結びは、「ケ」符に順えば、「よめりける」、「よみ侍ける」なる本文となり、第一類契沖本系に看取される特徴的本文である。此の結びは本書巻一～八巻の間に屢々校合本文として検出されるが、これ以後―一七詞書辺―から全く「ケ」符は省略されている。無符とはいえ同一本からの比校であることは、間宮永好校合本に附す「ム」符校合と殆んど一致する処からも確認されるのである。同書

解題で言及したごとくに此の結びは契沖本系からの対校経由が想定されるのである。たゞ結びの詞のみならず、間宮永好校合本に於ける「ム」符の校異を本書の当該校異―無符―と対照するに―両本は各々依拠底本を異にし、相互に本文異同が存するが、それを除けば―これも又殆んどが一致するのである。もっとも間宮永好校合本は第五～八の四巻は校合書入れを欠いているのであるが。従って契沖本系の校合は全巻本文にわたっていたのである。

しかし、不可解なことに、本書に校する「イ」符の校異本文も契沖本系本文と同じくする処が過半に及びながら、前例八歌第五句「空はきるらん」のごとく「イ」符、「ケ」符を併記する一方、一詞書「……つかふまつれる」と契沖本系本文は「イ」符本校異と同じながらに「ケ」符を附さないのである。次の三詞書「イ」校も同様である。「ケ」符が省略される一七歌以降は当然のことながら「ケ」符をも含む「イ」符校合であるかのごとく本書に於ける「イ」符校本は特定一本を指すものでなくして本書以外の本文、即ち他本一般を指示する符号となっているのである。かなり、任意的な校勘であるが、更に本書の校合に於ては混淆的な様相を示すのである。偶目するまゝに春部より十例ほどを掲示してみると、

1 三〇詞書　……常陸守経兼かもとより……　契本「……ひたちの守つねたゝかもとより……」、永本「……常陸守

2 四五歌第五句　香にかほるらん　契本「香に匂ふらん」、永本「かにかほるらむ」

3 四七歌第四句　なくをは人の　契本「なくをは人も」、永本「なくをはひとの」

4 八八歌第四句　思ひもしらす　契本「思ひしらすも」　永本「思ひもしらす」

5 九七歌初句　いもせ山　契本「こもり山」　永本「いもせ山」

6　一三歌第二句　春のこすゑを集又イ本同古來風体　こすへの空を　契本「春の梢を」、永本「春のこすゑを集詞花ム。又イ同　こすゑの空を」

7　一四三歌第五句　おもひしらるゝ（はてぬイ／同）　契本「思ひはてぬる」　永本「思ひしらるゝ（はてぬるム／墨）」

8　一四四歌第四句　あへのいちゝに（野の市にイ）　契本「あへの市路に」、永本「あへのいちゝに（野の市にサ／イ）」

9　一五六歌第四・五句　つゝしのをかにあせみ。さくなり（けたイ（イ見消チ）花イ）　契本「つゝしのけたにあせみ花さく」、永本「つゝしのか

10　一六六歌第五句　おかにあせみ。さくなり（けた墨　馬酔花　花墨）　あはれとそ見る（おもふ同）　契本「哀とそ思ふ」、永本「あはれとそ思ふ（サ・ム。如此　みるル・サ・イ）」

のごとくである。参照例として契沖自筆本、永好校合本の当該箇処を併記した。

僅少なる掲示によって例証することは如何かと思うのであるが、掲出例のごとき校勘が全巻にわたる略大概の状態である。

右十例中、8の一例を除き他はいずれかの校異部分に於て契沖本系の本文と同一であり、永好校合本によれば、1・6・7・10、に「ム」符を印していることから、本書も共に契沖本系との校合経由を否定しがたい。たゞ本書に於ては略符はほゞ一律に「イ」符を以て統一し―一・二例、「又同」、「同」略符を見るが―ている。それに対し永好校合は「ム」符以外にも、「イ」・「墨」・「サ」符―上記簽符同本にて既述―を附し、しかも其等は師翁小山田與清校本に施された校合本の識別符である点が留意される。更に上掲例に於ては、此の略符をのぞけば、その校合状況はすべて一致又は類同することである。このあまりにも極似する符合は両書が或る一校合本に拠っての当該校異の移写が、その主なるものであったと想定せざるを得ないのである。それは又上記のごとき諸本との比較のみならず、勅撰集以下歌合を含む諸集との校異に於ても両書は其の過半を同じくし、且つ又後述する附注書入れに於ても両書類同するところの多きをみ

ても共に一校合本からの転写が両書校異に於ける主なる土台をなすものであった。寧ろ大概であったと過言してもしかるべきであろう。それは記すまでもなく小山田與清による群書類従本への校合である。そして該本が既に其の校合に於て稍々任意、不完備な或は重層的な方法に基づくものであったがために対校本略符も間々一律性を欠いた、と推測され、それが間宮永好校合本に投影したのであろうと憶われるのである。そして更に本書にあっては各対校本の略符は殆んど全てが、「イ」符又は無符を以て転写されたが故に既にその源を辿るべくもなくしている。しかし、それは歌解を主目的とする当代一般の校勘方法に則った通念でもあったのであろう。

間宮永好の奥書に誌す「水戸家一献上。彼御文庫ニアリ」の類従本は既述したごとくに現在伝存は不明にて右記の推測は又確認しがたいが、永好校合本に何故か欠漏する、略第五～八巻の間の校合・書入れは本書に存し、該本を相補するものとなろう、と思われる。

もとより、本書の校合は上記の転写にとゞまるもののみではなく、岡田希雄による追校・確認・取捨・補訂の跡が間々散見され、前者の不備を補綴するものである。

備考二

本書の書入れは両筆の書跡が存する。一は本集筆写者内藤広前の手跡であり、その二は岡田希雄の筆跡である。前者は上欄余白に、本集にみる特異な語句・歌句を採択し今後の釈義に備えての書付けと附箋押紙の一部―罫紙又は薄様に附注―である。しかし数葉にすぎず、共に考証書入れとは云難い。それに比し後者は上欄・行間余白に稠密に細書され且つ大小附箋を交え「希云」と誌すも尠なからず散見され、共に附注書入れたるにふさわしいものである。

しかし、本書の校合にも看てきたごとくに此の岡田希雄の手跡書入れの過半はさきの間宮永好校合本の書入れと同

じくして其の依拠するのはやはり共に小山田與清本であろうと推定されるのである。既に該本書入れにて言及したが、本書の書入れには「永好曰」の附注を一切見出さないところから校異移写と共に永好校合本ではなくして或は直接に與清校合本、又はその転写本などに拠ったものであろう。

たゞ、それにしても、本書には校異を含め書入れについても一言もそれに関して触れているところがない。本書の校合・附注に関聯する記中の事項を拾うと、

1 本書の校合は、後人の歌書、勅撰集／歌合、百首等を以てすべし、松屋筆記／等の如き考証物にもまゝ見ゆ、必ず参照ノコト（墨）上冊第一巻首

2 松屋筆記ヲ見ヨ（墨）中冊見返し

3 希云、以下○印アルハ哥合／十首哥百首哥等ナリ（朱）上冊第一巻首

4 基俊トノ贈答歌ハ基俊集にて補記すへし、本／集には故に皆除かれてあるを以て也（墨）同右

5 希云本集中肩ニ¬印アルハ他人ノ哥也（朱）同右

6 後葉集ナドノ私撰ノモノト比較セヨ（墨）同右

7 村上忠順ニ散木弃歌集標注四巻（嘉永三年）アリ（朱）同右

等が其の主なるものである。右記1・2・3は、既に永好校合本の中に処を同じくし共通して附註されているものであれば、やはり與清校合本よりの転写が主であり、本書において校合と共に精査し補完することを期したものであろう、例証、引用等には可成りの増訂が所見される。松屋筆記などはとりわけ留意し所引附説しているのは首肯される。4・6も又新に検出結果を附箋押紙する処が尠くない。5はともかく、7の忠順標註は本書書入の中に間々共有

するがあらため断る処を見ない。更に岡田希雄の補注は代表的歌論書・物語・史書・日記類、和漢両漢詩文類等、広汎な捜索におよび増補と共に旧書入れ所引の本文を訂しているところは尠くなく考証学者の面目をみるのである。

本書の附注書入れは、その点でも本文校勘と併せ本集釈義上に於ける意義は注目されるものである。此処には纔か一端を呈示する以外はないが、先ず、與清校合本からの転写と推定される書入れの中で、その校勘上すくなからぬ位置を占めた契沖本系に於ける書入れとの関聯を永好校合本と併せ概括しておくことにする。前輯(一)の契沖自筆本解題の備考二に略述したので重複を避け当該番号を以て替ることにする。前輯(一)を参照されたい。

一—7　永本欠（巻五～八校異・書入れヲ欠ク、以下同）・本書同存

二—(イ)　永本・本書同存、二—(ハ)—永本欠（同上）・本書同存、二—(ホ)　永本欠（同上）・本書同存、二—(ヘ)　永本欠（同上）・本書同存、二—(ト)　永本欠（同上）・本書同存、二—(ヌ)　永本欠（同上）・本書前半同存

三—(ホ)　永本欠（同上）・本書同存、三—(ヘ)　永本欠（同上）・本書同存、三—(チ)2　永本・本書同存、

四—(イ)　永本・本書同存、四—(ロ)　永本欠（同上）・本書略同存、四—(ハ)　永本欠（同上）・本書前半同存、四—(ニ)　永本欠（同上）・本書一部存、四—(ホ)　永本欠（同上）・本書前半部同存

と同じくしている。さきの契沖本解題にての例示のすくなきにもよるが、該本書入れからの移写は比較的尠く—但し契沖本に附記する諸集の詞書などは殆んど転写している—二・三・四、即ち語解・類歌・歌解書入れにかぎられ取捨撰択されているのが窺われる。しかし、かゝる明らかなる類同は釈義の上にも契沖の揺曳を見出すのである。

本書に所見する次の一例、

一字抄下なへ　さ一字又同
をしまれてはなふく秋もうつろへる菊をはえこそみすてさりけれ　秋部五四五
一同　すきゆく一字抄一本

の歌に、

此哥ノ二句おのれもはやくよりすきゆくノ誤ナルベク思シニハタシテ一字抄ヲミレハ一本ニシカ有キ　契沖本ノおしなへて花咲云々ハいはれなし

と附注している。永好校合本には見えぬが恐らく小山田與清の附注[註三]と推定されると共に、此処にも契沖の投影をみるのである。同時に又本文校勘・校訂に於ける時代的な一斑を垣間見る想いに駆られるのである。

次の書入れは與清の附注であり、本書に看るものゝ過半に及んでいる。永好校合本は同校の、略第五―九巻の間を欠くが他巻は本書と類同する。該書備考に纔かながらも掲示したので、此処では、其の後を受けて追補・補訂し周備を期したのであろう「希曰」と断る以外に、永好校合本に所見しない書入れも屢々散見し、猶與清旧注の名残とも判断を躊われるので、今その一部を併せ巻一春部前半より拾い参考に供することにする。

1　春部冒頭

希云、袋双子巻三、経信卿哥云大ゐ川岩浪たかしいかたしよ岸の紅葉にあからめなせそ後拾遺ニ入之、而経信故礼部ニ乞請テ出之、無下ノ弃哥ナリ、為後見有恥、抂テ可止云々、仍除之、而後年俊頼朝臣入金葉集如何

2　同六歌第二句　もちひ

用ハ持居ノ意ナルベケレハ仮名モもちゐナリ餅ハ毛知比ノ仮名ナレハ云掛タカヘリ

3　同八歌初句　さほ山に

頭句ハ棹ニテ云掛タレドカンナタカヘリ去ドイトハヤクヨリ誤キタレリ天喜二年四月蔵人所哥合紅葉ヨミ人シラス今はたゝもみちのにしき立田姫そめかけつらんさほの山辺に金葉三さほ川の汀に咲る藤はかま波のよりてやかけんとす

らん又清輔初学抄にさほ山棹ニソフトあれは既ニ此比ハ云カケニ用タルヿウタカヒナシ　永本ニ「永好曰」トアルニ略同

4 同一九歌　花さかぬみ山かくれはかすめともかすならぬ身のはるかとそみる

此哥三句ヲ初句ノ上ヘマワシテミベシ四句ヘッ、ケテハキコヘガタシ

5 同二歌　かすか山ふもとのをのに子日してかことをかみにまかせそみる

下句ノ意ハカコチヿノ意ニテ子日シテ行末ノヨハヒヲ祈ソノネギヿヲハ只神慮ニマカスト云ヿ

希云袖中抄一〇四頁、病アリ／色葉和難抄二ノ六ウ

6 同二四歌　子日してよはひをのへに雪ふれは二葉の松も花さきに鳧

二句のへハ延ヘト野辺トヲ兼ネタリ、松ノ花咲クトハ雪ノカ、レルヲ花ニ見ナセルナリ

7 同三七歌　ひく駒（馬）の松のみとりの色なれは千とせをすくす（こ）庭かとそみる

馬毛ノ誠ニ緑ナルニハアラネド白ハ青ニ色ノカヨヘハカクハ云ツヾケタリ

8 同五七歌　咲（千載春上）そむる梅のたちえに降雪はかさなる数をとへとこそおもへ（の）

問ニ十重ヲソフ

希云此ノウタ俊忠集ニハ「正月廿日ころ雪のあしたに二条の家のやへむめをおりてとしよりの朝臣のもとにをくりし」トシテ贈答ヲノセタリ―押紙

9 同六詞書・歌　賀陽院殿の哥合に桜をよめる（みせけ）　山桜さきそめしより久方の雲井にみゆる滝のしら糸

希云寛治八年也、持トナリヌ／秀哥之体大略□三頁、古来風体抄、近代秀哥六八（ママ）八丁、三五記九二八、

10 同六七詞書　修理大夫顕季卿六条の家にて桜の哥十首人々によませ侍けるによめる

希云顕季集五百二頁に「於七条（ママ）亭人々桜哥十首よみしに」トアリ

11 同五歌第四句　風のはふりに

信濃諏訪神ニ農業神トシテ国祭リアリ日本風俗史講座第六祭礼と風俗

12 同九三・九四贈答歌（本文省略ス）

希云、此哥二首ハ顕季集ニ「前坐頭俊頼朝臣の北山の花見に人々さそひて罷たりと聞て」トシテノセタリ、

希云、顕季集ニ「長治（堀川）二年三月四日行事（按ニ幸ノ誤ナルヘシ）して三日おはしましゝたひ池上花題、

岸近く匂ふ桜の花見れはしつえや岸のかさしなるらん」トアルハ仝シ時ノ事ニヤ―押紙

13 同九五詞書　堀河院の御時花山といふ所の花云々（以下省略）

中右記（巻三ノ二百頁）嘉承二年三月十四日条云　内女房又見洛外花車少両到花山寺、雲客廿人許相従、或車或

馬、各以任意、此外古宰相中将顕雅左京大夫（顕仲）新宰相（俊忠）又相具云々、晩頭帰参、於北面講和哥見花題也有

序代、蔵人広房書之、講師蔵人弁雅兼云々

14 同一〇一歌　君か代のはるかにゝほふさくら花こすゑにかけて千とせみえける

此哥一本ノかたしかるへし

15 同一〇九歌第四句　そなれの松

好忠家集詞花、□みよしのゝきさ山かけに立る松いく秋風にそなれきぬらん　散中一オ、二ウ、下卅七丁オ、夫木春四、雑八、

十一、十八、顕季集十二丁オ同三十七丁ウ夫木雑十一

纔か巻一春部前半の書入れにすぎないが、契沖書入れにはじまる與清の大幅な追補を基に更に本書に於て岡田希雄

の増訂加注により、難義な本集の釈義は一歩づつながらも累積的に漸進したのである。しかし、その進展の形跡はな

かなかに辿りがたいのである。上掲の例示に於ても厳密には「希云」をのぞけば與清附注の一部は混入をも予想され、與清校注本の所在不明の現在確認しがたいのである。しかし、かゝる不分明な継襲による累積ではあるが、その永きにわたる語義・引歌・類歌又関聯事項の考証が本書のごとき校注本を形成しているのである。

加えて、反復繰返しにはなるが、江戸期国学者の手を経緯した本文は本集にかぎることなく釈義の上に立脚した本文整定が其の一般であるのは、上記の掲出例からも窺われ、本集伝本に於ては殊に第三・四類本系統に於て顕著であることは縷述したごとくである。

註一　契沖自筆本には「空はきるらん」と書写され、本書の「空」に附す傍記「春イ・ケ」の「ケ」符は以下に想定する契沖本系校合本文ではない。永好校合本には「空(春墨)はきるらん」とある。以下校合符は「イ」符をもって統一しているが、冒頭一部にかぎる「ケ」符ではあるが、岡田希雄の錯誤であろうかと思われる。

註二　当該校合は「いもせ山」の右傍校異は当初「こもり」と書き、「り」字の上に「ち」字を重ね書き訂している。それは本書、永好校合本共に「いもせハこもち山ノ誤」とある両書の依拠本附注によって永好校合本のごとく左右両校異を省き一校異に統一したのであろう。岡田希雄の対校本にも当然左右両校異は存したものと推定される。

註三　間宮永好校合には掲示の附注を見ぬが、同歌には、

をしまれてはなふく秋もうつろへる菊を。えこそみすてさりけり
（一字抄下なへム　さム一字　はイ(朱)はル　すきゆく一字抄一本）

と校異を附している。第三句の「はイ」は源輳令写本元来の朱校、第四句の「。」(はル)は類従本に拠る永好校合である。ともかく初・二句共に校異を同じくするが此の本には「ム」符―同凡例に「故翁校本に書名なきもの也」と誌す―を附している。永好の施す「ム」符即ち契沖本たるを識るは與清のみであれば、「おのれ云々」の表記にかゝわらず同人の釈義附注であろう。因みに、本書では「希云」と附記するのが普通である。

関根慶子氏蔵　阿波国文庫旧蔵本　存十巻

本書は未だ披閲の機を得ず関根氏の御労作「阿波本　散木奇歌集本文校異篇」の解題並びに附載影印によって概要を麁述させていたゞくことにする。

袋綴、二冊。薄茶色鳥子表紙、竪二十七・五糎、横二十糎。料紙、斐・楮交漉薄様。毎半葉十三行(纔かに例外あり)に和歌一行書き、詞書略二字下げに書写する。本文墨付、上冊九十五丁、下冊六十七丁(但し、六十一丁一葉書損じ合綴、同葉に連謌一六〇〇和句一六〇一唱句初句「けふ」迄六行を書写す、従って実六十六丁)、影印は省略されているが次葉より十九丁にわたり書陵部A本同様に「基俊集」を合綴しているも該書の朱書「本云」の奥書追補を欠いている由である。

題簽、両冊表紙左肩に金泥竜文短冊を貼付し、「散木奇歌(朱)集上(下)」と誌す。

内題、「散木奇謌集第一(〜十)　春部(〜雑部下)」と記し、「巻」字を欠く。内題と共に部立も書陵部A本と全く同じくし、四季部(正月〜十二月)、祝部・別離・旅宿、悲歎部・神祇・釈教―上冊、恋部上・下、雑部上、雑部下(長歌・旋頭歌・混本謌・折句哥・沓冠折句謌・隠題・連謌)―下冊、と書写されている。

本書には夏部三五七詞書・歌を三六六歌左頭に「。」符を附し同筆細補しているほか、同部二八詞書「郭公をよめる」を重複し書写するところが瞥見される。共に書写の錯誤であろう。

本書の書写年代は影印本にて審らかにしがたいが江戸期の写本のごとき印象を受ける。又、その筆跡は稍々肉細、肉太の両様が窺われるが単に筆墨の痕跡によるものか。

印記、上下冊巻首尾に「阿波国文庫」の重郭長方形印を捺している。

本書と書陵部蔵A本との類同性については上掲書解説に於て、関根氏は

阿波本と宮本（書A本）は外形内容共に酷似し、近いところに同一祖本を有することが明白であるが、両本の判然たる相違は奥書の有無のみである。

と結論され、書陵部A本の朱書転載奥書と同一なる竜門文庫蔵二本に言及され、「そしてその最も完全に近い姿を保つ」伝存本として当本を想定されている。竜門文庫両本の未見により附言は差控え、書陵部A本との相互関聯性を氏の論述を踏えながらに略述することにする。

まず、両書の外形、その形態上より観ると両書は上下二分冊され、共に下冊巻尾に「基俊集」十九丁を合綴附載し、散木集墨付丁数は、上冊　本書九十五丁、書A本九十四丁（巻六神祇一丁書落し）、下冊　本書六十七丁（内一丁書損じ合綴、上記）、書A本六十六丁と全く同一である。且つ行数は共に十三行（本書に纔か例外十二行見ゆ）にして、詳細は省略するが毎半葉書写本文は過半が一致し同一系統本上の転写関係をも予想されるのである。書写状況の極似一例を掲示すると、巻三秋部五〇六詞書は

九月十三夜大井河にまかりて船にのりてきよ

たき河のわたりまてのほりてかへさに頭弁のむめつにてあかき月を翫といへる事を人〳〵よみけるによめる

紅葉ちるきよたき川にふなてして名になかれたる月こそみれ（をアリ書A）

と第二行目は二字上げ同歌本文同格としている。単なる偶然とは看做しがたい表記上の一致である。

如上の形態上の事柄からは外れるが、関根氏も指摘されるように、両書に散見する集付は殆ど一致し、又歌頭に附す「一」符―符意不明―も一部同じくする。或は又、纔かに一例の校異箇処、即ち春部二三歌に、

詞
しらかはのこすゑの空をみわたせは松こそ花のたえまなりけれ（春のこすゑを詞□）

と、詞花集本文[註一]を両書同様に校記するなど其の源を共有するとしか想定しがたい。

更に此の場をかり、新編国歌大観、本集解題に誌す「校訂表」一覧を拝借し、底本たる書陵部A本の当該本文と本書とを対照すると、

春部六九歌第四句　水のをかにも（書A、以下略同）―水のをかにも（本書、以下略同）、同一三歌第二句　なをもいはれん―なをもいはれん（いと歟）、※同一六三歌第四句　はるこたないに―はるそたなゐに

夏部一四四歌初句　ときつくり―ときつくり（と歟）、同一七一歌第二句　△うゑの山やま―こゑの山やま（す歟）、同一七六歌初句　都鳥―都鳥（郭歟）、同三七詞書　春宮大夫公実ひくちの前斎院にて……同上

秋部五五第三句　※うへそへる―うつろへる

冬部六六歌第四句　かたのゝおのゝ―かたのゝをのゝ（に歟）

旅宿七七歌初句　もとめつる―同上

神祇八四第四句　おほたえしめに―おほたへしめに

釈教九三第五句　春のけたれを―同上、同九〇歌初句　らつめすら―同上

恋部上一〇七歌第五句　色しあはすは―同上、同一〇八歌初句　せたの橋の―同上

恋部下一一四六歌初句　ちつのほき―同上、同一三三第五句　たましさりけり―同上

雑部上一三六八初句　岩のめは―同上、同一三七〇歌第四句　さるまつをしも―同上、同一三九歌第四句　あそのみをきに―同上、同一三〇八歌第五句　まいりきにける―同上、同一四一九歌第二句　※しのまねあまの―しのまのあまの、同一四二

歌第五句　うみほよむらん―同上、同一四四歌第四句　※むけほゝれても―むすほゝれても、同一四六歌初句　するしまを―同上

以上、二十五例を示している。或は更に、雑部下一五九・一五二・一五三詞書　返歌―同上、などを加えても差支えあるまい。上掲の諸例は本集校訂上の本文整定に於ける書陵部A本本文の略誤謬―多少の存疑はともかくとして―と認定した箇処である。しかして、両本の異同は※印を附した四例と△符をしるした一例にとゞまり、他例はいみじくも吻合している。因みに、△符一例は草躰の紛れによるにすぎない。且つ附言すれば例示諸例中には四・五例の間にわたり類同する伝本も存するが、かゝる著しき近似は両本以外には見出しがたく、其は又両書の特色をも呈示する本文異同でもあれば、上記の推論を更に傍証することゝなり、且つ、書陵部A本に書落す一丁分―神祇八九詞書より八六詞書前半部[註二]―を も完備し、現存する同系最善本たる意義を提示することゝなるのである。

しかるに、かゝる形態・内容上の否認しがたく極似する両本でありながら夏部の歌序排列に於ては次の一箇処を相違するのである。即ち、

三三・三四・三五・三九・三六・三七・三八・三〇

と並び、書陵部A本の歌番号に准する排列と異るのである。この歌序の是非は扨措き、[註三]本書と同じくするのは書陵部A本をのぞく群書類従本以下第四類系諸本である。

当該歌群の排列は伝存諸本にあっては異同多き処ではあるが、既述してきたごとくに概ね三系統に類別し得るのである。此処に一括すると、

1　第一～三類本系諸本　三三・三五・三四・三八・三九・三六・三七・三〇

2　第四類本系諸本　本書等既述伝本　上記

3　書陵部A本　二三三・二三四・二三五・二三六・二三七・二三八・二三九・二三〇

である。伝本により多少の例外はあるが、かく略系列に集約され、前半の二三三・二三四・二三五と後半の二三七・二三八・二三九、の歌群に異同は集約されている。その当否は此処に言及すべくもないが、纔か附註したごときの感も残れば、1↓2↓3、のごとき整序の方向があったものかとも臆測に趨るのである。

しかし、それはともかくも、両書がかく近似し、祖本の類同性が検出されながらにかゝる相違が現出することに至ったのか、たゞ転写上の偶発的結果として処理しがたいものを想うのである。一方又、その異同の経由も窺知し得ないのも実情である。

猶書陵部A本には、夏部に

大弐長実白河にて郭公をよめる

おとせぬ（金）は待人からか郭公たれをしへけむかすならぬ身を　二六三（続古）

左京大夫経忠の八条の家にてよめる

郭公声待かねてゆふけとふ道のうらにもことよき物を　二六四

ならの哥合に人にかはりて

郭公なくうれしさをつゝめとも袖にはこゑもとまらさりけり　二六五

と書写されながらに、二六五歌を二六三歌に続くべき移行符を印している。依拠本のまゝなる移写か、書写後の訂正か、あるいは第一〜三類本系諸本に看る同排列による追校のあとなるや判然としがたい。たゞ二六五歌に附さるべき集付けが

三六三歌に「金」と共に併記されているのが懸念される。因みに新編国歌大観は同符を無視し翻字している。本書には此の移行符を欠き歌順を追っているので念のため附記する。

この両書の如上の相違のほかにも相互本文の間には些少な異同ながらも次掲のごときを間々散見する。偶目するまゝに参考までに例示すると、

夏部三五八歌第五句　こひたくむし（書A、以下略同）―こひたくむらん（本書、以下略同）、同三六一歌第四句　くひをとなふ―ゐひくをとなふ

秋部四一九歌第五句　おにのこしくさ―おにのしこくさ、同五五歌第二句　はなさふく秋も（本ノマヽ）―はなふく秋も

冬部六〇三詞書　田上に侍ける比俊重かくたらむなと［略八字余白］けれはいひつかはしける―田上に侍ける比俊重かくたらむなと申けれとみへさりけれはいひつかはしける、同六八詞書　ふけ井のうらの千鳥を―ふけ井のうらの千鳥をよめる

祝部六九三詞書　……松久友といへる心を―松久友といへるこゝろをよめる

悲歎部八三八第五句　思ふへかりけれ―とふへかりけれ、同八四三第四句　をさふる袖の―をそふる袖の、同八四五第四・五句　いとゝや袖のくちかてぬらん―いとゝや袖のくちかて（は歟）ぬらん

釈教九二三詞書　……阿弥陀仏にもまさりといへることをよめる―……阿弥陀仏にもまさりたりといへる事をよめる、同九三一歌第五句　やみもけすかに―やみもけす哉、同九四五第四句　いつるひかけに―いつるひかりに、同九五歌第二句　きゝのたえまの―きゝのたまえの

恋部上一〇四五詞書　……の根合に恋の心を―……の根合に恋の心をよめる、同一〇〇詞書　……おとこに紛はせける

に―……おとこに給はせけるに

恋部下二八四第二句　ねしろたかしや―ねしろた。かや

雑部上二四〇詞書　……よきゝぬともをわかやくをみて―……よきゝぬれをきてわかやくをみて、同二四〇第二句

はひおほゝれる―はひおほられる

雑部下連謌二五七〇唱句　こゝのつのみちのこゑ―こゝのつのちのこゑ、同二六三唱句詞書　伏見の山さとにてあそひとりを……―伏見の山さとにてあそひともを……

のごときが散見される。例示するところのかぎりにおいては、書陵部A本は其の書写過程又は依拠本の本文誤写・誤脱、省删として訂されるべき処が過半であるが、上述の歌序排列の異同と共に両書は同一底本からの書写本ではなく、又当然のことながら相互の転写関係は存せず、かく両本を派生する間には猶何等かの経由を想定せざるを得ないのである。不審なるまゝに附言して今後に期したい。

註一　第一類～三類本諸本は、同歌第二句を「春の梢を」とするが、第四類本系はすべて「こすゑの空を」としている。なかでも群書類従本系は、その傍記に「春のこすゑを集」と校異して両書と略同じくするが、「詞□」の不明字と共に全く同一とは云難く、両書の傍記は各々の依拠した底本に共通して附校されていたものであろう。

註二　書陵部A本は上冊八十二丁表終行までに神祇八五歌を書写し同裏初行は八七詞書尾部、

はしますそと尋けれはもちゐの宮と申神のおは／しますと云を聞て俊重かたはふれて申ける

にて始る。その間、本書には八十二丁裏初行に八五詞書

左京大夫経忠の家にて社桜といへる事を

を書写し、八九歌～八六歌、八六詞書までを終行としている。次葉八十三丁表は八六歌より八六歌を十行迄に書写して、残り三行

に、八七詞書前半の

田上に侍ける比かみの里といひける所にゆわかして／人のむかへけれはまかりけるに鳥ゐのありけるまへに／みちしるへのものゝおそろしけれはいかなる神のおはし」

と書写し終行としている。書陵部A本八二丁裏初行、上掲の「はしますそと尋けれは云々」と傍点二語「はし」を重複するがいみじくも符合し、同系統本の一丁を繰り誤りか、書落しているのが判明する。

註三　此の歌序には、各系類本から略三系統の排列が検出され、それぞれの意図的配慮が窺れるようであるが、類従本と同じくする本書に限ってみると、三三～三六歌の間は郭公の声待ちわぶるの情をほゞその主題とし、三七・三八・三九歌は、ほのめかす声、ほゝめつる声、こもらぬ声、と些々としてとらえる繊微なる声容を賞ずるの吐情を詠じ、且つ、うきたのもり、なげきのもり、しとみ山、と想ひをつらねての運びに自然の移ろいが感想されて、書陵部A本には更に整序の方向が見出せるのではなかろうか。

書陵部蔵―函架番号五〇一―七三　〔近世初〕写　桂宮本　存十巻　**書A**

袋綴二冊。打曇表紙、竪二十八・三糎、横二十・四糎。料紙、楮紙。毎半葉十三行に和歌一行書き、詞書二～三字下げに書写している。本文墨付、上冊九十四丁（書落し見開き両面一丁分、後述）、下冊八十五丁―但し本集六十六丁、巻尾十九丁基俊集合綴す―。既述のごとく阿波国文庫旧蔵本とは上下冊共に上冊書落し見開き両面を除き、基俊集合綴を含み丁数・行数―但し阿本十二行の処もあり―共に同じくしている。

題簽、両冊表紙左肩に上辺金泥竜文丹色短冊を貼付し、「散木奇謌集　上（下）」と墨書する。「図書寮典籍解題文学篇」によれば霊元天皇宸筆という。

内題、「散木奇謌集第一（〜十）春部（〜雑部下）」と誌す。部立は小項目を併せ内題共に前掲阿波国文庫旧蔵本と其の表記は同一である。

本集には前掲書に見ぬ寛文十年後西上皇（同解題）の他本による奥書（下冊六十六丁裏）を朱書、転写附載している。

本書は、現在のところ阿波国文庫旧蔵本と共に近世の書写本ながら第四類本系を代表するのみならず本集の最終形態を具備する伝存本として措定するほかはなく、結句、両本相補完することにより現存伝本処理の基底たらしめることとなるのである。再三繰返し附言してきたが、かゝる現状の上に新編国歌大観に附与された流布歌番号による便宜をもあわせ縷述を重ねてきたのである。従って本文上又歌序排列の基本的異同も本書、あるいは場合により阿波国文庫旧蔵本の充補によって対処してきたのである。

その補綴の最たるは、本書第六神祇、上冊八十二丁表と八十三丁裏の間、見開き両面の一丁分にわたる書落しである。前掲書註二に言及したので略記するにとゞめるが、同表最終行は、同八五八「あたりをはなをほのめかせ云々」歌で終り、同裏初行は八六七詞書後半「はしますそと尋けれはもちゐの宮と申す神の云々」にて始まり、同八五九〜八六六歌迄八首と八六七詞書前半を闕く結果となっている。[註一] 第一類〜四類本諸本すべて此の欠落本文を載録するところであれば本書の書落しと判断されるのである。当然の事ながら阿波国文庫旧蔵本は完具している。

本書と同書とが極めて近似する同一祖系本たるについては既に関根氏の論述されるところであり、且つ両書相互の間に散点する小異は前記解題に於て例示したごとくに本書には稍々誤写・誤脱、省略の箇処が瞥見される。さきの欠落本文と共にその過半は同書により補訂されるのである。

たゞし、両書異同の顕著なるは、既に述べたところの、夏部に於ける排列一例である。即ち、本書は

二三三・二三四・二三五・二三六・二三七・二三八・二三九・二三〇

と、当然歌順を追うに対し、同書は、二三五・二三九・二三六、と二三九歌を挿み相違を呈している。同解題にて触れたので参照されたい。

又、本書は同部二六三・二六四・二六五歌三首を書写の上、二六五歌を二六三歌の次に排すべく移行符を施している。同じく既述言及したので省略する。

以上、両三例が両書に看る異同の主なる処である。

扨、次に後西上皇筆と称せられる「或本」転載の朱書奥書についてゞあるが、本書の書写状況より看て本集十巻併びに基俊集は同筆にして諸氏査定のごとくに近世初の書写にかゝる合綴伝本[註二]であったのであろう。その後、寛文十年七月十九日―後西天皇譲位七年後にあたる―に「或本」奥書を追補したものと推定される。竜門文庫目録等[註三]によれば同一奥書を誌す慶長頃書写一本を存するが、未見なるまゝに、関根氏の御調査によると[註四]「阿・宮両本（阿波国文庫旧蔵本・書陵部蔵A本）とは異系統の大系統の中の一派の本」と想定されている。その系統論は暫く措くとして別系統本からの転写奥書たることは明らかであり、本書又は阿波国文庫旧蔵本とは直接には関聯なき伝存本奥書である。本書の朱書奥書には、

仁平四年正月十九日未時許以彼家自筆本書写了　一校了[本云]

永久三年六月三日顕輔会瞿麦制露

意尊

なてしこのもとにほへるしはかきはしはしも人のとまらぬはなし

俊頼

かきねにはむくらもはひてしけからんすこしたちのけやまとなてしこ

如此会者此葎哥俊頼詠歟而世以講意尊哥又不入散木集又清輔／朝臣一字抄意尊哥ト注了甚以不審歟世人又多者本ノマ、講俊頼也／如何又第二句ハムクラノツユモ云々

（二～三行余白）

宝治元年九月廿七日於燈本而書写訖此本者故顕昭法橋自筆云々／片仮名横切一帖厚雙帋也披閲之間依有煩書分三帖了彼顕昭／文書等譲与弟子印雅々々同宿故幸清法印房修焉之時印雅譲／幸清々々入滅之後故超清法印伝得超清持両妻之間彼是／相争散々云々不慮之外伝備件本書写了但日々無余暇夜々／励筆功仍筆跡狼籍可察老眼也

六旬有余翁在判

右之奥書者或本ニ載之仍テ此書加了　寛文十七十九

と誌している。

右奥書「仁平四年云々本云」と「宝治元年云々」の行間に余白があり、一見両種別箇の奥書のごとくにも看取されるが、やはり一聯の奥書であり、「宝治」奥書の筆者「六旬有余翁」が「或本」即ち顕昭自筆本の奥書を書留めたものとみてよいのではなかろうか。井上宗雄氏註五も「仁平四年（久寿元）正月十九日顕昭は『彼家自筆本』（俊頼家の意か）散木奇歌集を書写一校した（書陵部本等奥書……）。俊重か俊恵の家に伝わる本によって写したのであろうか」と推論されている。その顕昭自筆には「顕輔会瞿麦制露」二首中の「葎歌」についての勘物―顕昭の附記であろうか―が追記

されていた、と解せないであろうか。そして「六旬有余翁」が書写した伝本は顕昭から弟子印雅へ譲られ更に幸清を経て子超清にと相伝された「片仮名横切」一帖の厚双紙なる来歴正統なる証本である、と加証識語したものであろう。此の「六旬有余翁」を福田秀一氏[註六]は鎌倉中期の反御子左家の古典籍書写等の中に「散木奇歌集／宝治元年九月廿七日／某（或いは知家か）は、顕昭筆本を書写」したと、知家を推測されている。恐らく恰当なる銓考かと傾顧される。知家時に六十五・六歳であろう。

その真偽はともかく此の奥書のごとき由縁正しき伝本たる「或本」の祖系を現在辿るべくもなく、同奥書を持つ竜門文庫一本の未見にて言及すべくもないが、関根氏の論述を拝借すれば「その伝流には曲折があったが、宝治元年九月に顕昭自筆本を写した本の末流が竜門文庫本二本（他一本も同系と云う、稿者注）であること、それによって、現存散木奇歌集が、その内容自体と併せ考えて、おおむね俊頼当初の姿を伝えると推考し得るという点で極めて重要で」（上掲書）あることは否めない。両本精査の機を得て今後に期する所存である。

註一　本書の書落し欠落本文を参考までに阿波国文庫旧蔵本の本文を以て次に掲出する。即ち

左京大夫経忠の家にて社桜といへる事を

けふみれは花もすきふに成にけり風はいなりにふくとみれとも　八五九

前斎宮の閑院におはしましける比月のあかゝりける夜まいりてみれは女房たちあまたくして月にあそひけれは南おもての社のしたにかくれてみれは女房達むれてこのもりは神のやしろにゝたるものかないさおほしき事申むとてよき男給へと申を聞てとらせんとこゑをかへていらふれはおちてみなかへりにけり又の日つかはしける

思ひかねやしろもみへぬ森にきていのりしことのはよいかにそや　八六〇

返し　　ゆりはな

あまくたる神もしるらむ思ふことむなしき森にゆきていのらは　八六一

榊をよめる

榊葉を神のみむろとあかむれはゆふつけ鳥のねくら也けり　八六二

春日祭

きさらきのはつさるなれやかすか山嶺とよむまていたたきまつる　八六三

賀茂祭

引きつれてわたるけしきを来てみれはいつきそ神のかさりなりける　八六四

稲荷にまいりたる人のすきをこひけれはつかはすとてたゝうかみにかうかひのさきしてかきつけてつかはしける

人しれすいなりの神にいのるらんしるしのすきとおもふはかりそ　八六五

返し扇のつまにかけり

君をとはいなりの神にいのらねはしるしの杉のうれしけもなし　八六六

田上に侍りける比かみの里といひける所にゆわかして人のむかへけれはまかりけるに鳥ゐのありけるまへにみちしるへのもゝおそろしけれはいかなる神のおはし

迄であり、「神のおはしますそと云ゝ」と傍点以下を本書八十二丁裏に初行としている。

註二　本書に合綴の基俊集は巻頭より一九〇番歌迄が書写され阿波国文庫旧蔵本と同じくしている。同集の書陵部蔵〔近世初〕写本（第一類2）―函架番号五〇二―七四三―には一九〇番歌の次に前後に余白をおき、次の識語がある。

茲散木集弐冊召僊洞新本騰写出后毎輪直依禁裏古本校正為盖自正月一日基俊家集也夫俊頼基俊之二士同世而生同道而立其名鳴于一時其統伝于万古可謂倭歌之仙矣今合二集為全書聊欲有助」観覧而已

戊寅臘月七日　　藤譚玄誌

この識語の筆者、藤譚玄なるは寡分にして不明であり、「戊寅」年も又知るべくもないが、「夫俊頼基俊二士同世而生同道而立其名鳴于一時」を以って「今合二集為全書」のごとき合綴本が成立していたとすれば或は本書もそれとの結びつきも予想されなくもない。本書にみるかゝる合綴形態も、直接か否かは審らかにしがたいが、同種の動向のごときが促した書写本であろう。

註三　竜門文庫善本目録（昭27・11刊）の一四三にあげる本集十巻三冊の解題には同書は慶長頃の写本であり本文料紙、斐楮交漉紙に烏丸光広風の筆蹟であり、毎半葉十行に書写している。後補の青色古表紙が存するという。同書には書A本と殆んど同じ奥書を共有している。関根慶子氏「中古私家集の研究」附載の口絵等と照合するに、同書中冊末に「第四巻表紙云／永仁二十一廿書了（花押）」の細書奥書が誌され、一方書A本尾に記す「右之奥書者或本ニ載之仍テ此書加了　寛文十七十九」の所謂後西上皇の転載識語を欠くのほかは微々たる小異である。又書A本「宝治元年云々」を「宝治元年云々（本云）／（本云）」と「本云」を重複し、「……譲与弟子□（印）雅云々」（口絵不明）の傍記補訂を見出すにすぎない。右奥書の後に基俊集を載録していない様子であれば、元来本集に併載されていた奥書か、其後「或本」よりのそれか猶問題を残すが、本奥書の占る意義は重く、本集の由縁ある伝写、相伝の経緯を辿るべき鍵鑰ともなり、「彼家自筆本」の源を遡る一つの手懸りを残すものと予測される。未見のまゝに附記する。

又、同目録、一四四散木奇歌集三巻三冊（ママ）は江戸初期の書写本にして前掲書と全く同系統本との由である。各冊首に「正親町蔵」の朱印を捺すという。

註四　関根慶子・大井洋子両氏「阿波本　散木奇歌集本文校異篇」風間書房　昭和五十四年七月

註五　井上宗雄氏「平安後期歌人伝の研究」笠間書院　昭和五十三年十月

註六　福田秀一氏「中世和歌史の研究」角川書店　昭和四十七年三月

伝本考補

刈谷市立図書館蔵　村上忠順自筆　存十巻「散木棄謌集標註」稿本　第二次校合書入本

「散木棄謌集標註」（嘉永三年序刊）四冊は既述の第二類本系篤斎葉山信果天保十二年書写本の手沢後、同書を土台とし、その「於富舞泥」に誌すごとくに「羣書類従なるをはしめそのほかふたつみつよみあはせ考ふるうちに尾張ノ国名古屋人野口道直かひめもたる本をかりいて」て、同書に校合を施し併せて釈義考証を眉欄に註したのが、「標註」第一次の草稿本である。本書は其の第二次稿本ともいうべき、第一次校合書入本の本文整定と標註の周備を期した定稿寸前の繕写本である。

その成立については、夙に簗瀬一雄氏の「『散木弃歌集標註』の成立」[註一]に詳密なる御論考が存し、その上に附言すべくもないことでもあれば、以下は本集伝本の書誌的解題の主旨に沿って、板本「標註」にいたる本文校訂の経由を、葉山信果書写本から本書へ、更に板本「標註」へと、両三本の本文に課題を絞って概略麁述することにする。既に本書は村上忠順の本集校訂本であり、厳密には本集伝存本として対処すべきか否かは疑点の残るところであるが、本集の伝本状況から鑑み附録したものである。

猶本書の成立年次は簗瀬氏の考証[註二]により、本書・板本「標注」序に「嘉永三年庚戌正月」の年紀を誌すが、更に降って万延元年仲春後、程なき頃であることが証審されている。

註一・二　簗瀬一雄氏「『散木弃歌集標註』の成立」　国語と国文学　昭和四十年八月号

袋綴、三冊。縹色布目表紙、竪二十六・三糎、横十八・七糎。料紙、楮紙。字面高サ約二十・二糎。標註鼇頭高サ約四・五糎。自序・於冨舞泥・本文共に毎半葉十行に和歌一行書き、詞書二〜三字下げに書写し、鼇頭は忠順特有な勤細な筆跡にて詳密に註記をうずめている。本文墨付、自序二丁、於冨舞泥二丁、各巻柱に丁付す。―但し、第三・四・七・八巻は書脳―第一冊　第一・二―一（〜四十二了）―・第三・四―一（〜三十八終）―、第二冊　巻五・六―一（〜四十二了）―・第七・八―一（〜二十七終）―、第三冊　第九―一（〜三十了）―・巻十―一（〜二十七終）―・尾一丁識語を附す。

題簽、表紙左肩に茜色単郭附短冊を貼附し、「散木弁謌集　上（中・下）」と自筆墨書する。

内題、「散木弁謌集第一（〜十）」と記す。各部立については葉山信果本傍記校合との関聯もあり別註一覧した。

自序・於冨舞泥の奥には、それぞれに、

……前略……余今尋法橋微意為之標註其不足者加以諸家説／補以僻案号曰散木弁謌集標註集中之歌有雄偉」（2オ）

焉有新奇焉清詞妙句縦横磊落都無所拘泥実可／謂歌仙耳後世弁歌誤作奇歌亦宜哉童蒙勿拠書／名以為散木以為弁哥嗟乎斯集之弘麗温雅豈散／云乎哉豈弁云乎哉

嘉永三年庚戌正月　　村上忠順　「原印／忠順」（方形陰刻朱印）、「村上／承卿」（方形朱印）、二顆捺印

……前略……おのれ此集を校へ訂さむの心はあらさりしかともゆくりなく／狩谷望之か古本とも校正せし本をえてめつらかにおもふあまり／羣書類従なるをはしめそのほかふたつみつよみあはせ考ふるうちに／尾張ノ国名古屋人野口道直[註二]かひめもたる本をかりいてつこれはたい／とよき本なれは書入ぬさてこれかれふみよむついてこと

に書加／へなとしたるを友たち見ていかて板にゑりてむなといへはさはとて／さらに一わたりよみかむかへつされとこれをあたしふみともの中にさ／くりておなしきをくらへことなるをあけ言葉のたくひをひき事／のもとをことわりなといますこしつはらにせまほしけれ／とかたゐなかにて書にいとともしけれは手ちかき書といへともひ／きもらせるものおほきはいとあかすうれたきわさになむことにく／ちをしきは円珠庵あさりのかしら書といふものを得されはえかき／いれさりき見出たらむをり書加へてむすへてこの註は考証とことは／のこゝろをとくをむねとせり歌の意をとかむことは見む人の心々に在／へしさてこの朝臣のうへのもの。みえたるかきり伝や事蹟やいとお／ほかるをかきいててこの集にそへむとおもひてかつ〳〵書出もしつ／ましるしもしおきたれといまたえはたさすいくほとなくなしはてむ／とは思へといとまのひましなけれはそれはたいつの事にか／　忠まさ

と誌している。いさゝか長い引用となったが、本書の校訂、考証、語意を旨とする標註の意図、経緯を具に述べているので拙述を避けて敢て所引におよんだのである。

又、下冊、第十巻末（二十七ウ）に

右散木奇謌集以織部正乗尹本校合了（羣書類従二百五十四巻奥書）

と記し、次葉には

右散木弃歌集全部十巻四冊俊頼朝臣家集也或称散／木寄歌或云散木奇歌並非也此古鈔本題散木弃歌甚／佳也弃歌与散木相照且中世有須天宇多之辞亦可以／証矣僧契沖嘗云宜作弃歌達人之慧眼可服也此古鈔／本椋斎狩谷先生帳中之物今影照新写以蔵于家惜乎／此本欠巻九以下雑部故以一古鈔本繕写補入此藍本／亦係先生之蔵嗚呼先生徳崇学富儲書亦称焉保孝生／平浴於先生之徳沢有年於茲子孫其勿忘諸

天保二年八月廿四日夜況斎岡本保孝識於歳計草堂

と誌している。共に葉山信果本に看る、校語と識語である。後者において「天保十二年晩春写之　篤斎葉山信果」の書写奥書を刪省するのみである。

右掲の校語・識語の移写、又「於冨舞泥」の記述からしても本書本文は既述の信果書写忠順校合書入本を土台とし、板本「標註」の前稿としての体裁を整えていることが判る。

本書には猶まゝ押紙書入れが散見するが、既に板本「標註」に近く、その一例として、本書に於てあらたに整具した自序・於冨舞泥と板本「標註」との異同に於ても次のごとき纔かの修訂を散見するにすぎない。

㈠「於冨舞泥」は「於冨無泥」にと改字されるのほか、本書を殆んど其儘―助辞一例、漢字・仮名表記の相違あり―に完稿としている。

㈡「自序」は後述するごとく猶多少の経緯が存し、以下のごとき刪定部分が所見される―本書本行、傍記板本「標註」―

(1) 是大納言経信卿(ナシ)之子也、(2) 且其自家(所)詠謌(ナシ)亦高邁、(3)謂無用之木是人(為)之所散弃也『弃字(以下ナシ)或作奇或作寄倶非古本作弃者為是僧契沖嘗論之可謂至当之論矣』故有称須弓禹多者亦弃歌之謂也夫朝臣(ナシ)藻詞、(4) 意者其先考経信卿(納言)霊(庭)訓之所致也卿(納言)有所謂能乗三舟之材(才)、(5) 二子亦乃(ナシ)朝臣之子於卿(納言)為孫……蓋淵源於卿(納言)之母氏耶斯人賢明(ナシ)而善綴歌章、(6) 夫朝臣集亦除(然而世間所伝写本誤脱極多)在類従世間僅独伝写本而已亦復誤脱繁冗不可識読頃日幸獲一本雖非絶(無)謬誤、(7) 清詞妙句縦横磊落(跌宕)都無所拘泥実可謂歌仙(僊)耳後世弃歌誤作奇歌亦宜哉(矣後之観者或)童蒙勿拠書名以為散木……嗟呼斯集之弘(宏)麗温雅豈散云乎哉

のごときが其の主なるものである。簗瀬氏の詳述(註三)されるところであり再叙するまでもないが、村上家所蔵「蓬廬襍

鈔」に所収される「散木弁歌集標註序」二通が存し、それは忠順が松本奎堂に再度にわたり批正を覓めた添削稿であり、その経過後の事であると論証されておられる。かかる事情もあっての修訂であり、「於冨舞泥」に比し改めるところが稍々多きにわたったのであろう。

ともかくも、本書は葉山信果書写忠順校合書入本に依り、追訂、書入完備を期した繕写補訂本であり、定稿寸前の整理された第二次稿本である。

印記、上記「序」下に「握壁」（方形陰刻朱印）と同尾の二顆、中冊巻首に「村上文庫」（重郭方形朱印）、下冊巻首に「参河碧海／村上図書」（単郭方形朱印）の二顆が捺されている。

註一　以下に葉山信果本傍記の校合と本書との関聯を掲示しておく。上段信果本、下段本書。

散木弁歌集第一（奇塙（墨））　春部→散木弁歌集第一（奇イ　巻（朱））　春部、散木弁歌集第二　夏部→同上、散木弁歌集第三　秋部→同上、散木弁歌集第四　冬哥（部ノ（藍））・一本・塙（朱））→散木弁歌集第四　冬部（哥イ）、散木弁歌集第五　祝部・別離之部（原本ナシ（朱）・ノ（藍））羇旅塙（朱）・旅宿部（部ニ「一本塙」（朱））→散木弁歌集第五　祝部・別離之部イ・羇旅（旅宿イ）部、散木弁歌集第六　悲歎部・神祇・釈教部（一本アリ（朱）ナシ原本（朱））→散木弁歌集第六　悲歎部・神祇・釈教部、散木弁歌集第七（八）恋部上（下）→散木弁歌集第七（八）恋部上（下）、散木和歌集第九（弁（墨）一本／塙アリ（朱））　雑之部上→散木弁歌集第九　雑部、散木和歌集第十　雑（部ノ（藍））之部下→散木弁歌集第十　雑部（歌）下

と対している。その比校本附記は本書に至り簡略化されて―「イ」―いるが、部立表記には一部変改あるものゝ、そのなかでは、やはり「塙」本を踏えての一面は否定しがたい。

註二　野口道直旧蔵本は村上家に襲蔵され、前稿(一)に解題した。

註三　簗瀬氏上記論考

はじめに断りがきした趣意に沿い「標註」本文に限定し、第一次標註本（信果本）から第二次本（本書）、更に板本

「標註」へと、その関聯と推移を概観することにしたい。

前稿㈠に麁述したごとくに篤斎葉山信果書写本は八巻本系と第九・十両巻との別本の合綴より成るものであるので、以下本書との本文比較―こゝに板本「標註」併せ掲示した―に於ても既稿信果本解題の叙述に準じて言及してゆくことにする。その異同は該解題では、ひとつには信果本から標註本への校訂推移を主眼として同書本来の本文と其の欠脱本文の朱墨補入本文と標註本文との関聯を例示したものである。従って本稿に於ても当初の意図に沿い、例示掲出本文を基本に措き併せ附記した当該番号に拠って略記し標註本文と対照することにした、それ故に前稿掲示本文の参照を必須とするものである。已得ざることと諒恕いたゞきたい。且つ、繁縟とは憶いながらも提示例に於ける辞句上の異同は別註一覧した。

猶更に信果書写本に看る煩雑な点は「原本」狩谷棭斎本に同所蔵「古本」一本と「塙」との両校合―朱筆を主とする―が岡本保孝或は葉山信果の手により施され、且つ其上に村上忠順手沢後の、再度の「塙」本再校合―墨筆―、野口道直本の校合―藍筆―を経過して渾然たる上に、勅撰集以下諸集又歌合等による旧・今―保孝・信果・忠順―の校異が重層する様相を呈している。以下の対照表・附注中には上記色別により多くは類別し一部は附記したが、やはり煩累を惧れ詳記を避けて、前稿㈠の同解題に委ねた。

しかし、本集の釈義上から観れば如何に混態の本文であるにせよ当時代的な校勘結果であれば寧ろ蓋然的結論よりも詳密な語句に累及する異同の経過にこそ本来的意義が存するのは言を俟つまでもない。啻当面する課題から徒らに離析し迂遠するということばかりではなく、信果本解題の註記において上記主要補入以外の細部にわたる朱校異を煩縷ながらに掲示したことから更なる反覆も如何かと顧みて省略した。該書に於ける其等比校と板本「標註」とを併せ

覧れば其の本文推移の大概は御判断いたゞけるかと思われるのである。

第一～八巻

1―春部一〇三歌　信本朱細補、本書・板本「標註」本（以下、標本ト略記）本行、三本校異別註[註一]（以下同）、2―同部一六七・一八八左注　信本朱細補、本書・標本本行、3―夏部一九八詞書　信本墨書本行なるも文頭に「イ。一本／塙」と朱書す、補入本文歟、本書・標本本行、4―同部三六下句、信本墨書本行とするも朱圏符を附し「原本ナシ云々」と傍記す、補入本文歟、本書・標本本行、※イ[註二]―秋部四三詞書・歌　信本墨書本行存、上欄ニ「一本及塙本此二行ナシ」ト朱細記す、本書忠順筆にて行間に同本文を墨細補し、「一本无」と傍記、標本本行本文とし、傍記同上、※ロ―四六三同部詞書一部[註三]　信本忠順傍記墨細補、本書・標本本行、※ハ―同部五三八詞書[註四]―信本忠順筆にて行間墨細補、本書・標本本行、5―冬部六五八作者―信本本行朱補、本書・標本本行、※ニ―別離七三四詞書・歌[註五]　信本墨書本行存、本書行間細補、標本本行本文、6―別離七四六作者　信本本行朱補、本書・標本本行、7旅宿七六九詞書後半　信本朱細補、本書・標本本行、8悲歎部八一〇詞書後半部　信本朱細補、本書・標本本行、9釈教八九二歌　信本朱細補、本書・標本本行、10同部九三六歌　信本朱細補、本書・標本本行、※ホ―同部九五八詞書・歌[註六]　信本忠順行間墨細補、本書・標本本行、11恋部上一〇〇八作者　信本本行朱補、本書・標本本行、12同部一〇三九左注　信本行間朱細補、本書・標本本行、※ヘ―恋部下一二三六歌[註七]　信本忠順行間墨細補、本書・標本本行、13同部下一六〇詞書―信本朱細補、本書・標本本行、14同部下一三七歌・一三八詞書　信本上欄ニ朱細補（但し忠順校補ニアラズ信果筆跡）、本書・標本本行

第九・十巻

1雑部上三〇四作者　信本欠落、本書・標本同上、2同部上一三二歌―信本行間ニ藍色（野本）細補（忠順筆跡）、本書

・標本本行、又、信本上欄ニ朱附注細記「塙本ニモ空行アリ」、「諸本詞書のみありて歌脱たりいま野口本により て補へり」(本書・標本眉欄補注)、※イ―同部一三四作者　信本「イ」本注記ナシ―本書・標本「イ」記アリ、※ロ―同部一三六作者「イ」本注記ナシ、本書・標本アリ、3同部上一三八三作者　信本行間ニ藍色(野本)細補(忠順筆跡)―本書・標本細記、4雑部下一五八長歌一部　信本行間墨細補、本書・標本細記、5同部下連歌一五〇唱句　信本行間ニ藍色(野本)細補(忠順筆跡)、本書・標本本行、又、信本上欄ニ朱附注細記「塙本亦一行空欠」、「此一句諸本みな脱たりひとり野口本にのみ存るをもて補へり」(本書・標本眉欄補注)、6同部下連哥一六〇八和句　信本上欄ニ朱細補、本書・標本本行、7同部下連歌一六〇九唱句作者　信本行間ニ藍色(野本)細補(忠順筆跡)、本書・標本細記

いさゝか簡約な例示であるが、本書は篤斎葉山信果本を本体とした村上忠順の校訂本文であり、既に第一次標註稿本に於て本書併びに板本「標註」の基礎稿はとりわけ本文に於ては終尾に程近い階次に至り後は其の整序をあますところにあったのである。その間の経緯については前稿(一)第二類本系諸本の一本として縷述したところであるが、約言すれば八巻本系一本と余巻両巻の合綴本であり、共に狩谷棭斎儲書にあり、岡本保孝、葉山信果の、ことに保孝であろう、第一次の校訂を経過し、村上忠順の手沢後、更に「塙」、野口道直本との校勘を経由した、極めて錯綜する校合経過を辿った本集校訂一本である。幸いにも信果書写本、野口本が現存し、前者に於ては其の筆跡により略原本文と同補入本文―主に朱―は確認を可能にし、後者によって忠順補入校合―墨・藍―の実情を追認し得るのである。更には又、忠順の「塙」本ほか諸本追校のあとも、特有勤細な書体から一瞥、前者のそれ等とは判別することを得て、本書に至るの間の経由を追蹤しえたかとも思い前稿に拙述したのである。本稿はその拙述を踏えての言及であるため屢々煩累におよぶの難をまぬがれない処多々にわたると危惧する。成る可くは註記に徙し補説することにしたい。

扨、上記の略一覧において、第一～八巻より看るにまず著目されるのは信果本に於ける、朱・墨・藍両三筆の校補本文は※イ・※ニを除いて―3については信果本解題に既述―他十七例は僅少な語句上の異同を除いてすべて本書において整定本文として本行化していることである。※イ・※ニの二例は如何なる理由によって本書にて行間に細写するに至ったかは忠順の意図は審らかにしがたいが、註二・五に記したごとくに、単なる誤脱の追補ではなくして「塙」本などに牽れての意図的な却除であり、更に定稿への途次に再び追記、復活させたものかと推測される。が、ともかく板本「標註」には載録され、結果的には全て汲み込まれているのである。

そして、その両三筆による校補本文には、a信果本に既に存するもの―1～14―但し3・4は墨、他は朱補―、又b忠順校補―※ロ（墨）・※ハ（墨）―、c稍々変則的な信果本本文たる上記の※イ・※ニの切出・入、となっていて前八巻迄は其の過半は語句上の細部はともあれ略校了に近い状態にあり、それが忠順の更なる細部の追校を経たものであることが判明する。

余巻第九・十両巻は既述ごとくに本集伝存本すべてにわたり異同尠く、信果本も同様であり、その補校本文は、その1は信果本以下板本「標註」に至る三本の欠脱であり、※イ・※ロは比校本「イ」記の存否にすぎず、当然、このらを除く六例となるが、上記a項の対象となるのは此の両巻にはなく、b忠順の校補が殆んどを占め―2（藍）・3（同）・4（墨）・5（藍）・7（同）―、他一例―6（朱）―がc項信果書写本の上欄に朱補されているにとゞまる。藍筆補入は忠順の野口本購得の成果であったのであろう。

とまれ、既に原態が失われている上に且つかく概略したのみにても本書、又板本「標註」校訂本文は更に混糅し任意な伝本の合成であることが認知されるのは伝本処理上留意されなければならない。

この校合本文の、本書併びに板本「標註」の整定本行化に際してゞあるが、両書は註記一〜七に見るごとくに多少の異同が散見されることもさりながら、信果本に附記された比校本略符は削除されるか簡約化されるもの過半にして、両書のみを以てしてはもはや遡及しがたき現況を呈しているのである。詳細は註記に譲り、数例をあげて、其の恣意性を示すことにする。

既述したごとくに、信果本に看取される主なる校本は校斎蔵書「古鈔本称一本者是也」と「塙氏群書類従本」を主として、次に忠順手沢本たる「野口道直本」の三本が中心をなしている。そのほか「イ」本—不明—、「原本」—前稿(一)に詳述—がある。後者は前稿にゆずり前者についてみると、先ず前八巻に於ては、その附記は、「塙一本」、「一本」、「塙」、「ノロ」、「ノロ本」と表記して、そのかぎりに於ては分明である。それは両書にいたると、「塙一本」→「一本」とする※イ・4、「塙」→「一本」とする※ホ、「塙一本」→「釈教題林闕一本无」とする9・10、「塙一本」→「イナシ」とする6・8、或は又、信果本墨本行存、「塙一本」→校本省略3のごとき、更には「塙一本」・藍追補→「イナシ」7などをも所見され、比校本附記註には甚だ以て統一性を欠き、その経由は信果本の検索なくしては辿るべくもないのが実情である。因みに両書に於ける比校本附記を削除するをあげると、2・3・5・11・12・13・14、の多きが検出されるのである。

次の第九・十の両巻の校本註記については野口本を主とする故か、※イ・※ロの信果本無註記に対し、本書・板本「標註」に「イ」記を附す—其の意不明、誤写か—ほか、同書本来の上欄朱補6を除いて、「藍」筆→「ノ」2・7、→「ノロ本」3（本書）、→「野口本」3（標本）、「千堀百」・「ノ本」墨筆→「千堀」4（本書）、→「千百」4（標本）、或は「藍」筆校補を眉欄に「野口本云々」5と附註するなどあり、猶其の不統一感は免れぬが、前八巻に較べてほゞ比校本を推測し得るのである。

ともかくも、上述略記をしても板本「標註」寸然の稿本たる本書の段階において校勘比校本の附記は既に任意な取捨撰択がおこなわれ、原形を辿るべからざるのみならず、校訂本文は憖じいな附注によって寧ろ一種の紛乱を与える結果を招いている。しかも、それは纔かなる上掲例示以上に重い意味を課せられている歌句上全般にわたることは当代一般の通念ではあれ注意対処されねばならないであろう。[註八] 本集伝本が殆んど江戸期の書写本であり、確たる伝本の尠きにあわせて、晦渋な釈義を随伴する本文校訂は一方充分に其の意義を提示しながらに本文処理を一層に紛紜化させる一面が、本集の場合余りにも顕著であることを言添えたいのである。

それは、次の歌序・排列においても同様の傾向にある。

両三本の排列は次のごとくに、信果本の略補訂に随い四例中三例が改訂されている。

(一) 夏部　三三・三五（「一本塙後ニアリ」ト朱書ス）・三四（「一本塙前ニアリ」ト朱書ス）・三八・三九・三六・三七・三〇　信本

(一) 同部　三三・三四（「一本・後」ト墨書ス）・三五（「一本前」ト墨書ス）・三九・三六・三七・三八・三〇　本書・標本

(二) 同部　三六三・三六五（三六四詞書ヨリ朱線ニテ三六六詞書冒頭ニ移行符ヲ印シ、「一本塙」ト朱書シテ、更ニ鼇頭ニ「此哥ト上ノ哥トノ間空行ナシ一本塙本並同」ト朱書ス）・三六四・三六六　信本

(二) 同部三六三〜三六六の排列は本書並びに板本「標註」本文を掲示しておく。本行本書、傍記中に標本を校記する。

大弐長実卿白川の家にて郭公をよめる（りけイ（標本））

おとせぬは待人からかほとゝきす誰をしへけむ数（ゆゑノ（本書・標本））ならぬ身を（のイ（標本））　三六三

続古今（本書・標本）

ほとゝきす鳴うれしさをつゝめとも袖には声もとまらさりけり　三六五

一本後（標本）ならの哥合に人にかはりてイ（標本）

左京大夫経忠の八条の家にてよめる

一本前（標本）
ほとゝきす声待かねてゆふけとふ道のうらにもことよきものを　二六四

ならの歌合に人にかはりて郭公不乏といふ事を
「イナシ（標本）」
夫木（本書・標本）
今こそはふたむら山のほとゝきす声をりはへてあやになくなれ　二六六
類題（標本）

㈢ 同部　二九五・二九六（「後塙」ト朱書ス）二九七（「前塙」ト朱書ス）　信本

㈢ 同部二九五～二九七の排列を掲示すると、本書は、

五月雨の心をよめる

さみたれはもりこし水も岩こえて庭もぬまえのそこと成けり　二九五

百首哥中に五月雨をイ
千載　堀百
おほつかないつかはるへきわひ人のおもふこゝろはさみたれの空　二九七
（ヤイ）

五月雨はなつかしかりし水のおとのおひたゝしくもなりまさるかな　二九六

同㈢板本「標註」は再び信果本排列に復帰する。念のため掲示しておく。

五月雨の心をよめる

さみたれはもりこし水も岩こえて庭もぬまえのそこと成けり　二九五

五月雨はなつかしかりし水の音のおひたゝしくもなりまさるかな　二九六

百首歌中に五月雨をイ
千載
おほつかないつかはるへきわひ人の思ふ心はさみたれのそら　二九七
（ヤイ）
堀百

鼇頭註記二九六歌「此水の音の哥一本にはおほつかなの歌の次に入たり」と附刻シテイル

㈣ 釈教　八九一・八九〇　信本・本書・標本同、

但シ本書・標本、八九一・八九〇歌頭ニ「一本後」「一本前」ト附記シ、本書ハ又鼇頭ニ八九〇歌「一本此哥智恵光仏の上にあり」ト注シ塗抹シテイル

如上、四例の排列を見出すにすぎず、既述諸本のなかに屢々所見するところである。

先ず㈠は私に附点した、三五・三四と三八・三九、の両処の移動である。前者は信果本の「一本塙」の校異に拠り改められたものであるが、後者は同書に校記をかくが、恐らく「塙本」を踏えての校改であろう。

㈡例も又信果本の附記「一本塙」に依拠した改訂であるが、㈠と共に群書類従本解題等で繰返し言及したごとくに此の㈡の詞書の改更は類従本系に於ける明白なる誤謬であり、「標註」の冒した校訂上の過誤でもある。本文排列のみならず忠順における類従本本文による牽引と同書への偏傾の感はいなみがたいものを仄かに窺見るのである。

㈢例は本書に於ては、㈠・㈡例と同様に「塙」本による校訂であるが、板本「標註」にいたると再び信果本排列に回帰している。本来、信果本の排列が正当である―既述群書類従解題―のではあるが、その改訂につき附註せず、信果本から本書へ、本書から板本「標註」への基本的方向を崩す顕著なる一例となっている。忠順の本文校訂上におけるゆれがしからしめたのであろうが、同時に上述の本文整定におけると略同様な恣意的判断が働いたが故の混同化でもあった、と推測されるのである。且つ、対校本附注に於ても、本文上に所見するところと同様に、板本「標註」にいたるに随い、「一本」、「イ本」、時に「ノ」本、或は鼇頭に附記するなど一貫性を欠き、第二次の稿本・同「標註」の実態は葉山信果書写忠順校合書入本なくしては辿るべくもないのである。

註一　前稿㈠に掲示した葉山信果本補入本文から本書・板本「標註」への移行状況―第一～八巻の間は同稿一〇八頁以下―を例示

したので、此処では煩述を避け、当該箇処に於ける其の校訂上に看る異同本文部分をのみ掲示するにとゞめる。更に※符イ・ロ……は信果書写本元来の本行本文と其後村上忠順による墨―一本又は塙本―・藍―野口本―両筆の補入本文から本書・標本への校訂経過を示し、其の異同については註二以下に別掲した。

又、第九・十両巻は上掲諸巻とは別系統本文たるにより両巻欠落本文と忠順補入本文―同稿一一七頁以下に掲示―と本書・標本への校訂上の異同を掲げ、更に※符イ・ロ……を追記したものである。

いずれにせよ、信果本に看る著しき欠漏本文を拾綴したものであり、前稿(一)のそれによるもの、従って当該番号も同番号に準じているので参照されたい。例にならい漢字・仮名、仮名遣いの相違は省略した。

第一～八

1詞書　「候て」(信本・本書、以下同省略)―「さふらひて(めしてイ)」(標本)、同　「つかうまつれと」―「つかまつれと(うイ)」(本書・標本)、同　「つかうまつれり」―「つかうまつれる(りイ)」(本書・標本)、同歌初句　「いへはけに(夫木雑十五けにかさは(墨)一本无けにかさは　一本无けにかさはイ)」―「いへはけに(夫木)」(本書)・「いへはけに(にかさはイ　えイ)」(標本)、信本尾ニ「ノロ本アリ(藍)」附注、本書・標本刪省、2左注一六七・一六八　信本「ノナシ」(藍)・「一本／塙(朱)」ノ附記アリ、本書・標本省略、一六「あまのをふねともかけり」―「あまのをふねもとかけり」(本書・標本)、3詞書　信本朱附記ハ本書・標本省略、「百首の哥中に(〇一本／塙(朱))」―「百首哥中に」(本書・標本)、4下句　「八声の鳥はおのかつまかは(原本ナシ一本塙アリ(朱)・ノ本ナシ(藍))」―本文同上、但シ本書「下句一本无」・標本「下句一本脱」ト傍記シ、他省略、※イ詞書・歌　註二ニ記ス、※ロ詞書一部―註三ニ記ス、※ハ詞書　註四ニ記ス、5作者　「家道朝臣(塙一本)」―「家道朝臣」(本書・標本)、※ニ詞書・歌　註五ニ附記ス、6作者　「経兼(塙一本)」―「経兼(イナシ)」(本書・標本)、7詞書後半　「おい風ふきなとす日もたかし(む(藍)また(藍))」―「おひ風ふきなとす日もたかし」(本書)・「おひ風ふきなとす日もたかし(またイ)」(標本)、「よめる(塙一本)」―「よめる」(本書・標本)、8詞書後半　「そひ舟のせうつすをきゝて(とてイ)」(標本)、9歌　「人はいさ……しらは

しるらむ一本塙」―「人はいさ一本无……しらはしるらむ」（本書）・又、上欄ニ「一本此哥闕たり釈教題林にもらせり」ト附注スルモ塗抹セル如シ（本書）・「人はいさ釈教題林闕一本无釈教題林亦缺……しらはしるらむ」（標本）、10歌「そのほとゝ……心也けり一本塙釈教ナシ（以上四字忠順補記（墨））」―「そのほとゝ釈教題林无一本無……こゝろ成けり」（本書）・「そのほとゝ一本缺釈教題林亦闕……こゝろなりけり」（標本）、※ホ詞書・歌　註六ニ附記ス、11作者「をんな一本塙（朱）」―「女」（本書・標本）、12左注　信本「一本塙」（朱）ト附記ス、本書・標本ハ附記刪省ス、※ヘ歌―註七ニ附記ス、13詞書　信本「海路恋（朱）ノ本无（藍）」―「海路恋」（本書・標本）、14三七歌・三八詞書「此処哥一首と後の哥の詞書とを脱せり古本及塙本には左のことし」―上記附注ナシ（本書・標本）、初句「紅の袖に夫木雑十八（墨）一本无」―「くれなゐの一本无」（本書）・「くれなゐの夫木類題」（標本）、第四・五句「なかれつゝ夫（墨）りのわゝけをそおもふ」―「なれかつゝらしりのわゝけをそ思ふ」（本書・標本）

第九・十巻

2朱附註「塙本ニモ空行アリ」ト信果筆跡、※イ　作者「永縁」―「永縁イ」（本書・標本）、※ロ「家道朝臣通ノ（藍）」―「家道朝臣通ノイ」（本書・標本）、3作者「修理大夫三宮御製ト云々ノ」―「修理大夫三宮御製ト云々ノロ本（標本、野口本ニ作ル）十一字諸本ナシ（標本、无ニ作ル）」、4長歌一部「わか身のうへになりはてぬ千堀百（墨）・ノ本（藍）」―「我みのうへになりはてぬ千堀（標本・百ニ作ル）」（本書・標本）

註二　葉山信果本本文を左に掲示すると、

曙に鹿のまちかく聞えけれはめつらしさによめる

朝戸あけて立いつるしかの声きけは跡つかひにもきたりけるかな

と本行に書写し、上欄に信果筆にて「一本及塙本此二行ナシ」と朱注している。本書にいたり忠順が信果本の本文を欠落し、更にあらため細補したのは単なる誤脱後の追補ではなくして、同歌を欠く「一本／塙本」に牽れての刪省ではなかったかと推せられる。追補後、板本「標註」にて復帰再録したのであろう。

註三　同信果本本文には、忠順筆にて

同所にてとふ人もなきたひの。すみかに霧降ふたかりて(墨)いふせかりけるに都の人うらめしかりけれは

と墨筆細補している。其の比校本は誌されぬが、恐らく塙本に拠る補入であろう。本書・標本はそれを踏えての校訂本文化したものであろう。

註四　同信果本には、行間に忠順筆にて

。秋の山の月をみるといへる事をよめる　塙

と塙本を以て墨筆細補している。本書・標本は本行本文とするも、比校本「塙」記を省略し整定化している。

註五　同信果本は註二と同様、本行に書写する、即ち

かへし　　経成朝臣

旅衣たちし日数をかそふれはさやの中山はやこえぬらん　塙本ナシ(以上四字忠順補記)

とあるも、本書は忠順が註二同様に行間に細記追補するかたちをとり、標本にて更にあらため本行本文にかえし、「一本无」(作者名)、「一本无／万代」(歌頭左右)と附記している。

註六　同信果本には、行間に忠順墨筆にて細補している。即ち

諸の花くさ〳〵に咲みたるといへる事をよめる

そこはくの花のひもとく庭の面におしのけたるは蓮也けり　塙

とあるを、本書・標本共に本行に整定し歌頭に「一本无」と附記している。

註七　同信果本には、前歌の詞書をうけ、忠順墨筆にて細補している。即ち

あさましやこはなに事のさまそとよこひせよとても生れさりけむ　塙本
金ノ本无(藍)

とあり、本書・標本は同一本文を本行とし「あさましや……生れさりけむ」一本无　金葉恋下(恋下ノ二字標本欠)　と附記校合している。

註八　例えば、秋部三六歌は、信果本では

玉葉
七夕のかへるあしたのしつくにはあまの川なみ立やそふらん
堀百　たもとイ／塙(朱)／玉・堀　しつくのたもと一本(朱)

は、本書並びに板本「標註」では上句を「たなはたのかへる袂のしつくには」とし、二類本系―**忠**・**江**本―の本文を一本又は「塙本」に牽かれて任意改訂している。

玉葉(標本更ニ「雲葉」ト附記)　あしたイ　堀百　雫　たもとイ

かゝる例は夥多におよび例示しがたいので信果本解題に掲出した同系の類同的異文―詞書ではあるが―である数例をあげると、

秋部四〇三詞書

丹波前司季房の家にて女郎花をよめる　**信**本（**忠**・**江**本、「季」ヲ「重」ニ作ル）

重塙一本／原本(朱)・ノ(藍)

丹波前司季房の家にて「人々烋の花をよみけるに」女郎花をよめる

重イ　一本／塙本ノマヽ(朱)　イナシ

と、本書・板本「標註」では追補している。追補本文は信果本に校合を見ぬが、「塙本」には存し、同じく該本による補入であろう。又、秋部三六六詞書

九月十三夜法性寺関白殿下にてよめる　**信**本

法性寺関白イ

九月十三夜殿下にてよめる

と、両書共に改訂している。前者同様に信果本に校記をみぬが、「塙本」本文を踏えてのことであろう。更に一例、恋部下三三〇詞書

……前略……みち見くるしとてしはしたてと女官の申ければ……後略……**信**本

ナシ一本／塙(朱)、おはし塙(朱)房ノ(藍)

……前略……道みくるしおはしてと女官の申けれは……後略……本書

とてしはしたてとイ房ノ

……前略……道見くるしおはしてと女官の申けれは……後略……**標**本

たはしはくらしとてイ・しはしたてとイ　房ノ

と、両書の校異は、板本「標註」に契沖自筆朱傍記校異を附加しているが、共に「塙本」に拠る改訂を施している。

本文校勘の是非は暫く措くとしても本書はかく系類を超えての本文構成であることゝ共に伝本系統論上では本書本文にいたる細部の分析が前提となるのである。

散木弁謌集標註　存十巻　嘉永三年序刊

第二次「標註」自筆稿本に前書したのであらため断り書きするまでもないことながら本書成立に係る事柄については上掲簗瀬一雄氏の詳細なる考証にゆだね、且つ当板本の本文は第一次稿本、第二次稿本、の両解題に於て、その校訂経緯は言及麁述するところであり、当板本も遍く流布するので、此処には唯、其の書誌上の記述を以て本解題をとじることにする。

袋綴、四冊。香色布目空押表紙、竪二十六・六糎、横十九糎。匡郭、四周単辺、竪二十三・二糎、横十四・五糎。内眉欄高サ五・一糎。毎半葉十行に和歌一行、詞書三字下げに摺印している。版心、「。散木集」、下辺に丁附す。

第一冊　自序「一・二」、於冨無泥「三・四」、春部「一ノ一（〜二十四）」、夏部「一ノ二十五（〜四十三終）」、第二冊秋部「二ノ一（〜二十五）」、冬部（哥イ）「二ノ二十六（〜三十八終）」、第三冊　祝部・別離之部イ・羇旅（旅宿イ）部「三ノ一（〜十三）表」、悲歎部・神祇部イ。釈教部「三ノ十三裏（〜四十一）」、恋部上「三ノ四十二（〜五十五）」、恋部下「三ノ五十六（〜六十八終）」、第四冊　雑部上イ「四ノ一（〜二十九）」、雑部下（歌イ）長歌・旋頭歌・混本歌・折句歌・沓冠折句謌・隠題・連歌「四ノ三十（〜五十五）」、識語「四ノ五十六」、初音（跋文）「四ノ五十七（〜五十九終）」、散木弁謌集脱漏歌「四ノ六十（〜六十五）」、所載諸書俊頼朝臣歌数「四ノ六十六（〜六十七）」。

題簽、表紙左肩に単郭附白紙短冊を貼附し、「散木弁謌集標註　一（〜四）」と刻印する。

内題、「散木弁謌（奇イ）集（巻イ）第一（〜第十（巻イ））　春部（〜雑部下（歌ノ））」とあるが、上記「奇イ」校異は第一・五・九の両三巻に附刻

するのみである。

第一冊前表紙見返には黄蘗色紙の封面を貼付し、単辺匡郭を界線にて三分し、「村上忠順大人著／散木弁謌集標註／松塢亭蔵板」の墨刻記が存す。

第四冊後表紙見返しには、上辺余欄に「発行／書肆」と刻印し、下辺に、

京都三条通升屋町　出雲寺文次郎／同寺町通御旅町　田中屋治兵衛／江戸日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛／同四丁目　須原屋佐助／同芝神明前　岡田屋嘉七／大坂心斎橋筋北久太郎町　河内屋嘉兵衛／同安土町　河内屋和助／紀州若山駿河町　坂本屋喜一郎／尾州名古屋本町四丁目　永楽屋正兵衛／参州新堀　深見藤吉

の十書肆名を並刻している。簗瀬氏の上掲の御論考によれば

はじめの九名は売捌を託した書肆であり、実際の刊行を担当したのは、最後に記されてゐる「参州新堀、深見藤吉」であらう。藤吉は忠順の女婿篤慶である。彼は富裕な商人であり、忠順の感化を受けて、文学学事にも志があつたので、この書ばかりではなく、忠順の刊行書の大方を経済的に支援したのである。[註一]

と述べられている。「自序」は既述したごとくに前稿―第二次―の「嘉永三年庚戌正月」の草稿を基に松本奎堂の再度の批正を覓めた後、自らの推敲を経てのものであり、その完稿は万延元年仲春後、程近き頃といわれる―当板本と前稿との主なる異同は既述したので省略する―が、当書にも同年紀が其儘に刻されている。

嘉永三年庚戌正月　　村上忠順／「原印忠順」（方形陰刻）、「村上承卿」（方形）　両顆を模刻

又、「於冨無泥」は前稿を殆んど同文―既述―に刊刻し、「忠まさ」の記名を「蓬廬主人しるす」とあらためるにとどまっている。

第四冊、第十巻奥に細字にて、

右散木奇謌集以織部正乗尹本校合了（羣書類従二百五十四巻奥書）

深見篤慶　校読

と校語を附刻している。しかし、此の校合の記は既に葉山信果書写本にも存し、其の校異の跡も所見され、前稿—第二次—本にも同様の校語が誌され、且つ忠順の追校、追補の筆跡をとゞめているのである。この校語の許に細刻されている「深見篤慶　校読」の記は上記にても明白なように校者の署名ではなくして、簗瀬氏の御見解[註二]のごとくに「篤慶は忠順の女婿である。これは篤慶が刊本原稿の全部の読み合せを行つたことを示したつもりではあらうが、誤解をまねきやすい」のである。

更に右記校語につゞき次葉に信果本に転写し、又前稿本にも附載する岡本保孝識語を再録している。

右散木弁歌集全部十巻四冊俊頼朝臣家集也或称散／木寄歌或云散木奇歌並非也……以下省略……

天保二年八月廿四日夜況斎岡本保孝識於歳計草堂

忠順は本書「標註」本文の土台たる保孝本の経緯を巻尾にとゞめ、その信憑性を吐露したものであろう。「於冨無泥」に「狩谷望之か古本とも校訂せし本をえてめつらかにおもふあまりに」と呼応するのである。更に群書類従、野口道直旧蔵本の校勘を経て、本書本文が校訂されているのは既述したごとくである。しかし、簗瀬氏[註三]が言及されているごとく「羣書類従なるをはしめそのほかふたつみつよみあはせ」（於冨無泥）、「較諸他本為愈」（序）と誌す、二・三本、諸他本との校異らしきものは存することは事実であるが未だ確認するところではない。

板本「標註」巻後には跋文「初音」をもって結尾するのみならず、「散木弁謌集脱漏歌」、「所載諸書俊頼朝臣歌数」を補綴するなど周備の精根を尽されている。ことに後者は堀川院百首以下、和歌・連歌（一首）四十首ほどを検出し、

その過半を網羅して孜々たる勉励のあとが偲ばれるのである。

この「標註」の成立については言及をさけたが、その「於冨無泥」に誌しているように「ことにくちをしきは円珠庵あさりのかしら書といふものをえされはえかきいれさりき」と契沖本の存在には夙に伝聞するところがあったのであろう。そして、猶「いますこしつはらにせまほしけれとかたゐなかにて書にいとともしけれは」と千巻舎を自称しながらに慨歎するのもどかしきは忠順の心情吐露でもあったのであろう。結句「すへてこの註は考証とことはのこゝろをとくをむねとせり」と断り書きするのも自ら限度を余儀なくする事情も存したのではあろうが、その博引傍証は其の当代にあっては軽々卒爾になし得るところではない。刈谷市立図書館に現蔵する「蓬廬雑鈔」第二十九所収、「熊代繁里翁（木国）　散木集考」、「橘冬照（江戸）　散木集考」、村上家蔵「散木弁謌集校読」[註四]一冊等はよく其の研鑽のあとをとゞめている。ことに前二者は、成稿近き第二次「標註」稿本の後に猶繁里・冬照に存疑を諮問するなど、その間の次第は簗瀬氏の上掲論考に詳述されるところであるが、いかにも完備を期す村上忠順の人柄が彷彿されてくるのである。

次に、板本「標註」の刊行に就いては、同じく上掲の簗瀬氏の論証[註五]に尽くされている。その例証として掲示されたのは、葉山信果書写忠順校合書入本―第一次稿本―第一冊後表紙見返しに貼付された書面四通である。

その包紙には、「開板伺書　土井大隅守家来村上承卿」と書かれ、その中には、(イ)伺書[註六]、(ロ)許可書[註七]、イ・ロ共に忠順の控え留書であるが、(イ)の日付は「四月廿六日」とあり、(ロ)には「戌八月十九日」と記されている。且つ包紙左端には忠順が赭筆にて「文久二年壬戌八月官許」と細書附記している。両紙により昌平坂学問所への「標註」刊行に伴う公的経過が判明される。

更に一通は(ハ)村上承卿宛伊藤律之助書翰[註八]、(ニ)同書翰に対する忠順の控書である。[註九](ハ)の日付は「閏八月廿八日」、(ニ)

は「十一月三日返事也」とある。別注した同書面内容よりして、同書上木の実務に際し、松本奎堂を介し伊藤律之助の斡旋を経て―原稿は林家御塾吉田某の許に数年留置かれるも―閏八月（文久二年である）に漸くにして林家の改済許可を得ることゝなり、その返書が右控書「十一月三日」のことであると、簗瀬氏は論証なされている。そして「標註」原稿の完成を吉田某の許にあった数年を換算され、安政四・五年頃を推論されているのである。[註十]

更に、上肆、発兌は、忠順の控書により

これによつて、忠順が原稿の返送を受けたのが、文久二年（ママ）十一月二日であることは動かない。従つて、どんなに急いだとしても、刊行に一年はかかつたであらうから、出来上りは文久三年（一八六三）、遅ければ元治になつたのではないかと思はれる。

と、結んでおられる。極めて剴切なる審察であるので祖述附言させていたゞいた次第である。

註一・二・三・五・九・十　簗瀬一雄氏上掲論文。

註四　本書の題簽外題は「散木弃謌集　校訂」と誌す。板本「標註」刊行後の草稿をも含み合綴された一冊であり、散木集中、歌語を諸集に検出整理し索引の便宜たらしめた前半、又同板本初句索引を間にはさみ、後半は「散木弃謌集脱漏歌」稿本、「所載諸書俊頼朝臣歌数」稿、などより成っている。

年紀を明記するのは、勅撰集外、後葉・続詞花・雲葉・万代・和哥一字抄等所載俊頼歌の初句索引一括りのあとに、

明治二年巳九月十八日夜抄

と細記され、刊行後の抄出である。

又、次の一括は「類題和歌集」三十一巻中より俊頼歌を前者同様に初句・部立・丁数とあげた索引であるが、同冒頭の綴目に

文久二年壬戌年十二月廿四日創業廿七日朝校合了

と誌されている。同書刊行の官許が「文久二年壬戌閏八月」の事と判明するので、恰も刊行を前にしての抄出歌再検証のための一篇かと推測される。因みに板本「標註」の「所載諸書俊頼朝臣歌数」に「類題集　三百九十五首（除重出歌廿三首　三百七十二首）」とあるに全く同様である。

そのほかは年次を欠くが、夫木集・堀河院両度百首等所載歌、又散木集初句索引等数篇を合せ綴じて上記後半の脱漏歌等に移っている。その多くは刊行を前にしての再確認のための備忘ノート類整備のための稿本類が主であったかと推測される。機会を得れば詳述することにしたい。

註六　以下参考までに簗瀬氏の御解読を手懸りに全文を列挙する。

一標註散木集　四冊

右開板仕度候間此段／奉相伺候以上

四月廿六日　　土井大隅守家来　村上承卿

註七　官許の控え留書であろう。忠順筆跡であろう。

開板不苦候出来之上壱部／学問所江相納可申尤其節／改済之年月日相認メ差出／可申事

戌八月十九日

註八　(ハ)は伊藤律之助自筆であろう。

未得貴意候得共益／御清適珎重奉存候小生／仙台藩中ニ御座候処年／来松本君と御懇意申上居／右ニ而御著述上木御願之義／御同人ゟ御頼ニ候右本右処置／敬望仕候処早既数年前／之義何程手配仕候而も相知不申／候処林家御塾吉田と申仁／之方ニ有之依而此度願上申候御上木相成候ハヽ壱部聖堂に／御上納可被成候夫而已ニ而宜御座候／小生当時聖堂書生寮ニ相返／候間此後何ニても御信遣可被下候匆々頓首

閏八月廿八日　　伊藤律之助

村上承卿様

尚亦御案内も御座候処へ上木願済／の外ニ御書付と申も無之盖紙／ニ初巻壱冊ハ御改之判相据候／而已ニ御座候何年相過度改之義有／之候而も右之御判御願済之証跡ニ／御座候

註九　(二)は忠順の返信控之走書にて判読甚だ困難である。

閏月廿八日御認之朶雲十一月二日／到来辱拝誦至此節候而も朔／風甚候へ共倍御多祥可被成／御励学奉恭賀候荒書上木願ニ付／彼是御方配被成下千謝不尽之□／高庇ニ而早速相済□悦仕候上木次第／拝納可仕候

十一月三日返事也

無雑な解題ながら本稿を以てひとまず本集の「伝本考」を終えることにする。機会を得ぬまゝの未見伝本は、ことに冷泉家本以下猶数本にわたるが、已むを得ぬまゝに今後の事宜を俟つことにする。

諸本一覧並びに略称

第一類

円珠庵蔵　契沖写―自巻一至巻八・別筆写―巻九・十　　二冊　　略称「契」

三手文庫蔵　〔今井似閑〕写　自巻一至巻十　一冊　同　「三」

石川県立図書館李花亭文庫蔵　〔江戸中期〕写　自巻一至巻十　二冊　同　「李」

国立公文書館内閣文庫蔵　大野広城写　自巻一至巻十　三冊　同　「大」

第二類

㈠

イ　神宮文庫蔵　〔近世初〕写　存自巻一至巻八　二冊　同　「神A」

志香須賀文庫蔵　〔江戸後期〕写　存自巻一至巻八　一冊　同　「志A」

ロ　1国立国会図書館蔵　〔江戸前期〕写　存自巻一至巻八　松平忠房旧蔵本　二冊　同　「忠」

ロ　2国立公文書館内閣文庫蔵　〔江戸前期〕写　存自巻一至巻八　林羅山旧蔵本　二冊　同　「江」

ハ　刈谷市立図書館蔵　天保十二年葉山信果写　自巻一至巻十　村上忠順「散木弁謌集標註」稿本　第一次校合書入本　四冊　同　「信」

㈡

イ　村上家蔵　〔江戸中期〕写―自巻一至巻四・〔江戸後期〕写―自巻五至巻十・〔江戸後期（末）〕写―顕昭註　野口道直旧蔵本　五冊　同　「野」

ロ　簗瀬一雄氏蔵　明治四十五年長岡興家写　存巻一～三・巻八～十　二冊　同　「簗」

第三類

イ　神宮文庫蔵　〔近世初〕写　存各巻零本　八冊　同　「神B」

ロ　国立国会図書館蔵　〔江戸後期〕写　自巻一至巻十　岸本由豆流旧蔵本　五冊　同　「岸」

ハ　国学院大学図書館蔵　安永八年小沢蘆庵令写校合本　自巻一至巻十・附頭昭註　三冊　同　「国蘆」

慶応義塾大学附属研究所斯道文庫蔵　右同奥書本　右同　三冊　同　「斯蘆」

東京大学附属図書館蔵　右同　存自巻一至巻五　一冊　同　「東蘆」

京都大学附属図書館蔵　右同　自巻一至巻十・附頭昭註　九冊　同　「京蘆」

附　小平市立図書館蔵　右同　小津桂窓旧蔵本　右同　三冊　同　「小」

ニ　国文学研究資料館初雁文庫蔵　〔天保〕写寄合書　右同　三冊　同　「初」

穂久邇文庫蔵　安永八年小沢蘆庵令写校合奥書本　右同　三冊　同　「穂蘆」

第二類本系　補遺(一)・(二)

岡山大学附属図書館蔵　寛延二年業合賢豊写　存自第一至第八　一冊　同　「業」

岡山市立中央図書館蔵　〔江戸後期〕写　寄合書　存巻第一・二・巻第六～十　三冊　同　「岡」

第四類

イ　静嘉堂文庫蔵　天保十年烏丸光政令写本　存巻九・十　一冊　同　「烏」

ロ　静嘉堂文庫蔵　文政十年源輳令写間宮永好校合本　自巻一至巻十　三冊　同　「永」

ハ　慶応義塾図書館蔵　〔萩原宗固〕写　自巻一至巻十　二冊　同　「宗」

ニ　群書類従第二百五十四所収　自巻一至巻十　三冊　同　「類」

京都大学国語学国文学研究室蔵　〔江戸末〕写　自巻一至巻十　三冊　同　「京文」

志香須賀文庫蔵〔江戸末〕写　自巻一至巻十　三冊　同「志B」

書陵部蔵　函架番号一五五―一四五〔江戸末〕写　自巻一至巻十　三冊　同「書B」

国立国会図書館蔵　文政十二年内藤広前写・岡田希雄校合書入本―自巻一至巻十　三冊　同「岡」

ホ　関根慶子氏蔵〔近世〕写　阿波国文庫旧蔵本　自巻一至巻十　二冊　同「阿」

ヘ　書陵部蔵　函架番号五〇一―七三〔近世初〕写　桂宮本　自巻一至巻十　二冊　同「書A」

伝本考補

刈谷市立図書館蔵　村上忠順自筆　自巻一至巻十「散木弁謌集標註」稿本　第二次校合

書入本　三冊　同「標二」

散木弁謌集標註　十巻　嘉永三年序刊　四冊　同「標」

末尾ながら、拙稿の終了にあたり、貴重なる御蔵書の調査撮影を御清諾賜りました所蔵諸機関並びに個人所蔵の各位に対し、心から甚深の謝意を申上げる。